

秋 田 市

秋田新都市開発整備事業関係  
埋蔵文化財発掘調査報告書

下堤A遺跡

下堤B遺跡

1988.3 秋田市教育委員会

## 序

秋田新都市整備事業に係る御所野丘陵部の埋蔵文化財につきましては昭和 56 年度から対処し計画地域内 31ヶ所の遺跡のうちこれまで秋田大学農地関係の遺跡を除き、28 遺跡の調査を一応終了いたしました。

この台地は遺跡の宝庫であり、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、平安時代の貴重な遺構、遺物が検出され、これまで報告してきたところであります。今年度は下堤 A、B、C 遺跡の調査を実施し縄文時代中期、平安時代の集落跡が確認され集落跡研究上重要な資料と思われます。

調査の実施にあたっては県、関係機関の指導をはじめ地元関係者等多くの積極的なご協力をいただき深く感謝申しあげる次第です。

本報告書が文化財保護のため、さらなる研究資料として広く活用されれば幸甚に存じます。

昭和 63 年 3 月

秋田市教育委員会

教育長 高 泉 宏 作

## 例　　言

1. 本報告書は秋田市四ツ小屋小阿地字下堤に所在する下堤 A 遺跡・下堤 B 遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書の執筆、編集は、下堤 A 遺跡—西谷 隆、石郷岡誠一、下堤 B 遺跡—石郷岡誠一、その他を曾原俊行が行った。
3. 発掘調査、整理作業の過程で下記の各氏より指導、助言を賜わった。  
宮本長二郎（奈良国立文化財研究所）、富樫泰時（秋田県文化課）
4. 石質の鑑定は、秋田県立博物館の照井紀一氏、佐々木厚氏によるものである。
5. 遺跡の平面図、土層断面図中の P は土器（片）、S は（鍼）を示す。タール状の付着物は点線で範囲を示した。石器実測図の石礫、石甃、石槍等の外形図にはアスファルト付着物の箇所を示した。
6. 遺構の土層断面およびエレベーション図中に標高の記されていないものは、前調査の図面を利用して作成したものである。
7. 発掘調査による出土遺物、実測図、写真、その他の記録は秋田市教育委員会が保管する。

## 目 次

### 序

### 例言

### 調査の概要

調査に至るまでの経過	1
調査期間と体制	1
調査の方法と経過	2
遺跡の位置と地形・地質	9

### 下堤 A 遺跡

遺跡の概観	14
造構と遺物	14
縄文時代	14
平安時代	218
まとめ	223

### 下堤 B 遺跡

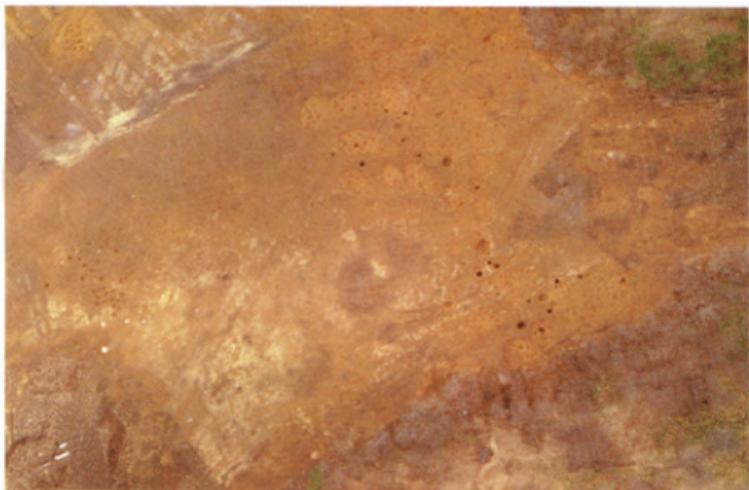
遺跡の概観	344
造構と遺物	344
縄文時代	344
平安時代	436
まとめ	440



御所野丘陵部（西→）



下堤A・B・C遺跡遺景（南→）



下堤A遺跡（北東→）



下堤B遺跡（南→）



下堤 A 通跡27号・28号住居跡（南→）



下堤 A 通跡43号・44号・50号住居跡（東→）



下堤A遺跡 23号住居跡石冠出土状況



下堤A遺跡 7号フラスコ状ビット土器出土状況



下堤B遺跡 33号住居跡 (南→)



下堤B遺跡 33号住居跡炉埋設土器断面



下堤 B 遗迹 40号住居跡



下堤 B 遗迹 40号住居跡複式炉

## 調査の概要

### 調査に至るまでの経過

秋田市南東部地域は、昭和56年6月の秋田空港の開港、東北横断自動車道秋田線秋田インターチェンジ開設予定等、空陸両面の交通の要衝に位置する所であることから、いち早く開発可能性等についての各調査が実施され、県市総合計画においても産業、住宅団地が一体となった総合的ニュータウン＝臨空港新都市として具体的に位置づけられた。

昭和55年に御所野台地全体の分布調査を実施し、約30カ所の遺物散布地を確認した。昭和56年度は開発計画地域内の西部工業団地造成に先立ち、下堤D遺跡（秋田市「下堤D遺跡発掘調査報告書」1982年3月、秋田市教育委員会）の発掘調査を行った。昭和57年度は今後の開発計画に対応するため55年の分布調査に基づき、3ヶ月間で遺跡の範囲確認調査を実施し、範囲確認調査の結果に基づき関係機関と協議を重ね、引き続き年度別に計画的な発掘調査を実施することとし、昭和57年度は下堤G遺跡、野畠遺跡、湯ノ沢B遺跡、坂ノ上C遺跡、坂ノ上D遺跡（秋田市「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1983年3月、秋田市教育委員会）、昭和58年度は坂ノ上E遺跡、湯ノ沢A遺跡、湯ノ沢C遺跡、湯ノ沢F遺跡、湯ノ沢G遺跡、湯ノ沢H遺跡、野形遺跡（秋田市「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1984年3月、秋田市教育委員会）、昭和59年度は下堤E遺跡、下堤F遺跡、坂ノ上F遺跡、狸崎A遺跡、湯ノ沢D遺跡、深田沢遺跡（秋田市「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1985年3月、秋田市教育委員会）、昭和60年度は地蔵田B遺跡、台A遺跡、湯ノ沢I遺跡、58年度に調査した湯ノ沢F遺跡の北西部（秋田市都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1986年3月、秋田市教育委員会）、昭和61年度は地方遺跡、台B遺跡（秋田市「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1987年3月、秋田市教育委員会）の発掘調査を行った。

昭和62年度は、狸崎B遺跡、地蔵田A遺跡、秋大農場遺跡の調査を実施し、新都市開発計画地区内に所在する27カ所の遺跡が一応終了する予定であったが、昭和60年度に調査した地蔵田B遺跡の保存問題が出てきたため計画の一部見直しがあり、総合公園、医療福祉等複合施設建設予定地にある下堤A遺跡、下堤B遺跡、下堤C遺跡の発掘調査が必要になり、昭和61年度に一部表土除去作業を行っていた下堤C遺跡の発掘調査を実施することにした。下堤A遺跡、下堤B遺跡については調査費の関係で7月以降に発掘調査を行うことになった。

### 調査期間と体制

調査期間 昭和62年7月20日～12月26日（下堤A遺跡）

10月6日～12月26日（下堤B遺跡）

調査主体者 地域振興整備公团

調査担当者 秋田市・秋田市教育委員会

調査員 喬原俊行、石野國誠一、西谷 隆、安田忠市（秋田市教育委員会文化振興課）

調査補佐員 舟木佳久子

調査協力員 五十嵐芳郎（秋田考古学協会）、平塚長史（日本大学）

調査作業員 鈴木銀一、鈴木長治、鈴木末藏、鈴木一美、三浦竹治、三浦馨、三浦吉男、秋本与次郎、三浦三治、水野金光、佐々木多治郎、加賀谷金一郎、鈴木銀三郎、堀野兼雄、佐々木東吉、鈴木藤一、渡部兼治、佐々木小一郎、藤沢啓治、渡部金次郎、鈴木ツヤ、鈴木ウメノ、鈴木鉢子、鈴木博子、三浦千枝子、三浦トミエ、三浦タキ、三浦ナフ、三浦トキ子、佐々木久子、工藤キクエ、熊谷文子、宮田トキ子、高島綾子、伊藤ツギ、長谷部ヤエ子、会場京子、渡部アイ子、渡部キネ子、渡部キヨ、渡辺フミ、佐々木ヨシ、佐々木健子、高橋ヨシ子、矢倉アキ、加賀谷ヒデ、杉沢ワミ、杉沢チエ子、鈴木ヒデ、鈴木ヒデ子、持主チエ、嵯峨キミ、鎌田ツヤ、佐藤アツ子、鈴木シワ、伊藤礼子、堀野ツタヨ

整理作業員 三浦秋子、船井律子、伊藤秀子、佐々木カネ、橋本ゆき子、横江美子、佐々木恵子、鎌田絹子

事務員 伊藤茂子、信太 緑

#### 調査の方法と経過

調査区は各遺跡ごとに任意の原点を決めて東西南北（縦北）に基準線を作り、調査全体に大グリッド（40 m × 40 m）を設定し、さらにその中に小グリッド（4 m × 4 m）を設定し、単位グリッドとした。大グリッドは（1～n）、小グリッドは東西（X軸）に数字（1～10）、南北（Y軸）にアルファベット（A～J）を配し、その組み合せで遺跡番号、大グリッド番号、小グリッドの順に呼称することとした。

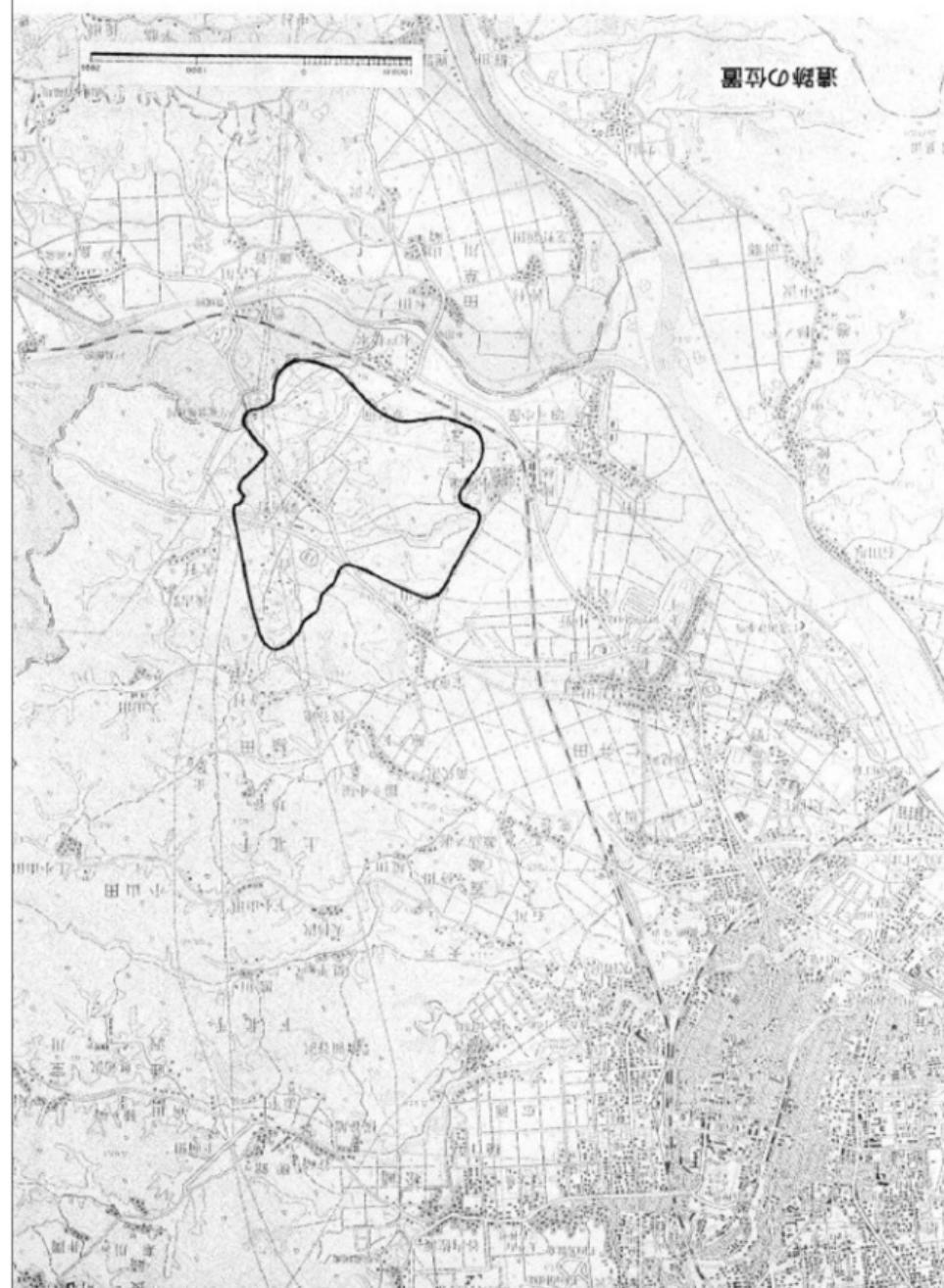
発掘調査は、7月20日～12月26日、10月6日～12月26日の日程で実施した。下堤遺跡は昭和42年に発見され、昭和43年から昭和48年まで6次の調査がなされ、下堤A・B遺跡では竪穴住居跡が検出され、一部発掘されている。今年度調査の結果、下堤A遺跡では绳文時代中期の住居跡76軒、フラスコ状ピット、土壙、平安時代の住居跡4軒が検出された。また下堤B遺跡では绳文時代中期末葉の住居跡45軒、フラスコ状ピット、土壙、平安時代の住居跡3軒、土壙などが検出された。

（註1）「小阿地、下堤、坂ノ上遺跡発掘調査報告書」1976年3月 秋田市教育委員会

#### 昭和62年度來跡者（順不同、敬称略）

富権泰時（秋田県文化課）、横山伸司、石川恵美子（秋田県埋蔵文化財センター）、木間 宏（福島県文化センター）、井上秀雄（東北大学）、宮本長二郎（奈良国立文化財研究所）、武藤康弘（東京大学）、小林 都、南部公民館サークル連合会、南部公民館繩文土器を焼く会、南部公民館ふるさと探訪会、大内町文化財保護審議会、御野塙中学校生徒10名、戸米川小学校生徒24名、市工業振興局職員

遺跡の位置





御所野丘陵部 遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所 在 地	範 囲 確 認 調 査			発 墓 調 査 遺 跡		
			時 代	面 積 <sup>m<sup>2</sup></sup>	地 目	調査年度	調 査 面 積 <sup>m<sup>2</sup></sup>	内 容
1	下堤 E	秋田市四ツ小屋小阿地字下堤	縄 文	5,626	畑	5 9	3,340	縄文(中期)集落
2	下堤 F	" "	"	14,375	"	5 9	2,950	縄文(前、中期)集落
3	下堤 G	" "	旧石器、縄文(中)	5,000	山林原野	5 7	1,550	旧石器、縄文(前、中期)集落
4	坂ノ上 C	四ツ小屋小阿地字坂ノ上	縄 文	6,000	"	5 7	1,000	縄文(中、晚期)
5	坂ノ上 D	" "	"	14,060	"	5 7	1,500	縄文(中、晚期)
6	坂ノ上 E	" "	"	15,000	"	5 8	5,000	縄文(中期)集落、9~10c製鉄炉
7	坂ノ上 F	" "	"	37,810	"	5 9	18,800	縄文(中期)集落、弥生住居跡
8	理崎 A	四ツ小屋小阿地字理崎	縄 文(晚)	13,750	畑、山林原野	5 9	1,910	縄文(前、晚期)土塁墓、弥生住居
9	理崎 B	" "	縄 文	11,250	原 野			
10	地蔵田 A	四ツ小屋末戸松本字地蔵田	旧石器、縄文、平安	30,000	畑			
11	地蔵田 B	" "	縄文(中、晚)、弥生	25,000	山林原野	6 0	12,000	旧石器、縄文(中期)集落、弥生集落櫛木跡
12	湯ノ沢 A	四ツ小屋末戸松本字湯ノ沢	縄 文	21,555	"	5 8	3,000	縄文(中期)、弥生住居跡
13	湯ノ沢 B	" "	縄文(前、中)	5,000	"	5 7	2,340	縄文(中期)集落、平安住居跡
14	湯ノ沢 C	" "	縄文(中、晚)、弥生	11,565	"	5 8	4,100	縄文(中期)集落
15	湯ノ沢 D	" "	縄 文(中)	35,000	畑	5 9	3,220	縄文(中期)集落
16	湯ノ沢 E	" "	縄 文	7,500	"	5 8	1,920	縄文(後期)
17	湯ノ沢 F	" "	縄文、土師、須恵	5,310	"	5 8・6 0	4,400	弥生土壤、平安墓(40墓)
18	湯ノ沢 G	" "	縄 文(後)	1,300	原 野	5 8	400	縄文(後期)
19	湯ノ沢 H	" "	縄 文	5,940	畑	5 8	720	縄文(前、中、晚期)住居跡
20	野 畑	上北手御所野字野畠	縄 文(中)	1,875	山 林	5 7	640	縄文(中期)集落
21	野 形	上北手御所野字野形	土 壈、須恵	5,940	山林原野	5 8	980	平安住居跡、窓跡
22	深 田 沢	上北手古野字深田沢	縄 文、平安	6,875	畑	5 9	3,320	平安建物跡、住居跡
23	台 A	上北手古野字台	"	8,440	"	6 0	2,000	縄文(中期)集落
24	地 方	上北手崩田字堤ノ沢	縄 文(晚)	54,670	畑、原野	6 1	11,500	縄文(中期)集落、(晚期)土壤墓
25	湯ノ沢 I	四ツ小屋末戸松本字湯ノ沢			苗 園	6 0	5,700	弥生
26	秋大農場	四ツ小屋小阿地字塑崎			畑、原野			
27	台 B	上北手崩田字寺ノ沢			山林原野	6 1	1,150	縄文(中期)
28	下堤 A	四ツ小屋小阿地字下堤			原 野	6 2	11,000	縄文(中期)集落、平安集落
29	下堤 B	" "			"	6 2	5,100	縄文(中期)集落、平安集落
30	下堤 C	" "			"	6 1・6 2	17,700	平安集落
31	下堤 D	" "			"	5 6	17,000	旧石器、縄文(前~晚期)集落、平安住居跡

## 遺跡の位置と地形・地質

### 位 置

秋田市街から国道 13 号線を南下し、仁井田、横山を過ぎ、坂を登ると標高 40 m 前後の広大な台地が開ける。これは奥羽本線四ツ小屋方面からもよく見える平坦な台地であり、御所野台地、末戸台と呼ばれている。この台地が秋田新都市整備事業計画地域である。

各遺跡の位置については挿図の、「御所野丘陵部免掘調査遺跡、範囲確認調査遺跡及び周辺遺跡」を参照されたい。

### 地形・地質

遺跡の存在する地形は、大別して和田丘陵と末戸台台地に分けられる。和田丘陵は平坦面をあまり持たない。しかし、定高性を持った標高 60 ~ 150 m のかなり開析を受けた老年期地形を示し、地形は第 3 系鮮新統に属する青色砂質シルト岩（猿岡層）と青灰色塊状泥岩（天徳寺層）、それに中斬統に属する暗灰色泥岩（船川層）などからなっている。末戸台台地は標高 25 ~ 50 m 強で、その表面は大変平坦である。この台地は和田丘陵と接して数段の段丘を識別できる。これらは内藤の区分からすると、上位から標高 45 ~ 50 m 強の椿台段丘、標高 40 m 強の上野台段丘 I 、標高 35 m 強の上野台段丘 II 、標高 25 m 強の宝竜崎段丘の 4 段階に分けられる。<sup>(註1)</sup>

### 椿台段丘

岩見川右岸末戸台台地では 40 ~ 50 m 強の標高をもつ、いわゆる椿台面をその堆積面とする椿台層が厚い疊（最大径 10 cm 前後）、砂、粘土の互層で構成されている。ただ基底高度はわからない。岩相は最上部に 1 ~ 2 m 褐色の粘土質火山灰層があり、次に疊、砂、粘土の互層で、砂疊の部分でしばしばクロス・ラミナ（斜交葉理）がみられ、砂土あるいはシルトは水平な細かい層理をなすことが多い。層厚をみると、疊層はうすく、砂、粘土層が厚い。その下部は第 3 系の泥岩（船川層）や砂質シルト（猿岡層）となっている。内藤はこの椿台面を関東の下末吉面に対比している。

### 上野台段丘 I

末戸台台地で椿台段丘の南側に標高 40 m 強でついている段丘が上野台段丘と呼ばれている。表層の 1 ~ 2 m 程度で、その下部は第 3 系となっている。下堤 A、B、C 遺跡は、この上野台段丘 I に位置する。

### 上野台段丘 II

末戸台台地では上野台段丘 I との比高が 5 m 強である。段丘堆積物の岩相は、上野台段丘 I とは同様で、層厚は 5 m 前後である。内藤によれば、厚い疊層の下部は椿台層に当るとしている。

段丘堆積物の特徴は、上野台 I 、 II 面では最大径 30 cm 前後の円錐形を主体とする。ほぼ一様な疊層をもち、河川堆積物で、厚さも加味すると岩見川などによる河成の侵食段丘面と考えられる。椿台、上野台 I 、 II 面の各面をおおっている層厚 1 ~ 2 m のシルト分を含んだ粘土質火山灰層は、男鹿半島の寒風山が起源と一応考えられている。この粘土質火山灰層の表面細粒物質の風化状態をみ

ていくと、椿台、上野台Ⅰ、Ⅱ面では黒色土の下の細粒物質のうち、上部50～100cmが明褐色を呈し、下部は灰色で、境は漸移する。また、土壤面を見ると、椿台、上野台Ⅰ、Ⅱ面をおおう土壤はいわゆる高岡2統に属していると考えられ、比較的大きい円錐を混入していく、黒色土層を厚く堆積させている。この層中には火山ガラスを混入しており、火山灰が関係しているものと推定される。

(註1)「秋田県岩見川流域およびその周辺の段丘について」内藤博夫 1965年 第4紀研究第4卷第1号

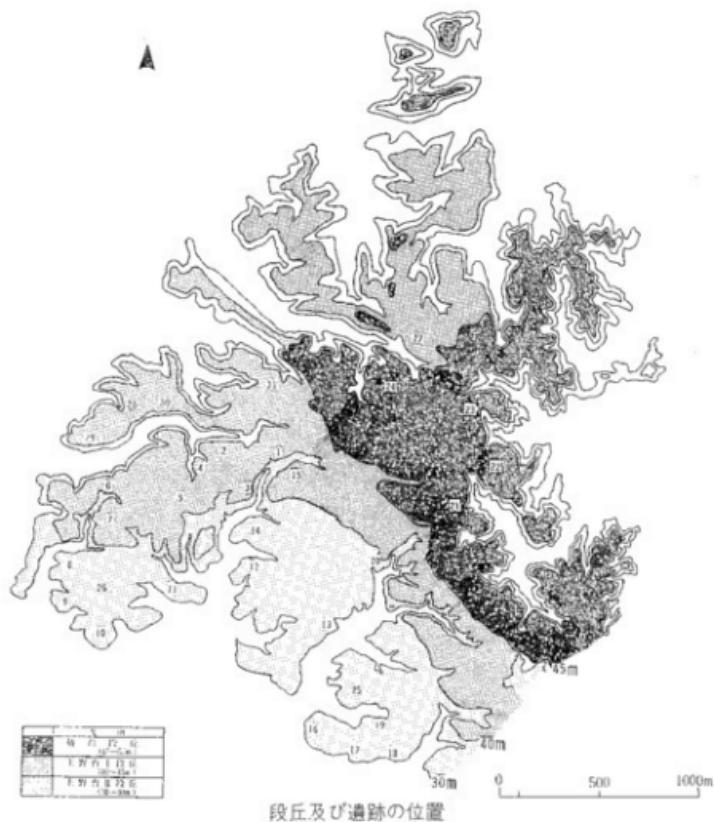
(註2)「地形、表層地質・土壤、秋田」経済企画庁土地分類基本調査 1966年

「八郎潟の研究」秋田県教育委員会 1965年

「火山活動と地形」村山 騰 大明堂

「秋田県男鹿半島の日潟の火山拠出物について」林 宏 地質学雑誌第61卷第717号

1955年

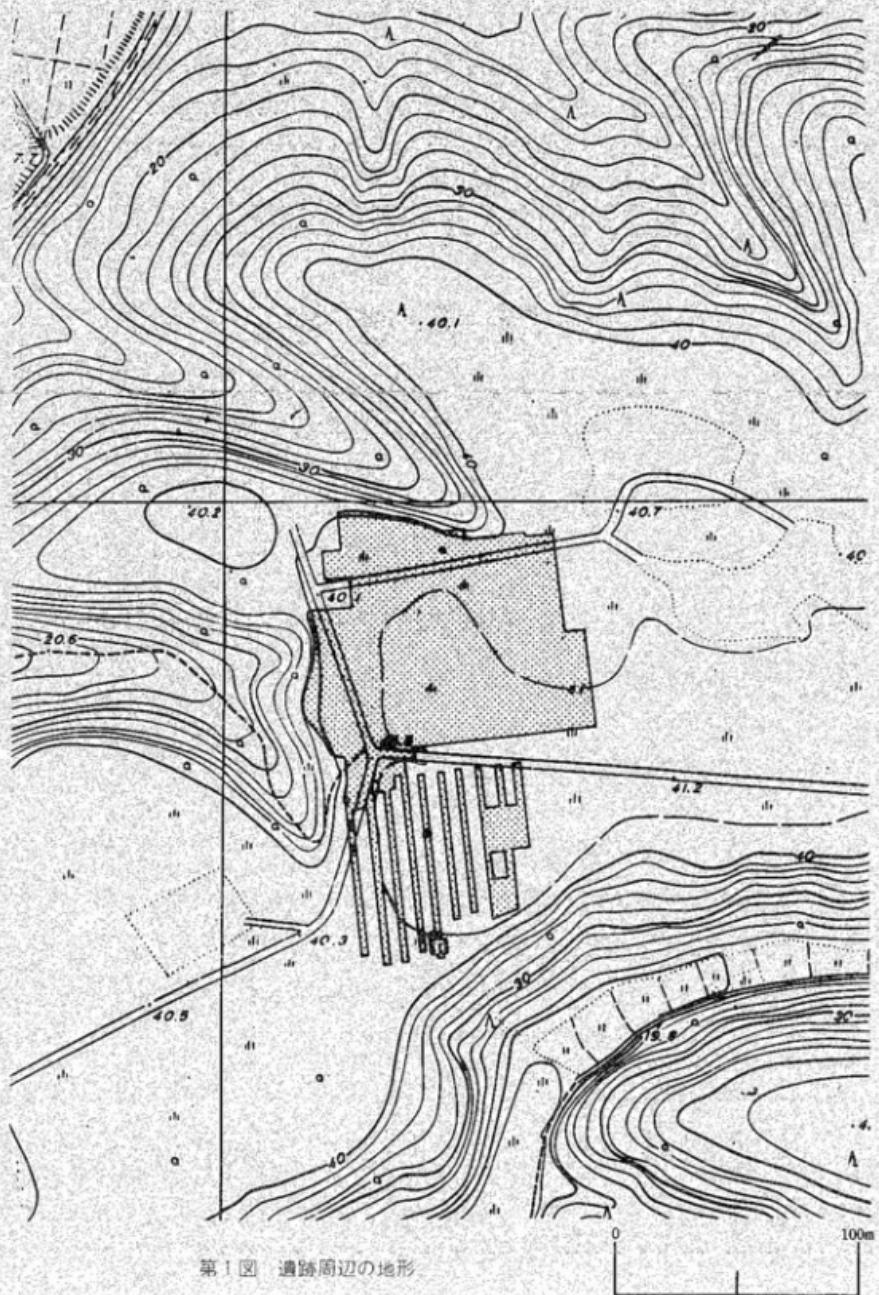


段丘及び遺跡の位置

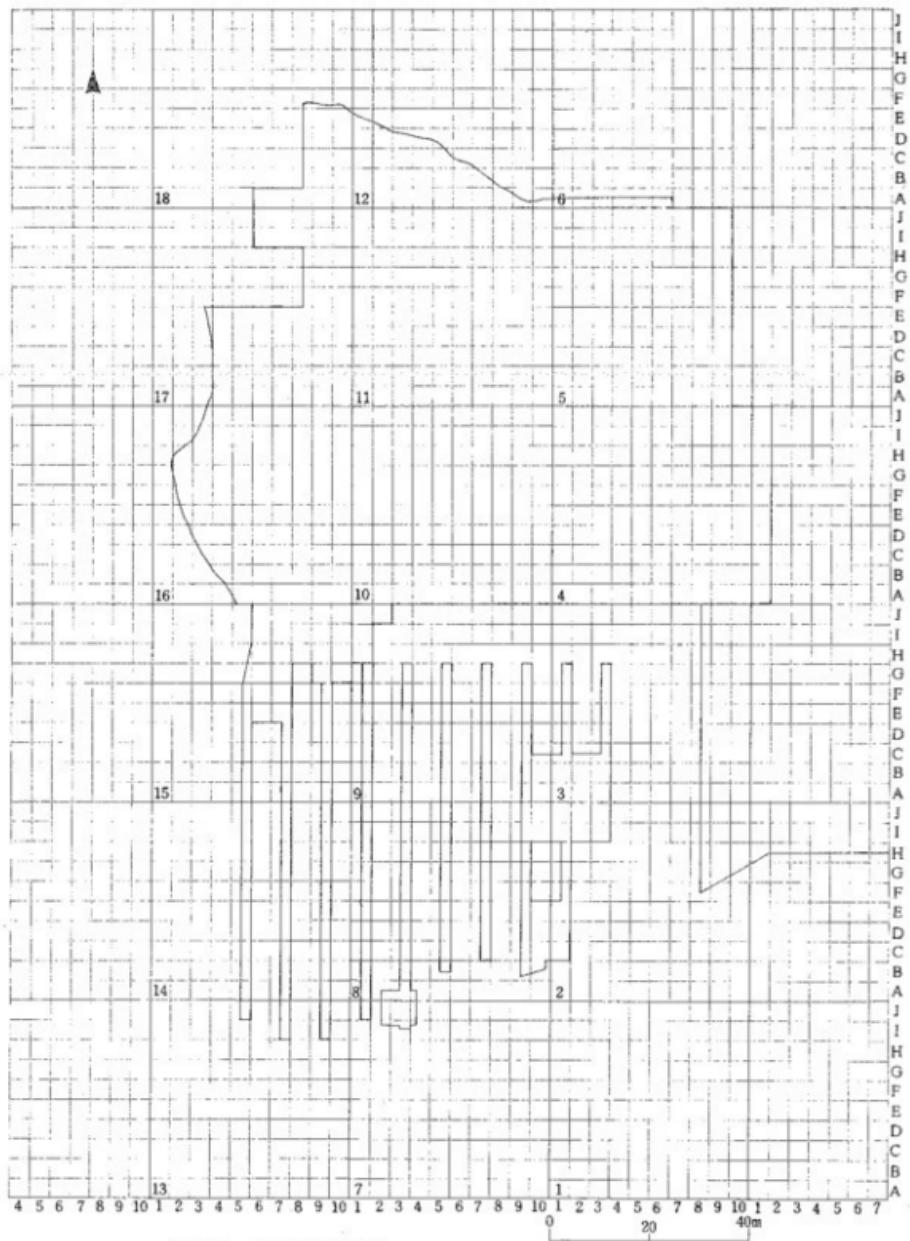
下堤 A 遺跡



下堤 A 遺跡



第1図 遺跡周辺の地形



第2図 グリッド配置図

## 遺跡の概観

御所野台地の北西部、JR 東日本奥羽本線四ツ小旗駅から北東へ約 1.2 km の地点である。西と北側から大きな沢が入り込み、4 つの突出する舌状部をもつ台地が東から西に延びる。遺跡は東側の地峡部から入った中央部に位置する。標高は約 41 m である。

調査の結果、縄文時代中期の集落跡、フ拉斯コ状ピット、土壙、平安時代の集落跡が検出された。隣接して東側に「下堤 C 遺跡」、南西約 300 m に「下堤 B 遺跡」が所在する。

## 遺構と遺物

### 縄文時代

下堤 A 遺跡で検出した 1 号住居跡～17 号住居跡・20・56・58 号住居跡は、昭和 43 年～48 年までの調査で発掘されているが、今回再発掘され、新たに報告することにした。

#### 1 号住居跡（第 3 図）

調査区の中央南側で検出された。

プランは長軸 5.9 m、短軸 4.7 m の橢円形を呈する。確認面からの深さは 10 cm で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 18 個検出されており、主柱穴は住居内を周る深さ 30 cm 以上のピット 6 個が考えられる。炉は 70 cm × 40 cm の方形石窯炉である。床面は炉周辺が堅く、他はやや軟弱である。

#### 2 号住居跡（第 4 図）

調査区の中央南側で検出された。

プランは長軸 7.8 m、短軸 6.5 m の橢円形を呈する。確認面からの深さは 12 cm で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは大小 26 個検出されており、主柱穴は住居内を周る深さ 30 cm 以上の 8 個と考えられる。炉は中央に位置しており、土器埋設炉が 2 基検出された。

## 出土遺物

### 土器（第 70 図）

89～91 は覆土から出土した。いずれも粘土紐貼付による文様が施される。粘土紐上に撚糸圧痕が施されるものもある。

### 石器（第 88 図）

1 は削器である。頁岩製。

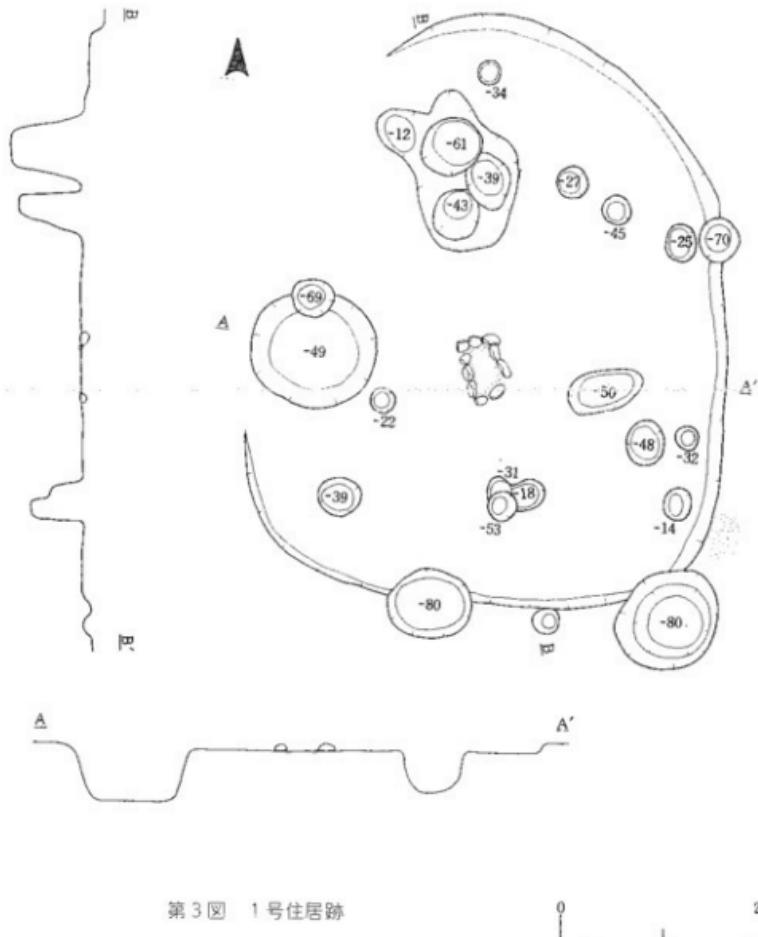
#### 3 号住居跡（第 5 図）

調査区の中央部で検出された。

プランは 3 号住居跡の東側を 4 号住居跡が、また西側を 5 号住居跡が切っており、不明である。確認面からの深さは 16 cm で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは住居内に 6 個検出されているが、主柱穴は不明である。炉は西側に位置しており、地床炉である。床面は堅く良好である。

## 出土遺物

### 土器（第 56 図）



第3図 1号住居跡



1は覆土から出土した。四つの弁状把手をもつ深鉢形土器である。口唇部には粘土紐を貼付、刻みを入れてある。口縁部には粘土紐貼付による隆蒂文が施文され、それに沿って撫糸圧痕文が縁取りされている。地文はLR（綴回転）卑節斜縄文である。

#### 4号住居跡（第6図）

調査区の中央部で検出された。

プランは長軸7.2m、短軸6.4mの梢円形を呈する。確認面からの深さは24cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは18個検出されており、主柱穴は深さ70cm以上の5本が考えられる。炉は中央に位置しており、土器埋設炉である。炉の周辺は火熱を受けて赤変している。床面は西側が堅く、東

側がやや軟弱である。

住居内南西部に、 $110\text{ cm} \times 98\text{ cm}$ 、深さ $45\text{ cm}$ の不整円形を呈するピットの上縁を厚さ $6\sim 8\text{ cm}$ の黄白色粘土で縁取りした施設を検出した。

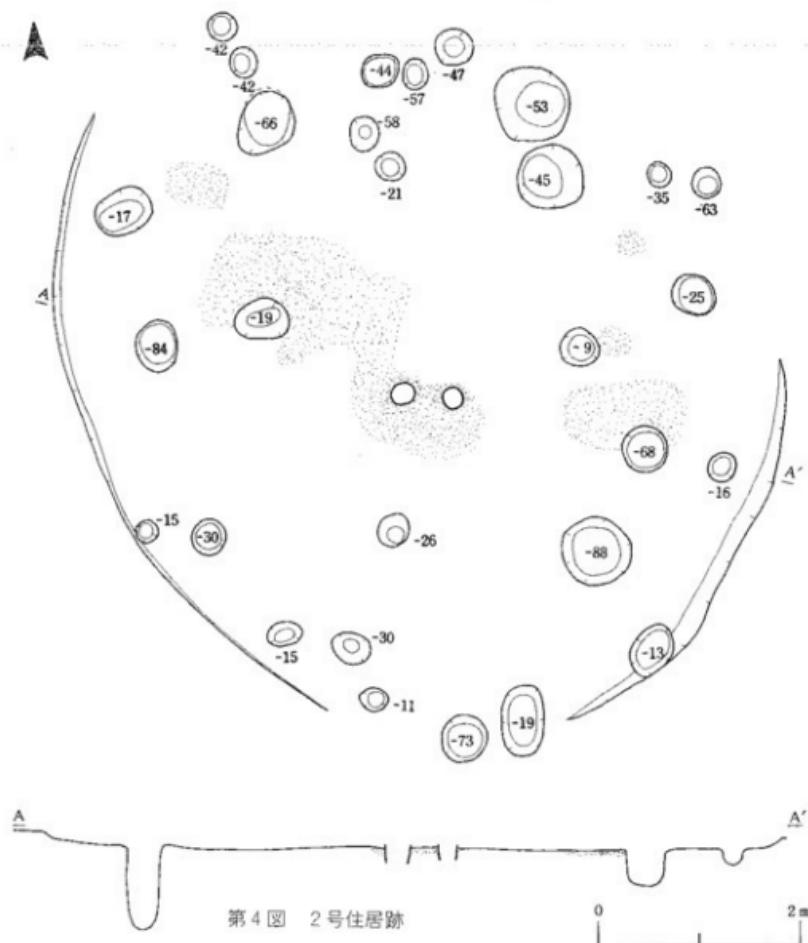
#### 出土遺物

##### 石器（第88図）

2は石錐、3は縦型石匙である。

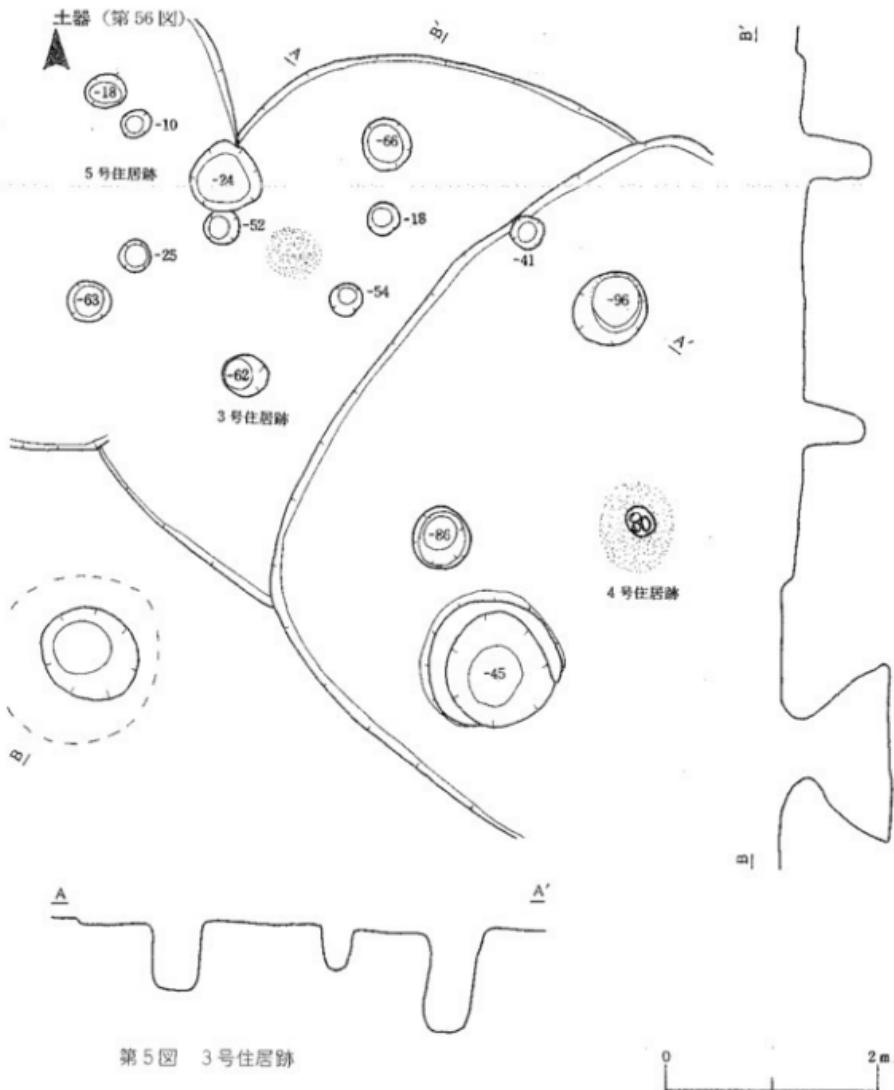
##### 5号住居跡（第7図）

調査区の中央部で検出された。3号住居跡を切り、8号住居跡に切られている。

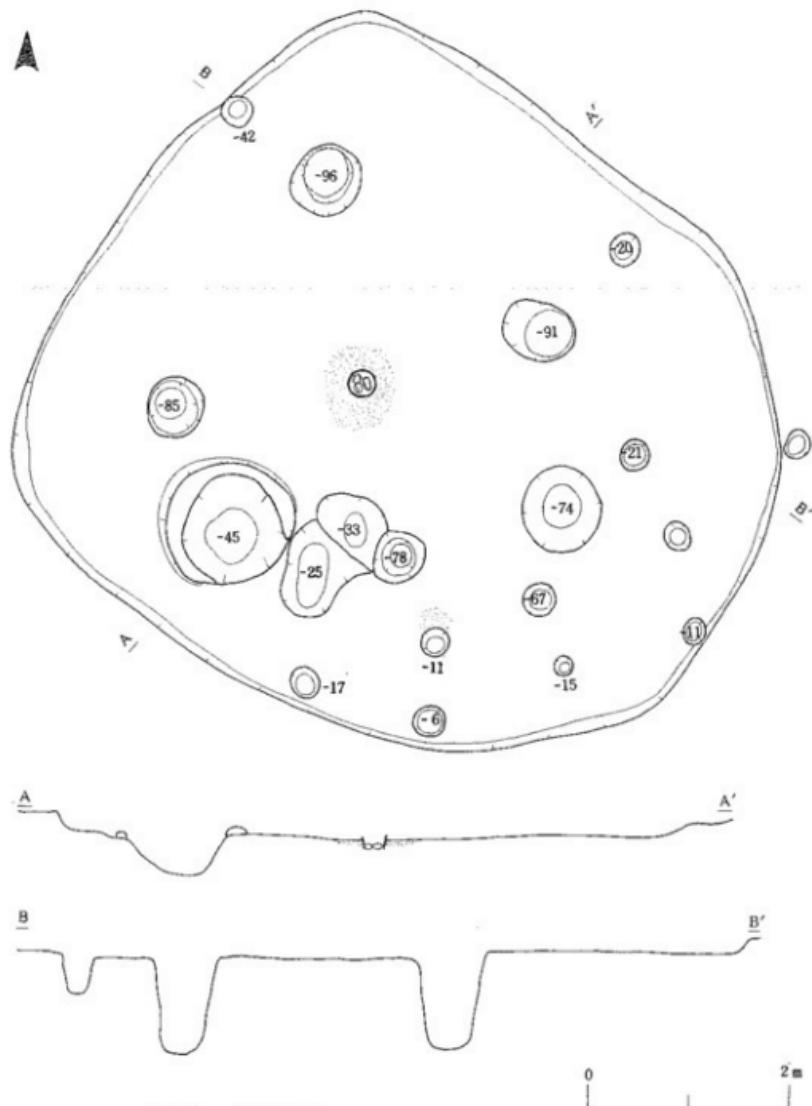


プランは長軸 6.3 m、短軸 5.7 m の橢円形を呈する。確認面からの深さは 14 cm で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 25 個検出され、主柱穴は住居内をめぐる深さ 30 cm 以上のピットが考えられる。炉は西側に 110 cm × 95 cm の円形石囲炉、東側に土器埋設炉が検出された。炉の周辺は火熱を受け赤変している。埋設炉には深鉢形土器が正立に据えられている。

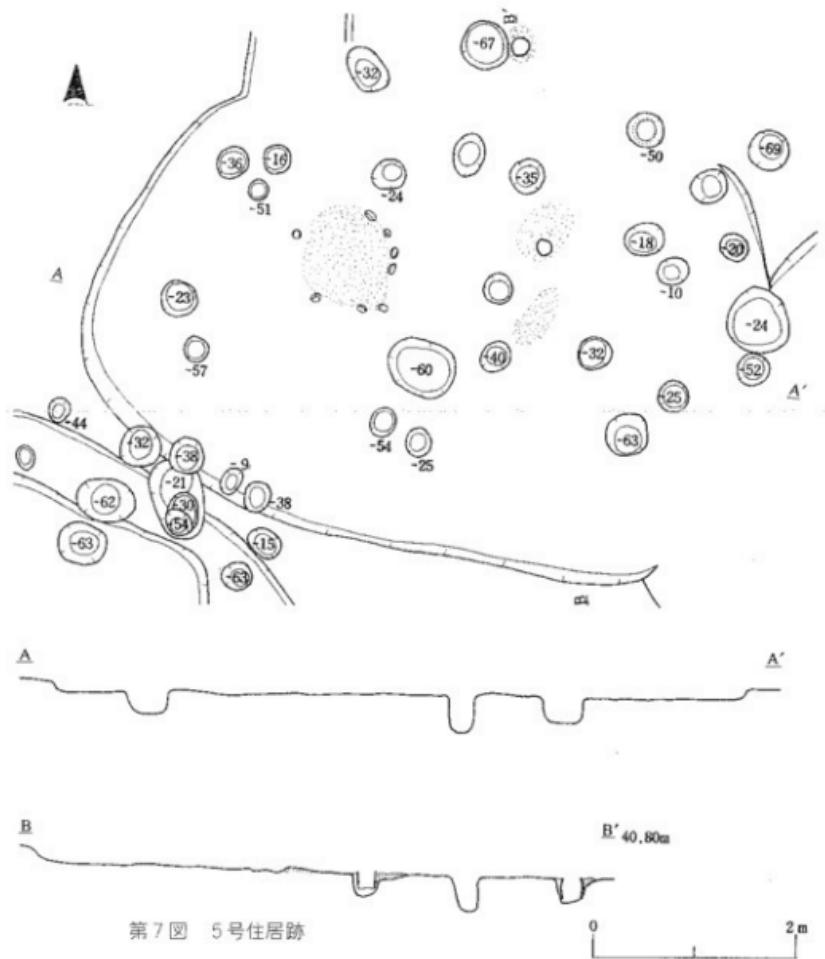
#### 出土遺物



第 5 図 3号住居跡



第6図 4号住居跡



第7図 5号住居跡

2は炉埋設土器である。口縁部と頸部に二条ずつの縄文の圧痕文が施文され、その間には同じく縄文の圧痕による山形文が施される。胴部には綫方向に結び目縄文が施される。地文はLR（綫回転）単節斜縄文である。

#### 6号住居跡（第8図）

調査区の中央南側で検出された。

プランは長軸5.7m、短軸4.9mの椭円形を呈する。確認面からの深さは8cmで、壁はゆるやかに立ち上がる。ピットは12個検出されており、主柱穴は深さ25cm以上の6個と考えられる。炉は中央南側に位置しており、93cm×70cmの長方形を呈する地床炉が検出された。床面は堅く良好であ

る。

#### 7号住居跡（第9図）

調査区の中央で検出された。

プランは長軸7.3m、短軸6.2mの楕円形を呈する。さらに、壁面より60～90cm内側に長軸5.2m、短軸4.4mの不整椭円形のプランが検出されている。確認面からの深さは24cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

ピットは多数検出されており、主柱穴は深さ50cm以上のものと考えられる。炉は中央や南側に位置しており、石囲土器埋設炉である。埋設土器は炉の北側に2個検出された。床面は堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第56・70図）

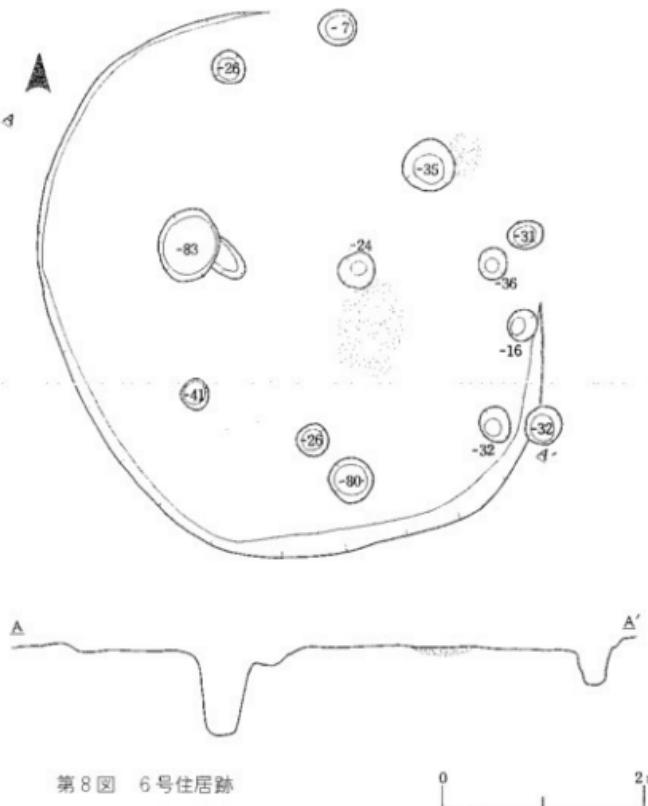
3は埋設土器、4は南側柱穴内覆土出上である。3は体部に沈線による剣先状渦巻文が施文されている。地文はLR（綱回転）単節斜縞文である。4は口縁部にヘラ状工具による浅い一条の沈線がめぐる。地文はLR（横回転）単節斜縞文である。92・93は粘土紐貼付けによる隆帶文を作り出し、縞文の圧痕文が施されるものもある。94は縦位、横位の細い沈線によって文様が展開する。

#### 8号住居跡（第10図）

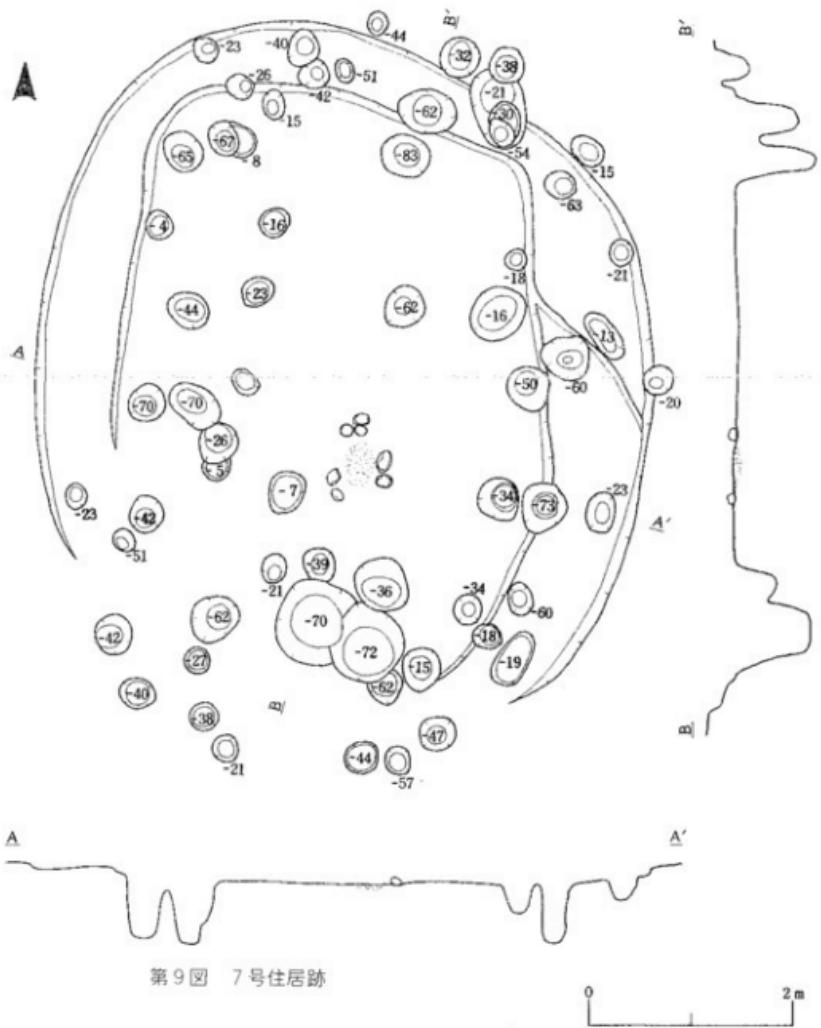
調査区の中央で検出された。

5号住居跡を切り、9号住居跡に切られている。

プランは長軸4.9m、短軸4.4mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは8cmで、壁は斜めに立



第8図 6号住居跡



第9図 7号住居跡

ち上がる。ピット、主柱穴は不明である。炉は南側に位置しており、土器埋設炉である。口縁部、底部を欠いた深鉢形土器を正立に掘えている。炉の周辺は火熱を受け赤変している。

#### 出土遺物

##### 土器（第56図）

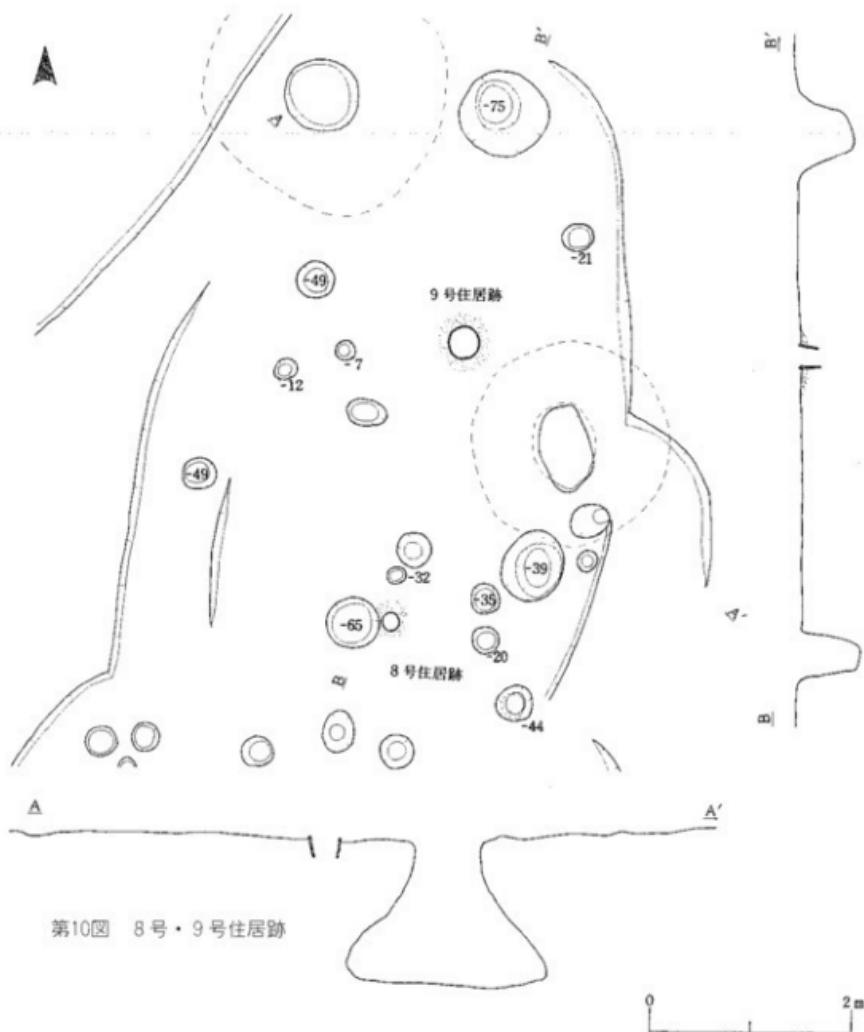
5は埋設土器、6は覆土からの出土である。頸部より下方に円形の突起を四ヶ所配し、その突起を中心とし突起間を連絡するように沈線文で文様を展開させている。地文はLR（綱回転）単節斜繩文

である。6はキャリバー形の深鉢形土器で、口唇部には粘土紐を貼付し、撻糸圧痕による刻目を施している。口唇部から下方にかけては二条ないし四条の撻糸圧痕と一条の隆帯によって文様を展開させている。地文は口縁部がRL(縦回転)単節斜繩文、胸部がLR(縦回転)単節斜繩文である。

#### 9号住居跡(第10図)

調査区の中央で検出された。

プランは推定長軸7m以上、短軸4.7mの橢円形を呈する。確認面からの深さは10cmで壁は斜め



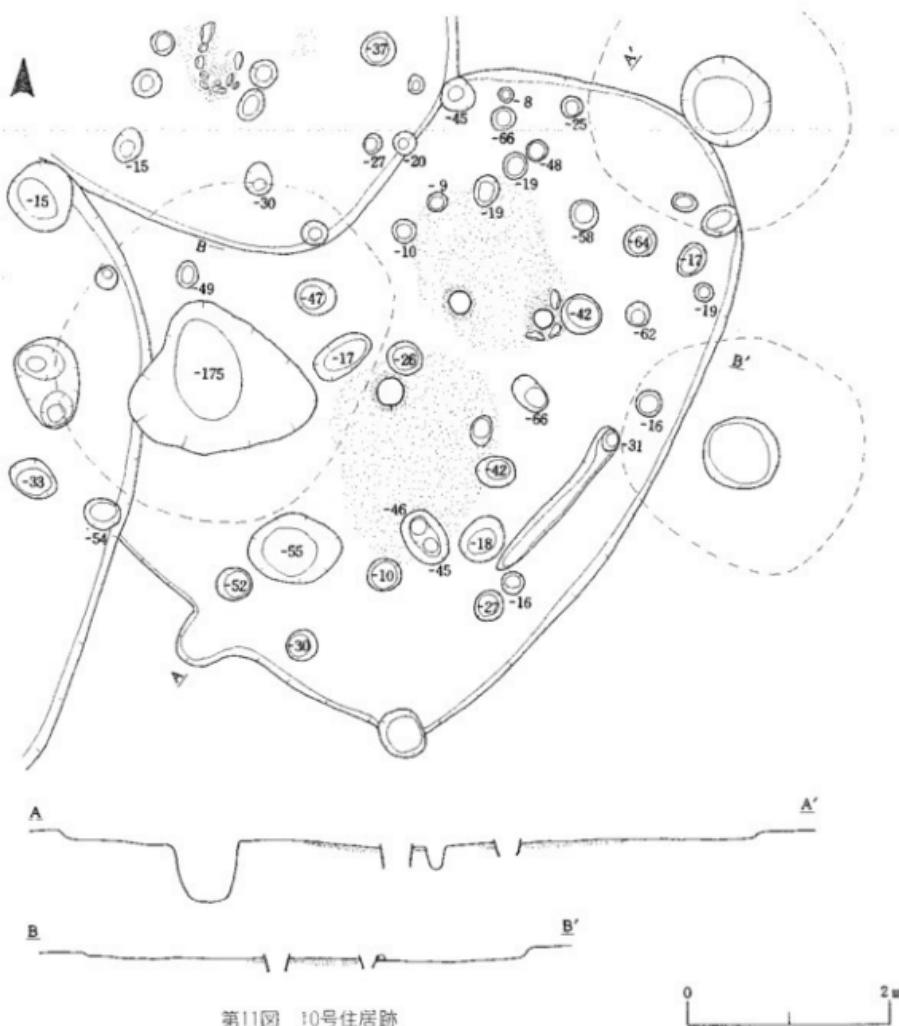
第10図 8号・9号住居跡

に立ち上がる。ピットは14個検出されており、主柱穴は深さ50cm以上の5個と考えられる。炉は中央に位置しており、土器埋設がである。炉の周辺は火熱を受けて赤変している。床面は堅く良好である。

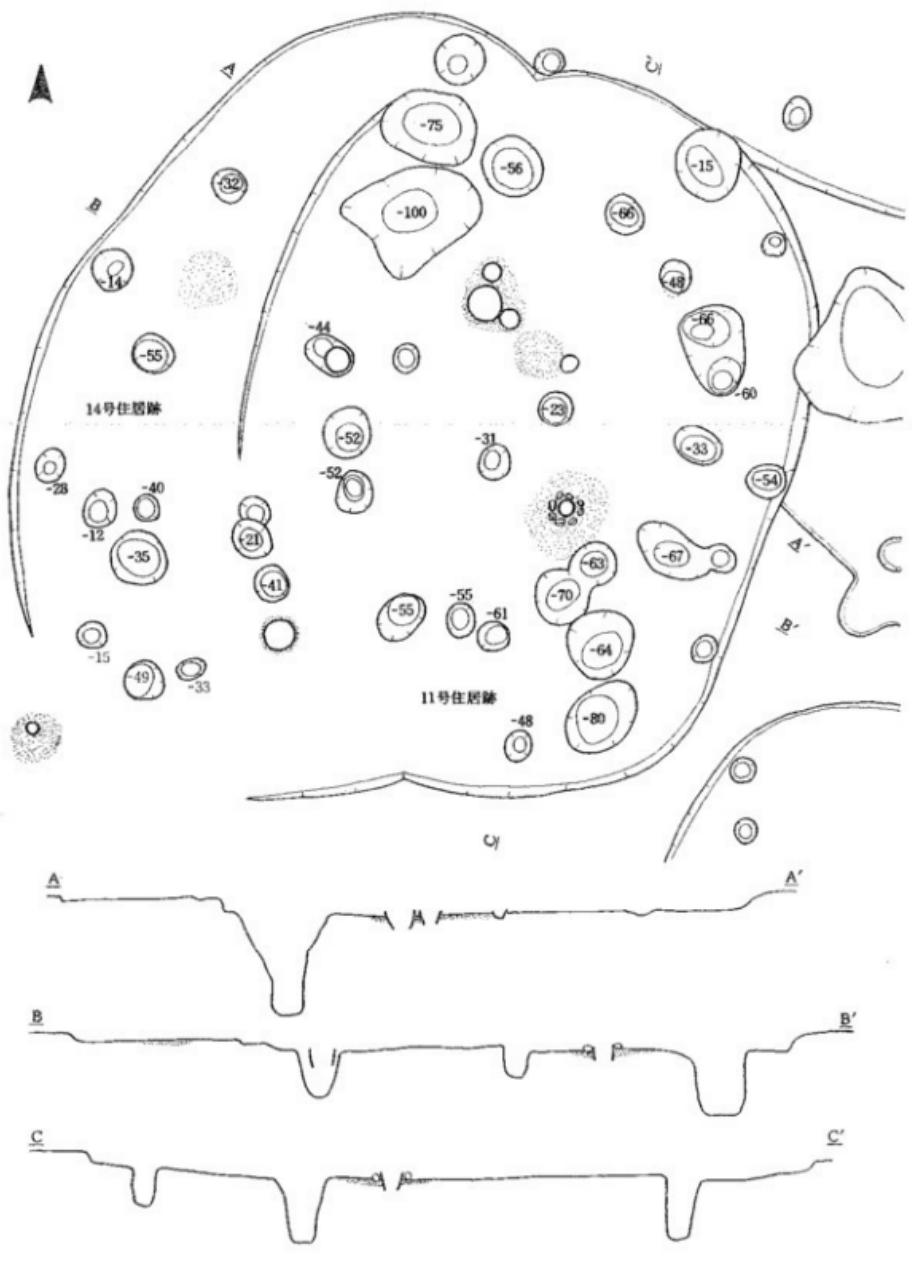
#### 出土遺物

##### 土器（第57図）

7は覆土からの出土である。浅鉢形土器で、口縁部は長楕円形の区画で燃糸圧痕を施し、胸部



第11図 10号住居跡



第12図 11号・14号住居跡

には垂下と横にひらく燃糸圧痕が交互に施文されている。

#### 10号住居跡（第11図）

調査区の中央で検出された。

11号・13号住居跡によつて切られている。

プランは長軸6.8m、短軸4.5mの不整橢円形を呈する。確認面からの深さは14cmである。壁は斜めに立ち上がる。住居内東側に長さ1.9m、幅20cm、深さ4cmの深い溝が検出された。ピットは多数検出されているが主柱穴は不明である。炉は中央部に三基、すなわち石圓土器埋設炉一基、土器埋設が二基検出された。

#### 出土遺物

##### 石器（第88図）

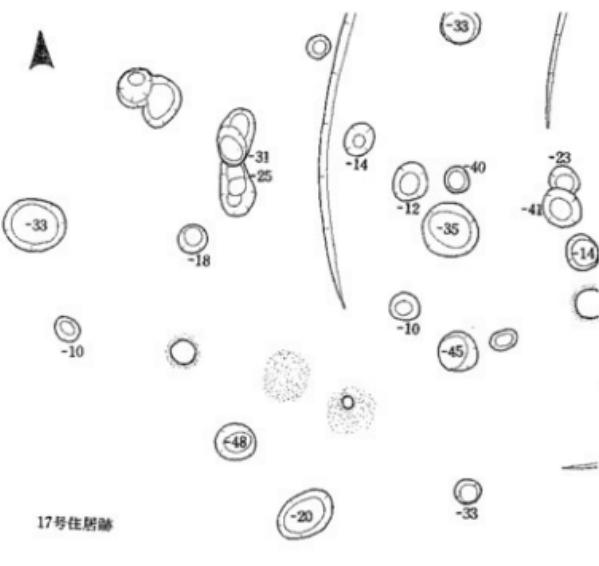
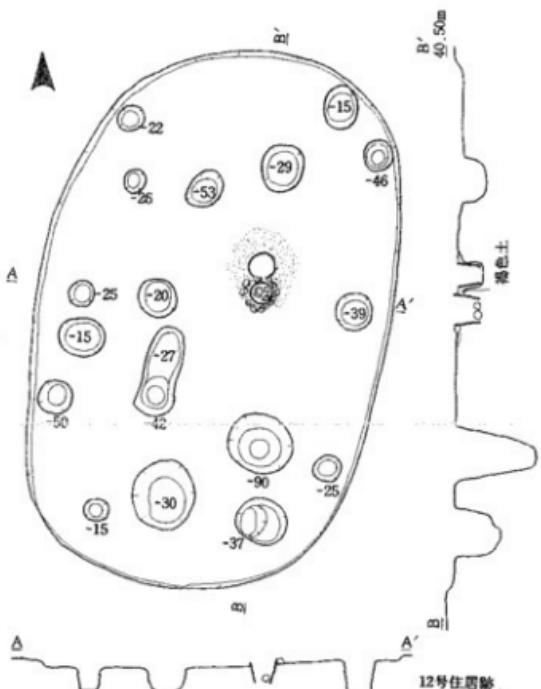
4は無茎の石鏃で先端部が欠損している。

#### 11号住居跡（第12図）

調査区中央部で検出された。

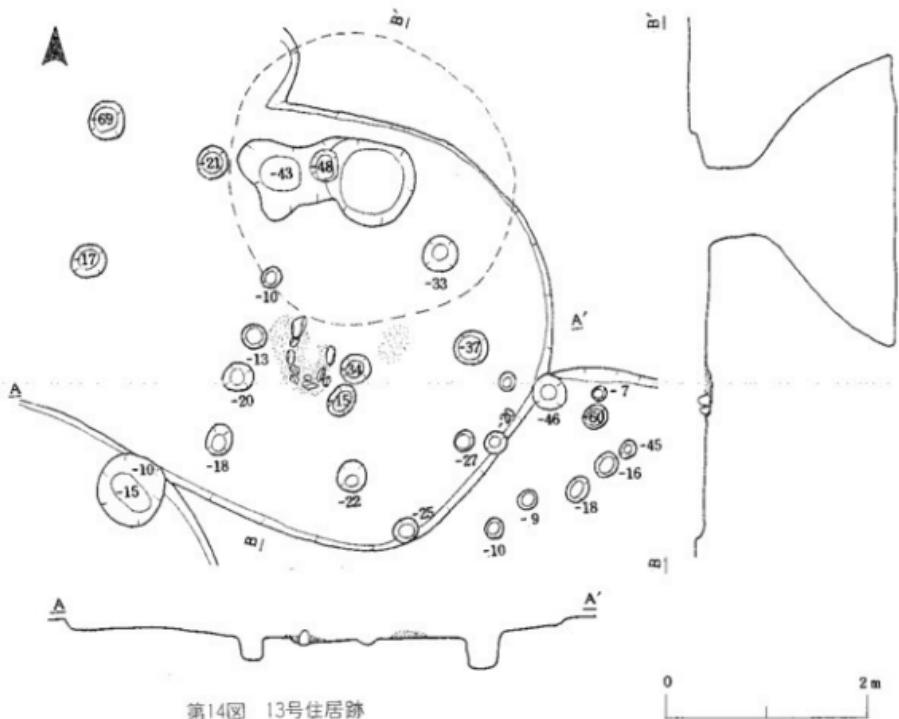
14号住居跡を切っている。

プランは長軸7.3m、短軸5.5mの橢円形を呈する。確認面からの深さは18cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは多数検出されているが主柱穴は不明である。炉は中央部に位置しており、石圓



第13図 12号・17号住居跡





第14図 13号住居跡

土器埋設炉である。炉の周辺は火熱を受け赤変している。

#### 12号住居跡（第13図）

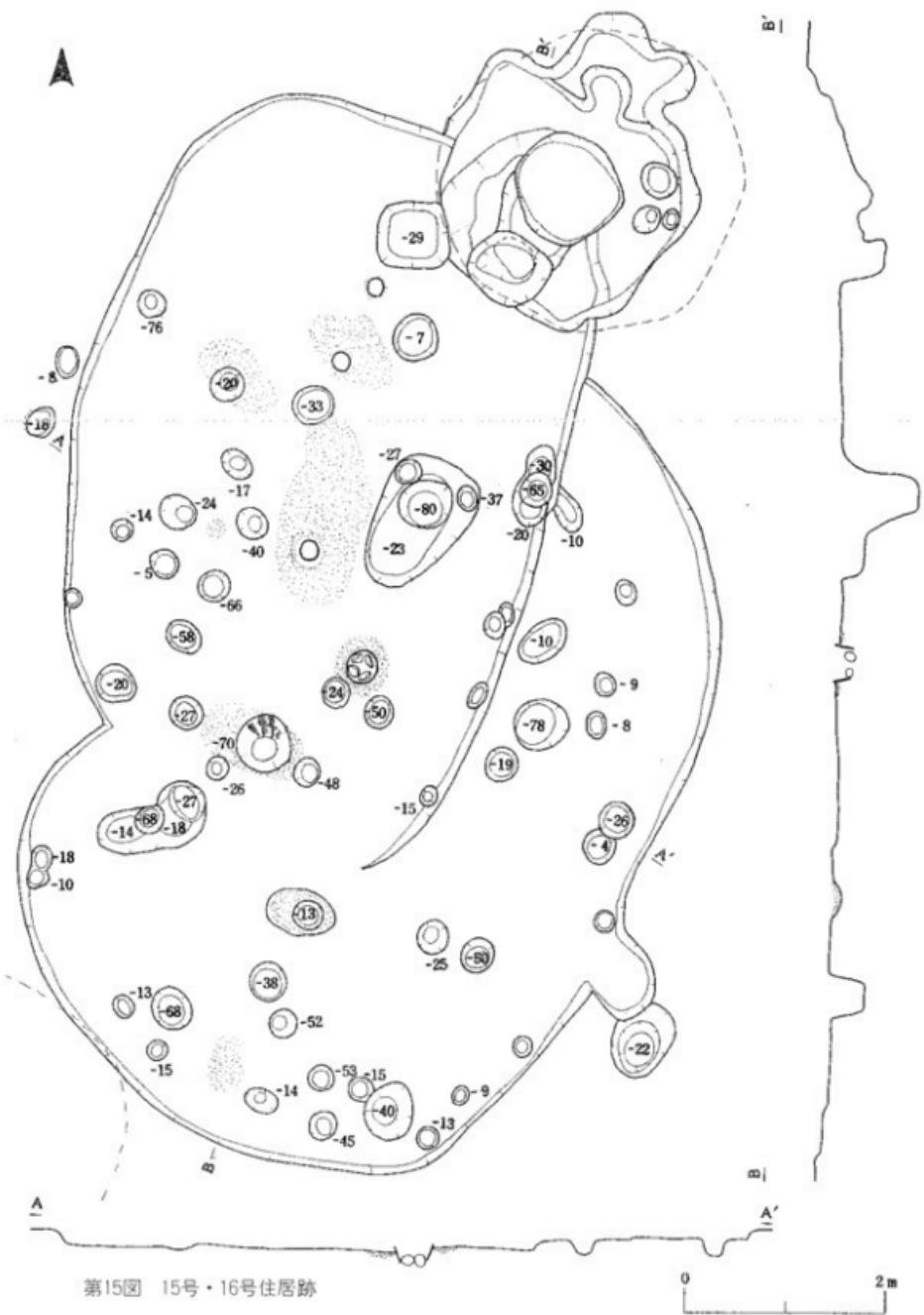
調査区中央で検出された。

プランは長軸 5.5 m、短軸 3.5 m の橢円形を呈する。確認面からの深さは 10 cm で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 18 個検出され、主柱穴は深さ 25 cm 以上の 6 個と考えられる。炉は中央部に位置し、新旧二時期のものが検出された。新炉は南側に位置し、小砾を円状に配した石圜土器埋設炉である。埋設土器内には小砾が込められていた。旧炉は新炉北側に堆積した焼土下より検出され、口縁部および底部を欠いた深鉢形土器が正立に据えられている。住居の拡張、縮少はみられないことから、同住居内で炉を移し替えたものと考えられる。いずれの炉の周辺も火熱を受け赤変している。床面は堅く良好である。

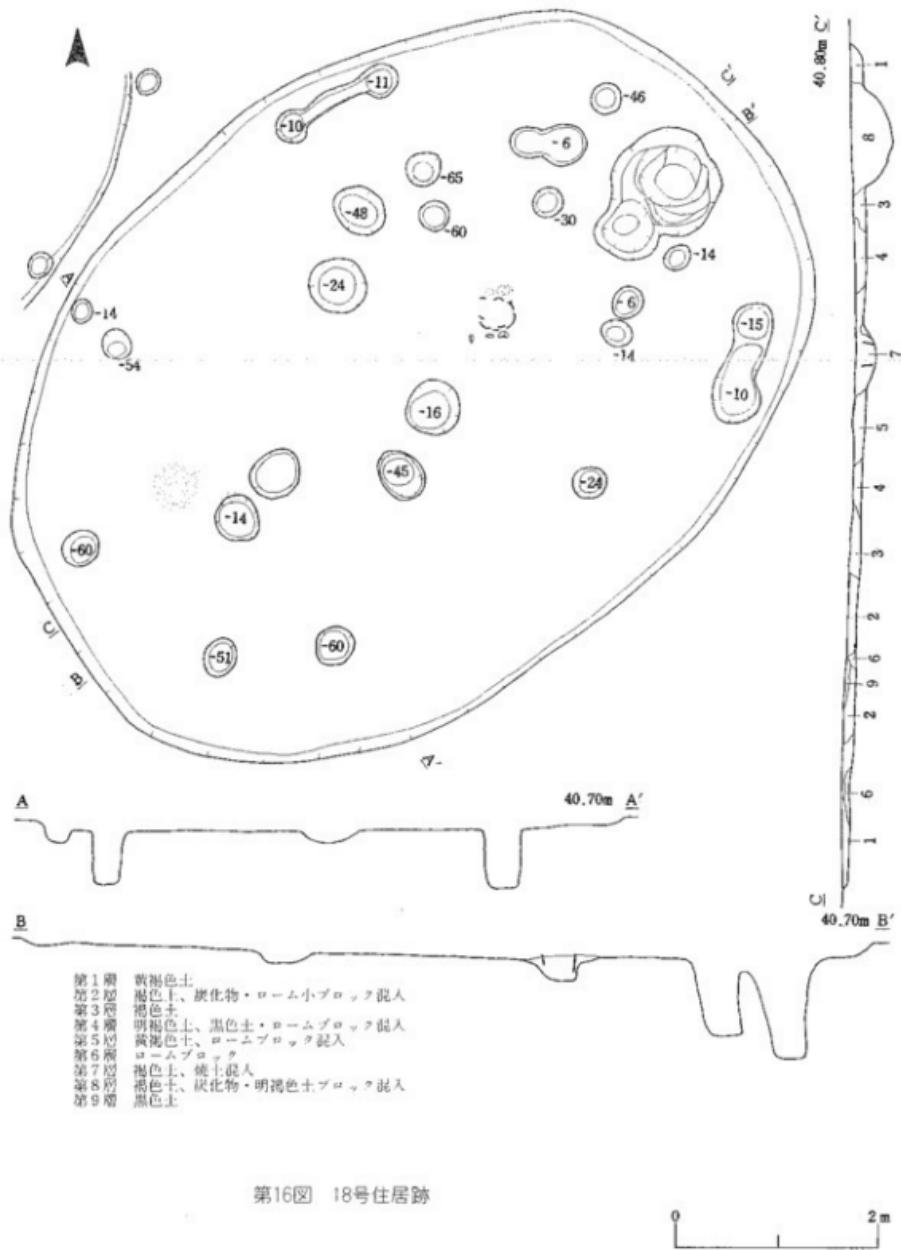
#### 出土遺物

##### 土器（第57図）

8 は旧炉埋設土器である。口縁部に粘土紐貼付による直線および波状の隆帯が施され、部分的に刺突も施される。地文は LR（継回転）単節斜繩文である。



第15図 15号・16号住居跡



第16図 18号住居跡

### 13号住居跡（第14図）

調査区中央で検出された。

10号住居跡、62号住居跡を切っている。

プランは、長軸4.9m、短軸4.3mの梢円形を呈する。確認面からの深さは23cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは17個検出されており、主柱穴は深さ20cm以上のものと考えられる。炉は中央部に位置しており、70cm×50cmの大きさを計るコの字型石圍炉である。炉内から埋設土器を抜き取った痕跡とみられる落ち込みが検出された。

### 14号住居跡（第12図）

調査区西側中央で検出された。

11号住居跡に切られ、17号住居跡を切っている。

プランは長軸7.5m、短軸6.0mの梢円形を呈する。確認面からの深さは6cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは多数検出されたが主柱穴は不明である。炉は南側及び11号住居跡内の北側に位置しており、いずれも土器埋設炉である。

### 15号住居跡（第15図）

調査区西側中央部で検出された。

16号住居跡によって切られている。

プランは長軸8.5m、短軸5.7mの梢円形を呈する。確認面からの深さは12cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは多数検出されているが、深さ40cm以上のものが考えられる。炉は16号住居跡内南東部の土器埋設炉が考えられる。床面は全般的に軟弱である。

## 出土遺物

### 土器（第57・70図）

58はピット内覆土、95～102は覆土からの出土である。58はキャリバー形の深鉢形土器である。地文はRL（縦回転）単節斜繩文である。95・97～101は粘土紐貼付による隆帯と燃糸圧痕で施文されている。96・102は竹管状工具による沈線が施文されている。

### 石器（第88図）

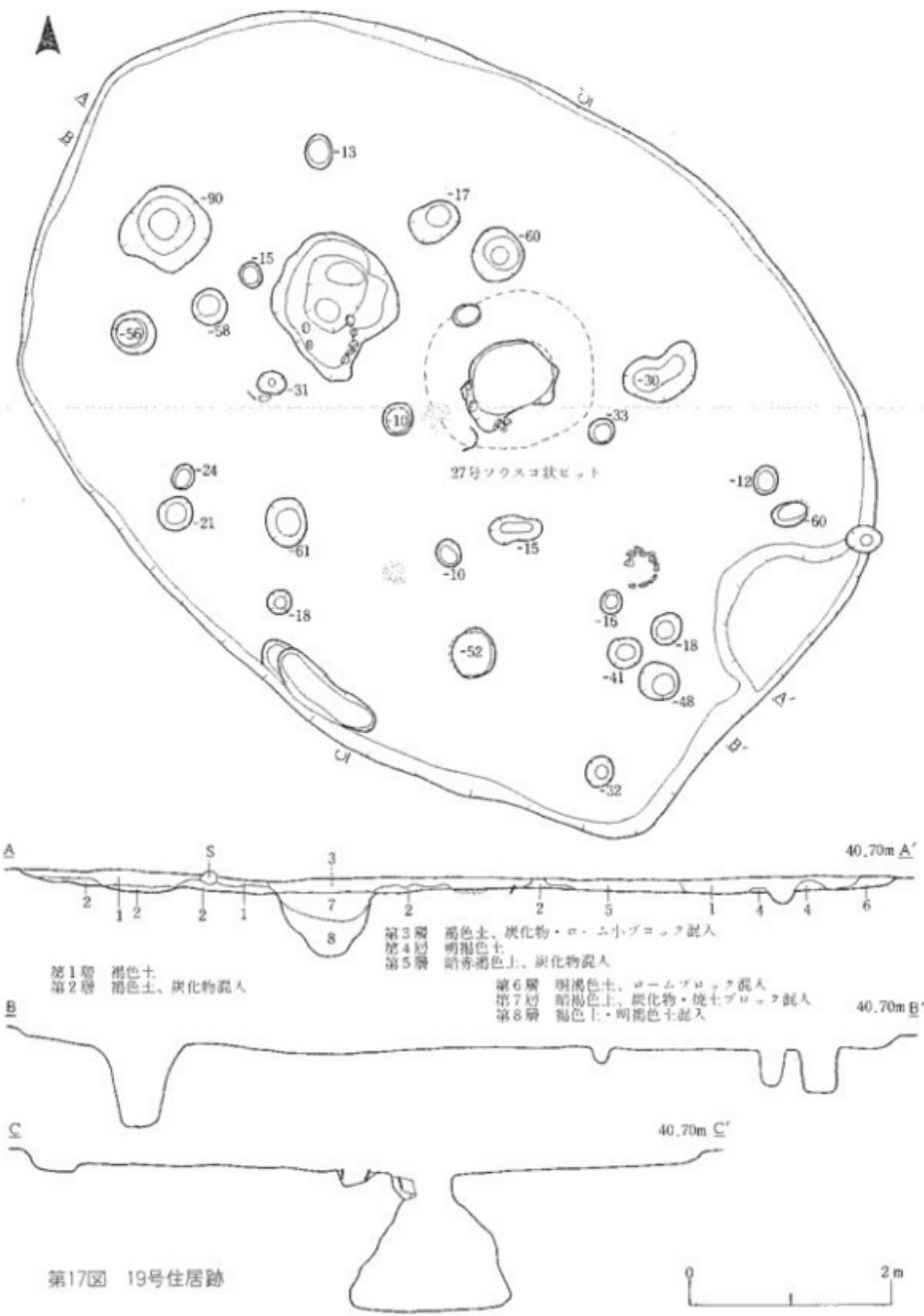
5は無茎の石鏃である。

### 16号住居跡（第15図）

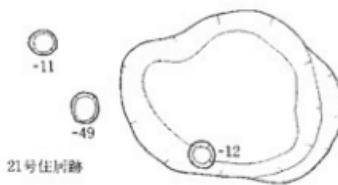
調査区西側中央部で検出された。

プランは長軸7.4m、短軸4.9mの梢円形を呈する。確認面からの深さは20cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは多数検出されており、主柱穴は深さ50cm以上の5個と考えられる。炉は中央および北側に三基検出され、いずれも土器埋設炉である。炉周辺は火熱を受け赤変している。床面は堅く良好である。

## 出土遺物



A



21号住居跡

○ -12  
○ -7

○ -70

○ -39

○ -20

○ -21

○ -31

○

○ -69  
○ -15

○ -20  
○ -10

○ -39

○ -81

○ -50  
○ -12

○ -54

○ -64

○ -22

○ -53

○ -63

48号住居跡

擾乱

m

40,60m



0

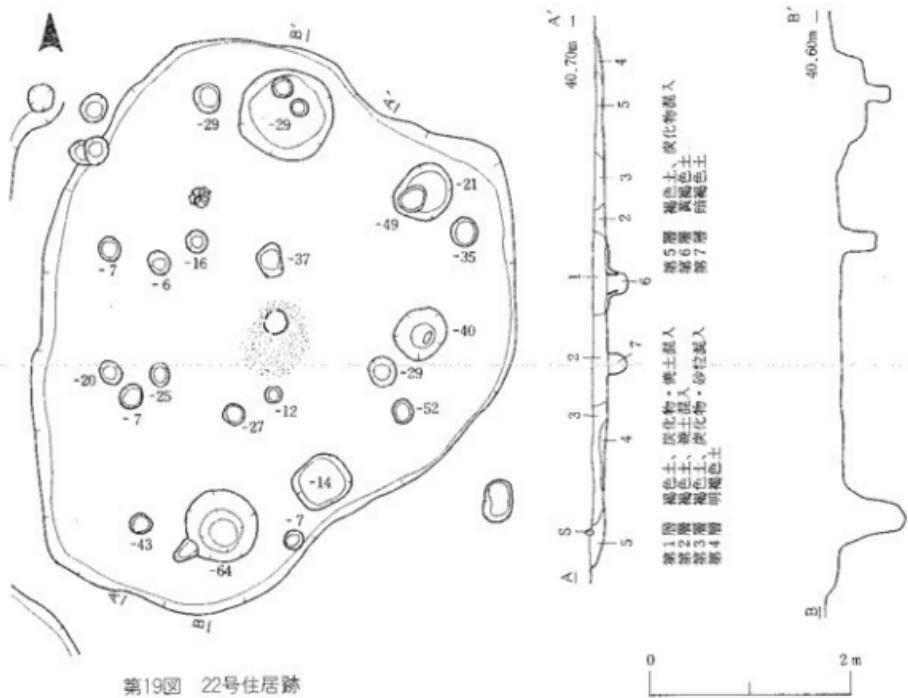
2m

A

40,60m

A'

第18図 20号・21号・48号住居跡



第19図 22号住居跡

### 土器（第57図）

11は北側炉の埋設土器、10は覆土からの出土である。11は頭部が外反する深鉢形土器である。頭部には平行な二条の粘土紐貼付による隆帯、その間には波状の隆帯によって文様を構成している。地文はRL（継回転）単節斜繩文である。10は深鉢形土器で、体部地文がLR（横回転）単節斜繩文である。

### 17号住居跡（第13図）

調査区の西側中央部で検出された。

長期間における客土作業と北西方向に走る農道により全体のプランは不明である。炉は北西部と南東部に位置し、いずれも土器埋設炉である。いずれも炉周辺は火熱を受け赤変している。

### 出土遺物

#### 土器（第57図）

12は南西部炉埋設土器である。頭部が外反する深鉢形土器である。粘土紐隆帯を横位または縦位に施し、隆帯上に撚糸圧痕が施される。また隆帯間に撚糸圧痕および紐の末端による圧痕（擬似爪形文）が施される。

### 18号住居跡（第16図）

調査区の中央で検出された。

プランは長軸 8.5 m、短軸 6.1 m の橢円形を呈する。確認面からの深さは 12 cm で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 26 個検出され、主柱穴は深さ 40 cm 以上の 7 ~ 8 個と考えられる。炉は北東側に位置しており、土器埋設炉である。炉の周辺は火熱を受け赤変している。埋設炉には深鉢形土器が正立に据えられている。床面はやや軟弱である。北東側に壇口部の大きさ 1.1 m、深さ 1.0 m の特異なピットが検出された。

#### 出土遺物

##### 土器（第 57・70 図）

13 は埋設土器、103 ~ 114 は覆土からの出土である。13 は地文が RL（縦回転）単節斜繩文の深鉢形土器である。部分的に S 字状の繩文の圧痕文がみられる。103 ~ 104 は竹管状工具による沈線が施文される。105、106 ~ 113 は繩文（単節）による圧痕文が施文される。114 は粘土紐隆帶上に刻目が施文されている。

##### 石器（第 88 図）

6 は石錐で、先端部がわずかに欠損している。7・8 は縫型石匙である。9 は槍先状石器である。

#### 土製品

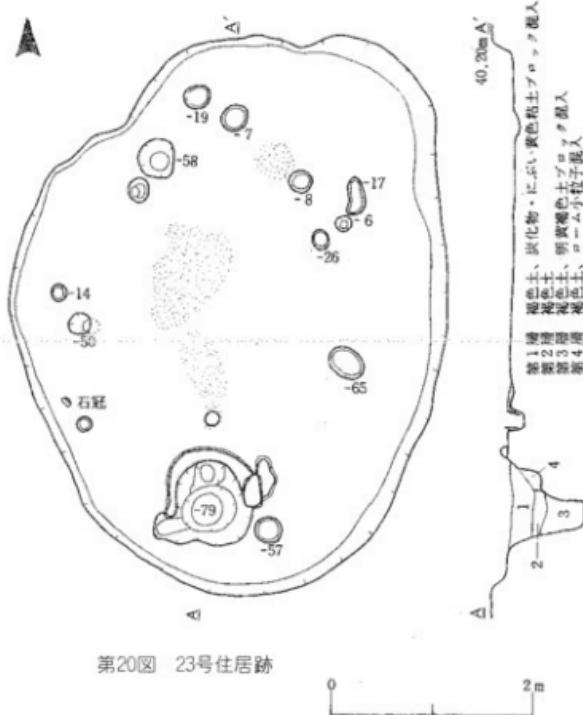
##### 土偶（第 162 図）

24 は土偶の頭部である。上部に刻みがあり、目、口が表されている。

#### 第 19 号住居跡（第 17 図）

調査区の中央部で検出された。

プランは長軸 9.0 m、短軸 6.6 m の橢円形を呈する。確認面からの深さは 12 cm で、壁は斜めに立



第20図 23号住居跡

ち上がる。ピットは 25 個検出され、主柱穴は深さ 30 cm 以上の 8 個と考えられる。炉は北西部と南西部に石畳炉、また中央部に 2 基の土器埋設炉が検出されたが、北側の炉は 27 号フラスコ状ピットにより北半分が壊されている。いずれも深鉢形土器を正立に掘えており、周辺は火熱を受け赤変している。床面はやや軟弱である。

#### 出土遺物

##### 土器（第 57・58・71 図）

14・15 は炉埋設土器、115～126 は覆土からの出土である。

14 は深鉢形土器で、粘土紐貼付と沈線によって文様を展開する。平行する隆線間にには弧状の隆線、沈線を配している。地文は単節の圧痕文が施される。15 は深鉢形土器の頸部から胴部にかけての破片である。粘土紐貼付の隆線と半截竹管状工具による沈線の組み合わせで文様を施している。115・116・150・121・123～125 は粘土紐貼付による隆帶および隆線や半截竹管状工具による沈線で文様を展開している。117・118 は単節縄文の圧痕文によって文様が展開される。126 は単節縄文の圧痕文や爪形文を施し文様を展開させている。

##### 石器（第 88 図）

10 は縦型石器である。11 は木葉形を呈する石槍である。12 はヘラ状石器である。13 は側面を利用した削器である。

#### 20 号住居跡（第 18 図）

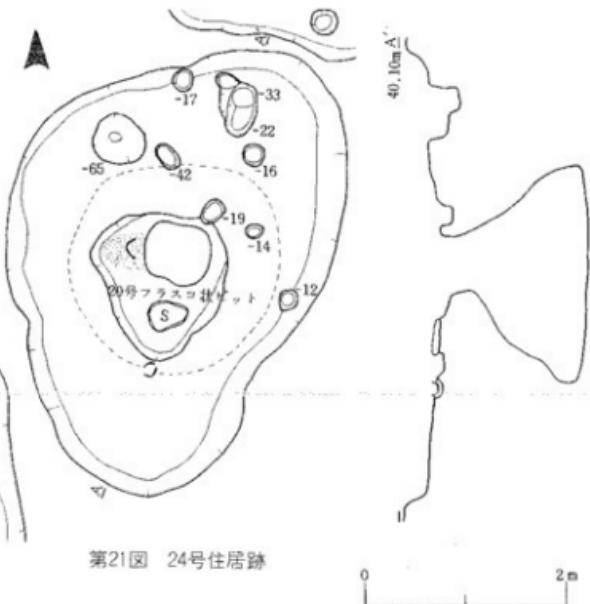
昭和 48 年度に調査されている住居跡である。（N 23 E 1 住居跡）

調査区の中央部で検出された。

全体のプランは不明であるが、径 4 m 以上の円形もしくは椭円形を呈するものと考えられる。主柱穴は炉を中心として円形もしくは椭円状に周る深さ 40 cm 以上のものと考えられる。炉は土器埋設炉で、周辺は火熱を受け赤変している。床面は堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第 58 図）



第 21 図 24 号住居跡

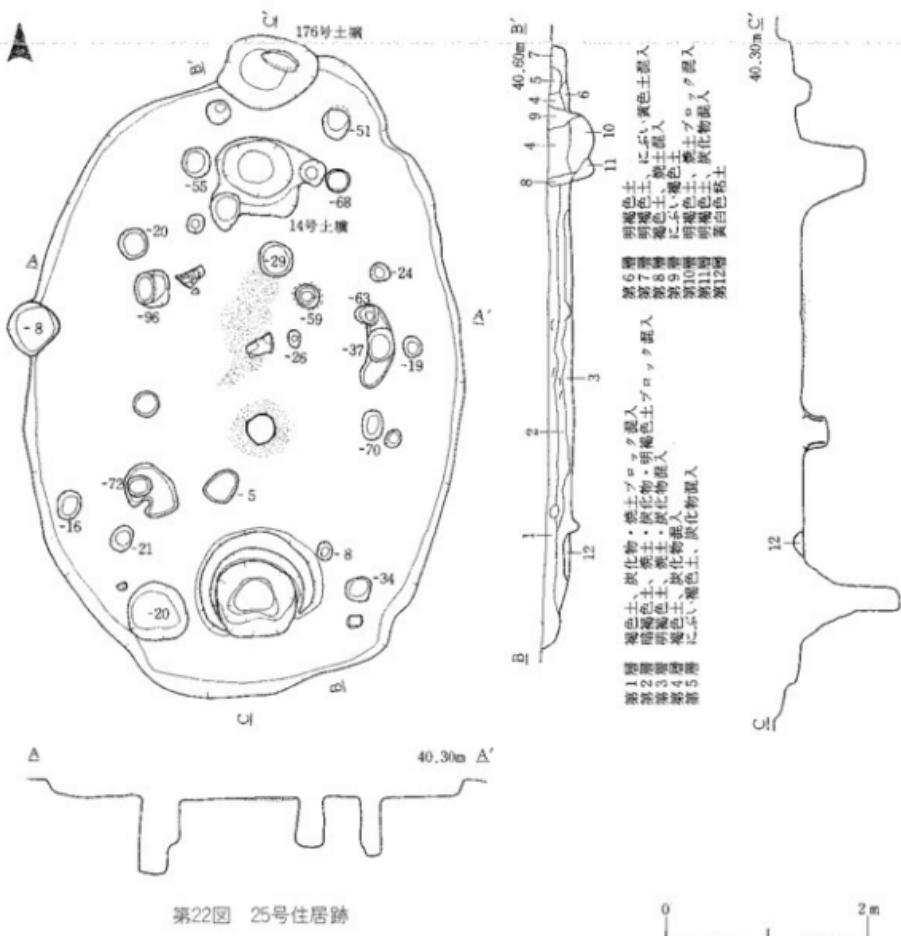


16は炉埋設土器である。粘土紐貼付による隆起部上に撚糸圧痕文を施し、隆起部には「C」字状に撚糸圧痕文を施文している。地文は結束のある横位の羽状網文である。

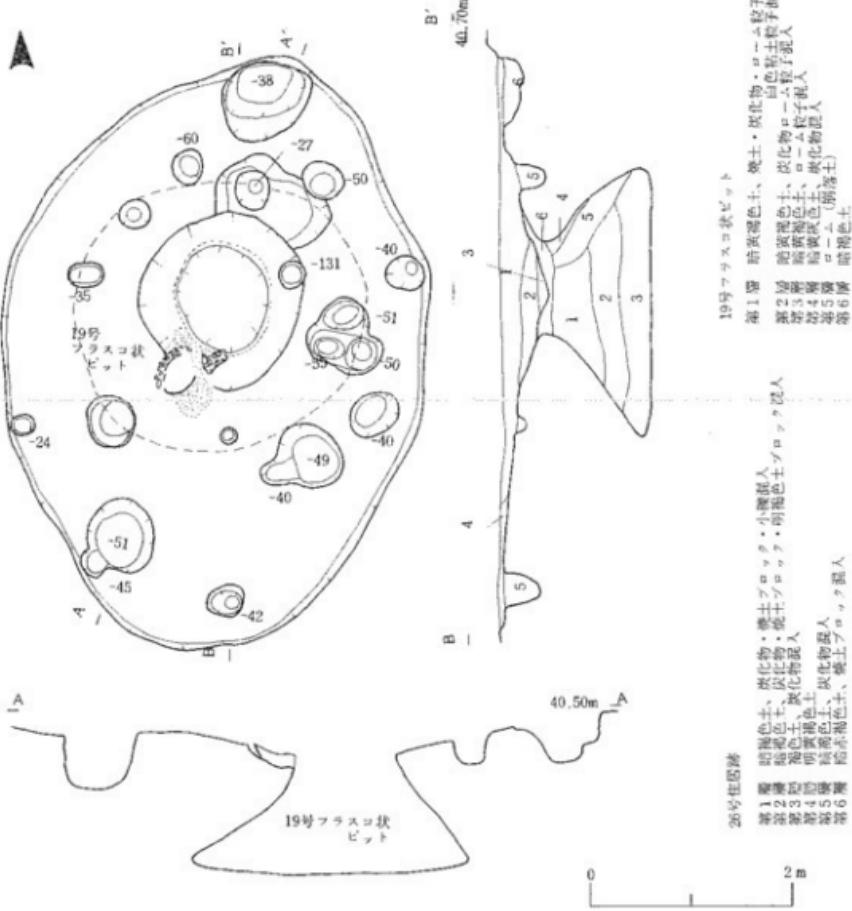
#### 21号住居跡（第18図）

20号住居跡の北側で検出された。

全体のプランは不明であるが、径4.3m以上の円形もしくは橢円形を呈するものと考えられる。主柱穴は炉を中心として円形もしくは橢円形状に周る深さ20cm以上のものと考えられる。炉は土器埋設炉で、周辺は火熱を受け赤変している。埋設炉には深鉢形土器を正立に据えている。床面は堅く良好である。



第22図 25号住居跡



第23号 26号住居跡

#### 出土遺物

##### 土器（第58図）

17は炉埋設土器である。口縁部が外反する深鉢形土器で、頸部に段がつく。口縁部に波状の粘土紐貼付による隆線が垂下する。地文はLR(横回転)単節斜繩文で、縦方向に綾繩文が施文されている。

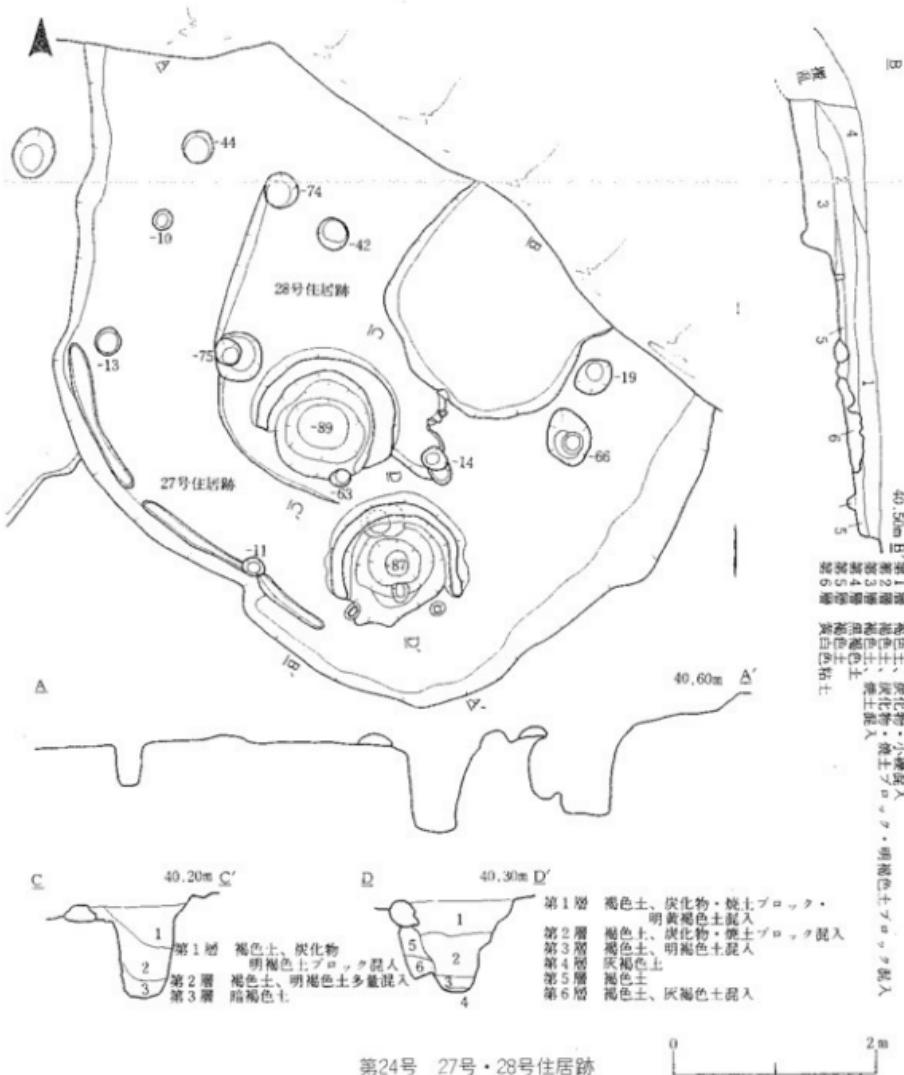
##### 石器（第88図）

14は槍先状石である。

##### 22号住居跡（第19図）

調査区の中央部で検出された。

プランは長軸 5.7 m、短軸 4.8 m の不整橢円形を呈する。確認面からの深さは 14 cm で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 21 個検出され、主柱穴は深さ 35 cm 以上のものと考えられる。がは中央部に位置しており、上器埋設炉である。炉の周辺は火熱を受け赤変している。埋設炉には深鉢形土器が正立に据えられている。床面は堅く良好である。南側に竪口部の大きさが 70 cm、深さ 64 cm の特異なピットが検出された。



## 出土遺物

### 土器 (第 58・71・72 図)

18 は炉埋設土器である。口縁部がキャリバー状を呈する深鉢形土器で、口縁部には半截竹管状工具により凸部を作り出し文様を展開させている。頸部にはボタン状の突起を付けている。地文は口縁部～頸部までは LR (横回転) 単節斜繩文で、胸部が LR (縦回転) 単節斜繩文である。127 は竹管状工具による沈線で三角形の文様を作り、その間に同工具による刺突文が施文されている。128～133 は粘土紐貼付による隆線や沈線による文様の展開がみられる。134・

135 は細い粘土紐貼付によって二本の平行な隆線を作り出し、その間には銅齒状の隆線を施す。さらに隆線によって作り出され

た文様帶の両端やその近辺には沈線による文様が展開する。137・138 は口唇部に波状の粘土紐貼付による隆帶を施しその上に刻目を施すものもある。

### 石器 (第 88・97 図)

15～17 は無茎の石鏃である。18 は先端が細く鋭利な石鏃、19 は縦型の石匙である。20 はヘラ状石器である。21 は磨製石斧である。183 は石錐、184 は磨石である。扁平な礫を使用している。

### 23 号住居跡 (第 20 図)

調査区の西側北西寄りで検出された。

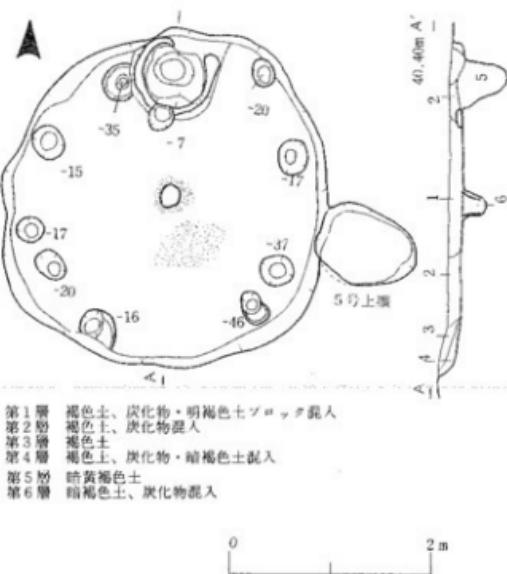
プランは長軸 5.6 m、短軸 4.4 m の楕円形を呈する。確認面からの深さは 20 cm で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 14 個検出され、主柱穴は深さ 50 cm 以上のもの 5 個と考えられる。炉は南側に位置しており、土器埋設炉である。また中央部に三ヶ所焼土が検出された。炉の周辺は火熱を受け赤変している。深鉢形土器を正立に据えている。床面はやや軟弱である。

住居内南側に 88 cm × 66 cm、深さ 79 cm の楕円形を呈するピットの上縁を厚さ 6～8 cm の黄白色粘土で馬蹄形状に縁取りした施設を検出した。

## 出土遺物

### 土器 (第 58・72 図)

19 は炉埋設土器である。沈線による渦巻状の文様と、垂下する文様を展開させている。地文は RL (縦回転) 単節斜繩文である。139～145 は粘土紐貼付による隆線や半截竹管状工具による沈線



第25号 29号住居跡

等による文様が展開される。147・148は口唇部に續位の刻目が施文される。149は渦巻文により肥厚な口唇部をなしている。

#### 石器（第 88・89・168図）

22～24は無茎の石鍬である。26は石錐で先端部が欠損している。27は石槍である。28はヘラ状石器である。31は石棒状の石器で、きれいに面取りされている。

#### 土製品（第 161・163図）

20は上偶の体部である。裏面には背骨を表現する一条の沈線が施されている。

#### 石製品（第 163図）

34は石冠である。断面が楔形をなし、底部は平坦で長方形を呈する。沈刻線によって文様が施されている。側面から底面にかけて孔が穿たれている。

#### 24号住居跡（第 21図）

調査区の西側北寄りで検出された。

プランは長軸 4.6 m、短軸 3.3 m の楕円形を呈する。確認面からの深さは 28 cm で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは 10 個検出されているが、主柱穴は不明である。炉は中央部で検出されたが、20 号フ拉斯コ状ピットに東側部分が切られている。炉は土器埋設炉で、深鉢形土器を正立に据えている。炉の周辺は火熱を受け赤変している。床面は堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第 58・72・73図）

20は炉埋設土器である。頭部がやや外反する器形で、粘土紐貼付による平行な二条の隆線等による文様展開がみられる。地文は LR（輪回転）単節斜繩文である。150～160・162は粘土紐貼付けによる隆線や半截竹管状工具による沈線、単節繩文による圧痕文などで文様が展開される。161・163・164は渦巻文等で肥厚な口唇部をなしている。

##### 石器（第 89・97図）

29はヘラ状石器である。30は搔器である。186は扁平な鍬を利用した石鍬である。

##### 土製品（第 160図）

10は装飾品と考えられる。面取りを行い上下に刻線を施している。

##### 25号住居跡（第 22図）

調査区の西側北寄りで検出された。

プランは長軸 6.5 m、短軸 4.3 m の楕円形を呈する。確認面からの深さは 25 cm で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは 24 個検出されているが、深さ 34 cm 以上のもの 7～8 個が主柱穴と考えられる。炉は中央部に位置しており、土器埋設炉である。深鉢形土器を正立に据えている。炉の周辺は火熱を受けて赤変している。床面は堅く良好である。

住居内南側に 94 cm × 90 cm、深さ 1.0 m の円形を呈するピットの上縁を幅 20～32 cm、厚さ 10 cm

の黄白色粘土で馬蹄形状に縁取りした施設を検出した。

#### 出土遺物

##### 土器 (第 58・59・73・74 図)

21 は炉埋設土器である。口縁部から頸部にかけて粘土紐貼付による隆線とそれに沿う沈線によって大きな波状文や渦巻を施文しており、波状文の頂点には小さなコブ状の突起が付く。頸部の隆線とは「H」状の隆線が連絡している。胴部には沈線によって渦巻文、また隆線による垂下する小さな波状の文様が施されて下部の文様帯と連絡している。地文は頸部より上方が RL (綫回転) 単節斜繩文、頸部より下方が LR (綫回転) 単節斜繩文である。21 は口縁部が波状口縁 (4 波) をなし、頂部に刻目を施している。頂部と頂部の中間には小さな突起が作り出されている。頂部と中間部突起は細い粘土紐を波状に貼付けて文様を構成している。地文は LR (綫回転) 単節斜繩文である。23 は四つの山状突起を有する深鉢形土器で、突起間に波状に粘土紐貼付による隆線が施される。胴部にも同じ手法により直線的あるいは曲線的な文様が施される。地文は RL (綫回転) 無節斜繩文である。167 ~ 175 は単節繩文による圧痕文で文様を構成している。177 ~ 182 は粘土紐貼付による隆帶や半截竹管状工具による沈線で文様が展開される。

##### 石器 (第 89・90・97 図)

31 ~ 38 は無茎の石鍬、39・40 は有茎の石鍬である。アスファルトの付着しているものがある。41・42 は石錐である。43・44 は軸型石匙である。45 ~ 47 は撥状石器、48 はヘラ状石器である。49 ~ 51 は磨製石斧である。187 は石錐である。

#### 土製品 (第 160 図)

8 は円筒状の土製品で、装飾品と考えられる。

#### 26 号住居跡 (第 23 図)

調査区の西側北寄りで検出された。

プランは長軸 6.0 m、短軸 4.3 m の梢円形を呈する。確認面からの深さは最深部で 50 cm で、壁はゆるやかに立ち上がる。ピットは 16 個検出され、深さ 35 cm 以上の 6 ~ 7 個が主柱穴と考えられる。炉は中央部に位置しており、石畳土器埋設炉である。浅鉢形土器の破片を正立に据えている。炉の周辺は火熱を受けて赤変している。床面は住居内中央部が窪んでおり、この部分に貼床が施されていた。これを除去したところ 19 号フラスコ状ピットが検出された。

#### 出土遺物

##### 土器 (第 59・74 図)

24 は炉埋設土器である。頸部に太い粘土紐貼付による隆帶、また口縁部にも同様の粘土紐貼付による渦巻文が施される。地文は口縁部のみで、LR (綫回転) 単節斜繩文である。186 ~ 194・196・197 は粘土紐貼付による隆線や半截竹管状工具による沈線等によって文様が展開される。195 は粘土紐貼付により、隆帶上や隆帶に沿う形で単節繩文の圧痕文が施される。

### 石器（第90・97図）

52・53は無茎の石鍬、54は磨製石斧である。188は石棒である。189はくぼみ石、190は石皿である。

### 土製品（第160図）

4は中央に穿孔が施されている鼓状の土製品である。耳飾りと考えられる。26は三角形土製品で、各角から底辺にむかって刺突文が施されている。

### 石製品（第162図）

29は硬玉製大珠である。孔は上部に偏在し一方向穿孔によって貫通している。30は二方向穿孔の施されたものである。32は扁平なハート形を呈し、上部の両側に穿孔が施されている。表裏面には擦痕が多数みられる。いずれも装飾品としての用途が考えられる。

### 27号住居跡（第24図）

調査区の北側で検出された。住居の北側は沢が入り込み傾斜地となっており不明である。

プランは長軸4.8m以上、短軸7.0mの橢円形を呈するものと考えられる。確認面からの深さは33cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ビットは11個検出されているが、深さ40cm以上のものが主柱穴と考えられる。炉は検出されなかった。床面は堅く良好である。

住居内南側に106cm×96cm、深さ87cmの円形を呈するビットの上縁を幅20～30cm、厚さ20～26cmの黄白色粘土で馬蹄形状に縁取りした施設を検出した。一方この施設の北西側にも黄白色粘土を使用した同様の施設が残っており、精査したところ床面下に住居跡がさらに一軒残存しているところが判明した。28号住居跡である。貼床は施されていない。

### 出土遺物

#### 土器（第75図）

203～216は覆土からの出土である。粘土紐貼付による隆帯やこれに沿う沈線または單節繩文による圧痕文などで文様が展開する。

#### 石器（第90図）

64は縦型の石匙である。

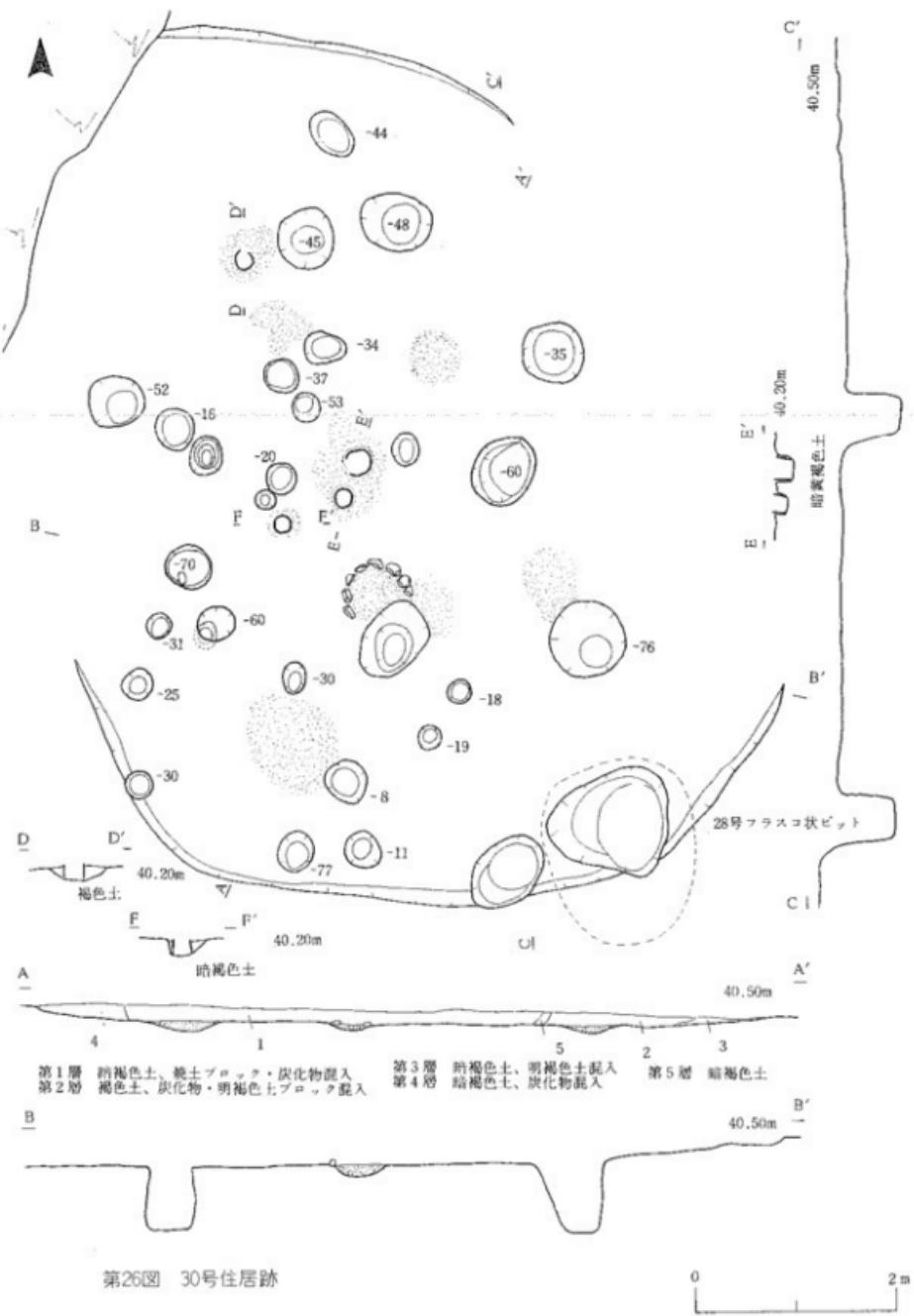
#### 28号住居跡（第24図）

調査区の北側で検出された。

全体のプランは不明であるが、橢円形を呈するものと考えられる。

炉は検出されなかった。床面は堅く良好である。

住戸内南側に110cm×100cm、深さ89cmの円形を呈するビットの上縁を幅30～35cm、厚さ18cmの黄白色粘土で馬蹄形状に縁取りした施設を検出した。この施設は27号住居跡のものよりも一段低くなっている。黄白色粘土も一部削り取られたように平坦な部分が観察された。一方、27号住居跡に伴う同施設内の北側では、28号住居跡に伴うものと、考えられるビットが検出された。した



第26図 30号住居跡

がって 28 号住居跡が古く、これを拡張して構築されたのが 27 号住居跡であることが判明した。

#### 出土遺物

##### 土器（第 74・75 図）

198・199 は細い平行沈線によって文様を構成する。200～202 は粘土紐貼付による隆帯で渦巻文を形成するものや、隆帯の上下に竹管状工具による刺突文が施されるものなどがある。

##### 石器（第 90・97 図）

55・56 は無茎の石鎚、57・58 は有茎の石鎚で、アスファルトの付着しているものもある。59 は石錐である。61・62 は槍先状石器である。63 は石ベラ状石器である。191 は磨石である。

#### 29 号住居跡（第 25 図）

##### 調査区の西側で検出された。

プランは長軸 3.4 m、短軸 3.3 m の円形を呈する。確認面からの深さは 14 cm で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 11 個検出されており、主柱穴は深さ 20 cm 以上のもの 4 個が考えられる。炉は中央部に位置しており、土器埋設炉である。深鉢形土器を正立に据えている。炉の周辺は火熱を受け赤変している。

住居内北部に、65 cm × 56 cm、深さ 46 cm の円形を呈するピットの上縁を幅 14～18 cm、厚さ 7 cm の黄褐色粘土で馬蹄形状に縁取りした施設を検出した。

#### 出土遺物

##### 土器（第 59・76 図）

25 は炉埋設土器である。頭部が外反する。地文は LR（縦回転）単節斜繩文である。217～221 は、粘土紐貼付による隆線や半截竹管状工具による沈線で文様を構成する。

#### 30 号住居跡（第 26 図）

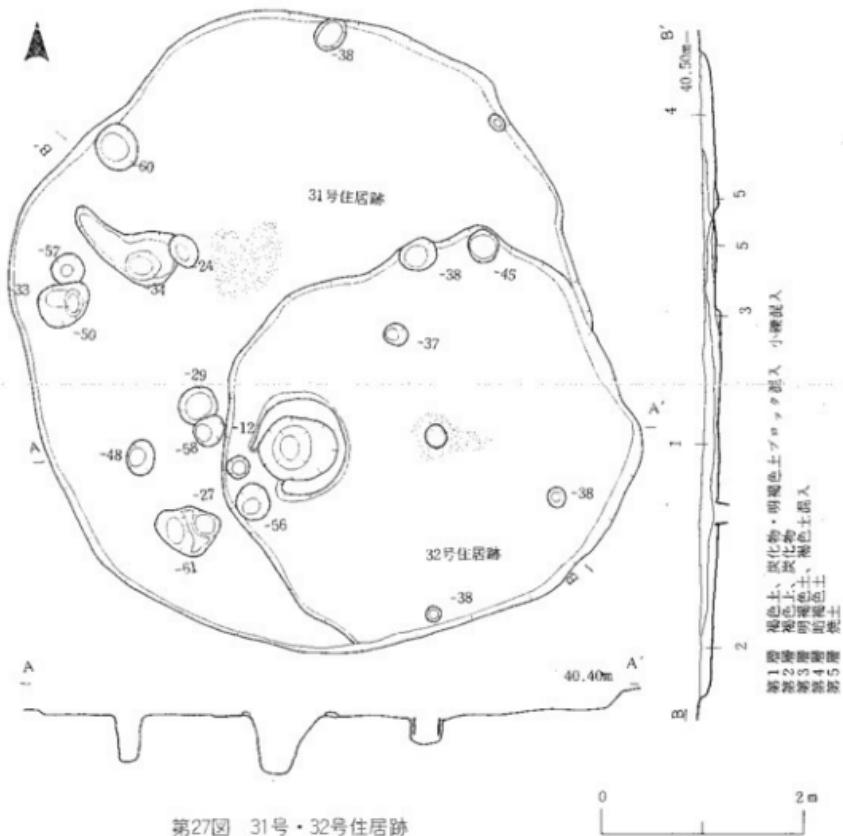
##### 調査区中央西側で検出された。北西壁は沢、東、西壁は削平で不明である。

プランは、長軸 8.9 m、短軸は推定 6.0 m の南北に長い梢円形を呈する。確認面からの深さは遺存の良好な部分で 10 cm である。壁は斜めにゆるやかに立ち上がる。ピットは 28 個検出されているが主柱穴については不明である。炉は石圓炉、土器埋設炉四基が検出されているが、すべて本住居跡にともなうものなのか不明である。石圓炉は南の壁が抜き取られている。土器埋設炉は中央付近に三基、北側に一基検出されており、周辺は火熱を受け赤変している。また、南側の二ヶ所に焼土が分布する範囲が認められる。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第 59・60・76 図）

26～29 は炉埋設土器である。26 は深鉢形土器の胴部である。四ヶ所に粘土紐貼付の隆帯を二本一組にして垂下させ端を内くする。上部には刻み状に撫糸圧痕を施し、間には撫糸圧痕による擬似爪形文が施文される。27 は深鉢形土器の胴部である。粘土紐貼付の隆帯がめぐり、上部には刻み状



第27図 31号・32号住居跡

の撲糸圧痕が施される。間は半截竹管状工具による爪形の刺突文で充填している。28・29は深鉢形土器の胴部であり、結束のない羽状繩文が施文される。30・222～232は覆土から出土した破片である。半隆起線文による垂下する波状、直線文が施されるもの、撲糸圧痕文により平行、Y状の文様が施されるもの、さらに粘土紐貼付の隆帯上に撲糸圧痕、隆帯間に爪形文などが施されるものがある。

#### 石器（第90・97図）

覆土から出土した。65・66は無茎石鏃、67是有茎石鏃である。68は縦型石匙である。石質はすべて頁岩である。192は円形を呈する磨石である。

#### 土製品（第161図）

21は覆土から出土した土偶の足部である。三本の刻みがあり指を表していると思われる。

#### 31号住居跡（第27図）

調査区北側で検出された。32号住居跡と重複しており、本住居跡が切られている。

プランは、長軸6.5m、短軸5.5mの橢円形を呈する。確認面からの深さは4cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは11個検出されているが主柱穴は不明である。炉は32号住居跡に切られたのか検出できなかった。北西寄りに焼土の分布する範囲が認められる。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第76図）

233～235は覆土から出土した破片である。細い粘土紐貼付の隆帯を直線・波状に施している。

##### 石器（第90図）

覆土から出土した。69は無茎石鐵、70は縦型石匙である。石質はいずれも頁岩である。

#### 32号住居跡（第27図）

調査区北側で検出された。31号住居跡と重複し、本住居跡が切っている。

プランは、径3.9mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは遺存の良好な東壁で18cmを計り、壁は斜めに立ち上がる。ピットは7個検出されているが主柱穴は不明である。西側に径90cm、深さ60cmの円形を呈する特異なピットが掘り込まれている。縁には黄白色粘土を馬蹄形状に盛土している。炉は中央部に位置する土器埋設炉で、周辺は火熱を受けて赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第60・76・77図）

31は炉埋設土器である。深鉢形土器の胴部で、頸部から胴上部に粘土紐貼付の隆帯を直線・弧状にめぐらし、間には半截竹管状工具による刺突文を充填している。236～241は覆土から出土した土器片である。粘土紐貼付の隆帯文・撫糸圧痕文・刺突文などが施されている。

##### 石器（第91図）

覆土から出土した。71は無茎石鐵、72は画面加工のヘラ状石器である。石質はいずれも頁岩である。

#### 33号住居跡（第49図）

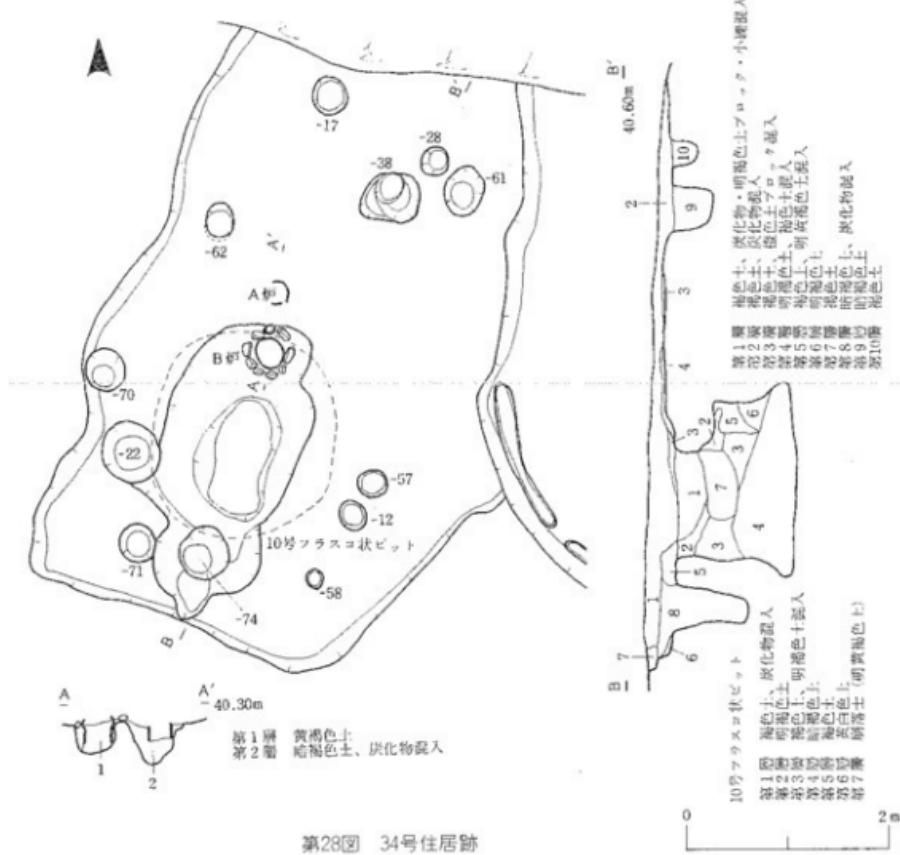
調査区中央部西側で検出された。68号住居跡の中央部を切って構築されている。

プランは、長軸3.0m、短軸2.3mの不整椭円形を呈する。確認面からの深さは38cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは8個検出されており、主柱穴は四隅にある深さ31cm以上のものが考えられる。炉は検出されなかった。床面は凹凸があるが堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第77図）

242～255は覆土から出土した土器片である。複合口縁を有し粘土紐貼付の隆帯で円文、垂下する波状文を施すもの（242）、半隆起線文、刺突文が施されるもの（244・245・248）や、撫糸圧



第28図 34号住居跡

痕文がY状に施文されるもの(246)、粘土紐貼付の両側に押圧細文で縁どりされるもの(247)、さらに粘土紐貼付の隆帯を直線・波状にめぐらし、その上部に刻み状の繊糸圧痕などが施文されるもの(250～255)などがある。

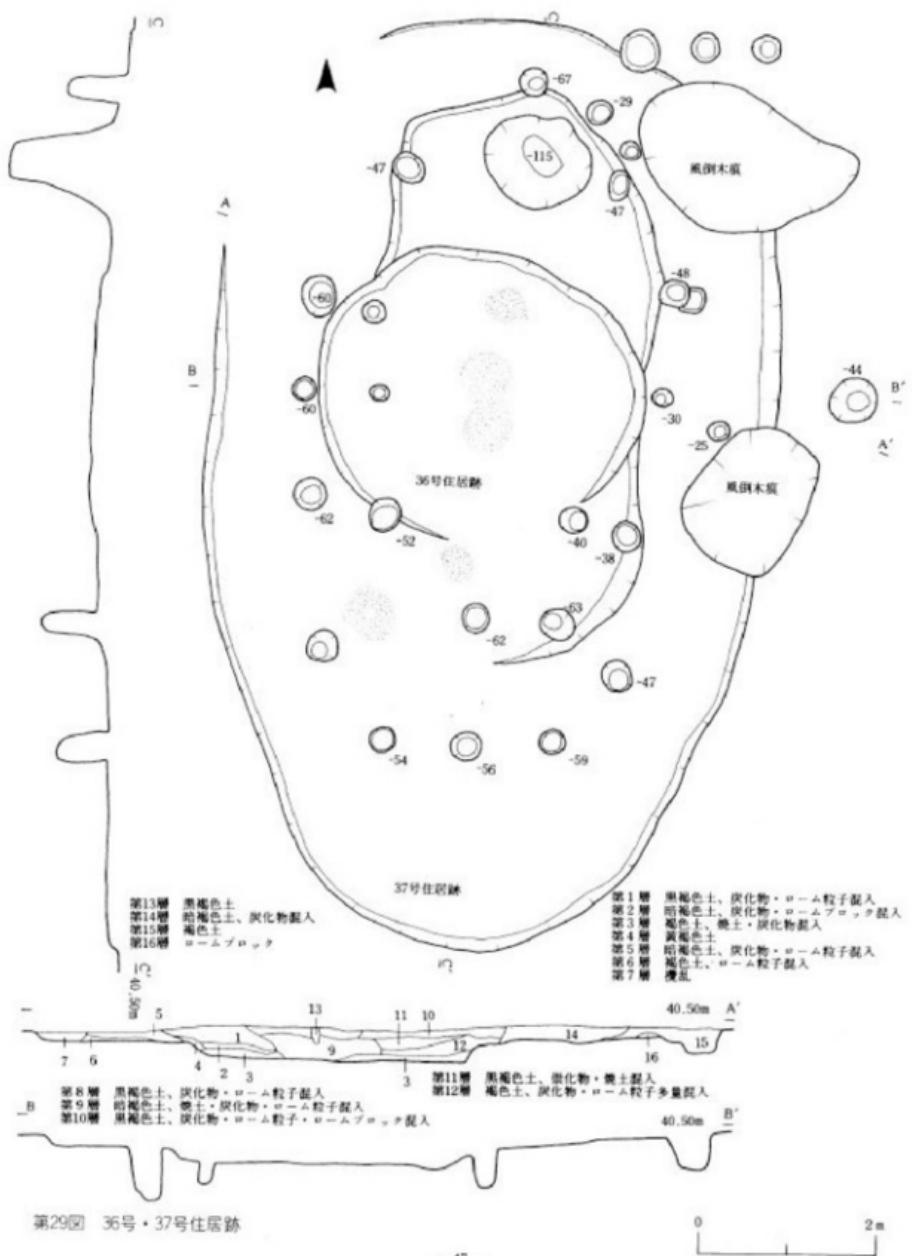
#### 石器(第91図)

覆土から出土した。73は無茎石鏨、74は縫型石匙である。石質はいずれも頁岩である。

#### 34号住居跡(第28図)

調査区北端で検出された。北側は沢で削平され、東側は27号住居跡に切られている。

プランは、現在する長軸6.0m、短軸4.2mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面中央から南側にかけて住居跡より古い10号フラスコ状ピットが掘り込まれているが、貼床は認められなかった。ピットは12個検出されており、主柱穴は長軸に沿う、深さ50cm以上のものと思われる。炉は中央部に二基検出された。古いA炉は土器埋設炉、新し



第29図 36号・37号住居跡

いB炉は石器埋設炉である。周辺は火熱を受けて赤変している。南側に径50cm、深さ74cmの円形を呈する特異なピットが掘り込まれている。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第60・61・77図）

32はA炉、33はB炉の埋設土器である。32は深鉢形土器の胴部で、地文はLR（縦回転）単節斜繩文である。33はキャリバー形を呈する深鉢形土器である。粘土紐貼付の渦巻状の突起、隆帯を波状にめぐらし、押圧繩文によって横円文・渦巻文などが展開する。256～261は覆土から出

土した。粘土紐貼付の隆帯を施し、渦巻文などがみられるもの（255～257・259）や、粘土紐貼付の隆帯を波状や縦に配し、上部に刻み状の撫糸圧痕を施すもの（260・261）などがある。

#### 石器（第91図）

覆土から出土した。75は無茎、76是有茎の石鏃である。77は縦形石匙、78は小形のヘラ状石器である。石質はいずれも頁岩である。

#### 36号住居跡（第29図）

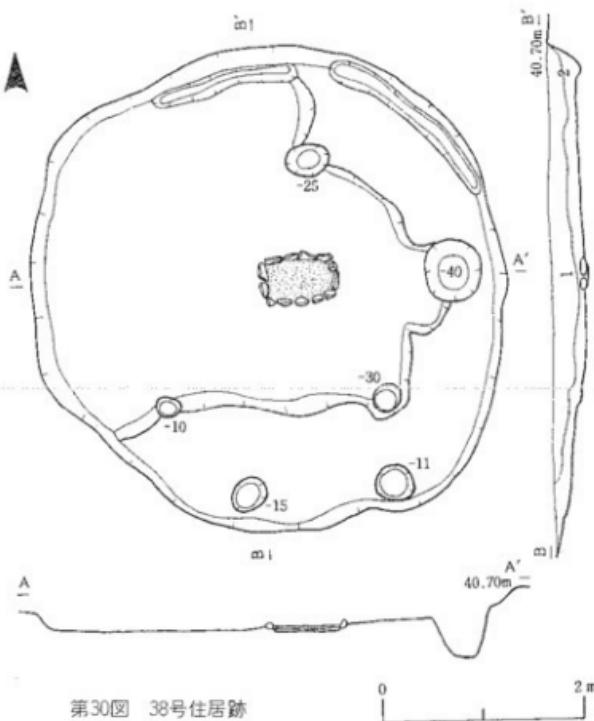
調査区中央西端部で検出された。37号住居跡の中央部を切って構築されている。

プランは、長軸3.7m、短軸3.3mの楕円形を呈する。確認面からの深さは20cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは2個検出されている。炉は地床炉と思われ、中央部と北側に焼土が分布している。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第61・62図）

34～38・39・41は覆土から出土した。34は頭部が外反し、口縁部が直立する深鉢形土器である。弁状把手を有し口縁部には刻み状の撫糸圧痕文によって文様が施される。35は口縁部が内湾す



第30図 38号住居跡

る浅鉢形土器である。半截竹管状工具内面使用の半隆起線文が施され、口縁部に爪形文が付される。頸部から胴部にかけては沈線によりF状の文様がみられる。36は頸部から口縁部にかけて外反する深鉢形土器である。山形口縁を有し、粘土紐貼付の渦巻文が付される。頂部下には長楕円形の粘土紐貼付の隆帯が付され、頸部には一条の貼付文がめぐる。37は頸部から口縁部にかけて外反する深鉢形土器である。山形口縁を有し、頂部下に二本一組の粘土紐貼付の隆帯が付され、その間にはヘラ状工具による細い沈線が配される。胴上部には綫に四条の沈線が施されている。38は深鉢形土器の破片である。山形口縁を有し、頂部下に粘土紐貼付の渦巻文、垂下する波状文が施される。口縁部、頸部には半隆起線文によって文様が配される。39は頸部から口縁部にかけて外反する深鉢形土器である。細い粘土紐貼付文が頂部下には綫に施され、頸部には一条めぐっている。地文は口縁部、胴部ともRL(綫回転)単節斜繩文である。41はゆるく内湾する浅鉢形土器である。一ヶ所に舌状の突起を有する。突起下には細い粘土紐をV状に貼付し、押圧繩文によって縁どりしている。口縁部には押圧繩文を施している。

#### 石器（第91図）

覆土から出土した。79～82は無茎石鏃、83～85は柳葉形の石鏃である。86は両端が欠損するヘラ状石器、87は綫型石匙、88・89は横型石匙である。石質はいずれも頁岩である。

#### 37号住居跡（第29図）

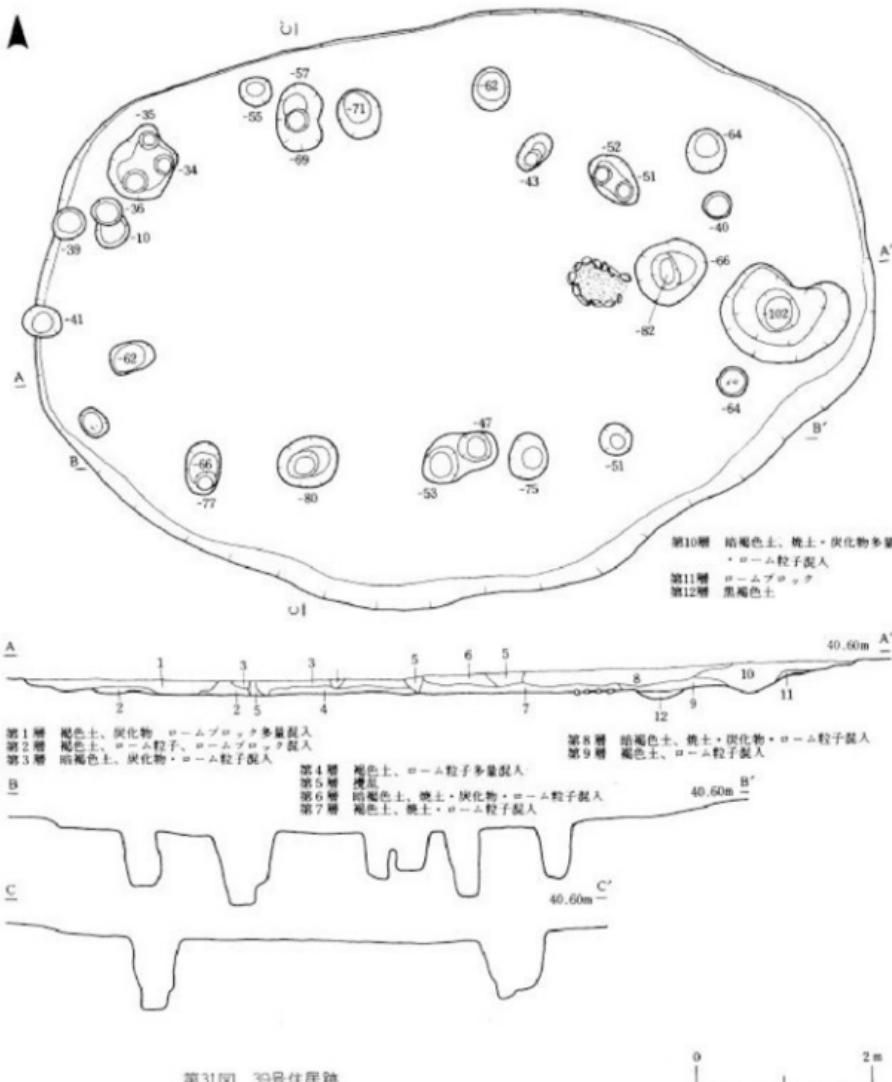
調査区中央西端部で検出された。中央部は36号住居跡によって切られている。

プランは、長軸10.7m、短軸6.4mの南北に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは10cmで、壁は斜めに立ち上がる。壁から約1.5m内側に長軸6.6m、短軸3.0mの楕円形を呈する一段低い落ち込みが検出される。これは本住居跡にともなうベッド状の遺構と思われる。ピットは22個検出されている。主柱穴は長軸に沿っているピットである。炉は中央南側に焼土が分布する範囲が認められ、地床炉と考えられる。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第62・63・78図）

42～45・262～264は覆土から出土した。42・44・45は頸部から口縁部にかけて外反する深鉢形土器である。42は粘土紐貼付の隆带上に刻み状の撫糸圧痕文を施し、間に擬似爪形文を充填している。43は口縁部に対をなす山形口縁を有する浅鉢形土器で、無文である。44は四单位の土器で山形口縁の頂部下に渦巻文、綫に三本の隆帯を施している。頸部に一条の隆帯をめぐらし上部に押圧繩文を刻んでいる。口縁部、胴部は横・綫方向に半截竹管状工具内面による半隆起線によって文様が施文されている。45は平縁で、主に半隆起線文によって文様が施文されている。口縁部は三角形状に、胴部は綫方向に垂下、鋸歯状に配される。262は押圧繩文、263は格子目文と半隆起線文によって文様が施される北陸系の土器である。264は刻み状の撫糸圧痕が施される隆帯と擬似爪形文が施文されている。



### 石器（第91図）

覆土から出土した。90・91は無茎石鐵、92は上部が欠損するヘラ状石器である。石質はすべて頁岩である。

### 38号住居跡（第30図）

調査区中央南側で検出された。

プランは径4.9mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは30cmで、壁は斜めに立ち上がり遺存は極めて良好である。北壁下に一部周溝が検出されている。南・東壁から約60～90cmの床面で低い段がつく。ピットは6個検出されているが主柱穴は不明である。炉は中央部に位置する。長方形の石圓炉で内部は火熱を受けて赤変している。埋設土器は認められない。床面は堅く良好である。

### 出土遺物

#### 土器（第78図）

265～267は覆土から出土した。連鎖状文、粘土紐貼付文、押圧縄文などが施文される。

#### 土製品（第163図）

33は覆土から出土した土冠である。側面に穿孔され、沈線によって文様が施される。

### 39号住居跡（第31図）

調査区中央西南部で検出された。

プランは、長軸9.5m、短軸6.5mの東西に長い梢円形を呈する。確認面からの深さは20cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは24個検出されており、主柱穴は壁に沿って周る深さ60cm以上のピットが考えられる。炉は東側に位置している。梢円形を呈する石圓炉で、内部は火熱を受けて赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

### 出土遺物

#### 土器（第63・78図）

46・268～273は覆土から出土した。46は深鉢形土器の底部で数条の縦に垂下する沈線が施されている。268～271は細い粘土紐貼付が垂下、横走して平行・波状に施文される。272は隆帯上に刻み状の撫糸圧痕が施され、273は隆帯により渦巻、梢円文が施文される。

#### 石器（第91図）

93・94は覆土から出土したヘラ状石器である。94は表面に自然面を残している。

### 40号住居跡（第32図）

調査区中央西端部で検出された。

プランは、長軸4.0mの不整円形を呈する。確認面からの深さは12cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは5個検出されているが、主柱穴は不明である。東側には黄白色粘土を馬蹄形状に西側にのみ盛土した、径90cm、深さ50cmの特異なピットが掘り込まれている。炉は西側に位置する。土器埋設炉で周辺は火熱を受けて赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

## 出土遺物

### 土器 (第 63・78・79 図)

47 は炉埋設土器である。深鉢形土器の胴部で粘土紐貼付の隆帯が施される。地文は RL (縦・斜回転) 単節斜綱文である。274 ~ 283 は覆土から出土した。274 ~ 276 は粘土紐貼付、半隆起線文が施され、刺突文もみられる。277・278 は撚糸圧痕文、279 は平行沈線、円形刺突文が施されている。283 は太い粘土紐貼付の隆帯上に刻み状の撚糸圧痕を施し、その間を擬似爪形文で充填している。

### 41 号住居跡 (第 33 図)

調査区中央西側で検出された。西側は 36 号住居跡、風倒木痕に壊されている。

プランは確認できる範囲で長軸 4.8 m 以上、短軸 4.5 m の橢円形を呈する。確認面からは非常に浅く壁の立ち上がりはかすかに認められる程度である。ピットは 11 個検出されており、主柱穴は中でも深さ 50 cm 以上の掘り方のしっかりしたピットと思われる。炉は二ヶ所に検出され、土器埋設炉である。周辺は火熱を受けて赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

## 出土遺物

### 土器 (第 64・80 図)

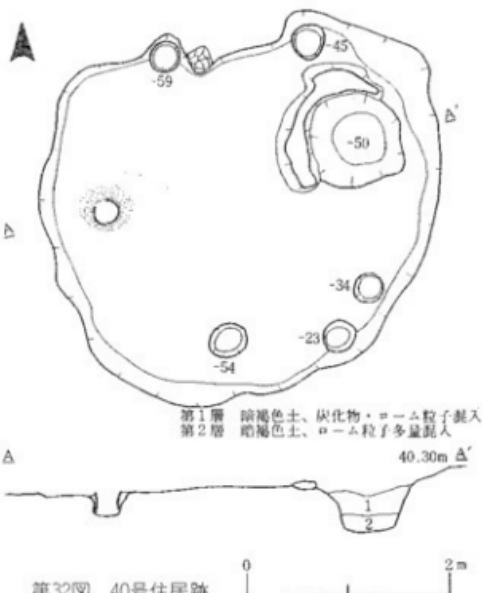
49 は炉埋設土器である。口縁部が外反する深鉢形土器で、地文は RL (縦回転) 単節斜綱文である。50・51・298 ~ 307 は覆土から出土した。50 は R (撚糸文)、51 は口縁に粘土紐を貼付する深鉢形土器である。298 ~ 307 は上器破片で細い沈線で文様を描くもの (300) や粘土紐貼付の隆帯を施し、上部に撚糸圧痕文を施すもの、間に刺突文を配するものなどがある。また木目状糸文が施されるものもある。

### 石器 (第 92 図)

101 ~ 104 は覆土から出土した。101 は先端部が欠損する無茎石鏃、102 は石錐、103 は縦型石匙、104 は両面加工のヘラ状石器である。すべて石質は頁岩である。

### 42 号住居跡 (第 35 図)

調査区中央西側で検出された。中央、南西部は風倒木痕により壊され、北東隅は 8 号土塙によつて壊されている。



第32図 40号住居跡

▲

△

□

▲

△

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

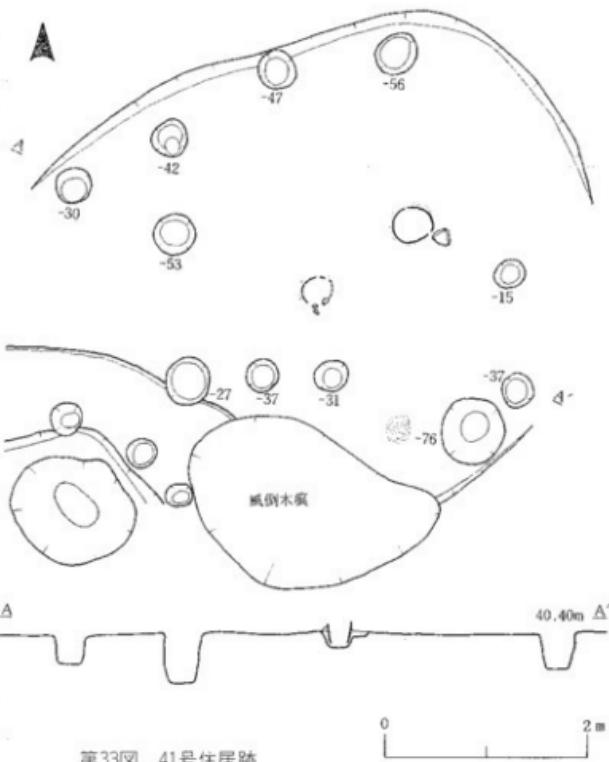
</div

プランは長軸 11.2 m、短軸 6.5 m の橢円形を呈する。礎面からの深さは 20 cm で、壁はゆるやかに斜めに立ち上がる。南東部壁から 2 m 内側には床が若干下がり段がつく。ピットは 21 個検出されているが主柱穴は不明である。炉は南西側に検出された石囲炉である。西側の礎は抜き取られている。周辺は火熱で赤変している。南側床面に焼土の広がりが認められる。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器 (第 64・80 図)

52～55・308～329 は覆土から出土した。52 は胴部が膨らむ鉢形土器である。頭部に三条の沈線がまわり、胴部は垂下する沈線で棘状文が施



第33図 41号住居跡

される。53 はキャリバー形を呈する深鉢形土器である。頭部の上下に平行沈線文がまわり、口縁部、胴部は沈線による渦巻文が施される。55 は深鉢形土器で地文は LR (継回転) 単節斜繩文である。308～318 は口縁部破片である。粘土紐貼付の隆帯を鋸歯状に施すものや、ゆるく波状にめぐらすものもある。さらに撫糸圧痕文や沈線による渦巻文などもみられる。

##### 石器 (第 92・98 図)

105～109 は覆土から出土した。105 は有茎石鏽、106 は基部が欠損する細身の石鏽である。107～109 は両面加工のヘラ状石器である。石質はすべて頁岩である。

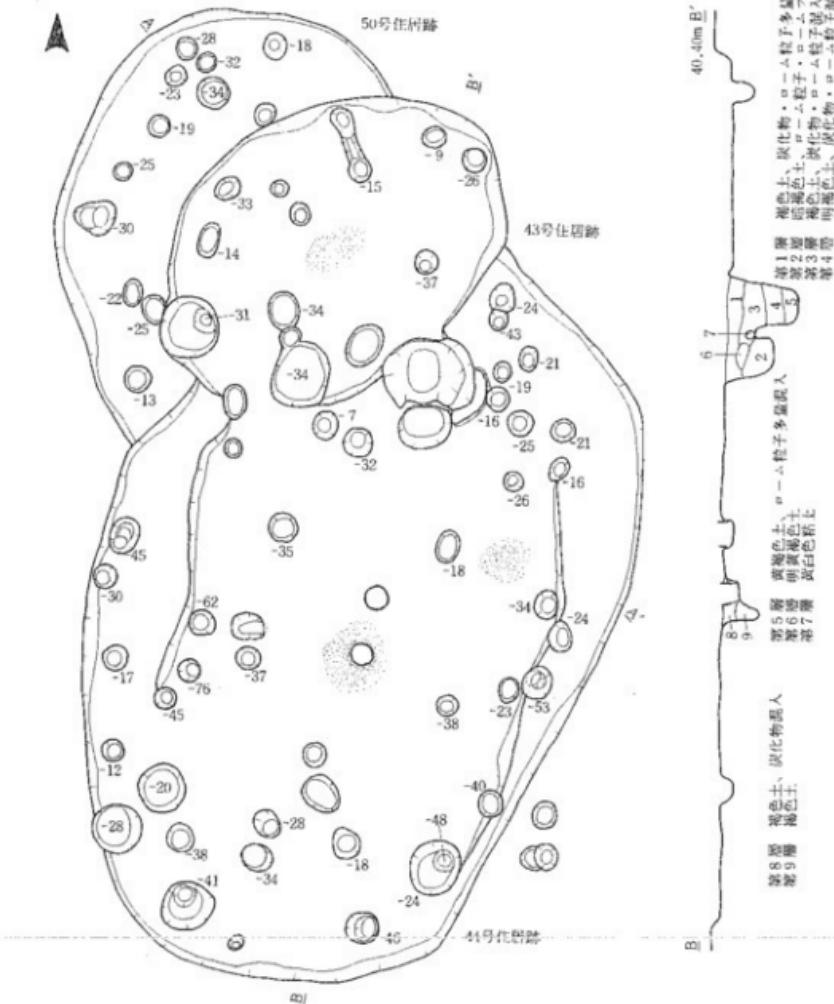
##### 土製品 (第 161 図)

18 は小形のうすい三角形土製品である。

##### 43号住居跡 (第 34 図)

調査区中央部で検出された。44・50号住居跡と重複しておりいずれも本住居跡が切っており新しいものである。

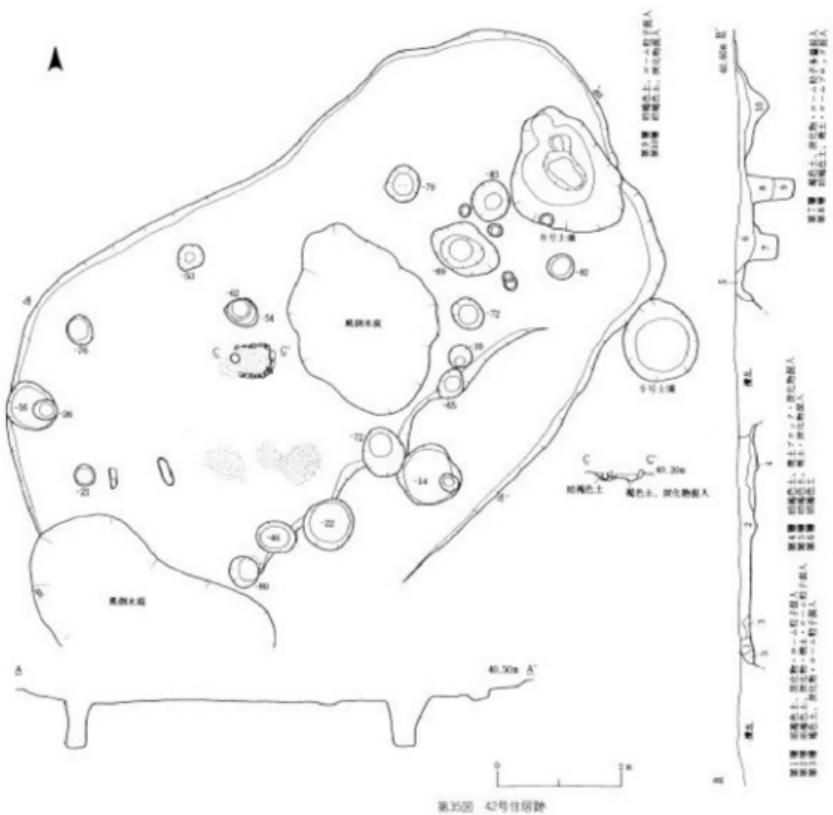
A



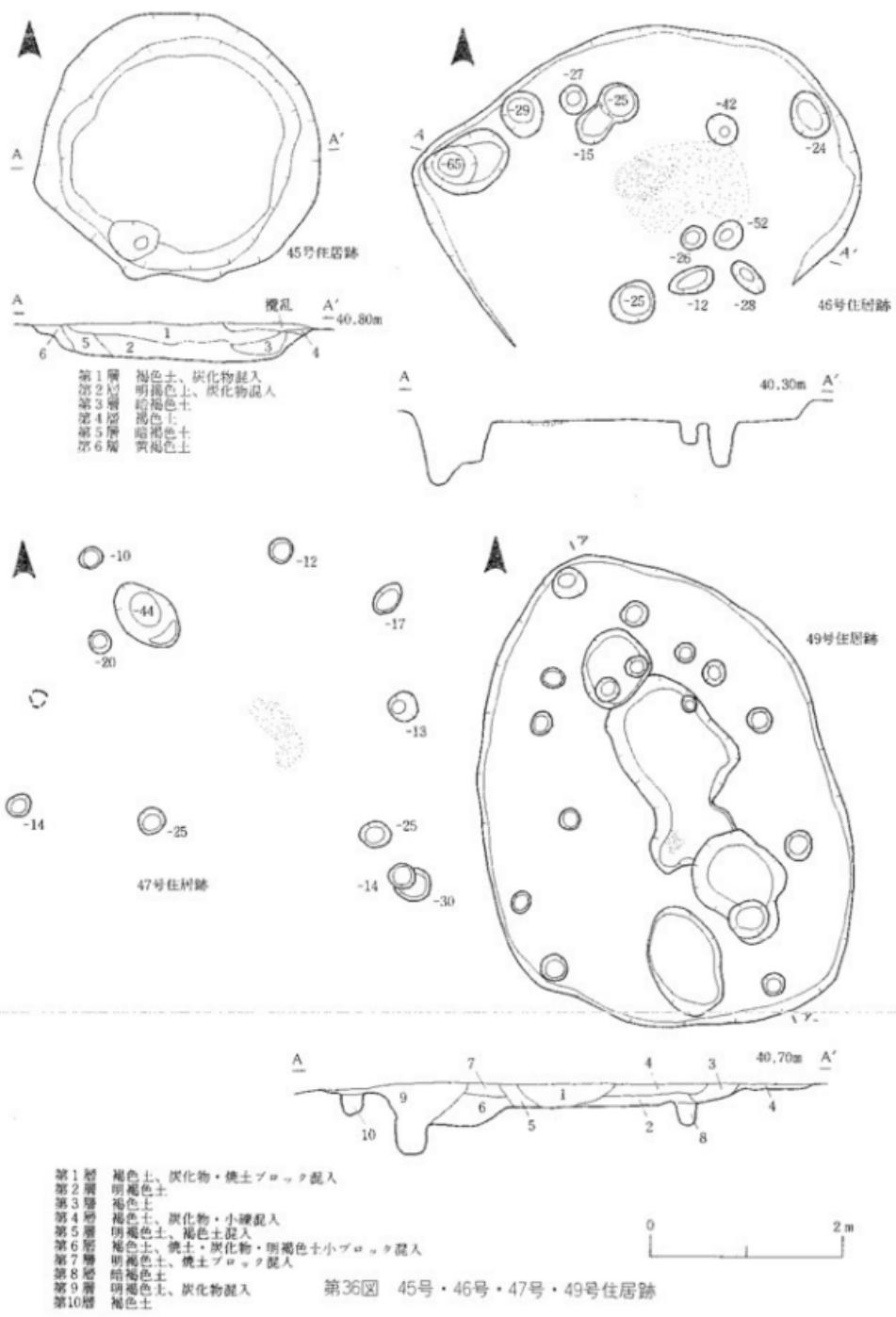
A



第34図 43号・44号・50号住居跡



第35图 42号住居跡



第36図 45号・46号・47号・49号住居跡

プランは長軸 3.9 m、短軸 2.6 m の橢円形を呈する。確認面からの深さは 10 cm で壁は斜めに立ち上がる。ピットは 13 個検出されており主柱穴は深さ 26 cm 以上の 6 個と思われる。炉は中央部に検出された地床炉で、火熱で赤変している。床は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第 65・81 図）

56・57 は床面から出土した。56 はキャリバー状を呈する深鉢形土器である。四単位で波状口縁をなす。頂部間に粘土紐貼付の渦巻状の突起を配し、粘土紐貼付の隆帯で連絡させ、隆帯に沿って押圧縄文で縁どりされる。胴部は隆帯文を縦に垂下させている。57 はキャリバー形を呈する深鉢形土器である。四単位の土器で口縁部の四ヶ所に瘤状の突起をもち、沈線を施す。頭部には一条の沈線がめぐり、間には瘤状の突起に向かい二条の沈線が弧状に配される。地文は LR（継回転）単節斜縄文である。330～335 は覆土から出土した。口縁部破片で竹管状工具内面による半隆起線文が施され、上部に刺突文が施されるものや、沈線と粘土紐貼付の隆帯文が施されるものなどがある。

##### 石器（第 93 図）

111～114 は覆土から出土した。111 は先端部が欠損する細身の縦型石匙である。112～114 は両面加工のヘラ状石器である。石質はすべて頁岩である。

##### 土製品（第 162 図）

23 は覆土から出土した土偶である。首・手足は欠損している。沈線で文様が描かれ、背面には渦巻文がみられる。首部の欠損箇所には厚くアスファルトが付着している。

##### 44 号住居跡（第 34 図）

調査区中央部で検出された。43号・50号住居跡と重複しており、本住居跡は 43 号住居跡に切られ、50 号住居跡を切っている。

プランは長軸 7.9 m、短軸 5.0 m の橢円形を呈する。確認面からの深さは 12 cm で壁は斜めに立ち上がる。東・西壁から約 40～90 cm 内側で床面が下がり段がつき、いわゆるベッド状を呈している。ピットは総数 44 個検出されており主柱穴は深さ 40 cm 以上のものと思われる。北側に径 90 cm、深さ 90 cm で、東南部に黄白色粘土を土手状に盛上した特異なピットがある。炉は中央部に二基検出された。土器埋設炉で周辺は火熱で赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第 65・81・82 図）

58・59 は炉埋設土器である。上・下部が欠損する深鉢形土器で 58 はキャリバー形を呈する。336～345 は覆土から出土した破片である。押圧縄文が弧状・波状に施されるものや、粘土紐貼付の隆帯が施され、その上部、両側に撚糸圧痕文を施しているものもある。

##### 石器（第 93・94 図）

115・116・197 は覆土から出土した。115 は先端部欠損の無茎石鍬、116 は両面加工のヘラ状石

器である。石質はいずれも頁岩である。197は両端を打ち欠いて作られた石錘である。

#### 45号住居跡（第36図）

調査区中央南側で検出された。

プランは径2.9mの円形を呈する。確認面からの深さは35cmで、壁は斜めにゆるやかに立ち上がり中程で段を有する。ピットは南に1個認められる。炉は認められない。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第65・66・82図）

60～64・346～348は覆土から出土した。60～63はキャリバー形を呈する深鉢形土器である。60は口縁部に粘土紐貼付の隆帯を施し、先端が渦巻状になる。頸部から胴上部には粘土紐が三・二・二本組になってまわる。胴下部は三条の沈線がまわり、その下には渦巻文が施される。地文はLR（綴回転）単節斜繩文である。61は沈線によって文様が施され、頸部に六条の沈線がまわり、口縁部、胴部には渦巻文が施される。62・63は口縁の一ヶ所に把手を有する。口縁部は細い粘土紐貼付で文様が施され、63は端で渦巻文を作る。頸部から下部は三条の沈線がまわり、垂下する沈線が施される。64は胴部が膨らみ口縁部が外反する深鉢形土器である。口縁部に隆帯があり、頸部には三条の沈線がまわっている。胴部は垂下する沈線で区画され、渦巻文が施されている。346～348は破片で、粘土紐貼付の隆帯が施され、348は間に疑似爪形文が施されている。

##### 石器（第93図）

117・118は覆土から出土した。両面加工のヘラ状石器である。石質は頁岩である。

##### 土製品（第160図）

3は舟形を呈する土製品で、上部の一端には穴が穿たれ内部は中空になっている。土笛と思われる。

#### 46号住居跡（第36図）

調査区北側で検出された。南壁は削られて不明である。

プランは長軸4.3m、短軸3.3mの梢円形を呈する。確認面からの深さは20cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは13個検出されているが柱穴は不明である。炉は中央部に作られた地床炉であり、火熱で広範囲に赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第82図）

349～351は覆土から出土した破片である。粘土紐貼付の隆帯・半隆起線文などが施されている。

##### 石器（第93・98図）

119・198は覆土から出土した。119は縊型石匙、198は石皿である。中央部は溝状に磨られている。

#### 47号住居跡（第36図）

調査区中央南側で検出された。

壁は削られて不明で、炉と周辺ピットの配列から住居跡と確認された。プランはピットの配置で推定すると長軸4.5m、短軸4.0mの橢円形を呈すると思われる。ピットは9個検出されている。炉は中央部に認められる地床炉で火熱で赤変している。床は平坦である。

#### 出土遺物

##### 土器（第82図）

352～355は覆土から出土した破片である。粘土紐貼付の渦巻文や、沈線による文様が施されている。

##### 石器（第93・99図）

120・121・199は覆土から出土した。無茎石鏃で121は一端が欠損する。石質は頁岩である。199は磨石である。

#### 48号住居跡（第18図）

調査区中央東側で検出された。20号住居跡と重複している。

プランは、西壁の一部が遺存するだけであるが、ピットの配列などから南北に長い橢円形を呈すると思われる。確認面からの深さは遺存する西壁で約5cm、壁は斜めに立ち上がる。ピットは22個検出されているが、20号住居跡と重複するものもあると思われ、主柱穴については不明である。また南側に橢円形の大きな攪乱が認められる。炉は土器埋設炉二基が検出され、周辺は火熱で赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第66図）

65・66は炉埋設上器である。上・下部が欠損する深鉢形土器である。地文は65がLR、66がRLの縦回転単節斜繩文である。

#### 49号住居跡（第36図）

調査区中央部で検出された。

プランは長軸5.2m、短軸3.7mの橢円形を呈する。確認面からの深さは10cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは15個検出されているが主柱穴は不明である。中央部には新しい土壤が掘り込まれ住居跡を壊しており、炉は検出できなかった。かすかに中央南側に焼土が認められた。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第82図）

356～358は覆土から出土した口縁部破片である。押圧繩文、粘土紐貼付の隆帶などが施されている。

### 50号住居跡（第34図）

調査区中央部で検出された。43・44号住居跡と重複しており、いずれも本住居跡が切られており最も古いものである。

プランは規模は不明であるが、南北に長い橢円形を呈する。確認面からの深さは12cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは12個検出されており深さ30cm以上のものが主柱穴と思われる。炉は認められない。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第82図）

359・360は覆土から出土した口縁部破片である。粘土紐貼付の隆帯が波状、「×」状に施され、上部や縁に撫糸压痕文、押圧繩文などが施文されている。

##### 石器（第99図）

200は覆土から出土した。扁平な礫の両端を打ち欠いて作られた石鎌である。

### 51号住居跡（第39図）

調査区中央北側で検出された。

プランは長軸5.9m、短軸4.2mの橢円形を呈する。確認面からの深さは18cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは22個検出されており、深さ30cm以上のものが主柱穴と思われる。炉は検出されなかった。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第83図）

361～369は覆土から出土した破片である。粘土紐貼付の隆帯によって文様が施され、三～四条平行に貼付されるものや、渦巻文などがみられる。また沈線によって文様が施されるものもある。

##### 石器（第93・99図）

122～124・201～203は覆土から出土した。122は無茎、123は基部欠損の石鎌である。124は両面加工のヘラ状石器と思われる。201・202は磨石、203は大きな礫を使用した磨石である。

### 52号住居跡（第37図）

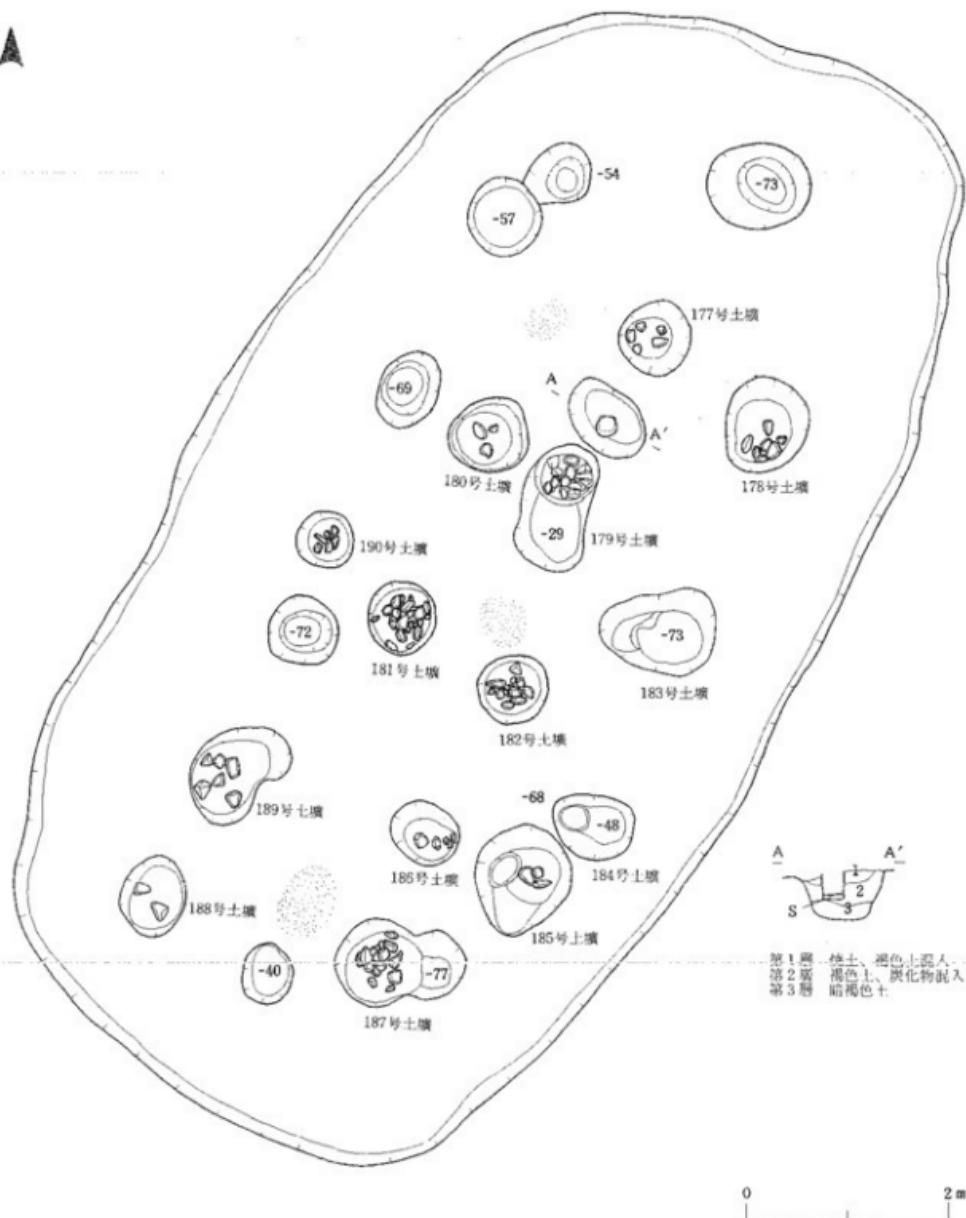
調査区南東部で検出された。礫の詰った円形の土壤が新しく掘り込まれており、ピット数個を切っている。

プランは長軸12m、短軸6.5mの隅丸長方形を呈する大形のものである。壁の大部分は削られ深さは2cmと浅い。ピットは8個検出されており、いずれも径50～70cm、深さ40～77cmとしっかりしており主柱穴と思われる。炉は中軸線上に二基、北側でわずかに西に寄ったところに一基の計三基検出されている。すべて地床炉で火熱で赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第66・83図）

A



第37図 52号住居跡

67・370～381は覆土から出土した。67は上・下部が欠損する深鉢形土器である。地文はLR(斜回転)単節斜縄文である。370～381は破片である。370～374は撚糸圧痕文・押圧縄文が主体で文様が施される。375～380は粘土紐貼付の隆帯が施され、渦巻文・波状文などが施文される。381は口縁に粘土紐を波状に貼付し上部に撚糸圧痕文が施される。

#### 石器(第93・99図)

125～129・204は覆土から出土した。125・126は無茎石鏃、127は先端が鋭利な細身の石鏃である。128・129は両面加工のヘラ状石器である。石質はすべて頁岩である。204は扁平な陳の両端を打ち欠いた石鍤である。

#### 53号住居跡(第38図)

調査区南東端部に検出された。

プランは径7.3mの円形を呈する。確認面からの深さは50cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは中央に1個、壁に沿って円形に9個の計10個検出されている。主柱穴は掘り方のしっかりした壁沿いに周る8個と思われる。炉は東側に位置する。土器埋設部、掘り込み部、掘り込み部からなる。土器埋設部には深鉢形土器が埋設され、周辺は赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器(第67・83図)

69は炉埋設土器である。口縁部、底部が欠損する深鉢形土器である。沈線区画の磨消帶が「J」字状に横方向に大きく展開する。地文はLR(綱回転)単節斜縄文である。382・385は覆土から出土した破片である。沈線区画の磨消帶・渦巻文などが施される。

#### 石器(第99図)

205は覆土から出土した磨石である。

#### 54号住居跡(第39図)

調査区中央南側で検出された。

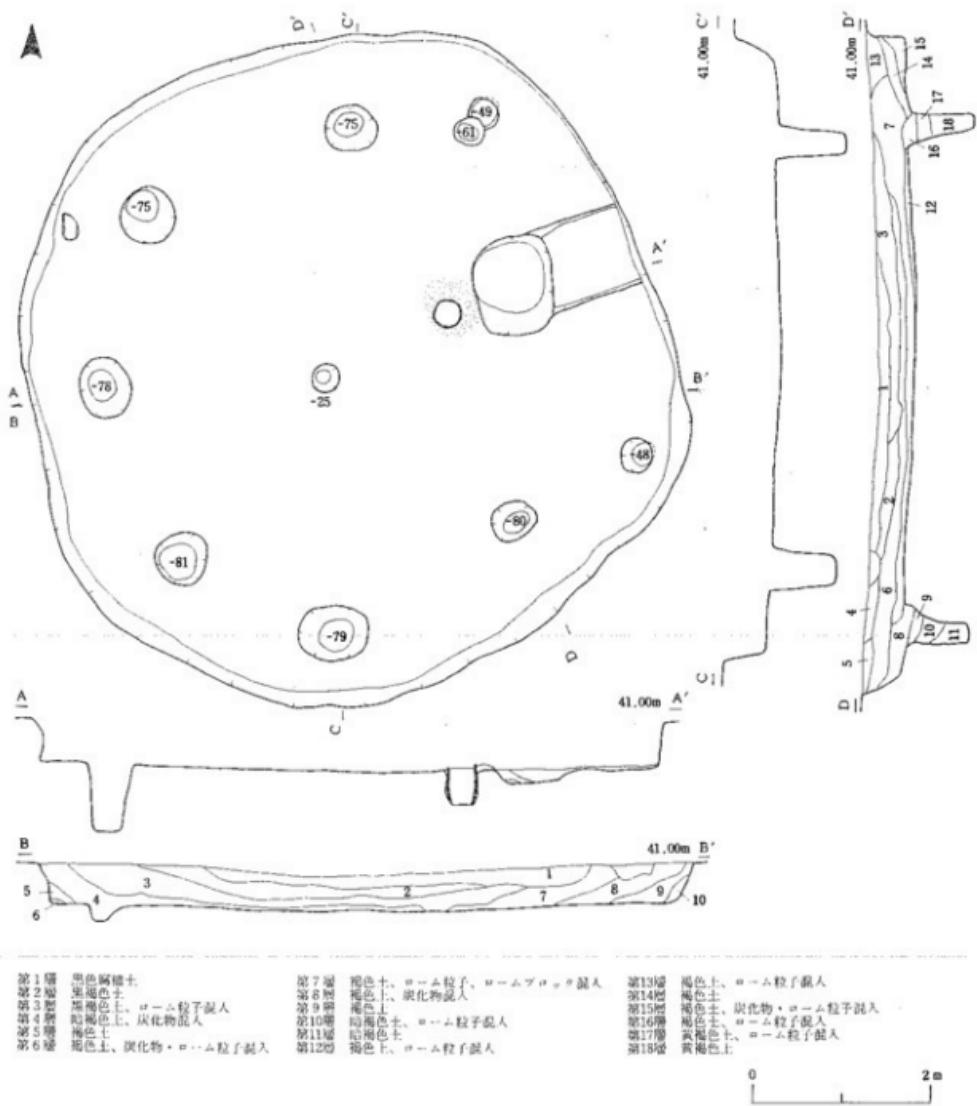
プランは径3.0mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは北東部で10cm、南西部で30cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは南西部に3個検出されている。炉は中央部よりやや南側に位置する土器埋設炉である。埋設土器は細片になっている。周辺は火熱を受けて赤変している。床面は若干傾斜しているが堅く良好である。

#### 出土遺物

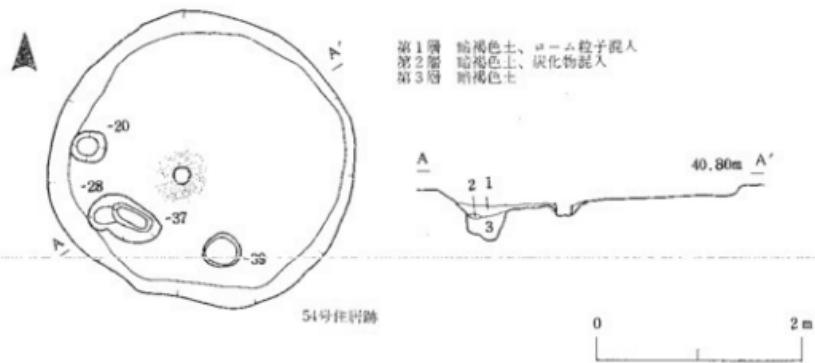
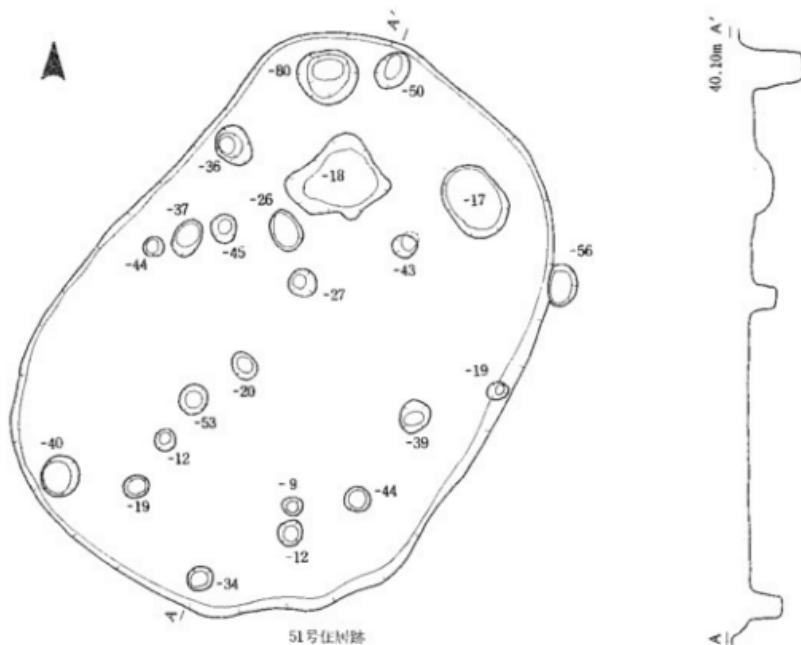
##### 土器(第84図)

384・385は覆土から出土した破片である。384はLR(綱回転)単節斜縄文、385は沈線区画の磨消帶が施されている。

#### 56号住居跡(第40図)



第38図 53号住居跡



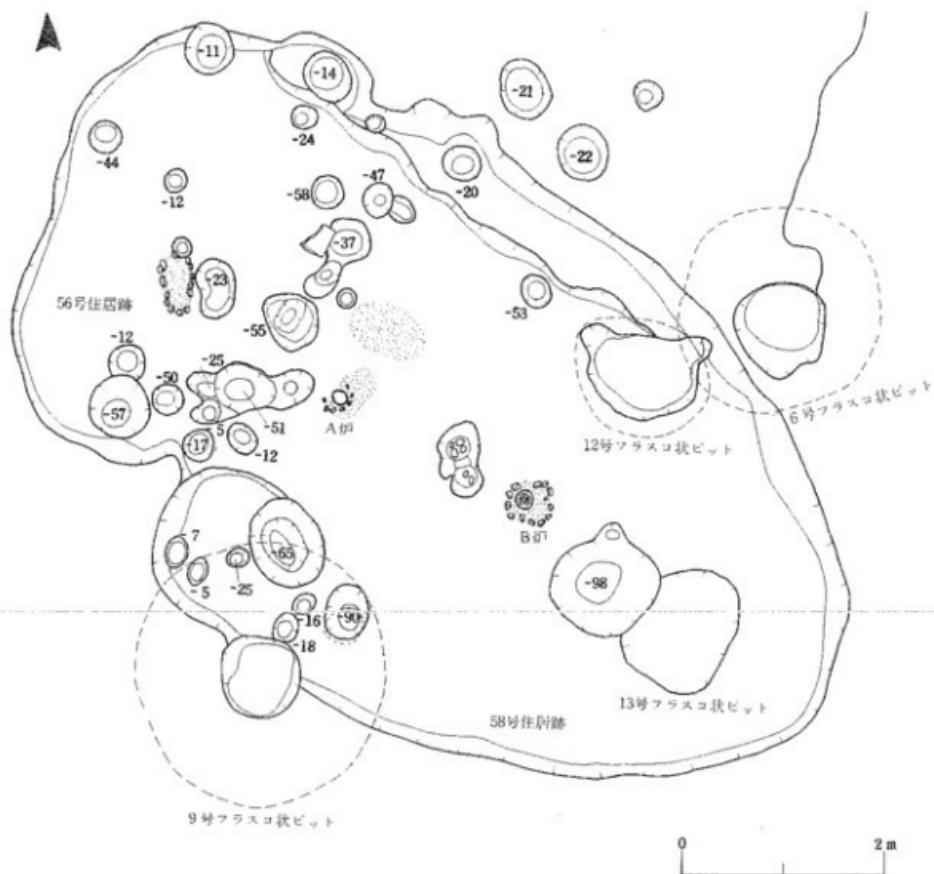
第39図 51号・54号住居跡

調査区北側で検出された。昭和47年度に発掘された住居跡である。

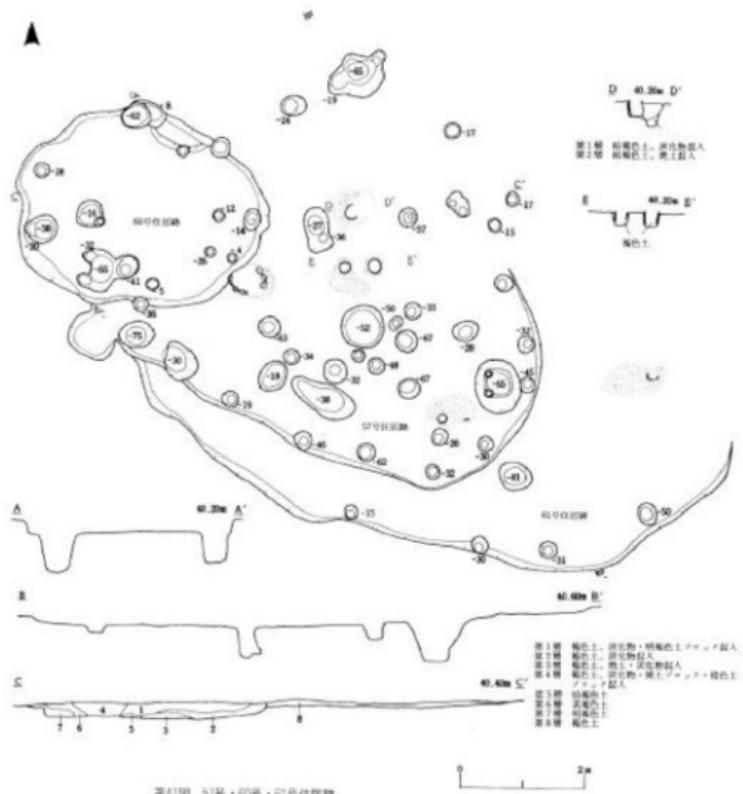
プランは長軸4.4m、短軸は推定3.0mの橢円形を呈する。非常に浅く、壁はゆるく斜めに立ち上がる。本住居跡にともなうピットは18個であるが主柱穴は不明である。炉は長方形の石畳炉で南側に埋設土器が配されていたようである。58号住居跡と重複しているが新旧関係は明確でない。ただ埋設土器からみると本住居跡が新しいようである。

#### 出土遺物

土器：図示はしていないが、埋設土器として深鉢形土器の胴部が出土している。粘土紐貼付二本一組の隆線で渦巻文、鉤状文が配される（「小阿地下堤遺跡」昭和51年3月、秋田市教育委員会、参照のこと）。



第40図 56号・58号住居跡



第41回 57号・60号・61号往復路

### 57号住居跡（第41図）

調査区北側で検出された。

60・61号住居跡と重複しており、61号住居跡を切り、60号住居跡に切られている。

プランは、北・西側が不明で規模は明確でないが橢円形を呈する。確認面からの深さは10cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは総数25個検出されている。主柱穴は壁直下を周る深さ30cm以上のピットと思われる。炉は北西部に石圓炉が検出され、火熱で赤変している。また、南東、北部に四ヶ所土器埋設炉が検出され周辺が赤変しているが、すべて本住居跡にともなうか不明である。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土物

##### 土器（第67・84図）

70～73は土器埋設炉の埋設土器である。70は口縁部が外反する深鉢形土器である。山形口縁をなし頂部の四ヶ所に瘤状の突起を貼付し、口縁には粘土紐貼付の隆帯をめぐらし、上部に撓糸圧痕文が施される。頸部から下部は頂部下に垂下する粘土紐貼付の隆帯を施し指による押圧を加えている。それらを連絡するように細い粘土紐を弧状に貼り付けている。71～73は上・下部が欠損する深鉢形土器で72は無文、71・73は地文の縄文だけである。386～394は覆土から出土した破片である。隆帯上に撓糸圧痕文が施されるもの、粘土紐貼付の隆帯が平行、波状に施文されるもの、また縁どりとして押圧縄文のみられるものなどがある。

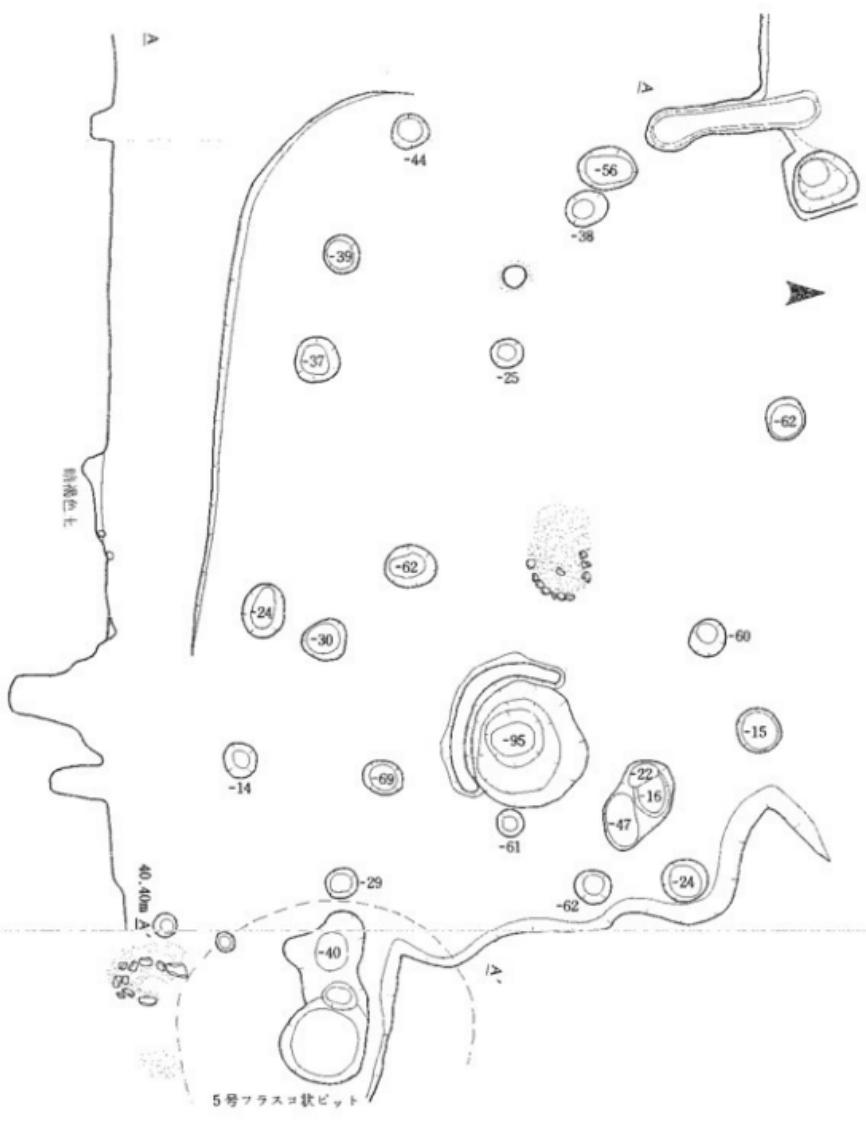
##### 石器（第93・94・99図）

130～135・206は覆土から出土した。130は先端が欠損する無茎石鏃、131は縦型石匙、132～134はヘラ状石器である。石質はすべて頁岩である。135は丸みをもつ磨製石斧である。

### 58号住居跡（第40図）



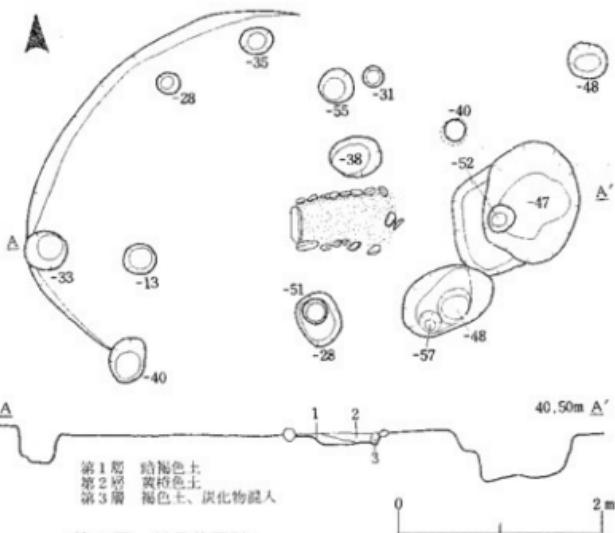
第42図 59号住居跡



第43図 62号住居跡

調査区の北側で検出された。昭和47年度に発掘された住居跡である。56号住居跡と重複しており新旧関係は明確でないが、炉埋設土器から本住居跡が新しいようである。

プランは、長軸推定約7.0m、短軸5.5mの橢円形を呈する。壁は非常に浅い。ピットは9個検出されているが、主柱穴は不明である。南東部に径1.0m、深さ98cmの特異なピットが検出された。がは中軸線上に石圓炉を二基検出



第44図 63号住居跡

した。A炉には深鉢形土器が埋設されている。B炉の中央には小穴が掘られ疊が詰められている。いずれも内部、周辺は火熱で赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第66・84図）

68はA炉埋設土器である。キャリバー形を呈する深鉢形土器である。口縁部に波状、頸部には三条の粘土紐貼付の隆帯をめぐらしている。地文はRL（綫回転）単節斜柾文である。395～397は覆土から出土した破片である。粘土紐を貼付し渦巻文などが施される。

##### 石器（第94図）

136～138は覆土から出土した。136は縦型石船、137は上部が欠損するヘラ状石器である。石質はいずれも頁岩である。138は上部欠損の磨製石斧である。

##### 59号住居跡（第42図）

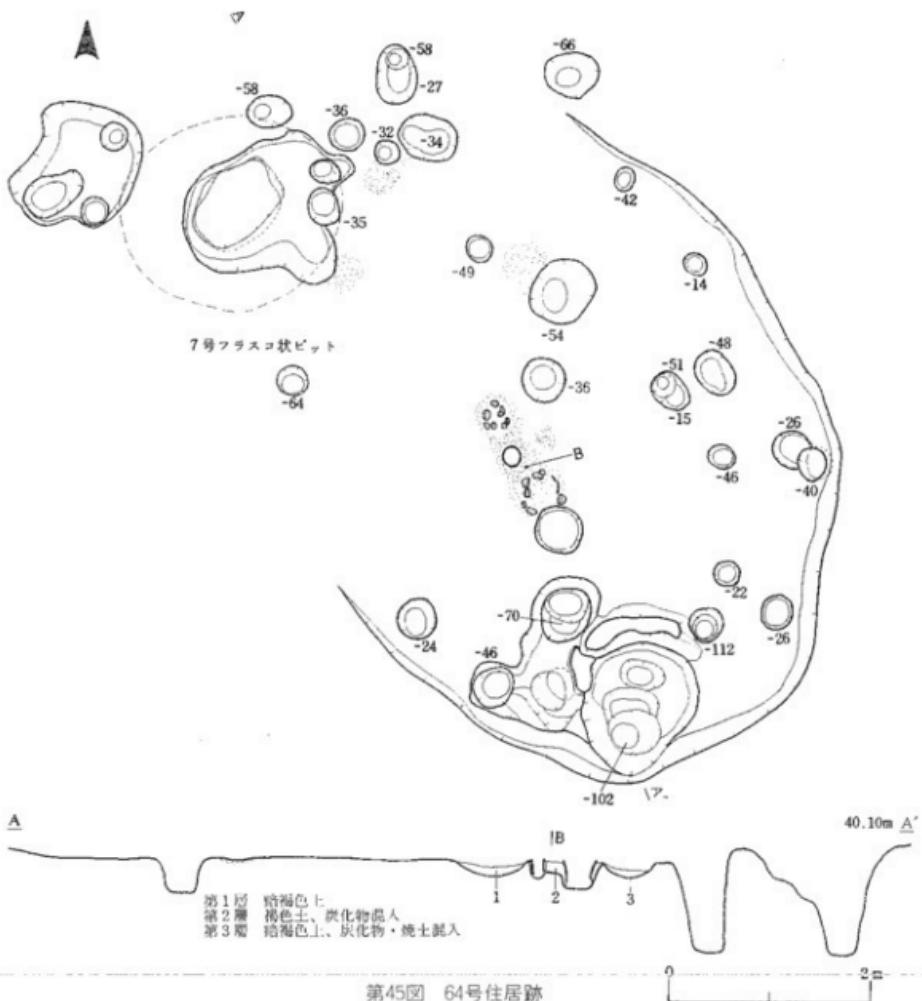
調査区北側で検出された。

削平されプランは不明である。石壠土器埋設炉と、それにともなうと考えられるピットが北東部で検出され住居跡と判明した。炉の疊は西側が抜き取られており、また埋設土器は小破片になっている。

##### 60号住居跡（第41図）

調査区北側で検出された。57号住居跡と重複しており本住居跡が57号住居跡を切っている。

プランは長軸4.0m、短軸3.2mの橢円形を呈する。確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直



に立ち上がる。ビットは15個検出されているが主柱穴は不明である。炉は検出されなかった。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第84図）

398～401は埴土から出土した破片である。細い粘土紐貼付の隆帯や沈線が施される。隆帯上に撻糸圧痕が施されるものもある。

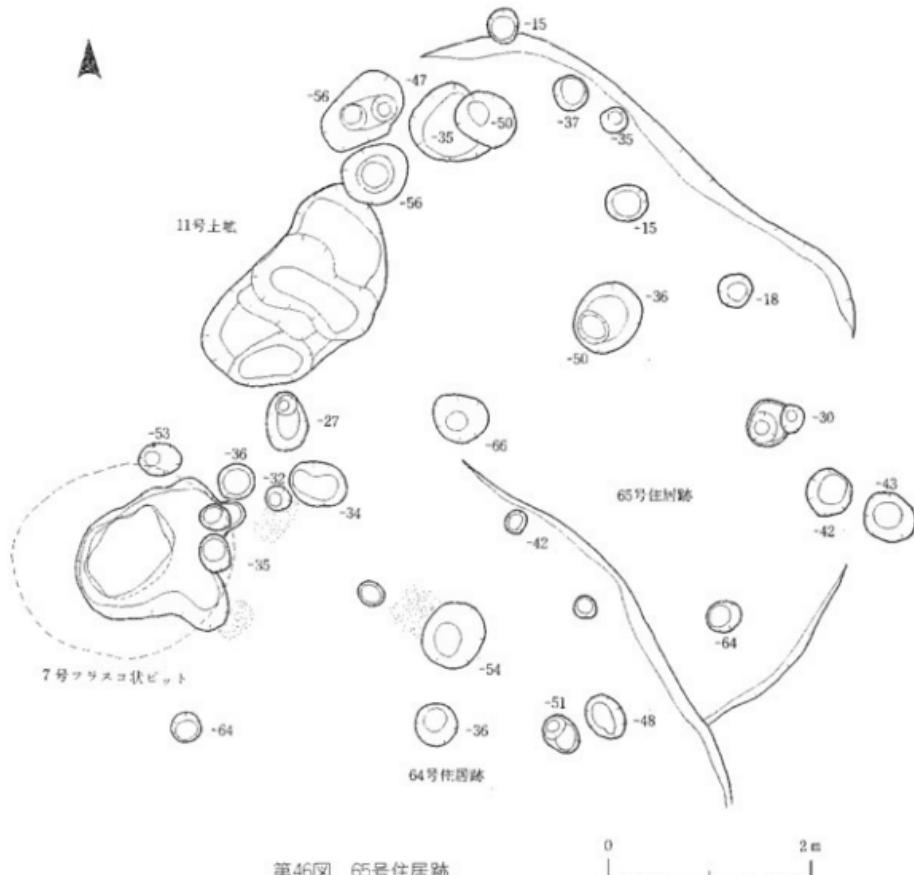
##### 石器（第94図）

139～141は覆土から出土した。139・140は無茎石錐である。141は縦型石匙である。石質はすべて頁岩である。

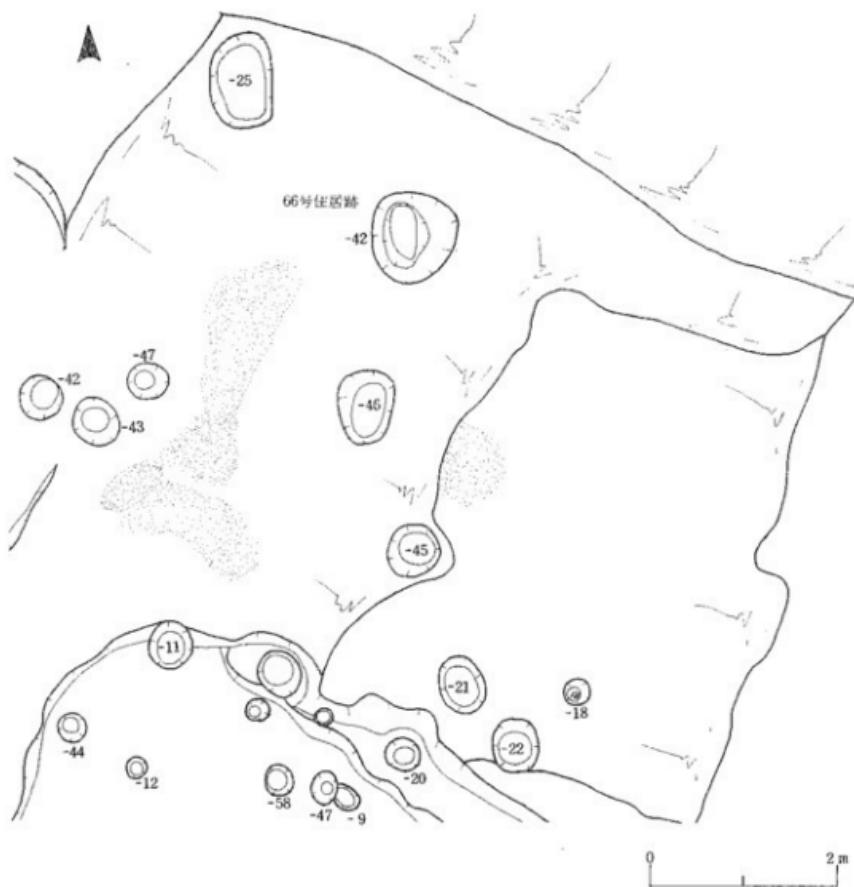
#### 61号住居跡（第41図）

調査区北側で検出された。57号住居跡と重複しており、本住居跡が切られており大部分が57号住居跡に占められる。北壁は削平されており不明である。

プランは、規模は不明であるが東西に長い橢円形を呈する。確認面からの深さは10cmで、壁は斜めにゆるやかに立ち上がる。ピットは南壁下に5個検出されている。炉は南東部に土器埋設炉が検出された。深鉢形土器の胴部が埋設され、周辺は火熱で赤変している。57号住居跡床面で検出されている土器埋設炉の中には本住居に含まれるものがある可能性が考えられる。床面は平坦で堅く良



第46図 65号住居跡



第47図 66号住居跡

好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第67・84図）

74は炉埋設土器である。深鉢形土器の胸部で羽状繩文が施文される。402は覆土から出土した破片である。粘土紐貼付の隆帯上に撚糸圧痕文が施される。

##### 石器（第94図）

142は覆土から出土した無茎石鏹で、石質は頁岩である。

##### 62号住居跡（第43図）

調査区中央部西側で検出された。北・西・南東部の壁は削平されて不明である。

プランは、推定で長軸 8.5 m、短軸 5.5 m の隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは遺存の良好な東側で深さ 10 cm で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 21 個検出されているが主柱穴については不明である。炉は中央部に石開炉が検出されている。西側の壁は抜き取られて無い。内部は火熱で赤変している。また、西側に小形の土器埋設炉が認められる。中軸線東側に径 1.3 m、深さ 95 cm の断面がロート状を呈する特異なピットが検出された。南西部には黄白色粘土を馬蹄形状に盛土している。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第 84 図）

403 ～ 407 は覆土から出土した破片である。粘土紐貼付や沈線による菱形・渦巻文・半截竹管状工具による刺突文などが施される。

##### 石器（第 94 図）

143 ～ 146 は覆土から出土した。143 は両面加工のヘラ状石器である。144 ～ 146 は刃部、上部が欠損する磨製石器である。

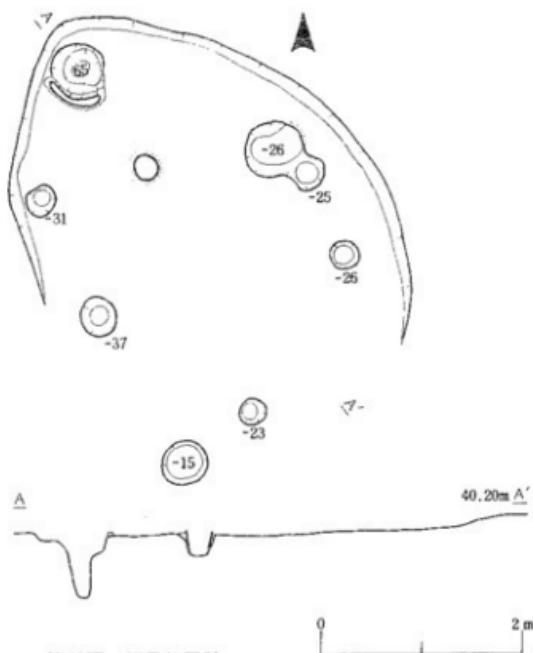
##### 土製品（第 163 図）

35 は覆土から出土した。三角柱形を呈する土製品で一边に面取りされている。上端と思われる。

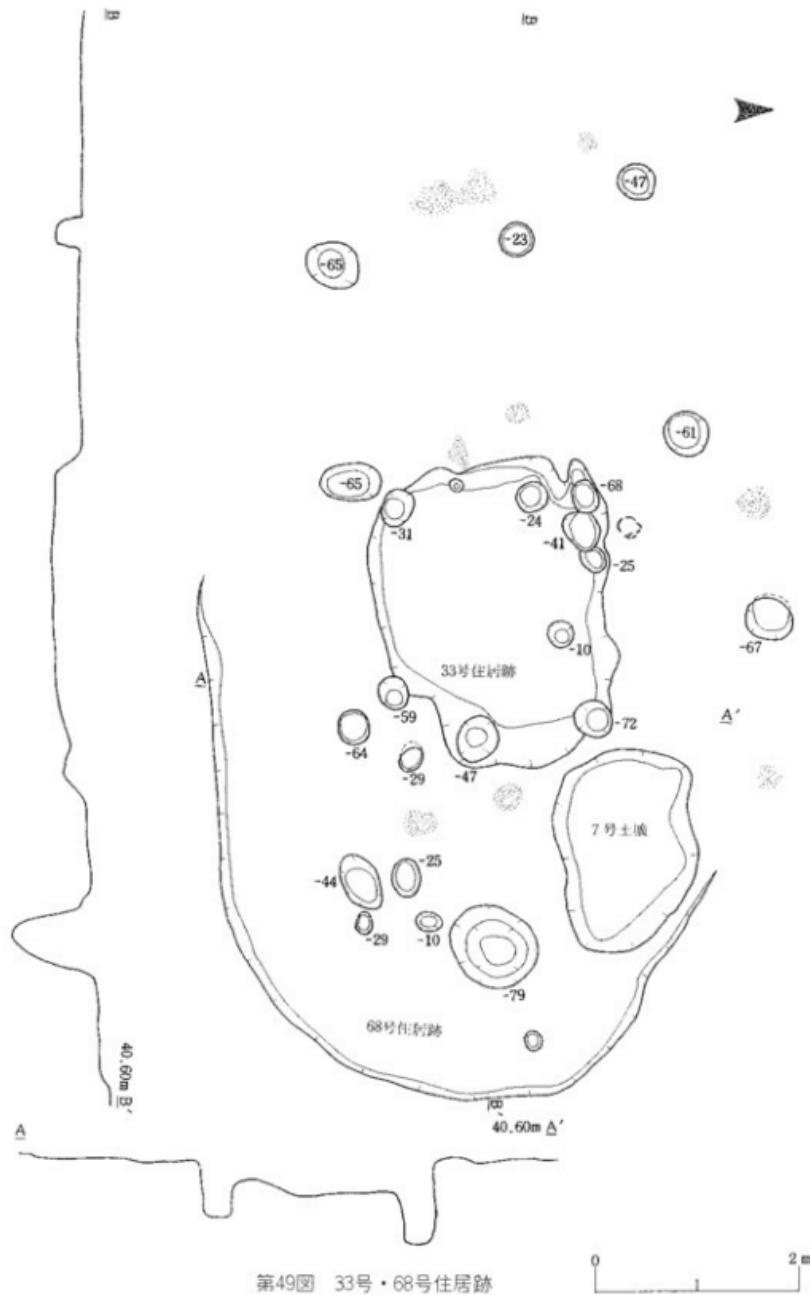
##### 63 号住居跡（第 44 図）

調査区中央部西側で検出された。

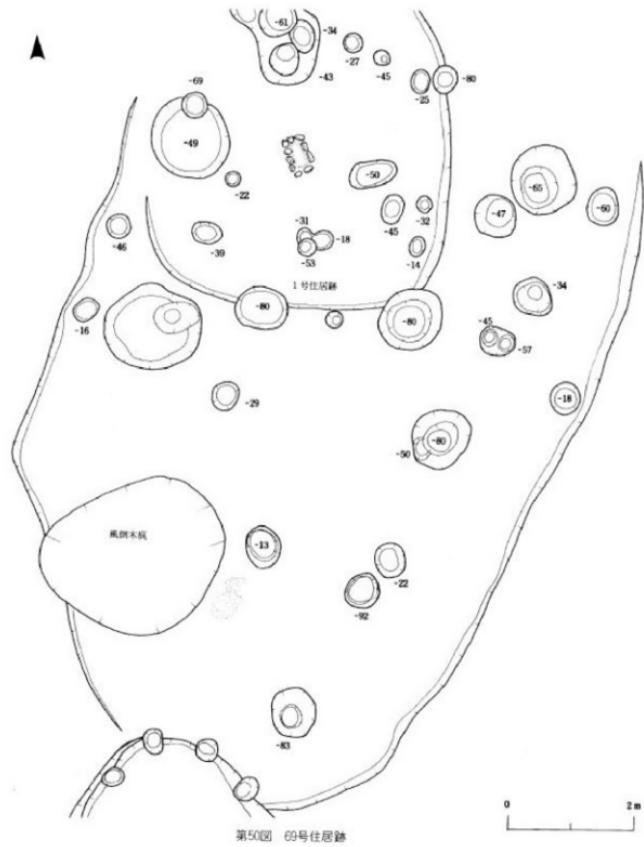
プラン、規模は西壁しか検出できず不明であるが、ピットの配列から推定すると、東西に長い梢円形を呈すると思われる。遺存する西壁で確認面からの深さ 7 cm で、ほぼ垂直に立ち上がっている。ピットは 13 個検出され梢円形に配される。主柱穴は深さ 30 cm 以上のものと思われる。炉は中央部



第48図 67号住居跡



第49図 33号・68号住居跡



第50図 69号住居跡

に位置する。西側に大きな礫を配し、拡大の礫がまわる長方形石圓炉である。内部は火熱で赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第 84 図）

408 ~ 410 は覆土から出土した小破片である。沈線によって文様が施され、刻目文などが施文される。

##### 石器（第 94 図）

147 は覆土から出土した無茎石鐵である。石質は頁岩である。

##### 64 号住居跡（第 45 図）

調査区北側で検出された。北西・西壁は削平されて不明である。

プランは、推定長軸 7.0 m、短軸 5.0 m の南北に長い橢円形を呈する。確認箇からの深さは良好な部分で約 5 cm と浅い。壁は斜めに立ち上がる。ピットは 21 個検出されており、主柱穴は壁に沿って周る深さ 40 cm 以上のものが考えられる。炉は中央部に位置する。二基の石圓炉が北・南側に隣接して検出され、その間に土器埋設炉が確認された。周辺は火熱で赤変している。中軸線上南壁下に径 1.1 m、深さ約 1.0 m、断面形がロート状を呈する特異なピットが検出された。北側に黄白色粘土が馬蹄形状に盛土されている。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第 68 ・ 87 図）

75 ・ 76 は炉埋設土器である。口縁部、底部が欠損する深鉢形土器である。75 は粘土紐貼付の隆帯によって文様が施される。口縁部は弧状に貼付された両側に押圧繩文が縁どりされている、頸部には二条の隆帯がめぐり、上部には同様の押圧繩文がみられる。76 は頸部に一条の隆線がめぐり、縦に蛇行する粘土紐貼付が施される。411 ~ 424 は覆土から出土した口縁部破片である。粘土紐貼付の隆帯で文様が施され渦巻文などが施文される。413 ~ 418 のように隆帯に沿って押圧繩文で縁どりされるものと、419 ~ 424 のように隆帯だけのものがある。

##### 石器（第 94 図）

148 ~ 153 は覆土から出土した。148 ・ 149 は無茎石鐵、150 ・ 151 は両面加工のヘラ状石器である。石質はすべて頁岩である。152 ・ 153 は磨製石斧である。152 は刃部が欠損している。

##### 65 号住居跡（第 46 図）

調査区北端で検出された。64 号住居跡と重複しており本住居跡が切られている。北西壁、東コーナー部は削平されて不明である。

プランは、長軸 7.0 m、推定短軸 4.7 m の橢円形を呈する。壁は非常に浅く、かすかに立ち上がっている。ピットは 15 個検出されているが主柱穴は不明である。炉は検出されなかった。床面は凹凸があるが堅く良好である。

## 出土遺物

### 土器（第 85 図）

425～433 は覆土から出土した破片である。粘土紐貼付の隆帯を主体に文様が施され、波状・弧線・渦巻文などが施文される。428 は口縁に撫糸圧痕文を施す隆帯が貼付される。430 は撫糸圧痕文が「r」状や隆帯を縁どる形で施文されている。

### 石器（第 95・99 図）

154～160・207 は覆土から出土した。154 は無茎石鏹、155 は鋭利な石錐である。156 は継型石匙、157～159 はヘラ状石器で、159 は大型である。160 は刃部が欠損する磨製石斧、207 は磨石である。

### 66 号住居跡（第 47 図）

調査区最北端で検出された。北側は沢で削平されている。東側は不明の落ち込み、南側は 56 号住居跡によって壊されている。

プラン、規模は不明で、西壁がわずかに確認されている。床面に、火熱により焼土が広範囲に認められる。

## 出土遺物

### 土器（第 86 図）

434～442 は覆土から出土した口縁部破片である。山形、平縁の口縁部を有し、粘土紐貼付・沈線文などで文様が施される。434・441 は沈線文が施され細長い刻みがみられる。435～438 は弧状、垂下する粘土紐貼付が施され、439・440 は渦巻文、菱形文などが施文される。

### 石器（第 95・99 図）

161～168・208 は覆土から出土した。161～163 は無茎石鏹である。161 は抉り部分にアスファルトが付着している。164 は継型石匙、165 は三脚石器と慰われる。166・167 はヘラ状石器、168 は刃部が欠損する磨製石斧である。208 は卵形を呈する磨石である。

### 67 号住居跡（第 48 図）

調査区北側で検出された。南・西壁の一部は削平されて不明である。

プランは、長軸 4.7 m、短軸 3.4 m の梢円形を呈する。確認面からの深さは 10 cm で、壁は斜めにゆるやかに立ち上がる。ピットは 7 個検出されており主柱穴と思われる。中軸線北側に径 55 cm、深さ 65 cm、断面がロート状を呈する特異なピットがある。南側に黄白色粘土を土手状に盛土している。炉は中央やや北西部に位置する土器埋設炉である。周辺は火熱で赤変している。

## 出土遺物

### 土器（第 68・86 図）

77 は炉埋設土器で、キャリバー形を呈する深鉢形上器である。四单位の土器で口縁四ヶ所に瘤状の突起が配される。口縁部、頸部に粘土紐貼付の隆帯がめぐり、それらの間には波状に隆帯がめぐ

り、頂部下には横状、中間点には弧状の粘土紐貼付が施文される。地文は LR (傾回転) 単壇斜縞文である。443～450は覆土から出土した破片である。443・444は粘土紐貼付の隆帯と撫糸圧痕文が施され、444は刺突文もみられる。445～448は隆帯による渦巻文、449・450は沈線によって文様が施される。

#### 石器（第 95・99 図）

169～172・209・210は覆土から出土した。169は無茎、170は有茎の石鎌である。171は石錐と思われる。172は両面加工のヘラ状石器である。石質はすべて頁岩である。209・210は磨石である。

#### 68 号住居跡（第 49 図）

調査区中央部西側で検出された。西側部は削平のため不明である。また、中央部には本住居跡を切って 33 号住居跡が構築されている。

ピットの配列からプラン、規模を推定すると、長軸約 9.7 m、短軸約 5.2 m の東西に長い隅丸長方形を呈するようである。櫛が遺存する東側では、確認面からの深さは約 10 cm で、壁は斜めに立ち上がる。住居跡にともなうピットは 14 個検出されている。主柱穴は長軸に沿って長方形に配される深さ 40 cm 以上のピットと思われる。内軸線東側に径 80 cm、深さ 79 cm の特異なピットが検出された。炉は中軸線に三ヶ所、その他に二ヶ所焼土が分布する個所が認められ地床炉と思われる。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第 86 図）

451～457は覆土から出土した破片である。粘土紐貼付の隆帯、撫糸圧痕文で文様が施される。451～453は縦に隆帯を重下させ、鋸歯状文がみられる。454は口縁に撫糸圧痕文、455・457は隆帯上に撫糸圧痕文が施される。

##### 石器（第 96 図）

174・175は覆土から出土した。174は石鎌、175は両面加工のヘラ状石器である。石質はいずれも頁岩である。

#### 69 号住居跡（第 50 図）

調査区中央南側で検出された。北壁は削平され不明である。また 1 号・72 号住居跡、風倒木痕によつて壊されている。

プランは、北側が不明であるが推定長軸 12.8 m、短軸 8.1 m の隅丸長方形を呈する。壁は非常に浅く、斜めに立ち上がる。住居跡にともなうピットは 18 個検出されている。主柱穴は長軸壁と並行する深さ 60 cm 以上の掘り方のしっかりしたピットと思われる。炉は検出できなかったが、南に焼土が分布する範囲が認められ、これが地床炉のひとつと思われる。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

### 土器（第87図）

458～462は覆土から出土した土器片である。沈線によって平行・波状・渦巻文などが施されている。

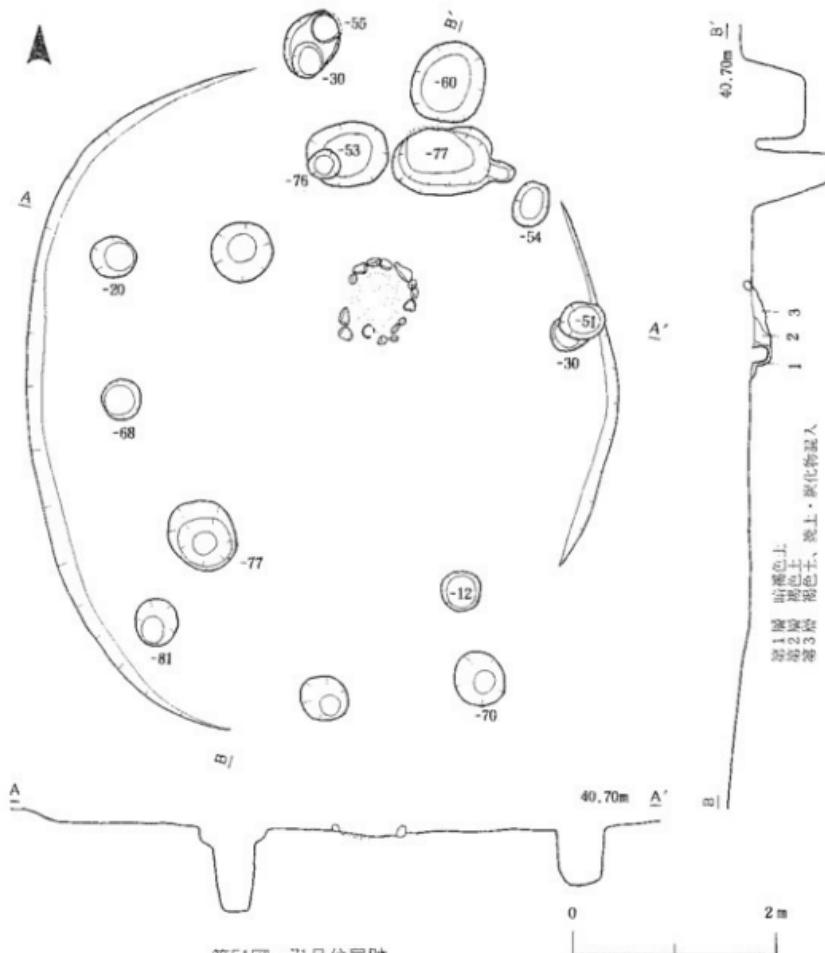
### 石器（第96図）

176は覆土から出土した無茎石鏃である。

### 71号住居跡（第51図）

調査区中央南側で検出された。北西・南壁は削平されて不明である。

プランは長軸6.6m、短軸5.9mの橢円形を呈する。確認面からの深さは10cmで、壁は斜めに立



第51図 71号住居跡

ち上がる。ビットは15個検出されている。主柱穴は深さ50cm以上の掘り方のしっかりしたビットと思われる。炉は北寄りに位置する。石頭土器埋設炉で、埋設土器は南寄りに埋設されている。壁は西、南側の一部が抜き取られている。中は火熱で赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第68・87図）

78は炉埋設土器である。胸部が膨らむ深鉢形土器で口縁部、底部は欠損する。頸部に四条の沈線文がめぐり、胴部には垂下する沈線から渦巻文が展開する。地文はLR（縦回転）単節斜繩文である。466・467は覆土から出土した。467は太い隆帯が施される。

##### 石器（第96図）

177は覆土から出土した鋼身の磨製石斧である。

##### 72号住居跡（第51図）

調査区中央南側に検出された。73号住居跡の北側を壊して構築されている。

プランは長軸3.5m、短軸3.0mの小さな橢円形を呈する。確認面からの深さは42cmで、壁は斜めに立ち上がるが、東壁は傾斜がゆるやかである。住居跡にともなうビットは4個と思われるが、主柱穴は不明である。炉は検出できなかった。床面は堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第87図）

468～474は覆土から出土した土器片である。粘土紐貼付の隆帯や、沈線によって文様が施される。468・469・472・474は隆帯が平行・波状・鋸歯状に施される。471は細い隆帯が「フ」状に描かれている。470・473は沈線によって平行、渦巻文などが施文される。

##### 石器（第96・99図）

178・179・211は覆土から出土した。178は無茅石鏽で抉りの部分にアスファルトが付着する。179は両面加工のヘラ状石器である。石質はいずれも頁岩である。211は欠損する磨石である。

##### 73号住居跡（第52図）

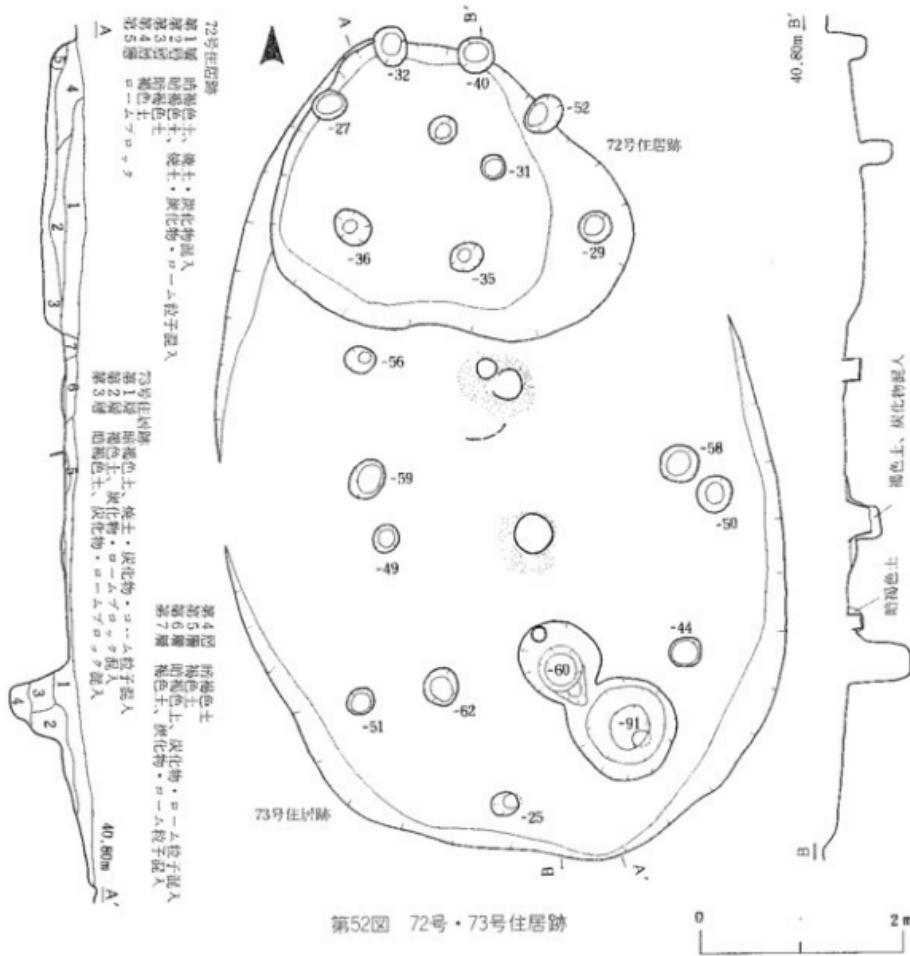
調査区中央南側で検査された。北側は72号住居跡によって壊されている。

プランは、推定長軸約8.3m、短軸5.4mを呈する橢円形を呈する。確認面からの深さは10cmで、壁は斜めに立ち上がる。ビットは15個検出されている。主柱穴は長軸に並行して周る深さ30cm以上のビットと思われる。炉は中央長軸線上に土器埋設炉が二基検出された。周辺は火熱で赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

##### 土器（第68・69・87図）

79～82は炉埋設土器である。79は口縁部、底部が欠損する深鉢形土器である。口縁部、頸部には粘土紐貼付の隆帯、胴部に二・三条の沈線がめぐっている。地文はRL（縦回転）単節斜繩文である。



第52図 72号・73号住居跡

る。80は口縁部の四ヶ所に太い隆帯で横に「○」状の文様が施される。地文はLR(縦回転)単節斜繩文である。81は口縁部、底部が欠損する深鉢形土器である。地文はLR(縦回転)単節斜繩文である。82は頸部から外反する口縁部、底部が欠損する深鉢形土器である。口縁下部に細い粘土紐貼付により鋸歯状文が施される。地文はLR(縦回転)単節斜繩文である。475は覆土から出土した土器片である。口縁部に二条の隆帯がめぐっている。

#### 石器(第96図)

180～182は覆土から出土した。181は細身の縦型石匙、182は先端部が欠損する削器状の石器である。石質はいずれも頁岩である。183は刃部が欠損する磨製石斧である。

#### 74号住居跡（第53図）

調査区中央東側で検出された。

プランは径6.3mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは10cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは11個検出されているが主柱穴は不明である。炉は中央部に位置する。土器埋設炉で埋設土器が2個体出土した。周辺は火熱で赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物

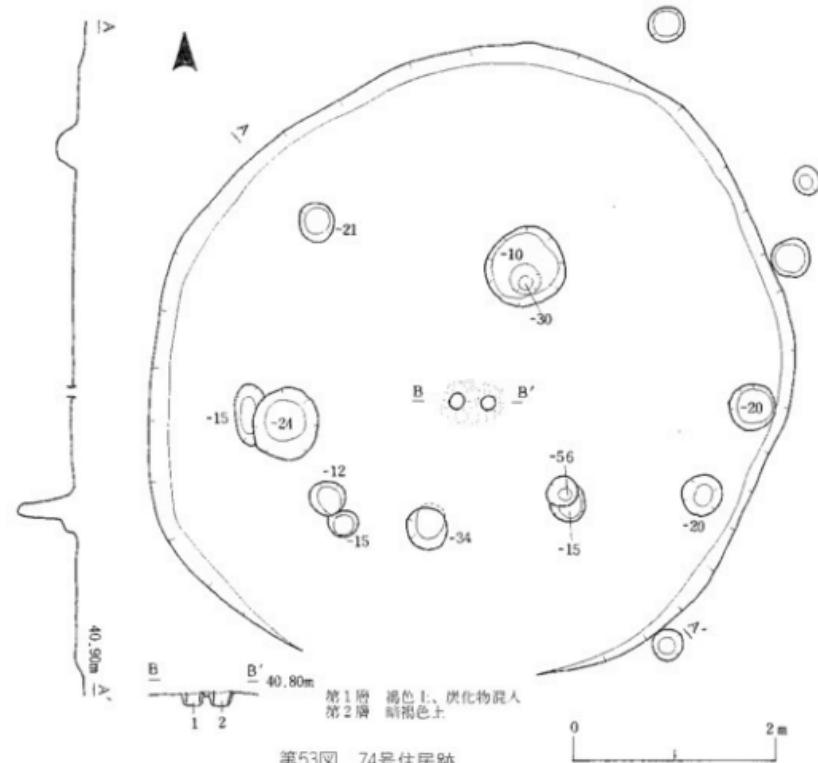
##### 土器（第69図）

83・84はが埋設土器である。いずれも口縁部、底部が欠損する深鉢形土器である。83は縞、84は横方向に結束のある羽状繩文が施される。

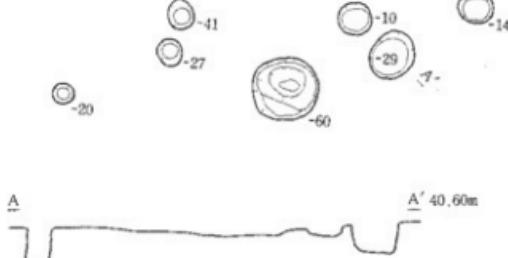
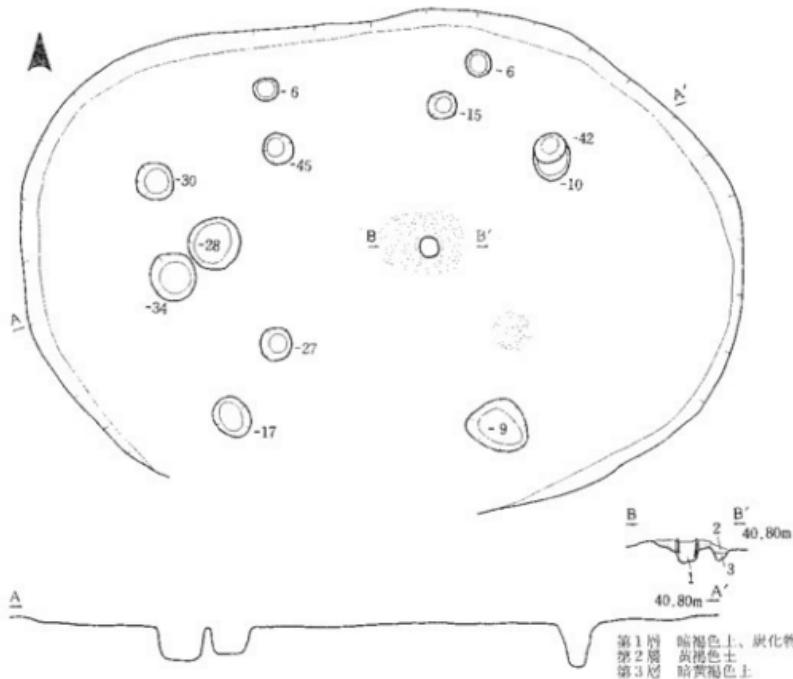
#### 75号住居跡（第54図）

調査区中央東側で検出された。南壁は一部削平され不明である。

プランは長軸7.1m、短軸5.1mの橢円形を呈する。確認面からの深さは約4cmと浅く、壁は斜めに立ち上がる。ピットは11個検出されているが主柱穴は不明である。炉はほぼ中央部に位置する。



第53図 74号住居跡



第54図 75号・76号住居跡



土器埋設炉で深鉢形土器が埋設されており、周辺は火熱を受けて赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

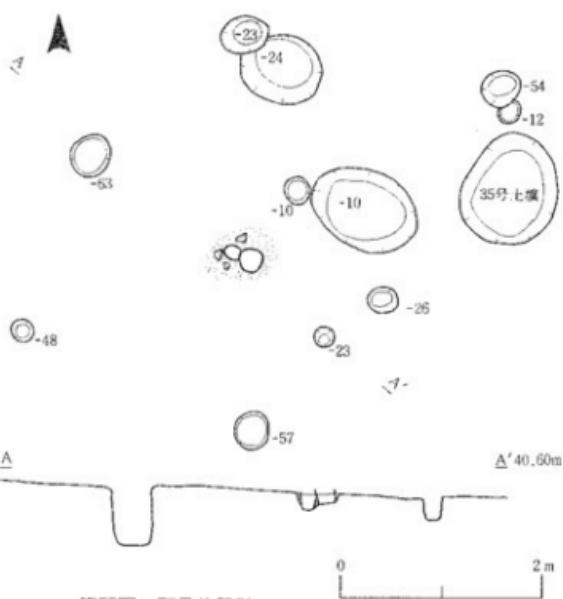
#### 出土遺物

##### 土器（第69図）

85は炉埋設土器である。口縁部が欠損する深鉢形土器である。口縁部に粘土組織帶と半截竹管状工具内面による半隆起線文で山形の文様が施されている。

##### 76号住居跡（第54図）

調査区中央北側で検出された。壁は削平され、プラン、規模は不明である。炉と周辺



第55図 77号住居跡

ビットにより住居跡と判明した。炉は土器埋設炉で周辺は火熱で赤変している。炉の周りに10個程度ビットが検出されているが主柱穴は不明である。

#### 出土遺物

##### 土器（第69図）

86は炉埋設土器である。深鉢形土器の胴部で地文はLR（継回転）単節斜繩文である。

##### 77号住居跡（第55図）

調査区北東部に検出された。壁は削平され、プラン・規模は不明である。炉と周辺ビットにより住居跡と判明した。炉は石器土器埋設炉である。礫は3個確認される他は抜き取られている。埋設土器は2個体出土した。周辺は火熱で赤変している。

#### 出土遺物

##### 土器（第69図）

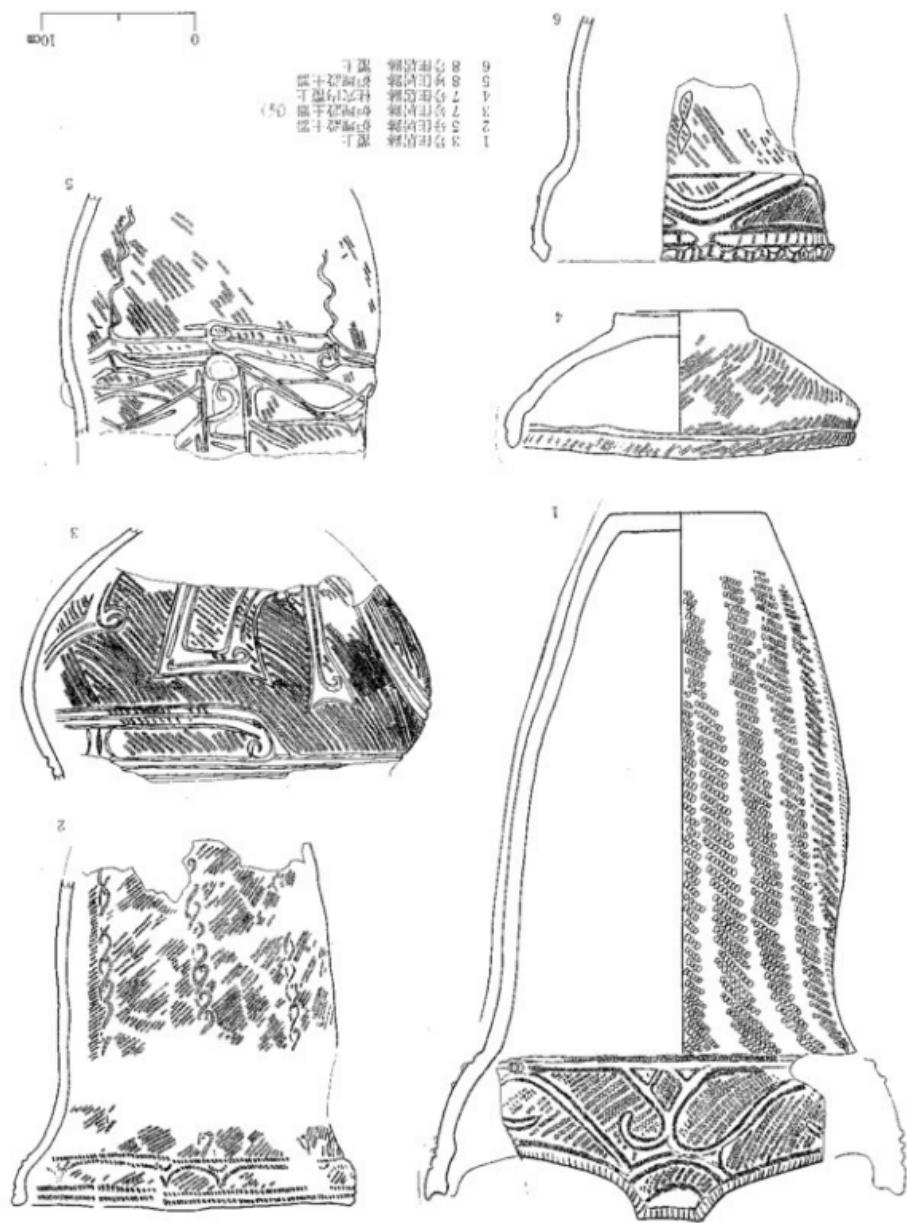
87・88は炉埋設土器である。口縁部、底部が欠損する深鉢形土器である。地文はRL（継回転）単節斜繩文である。

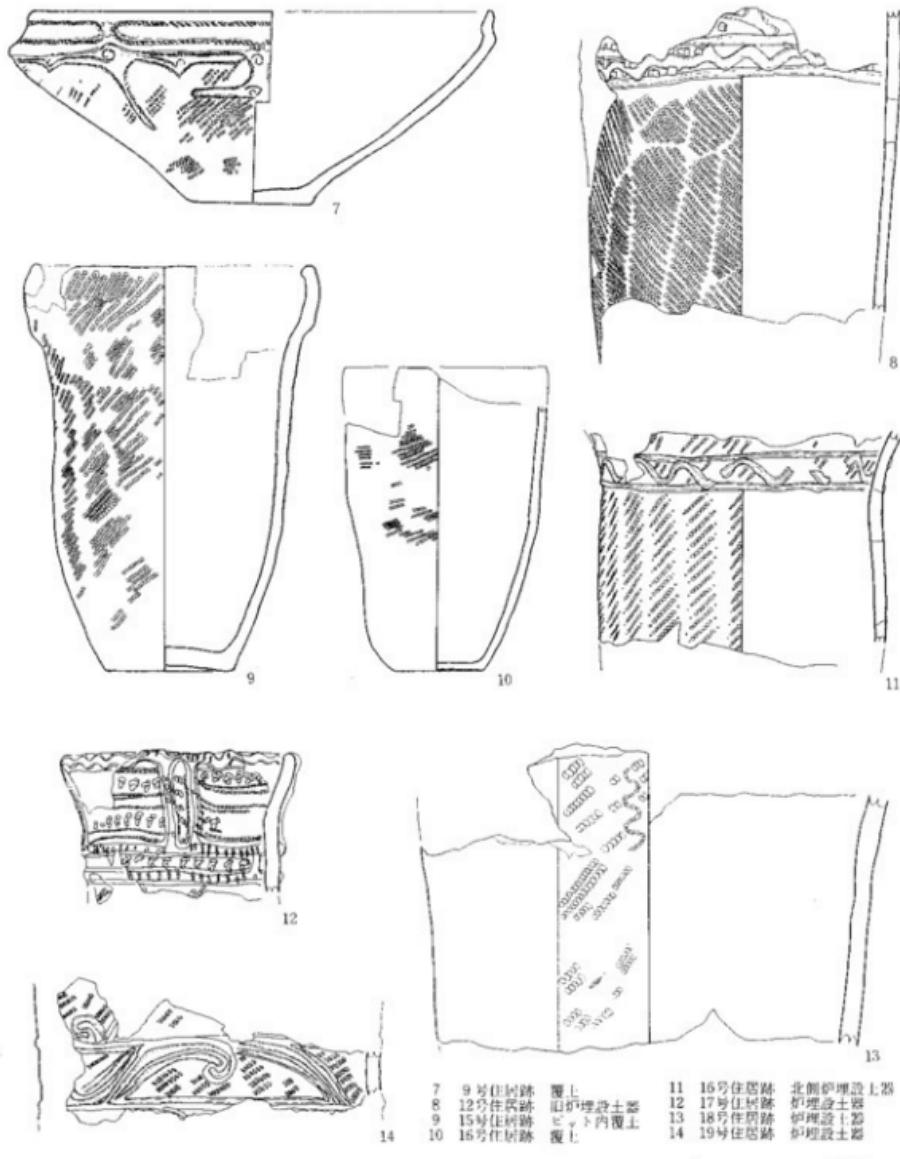
#### フラスコ状ビット・土壤

本遺跡からフラスコ状ビット28基、土壤190基が検出された。詳細については表にしてまとめた。

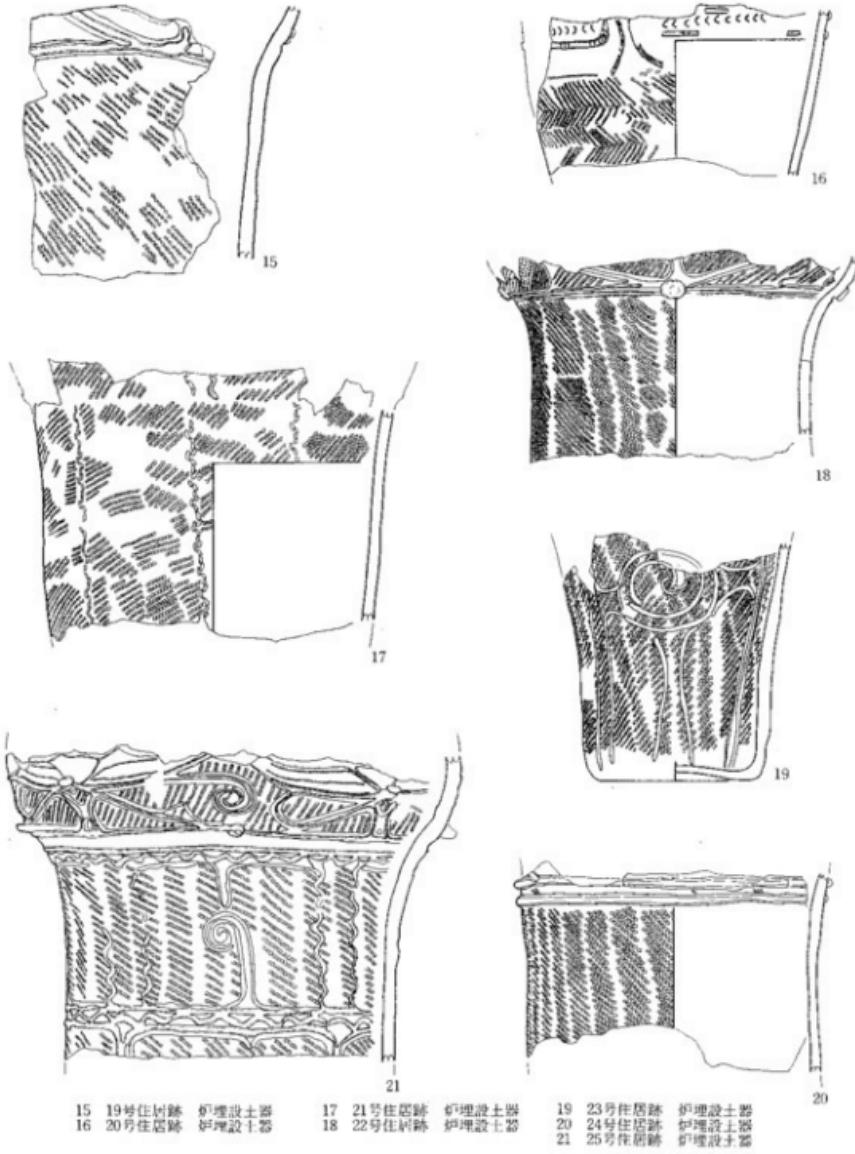
#### フラスコ状ビット出土遺物

圖56 圖 遺擱內出土玉器



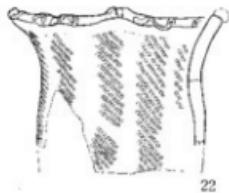


第57図 遺構内出土土器



第56図 遺構内出土土器

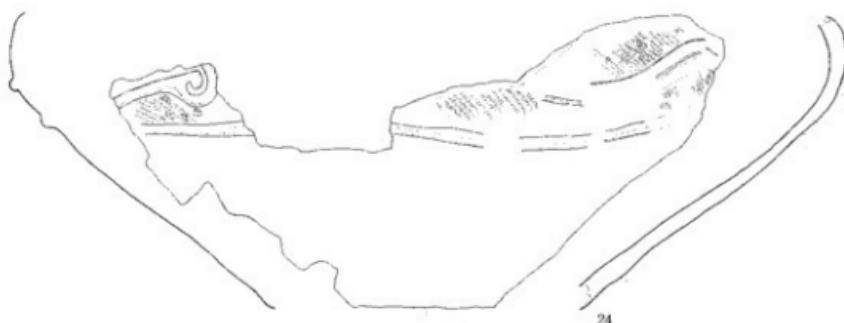
0 10cm



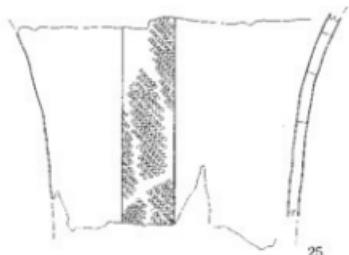
22



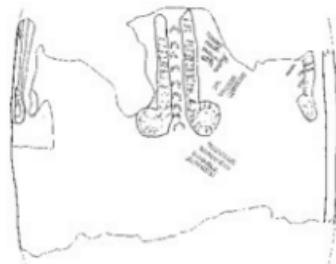
23



24



25



26

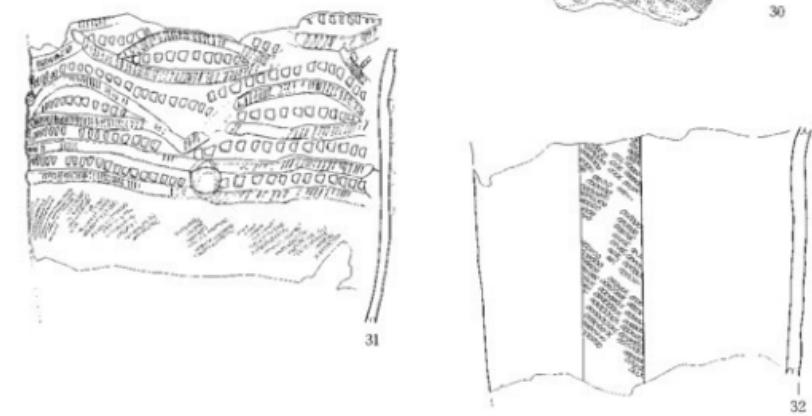
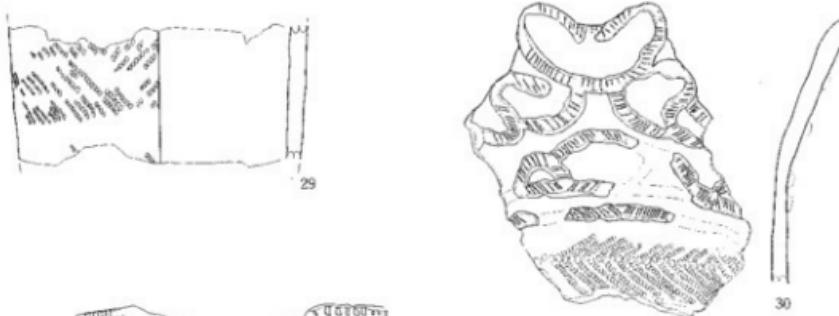
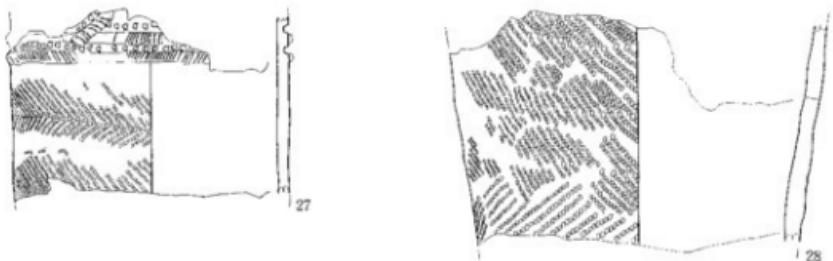
22 25号住居跡 覆土  
23 25号住居跡 覆土

24 26号住居跡 炉埋設土器  
25 29号住居跡 炉埋設土器

26 30号住居跡 炉埋設土器



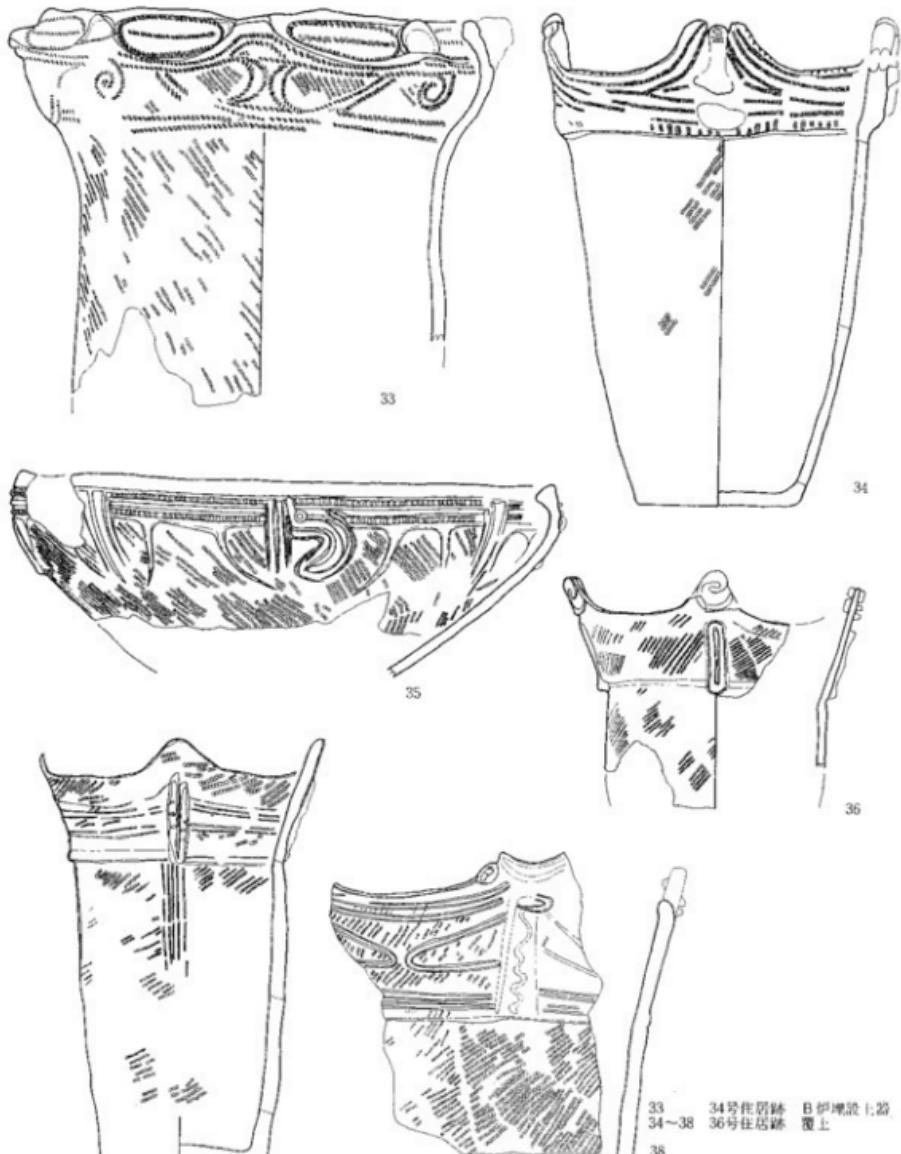
第59図 遺構内出土土器



27 30号住居跡 挖埋設土器  
 28 30号住居跡 炉埋設土器  
 29 30号住居跡 炉埋設土器  
 30 30号住居跡 覆土

第60圖 濟構內出土土器

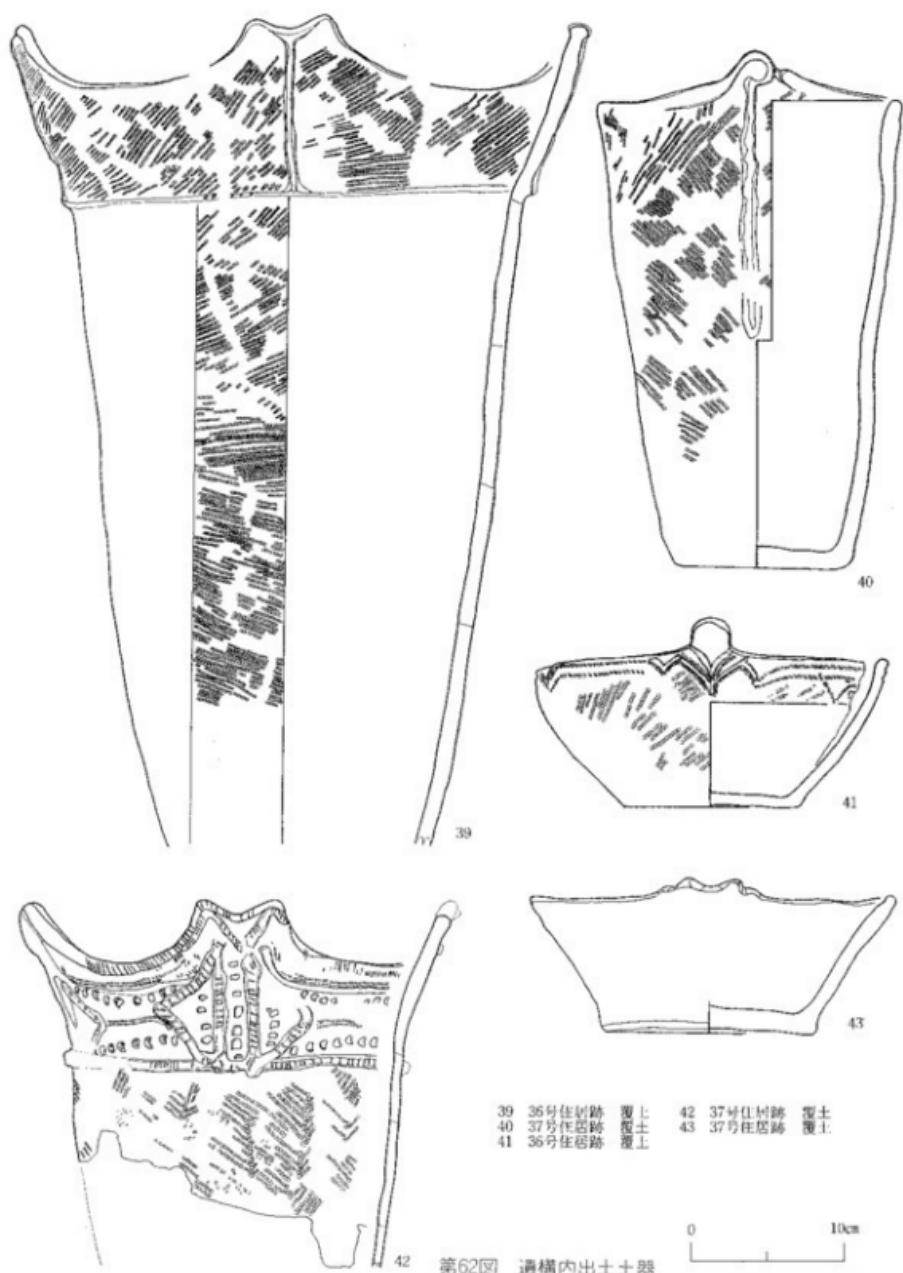
0 10cm



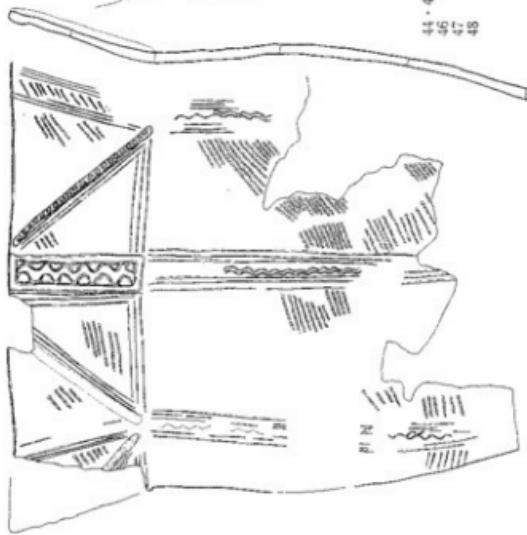
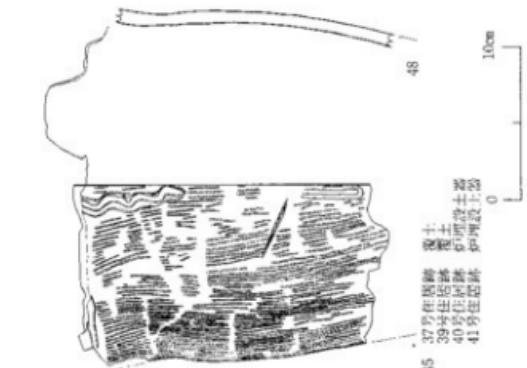
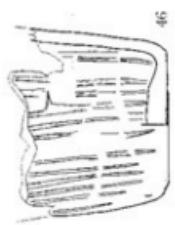
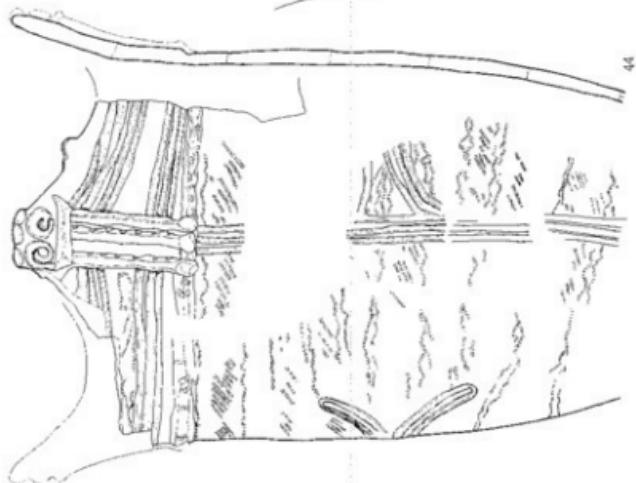
第61図 遺構内出土土器

33  
34-38 36号住居跡 B部埋設上  
36号住居跡 覆上

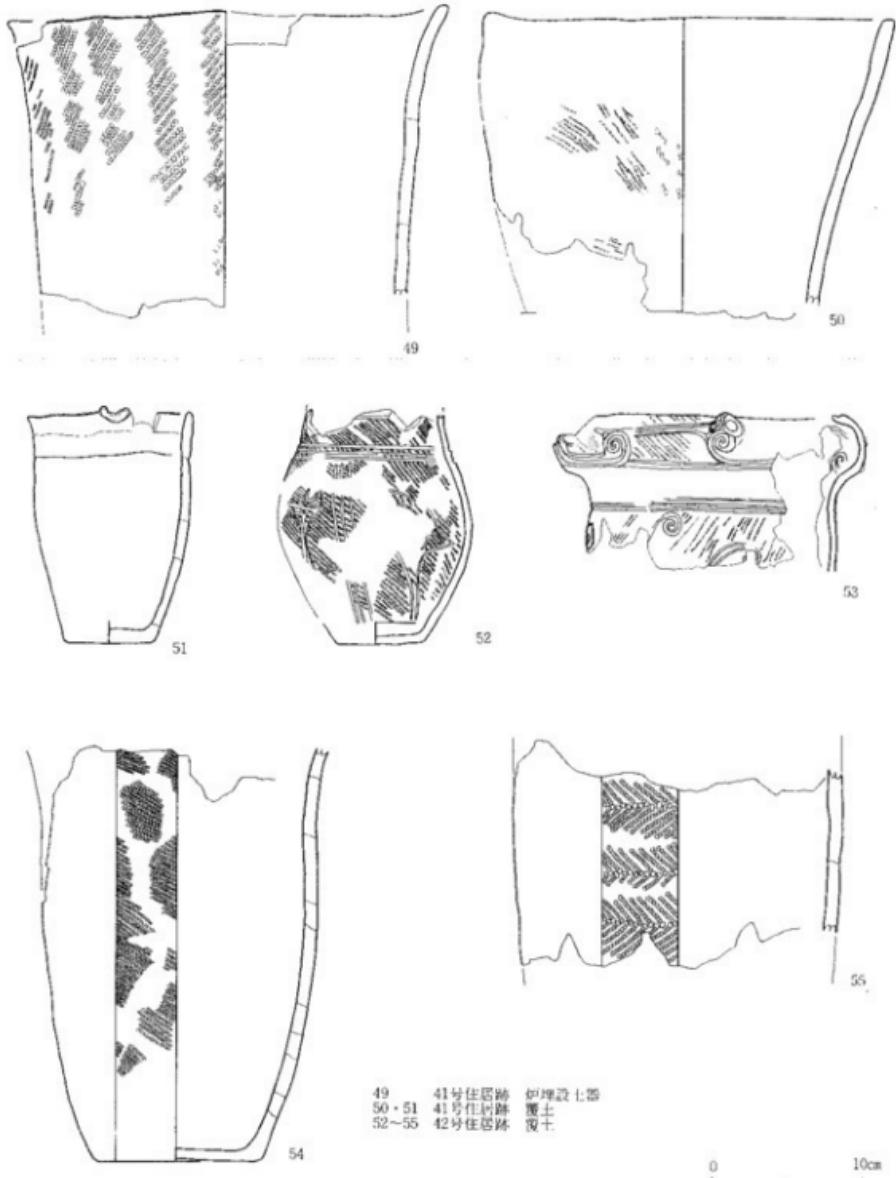
0 10cm



第62図 遺構内出土土器



第63図 遺構内出土土器



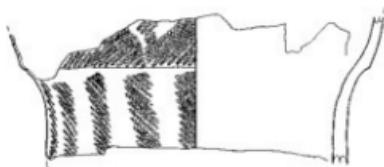
第64図 遺構内出土土器



56



57



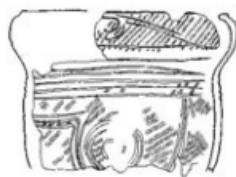
58



59



60



61



62

56·57 43号住居跡 床面  
 58 44号住居跡 炉埋設土器  
 59 44号住居跡 炉埋設土器  
 60~62 45号住居跡 覆土



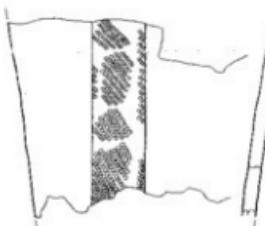
第65図 遺構内出土土器



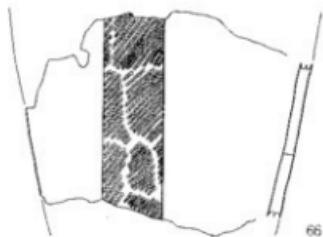
63



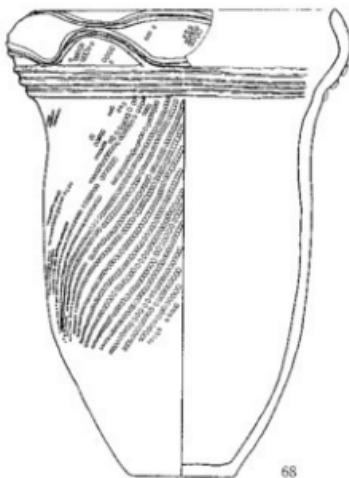
64



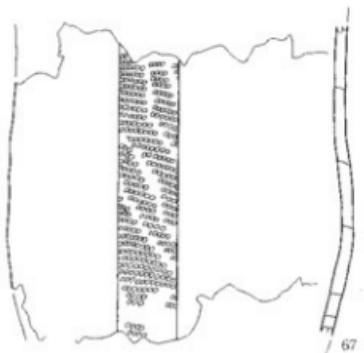
65



66



68



67

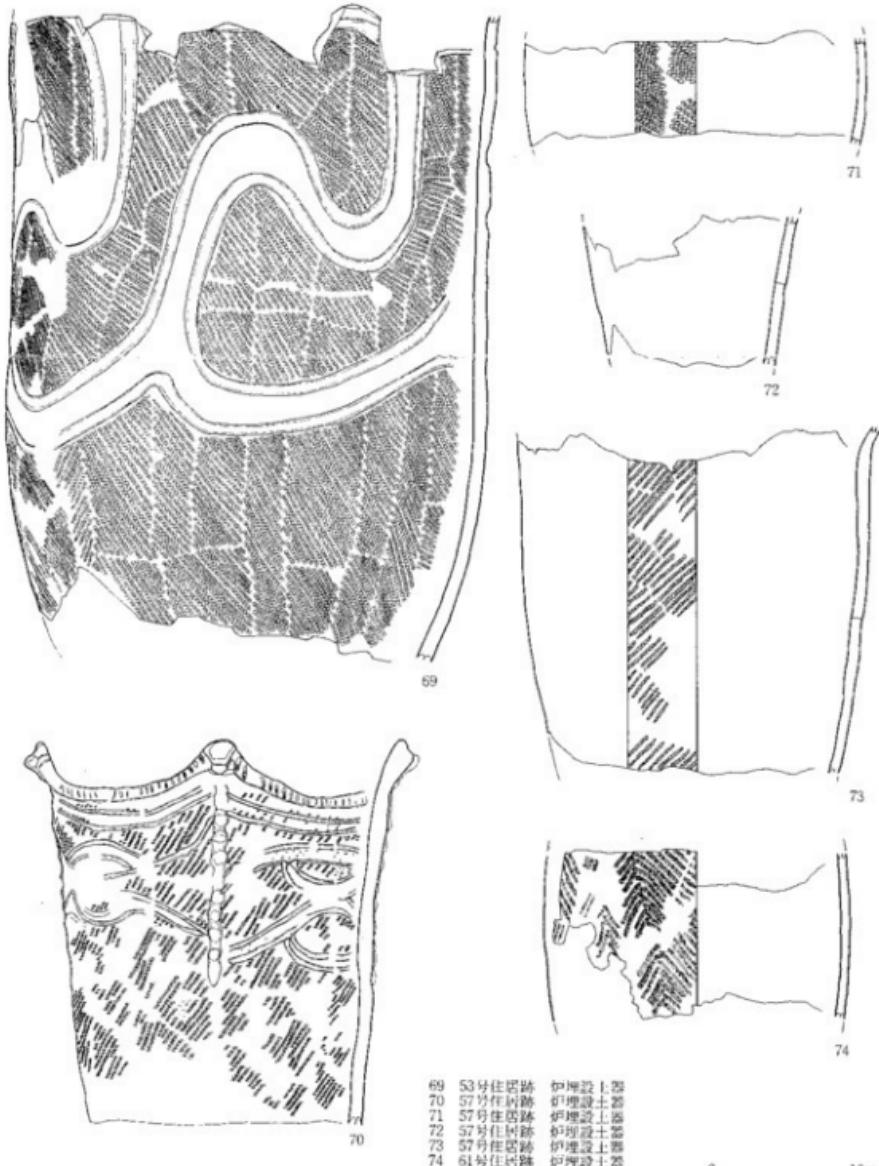
63・64 45号住居跡  
65 48号住居跡  
66 49号住居跡  
67 52号住居跡  
68 58号住居跡

蓋上  
炉埋設土器  
炉埋設土器

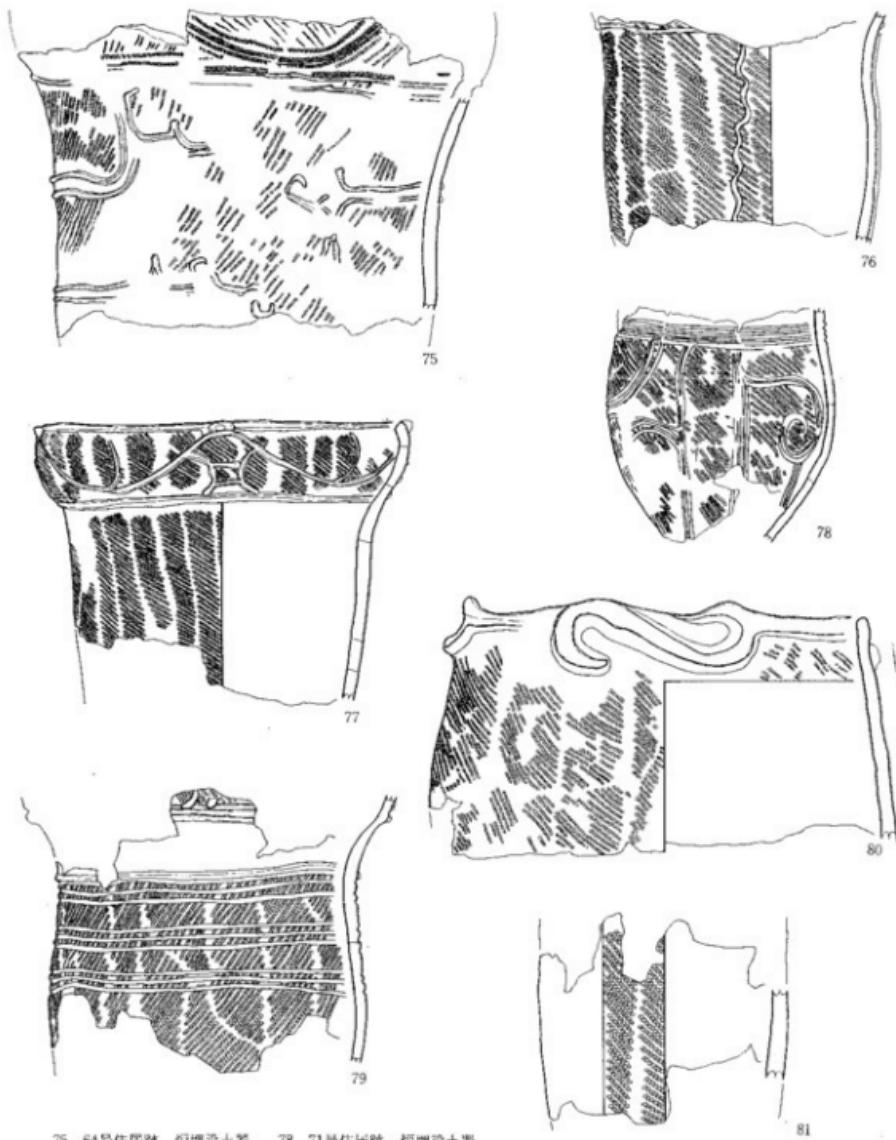
A炉埋設土器



第66図 遺構内出土土器



第67図 遺構内出土土器



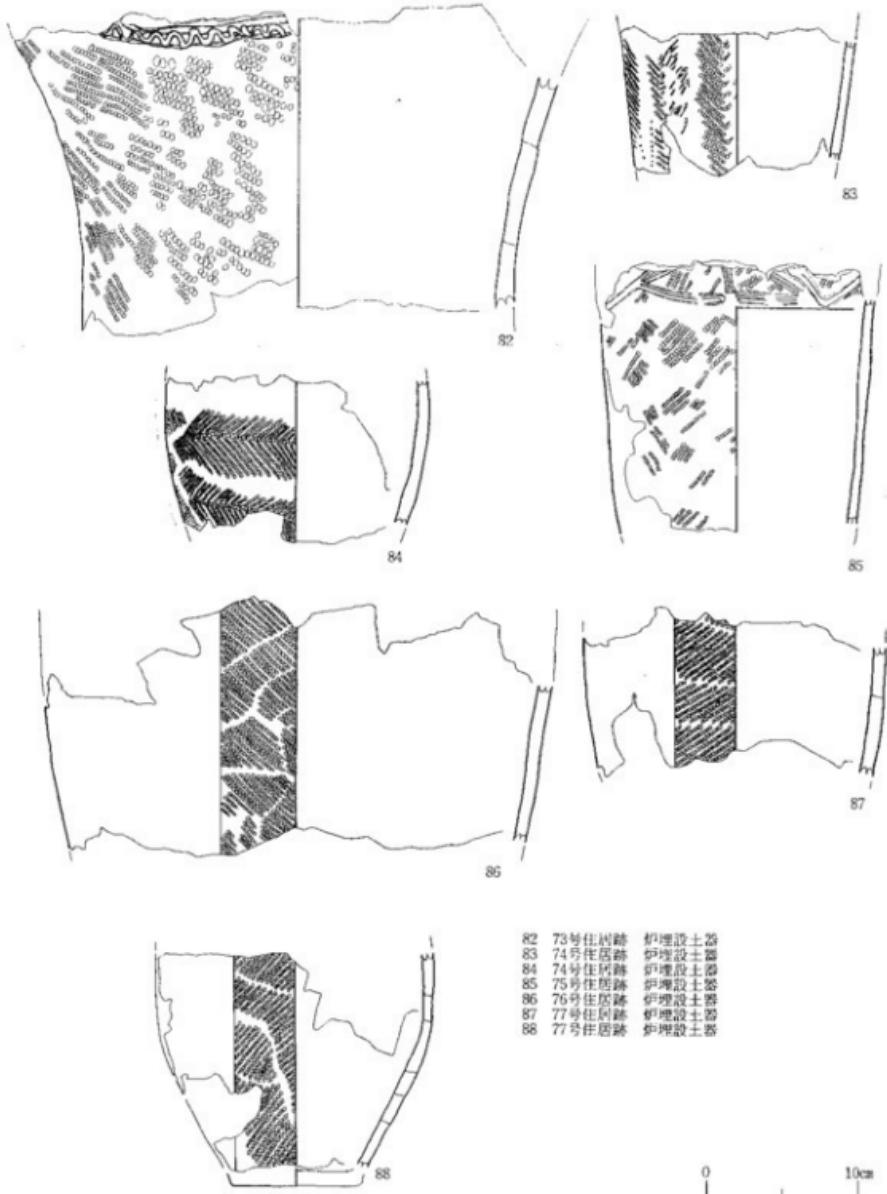
75 64号住居跡 64号住居跡  
64号住居跡 64号住居跡  
76 67号住居跡 67号住居跡  
77 73号住居跡 73号住居跡

78 71号住居跡 71号住居跡  
79 73号住居跡 73号住居跡  
80 73号住居跡 73号住居跡

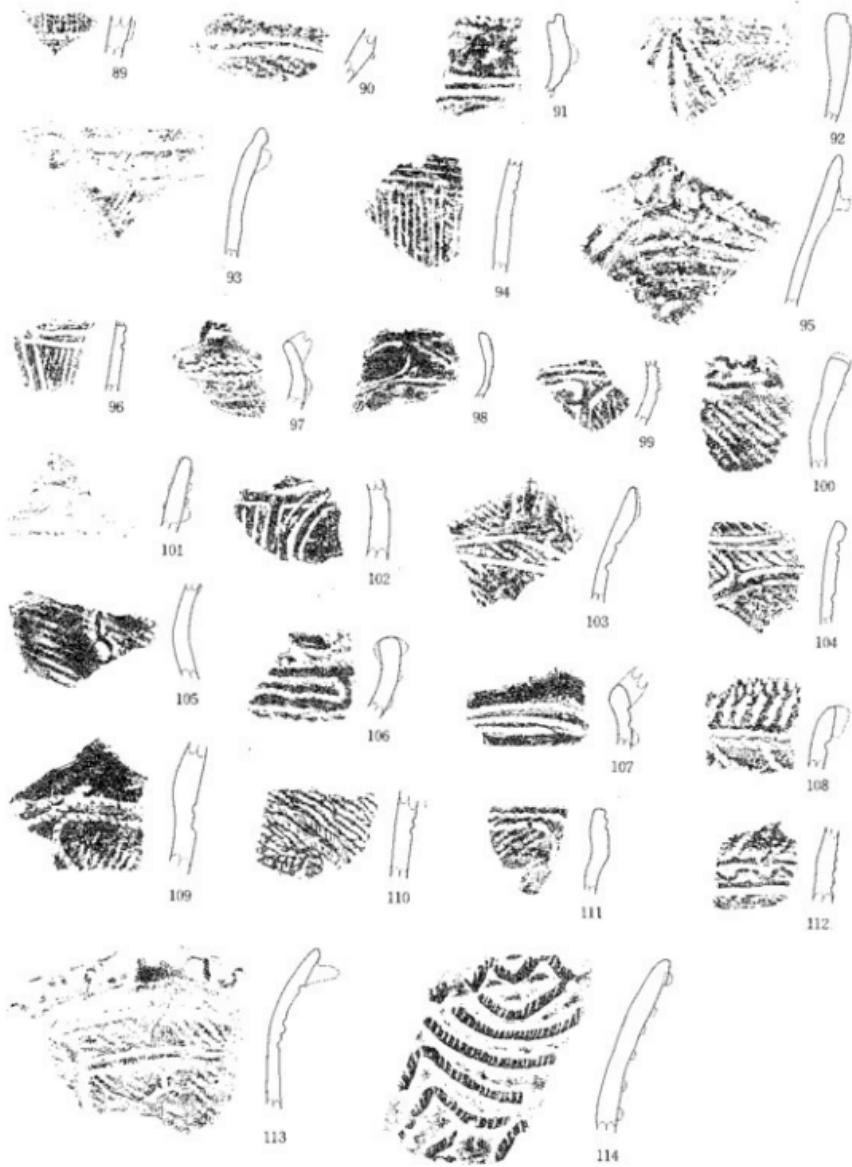
81 73号住居跡 73号住居跡  
73号住居跡 73号住居跡  
炉埋設土器 炉埋設土器

0 10cm

第68図 遺構内出土土器



第69図 遺構内出土土器



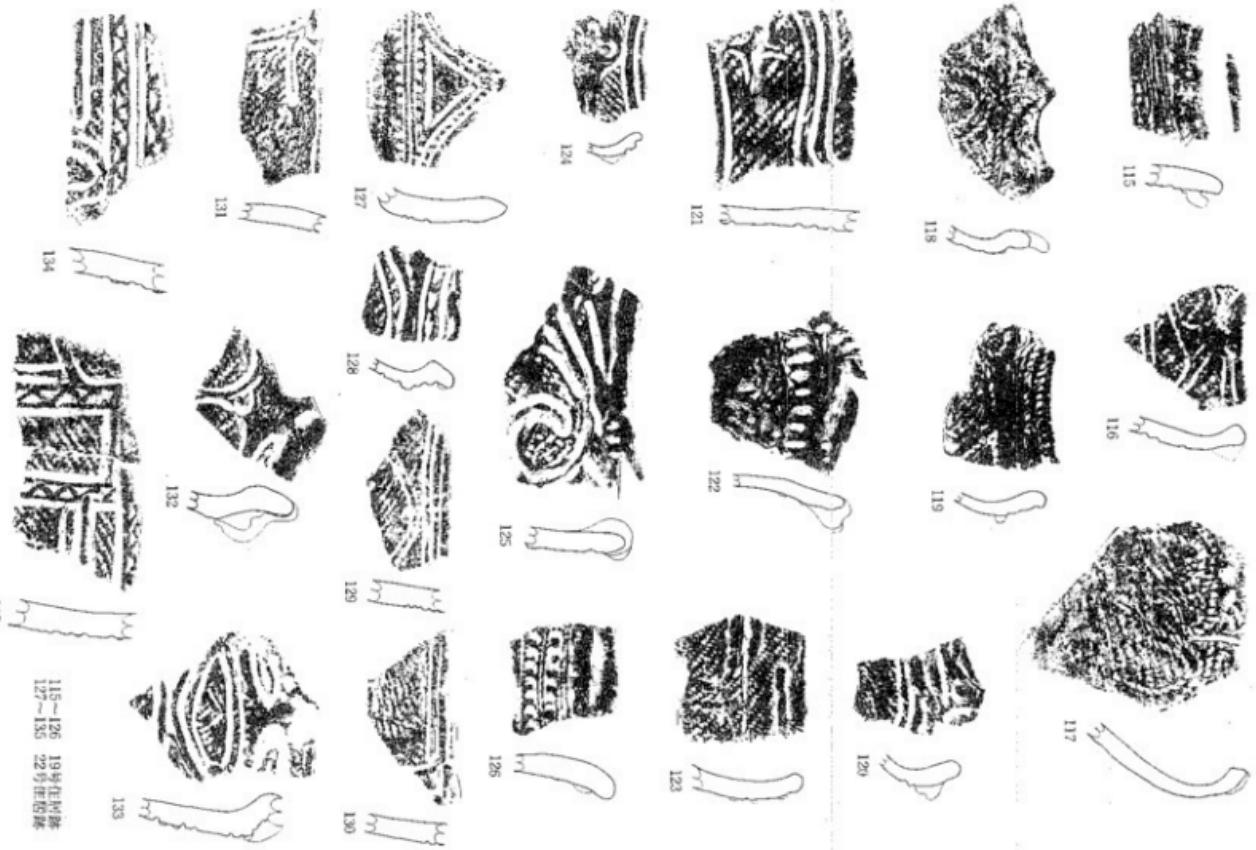
89~91 2号住居跡  
 92~94 7号住居跡  
 95~102 15号住居跡  
 103~114 18号住居跡

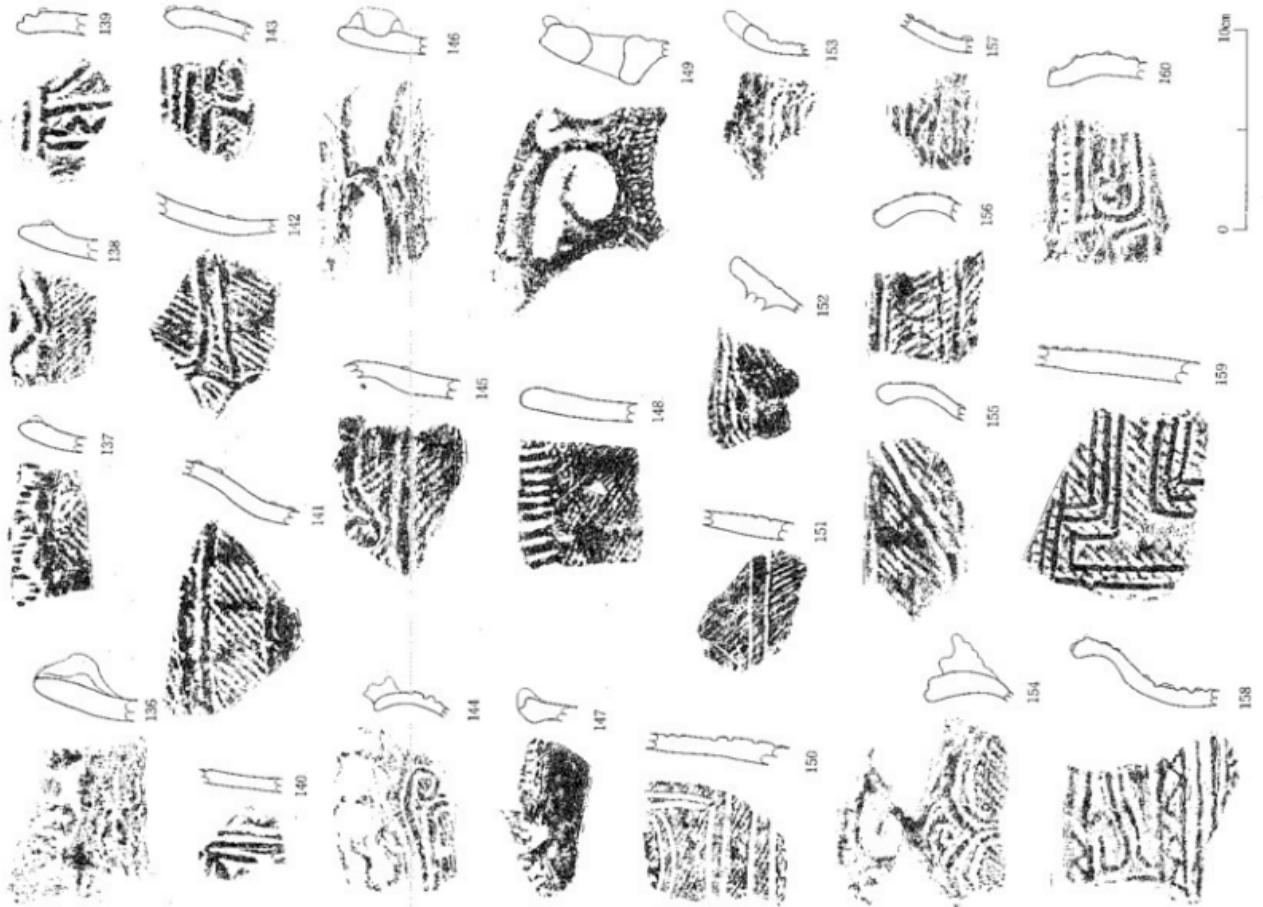
0 10cm

第70図 遺構内出土土器

第71図 遺構内出土土器

0  
10cm





第72图 遗構内出土器

136~138 22号E15层  
139~149 23号E15层

150~160 24号E15层

0 10cm



第73回 遺構内出土土器

0 10cm

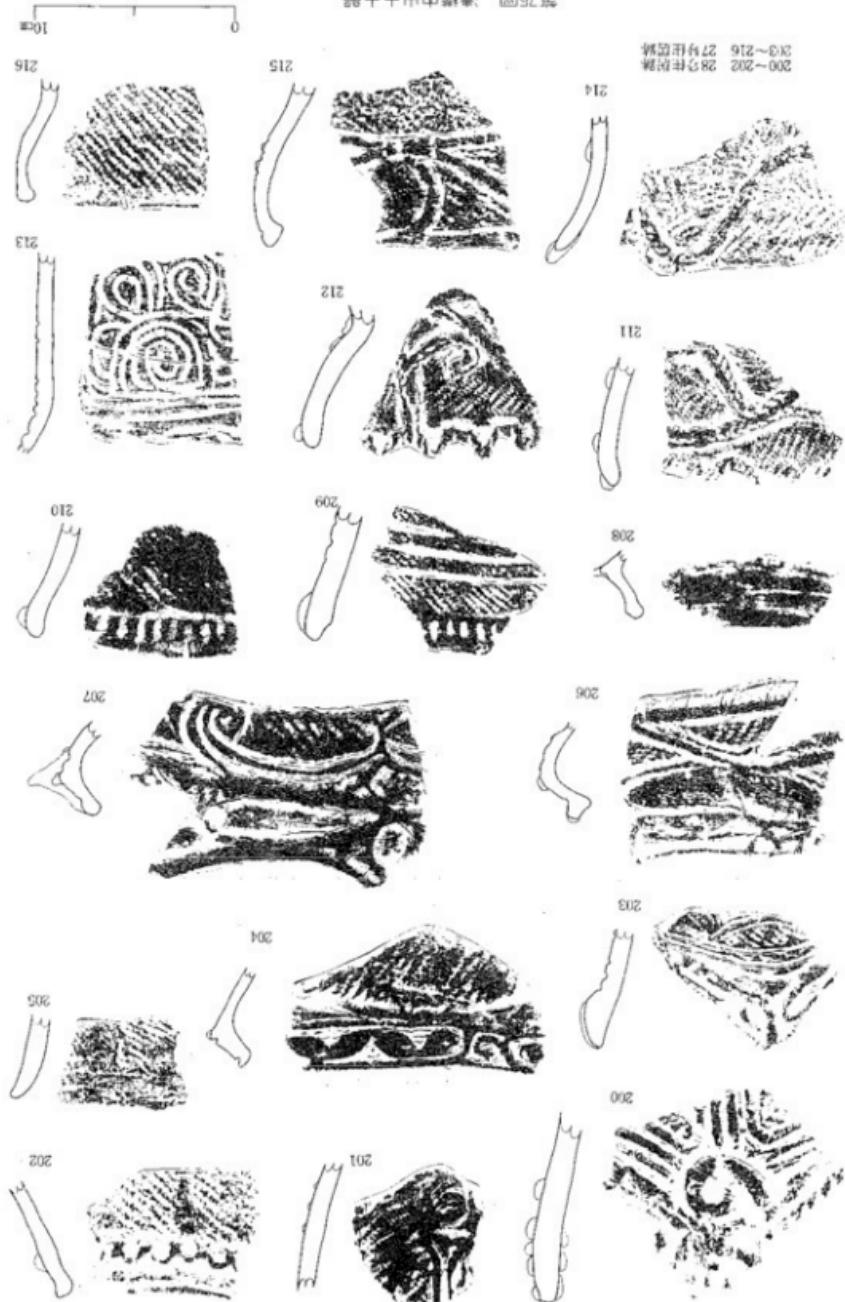


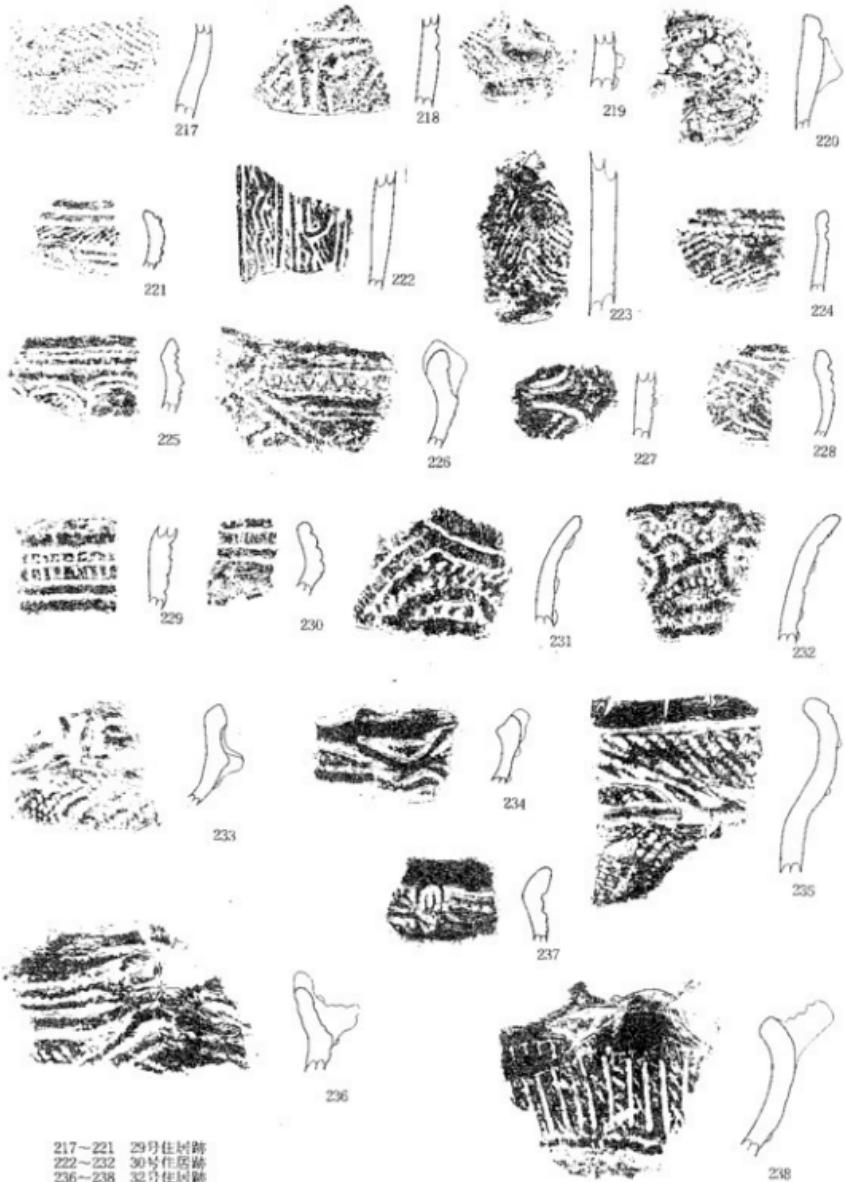
180~185 25号住居跡  
186~197 26号住居跡  
198~199 28号住居跡

第74図 通横内出土土器

0 10cm

第七五圖 遺構內出土土器

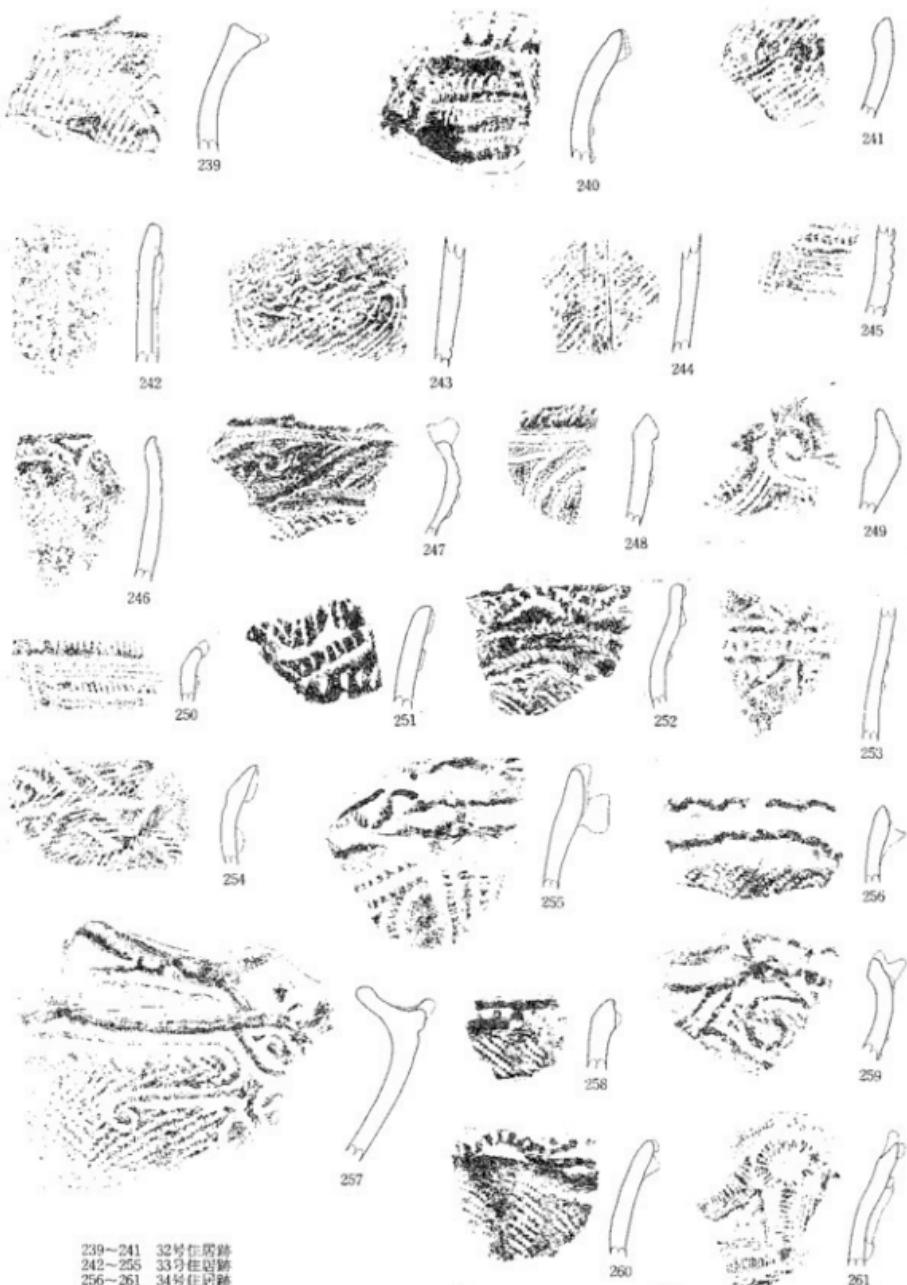




217~221 29号住居跡  
222~232 30号住居跡  
236~238 32号住居跡

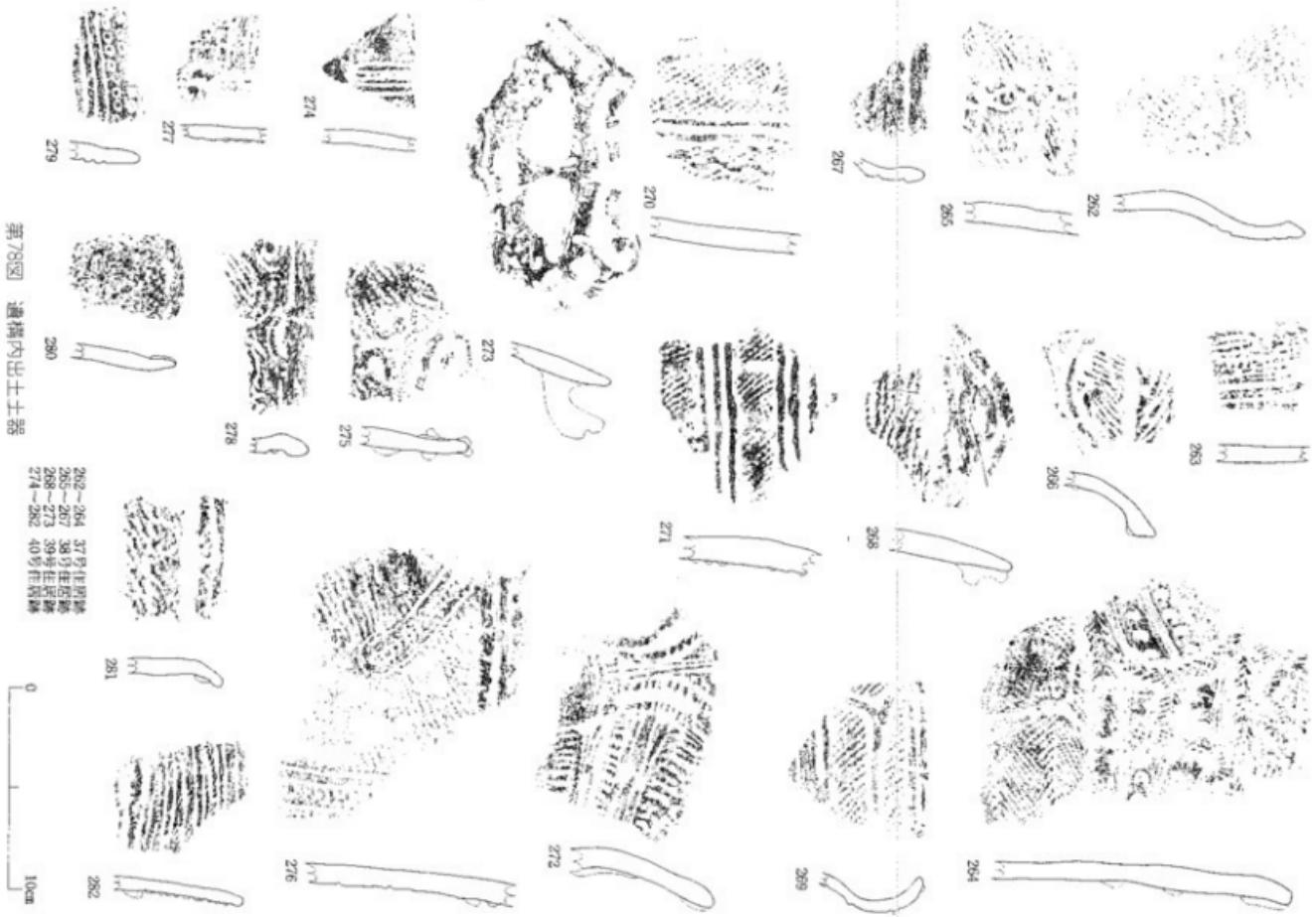
第76図 遺構内出土土器

0 10cm



239~241 32号住居跡  
242~255 33号住居跡  
256~261 34号住居跡

第77図 造構内出土土器



第78図 過構内出土土器



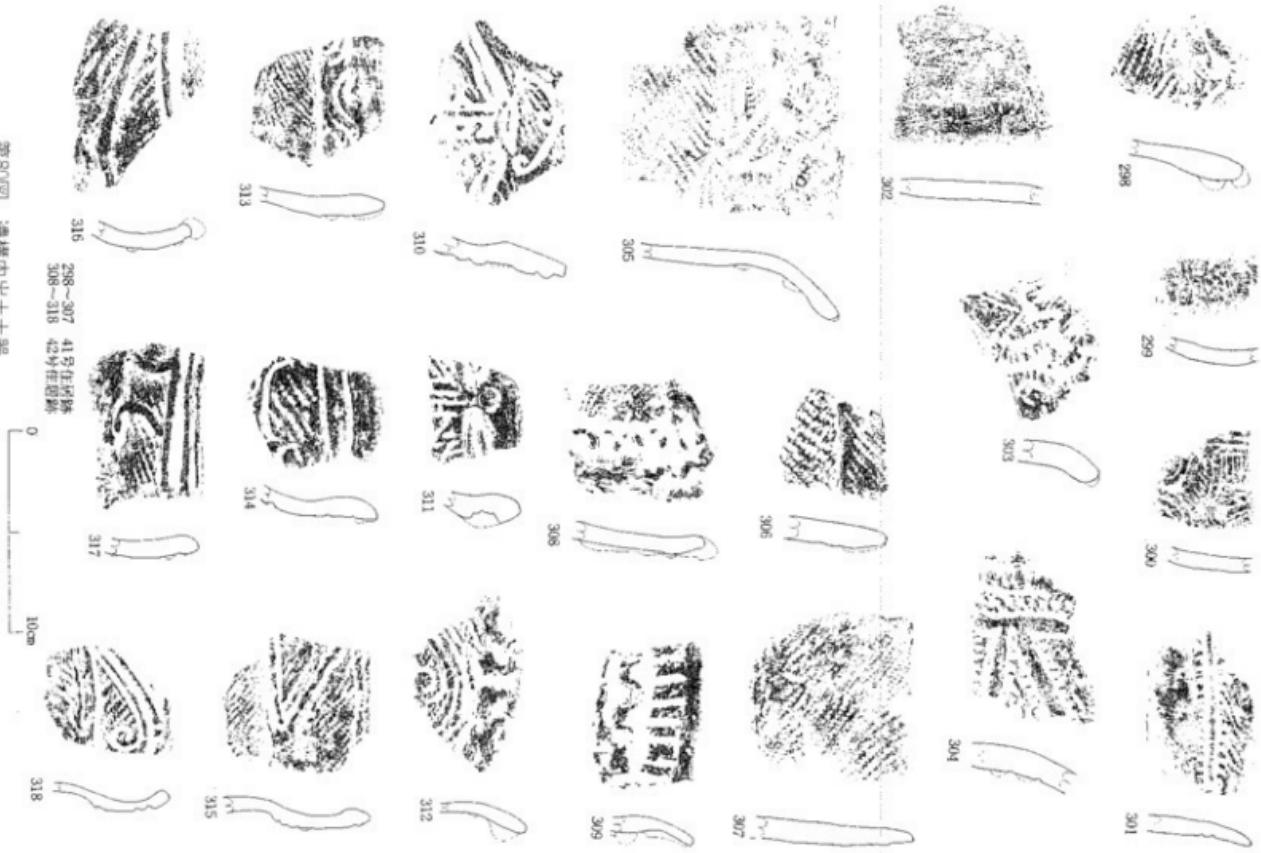
283 40号住居跡  
284~297 41号住居跡

0 10cm

第79図 遺構内出土土器

第80圖 通構內出土土器

— 112 —





319～329 42号住居跡  
330～335 43号住居跡  
336～337 44号住居跡

0

10cm

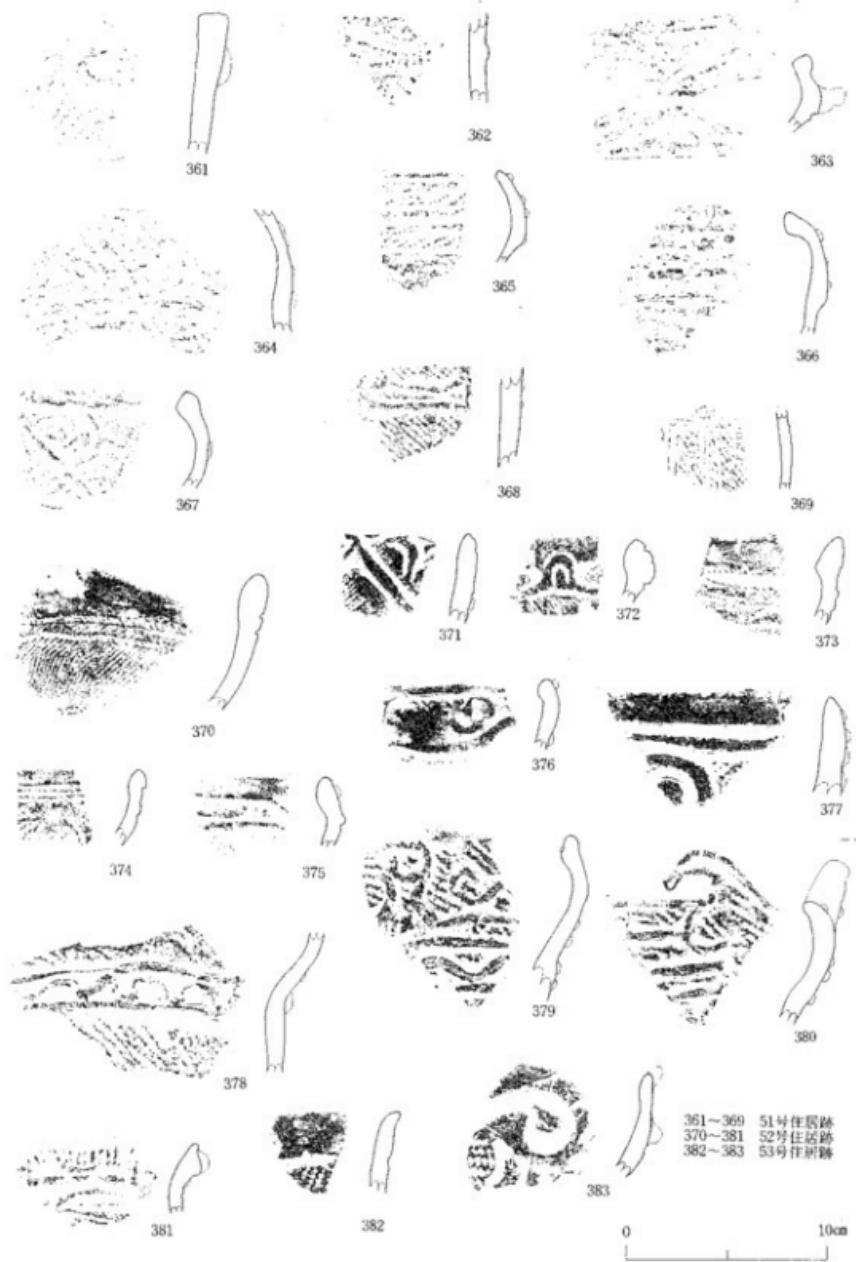
第81図 遺構内出土土器



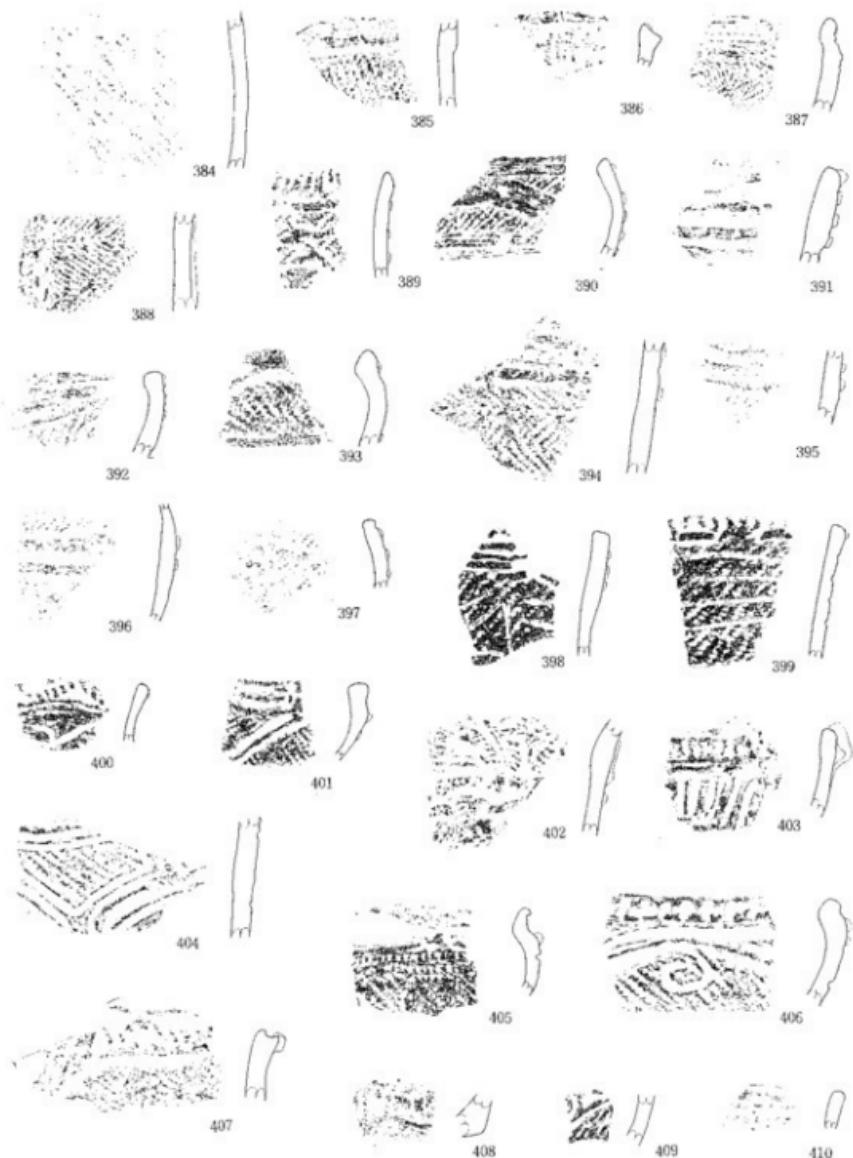
338~345 44号住居跡  
346~348 45号住居跡  
349~351 46号住居跡  
352~355 47号住居跡  
356~358 49号住居跡  
359~360 50号住居跡

0 10cm

第82図 遺構内出土土器



第83図 遺構内出土土器

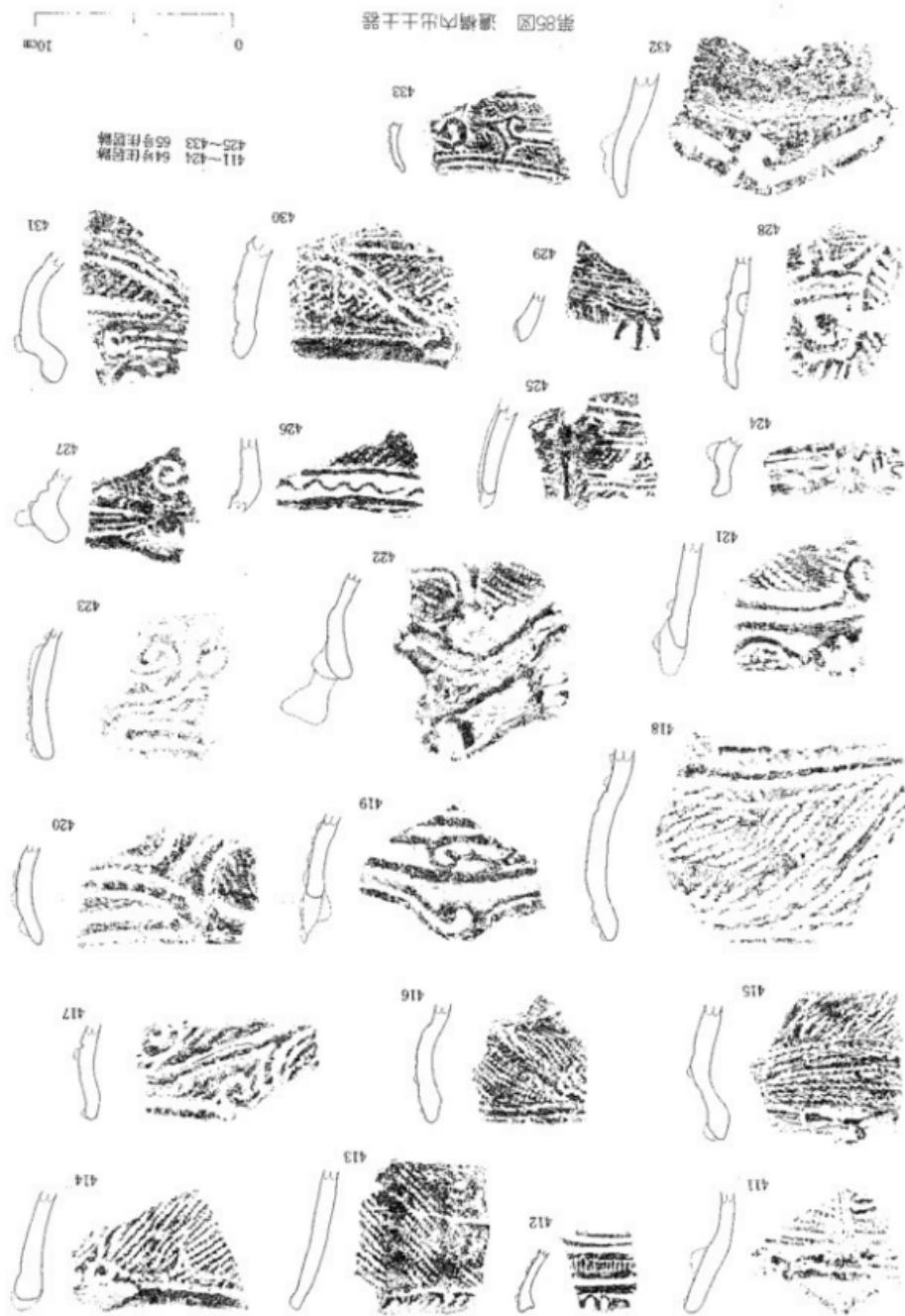


384~385 54号住居跡  
 386~394 57号住居跡  
 395~397 58号住居跡  
 398~401 60号住居跡  
 402~ 61号住居跡  
 403~407 62号住居跡  
 408~410 63号住居跡

第84図 遺構内出土土器

0 10cm

圖365 圖 遺物內出土玉器

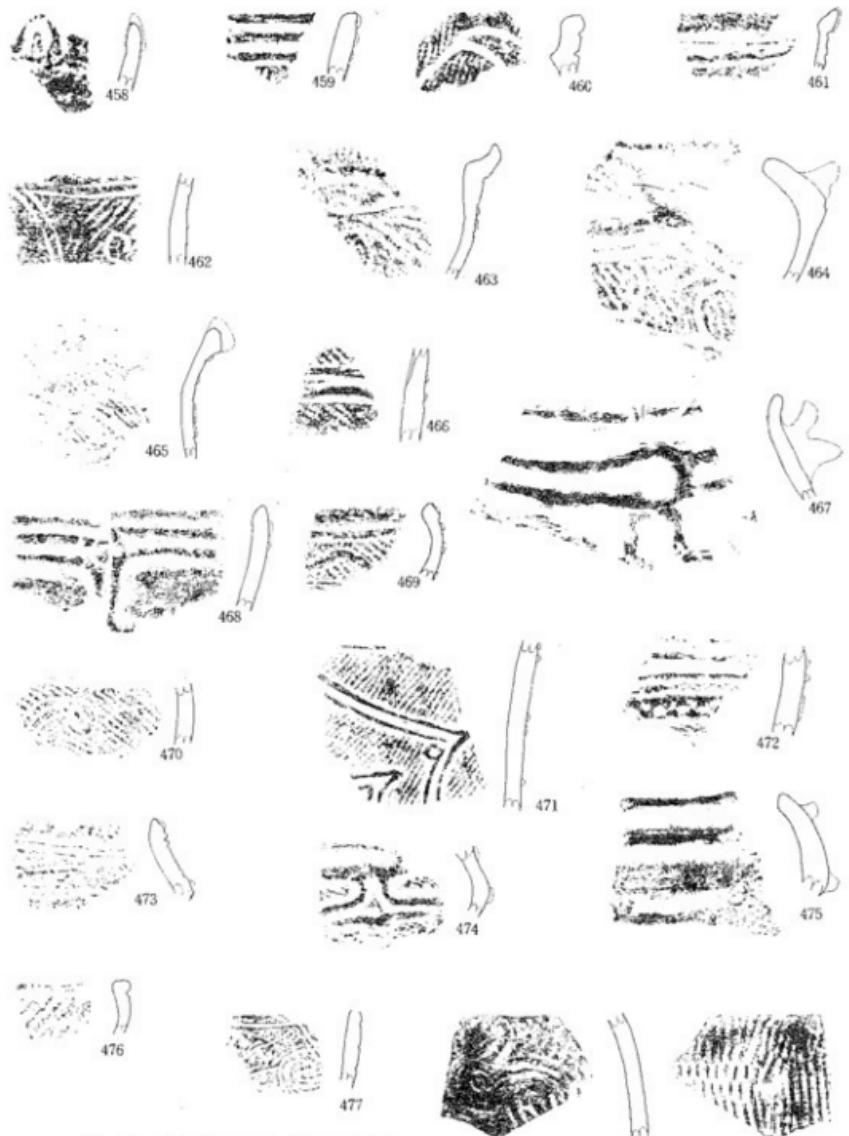




第86図 遺構内出土土器

434~442 66号住居跡  
443~450 67号住居跡  
451~457 68号住居跡

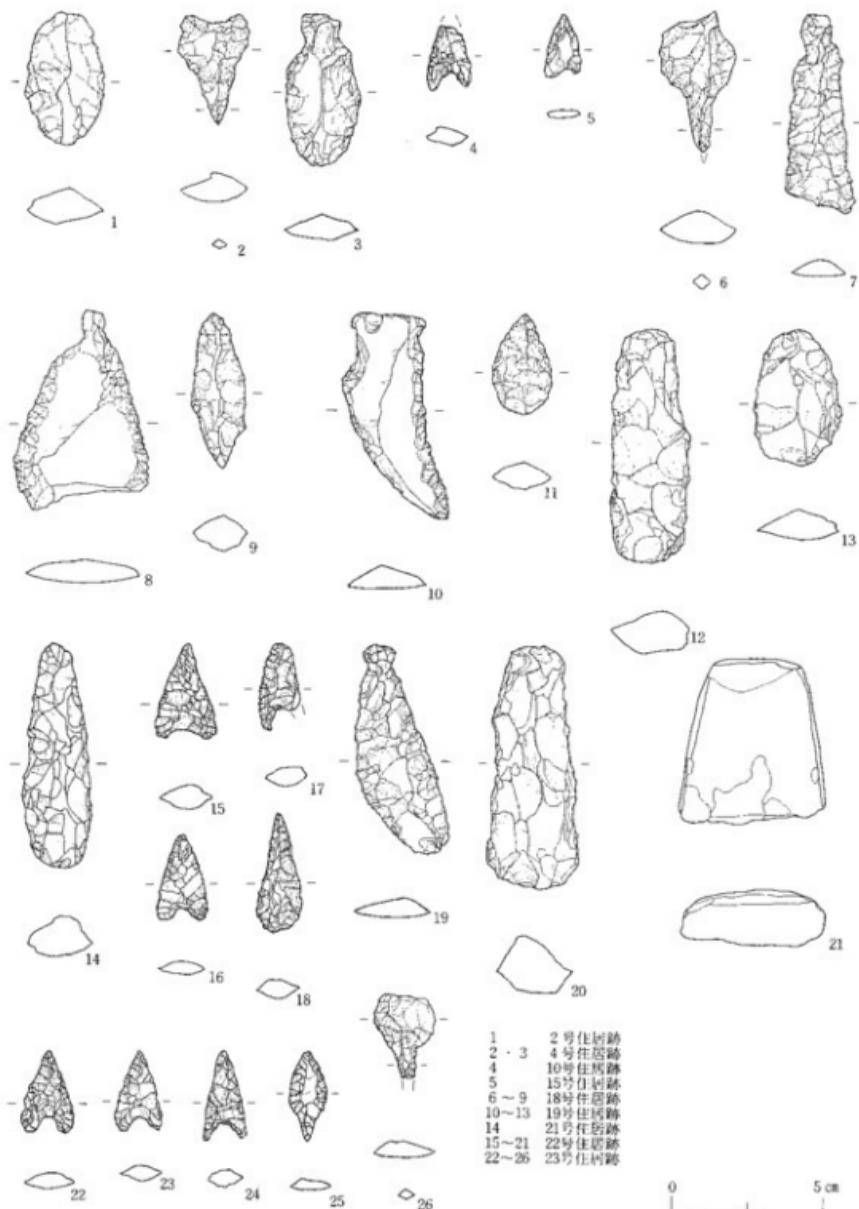
0 10cm



458~462 69号住居跡 468~474 72号住居跡  
463~465 70号住居跡 475 73号住居跡  
466・467 71号住居跡 476・477 78号住居跡  
478 55号住居跡

0 1 10cm

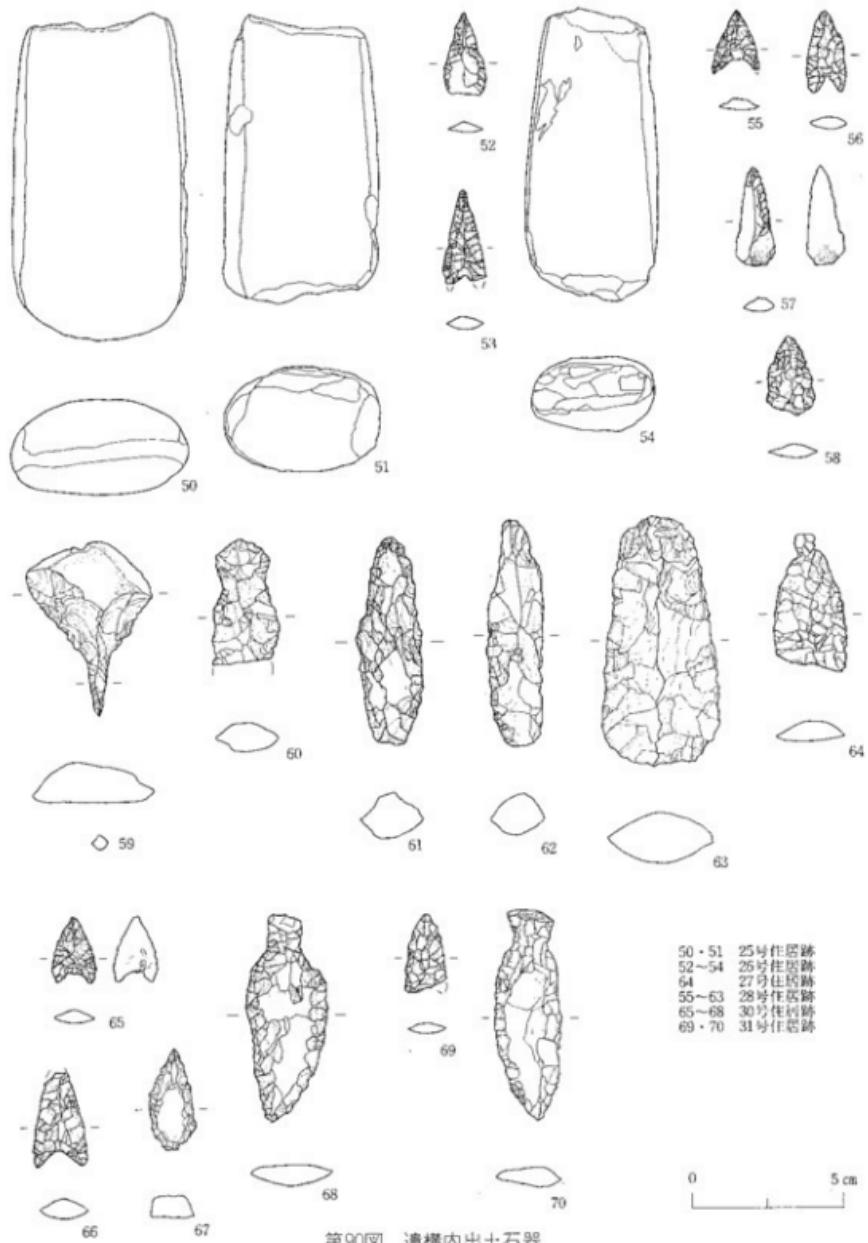
第87図 遺構内出土土器



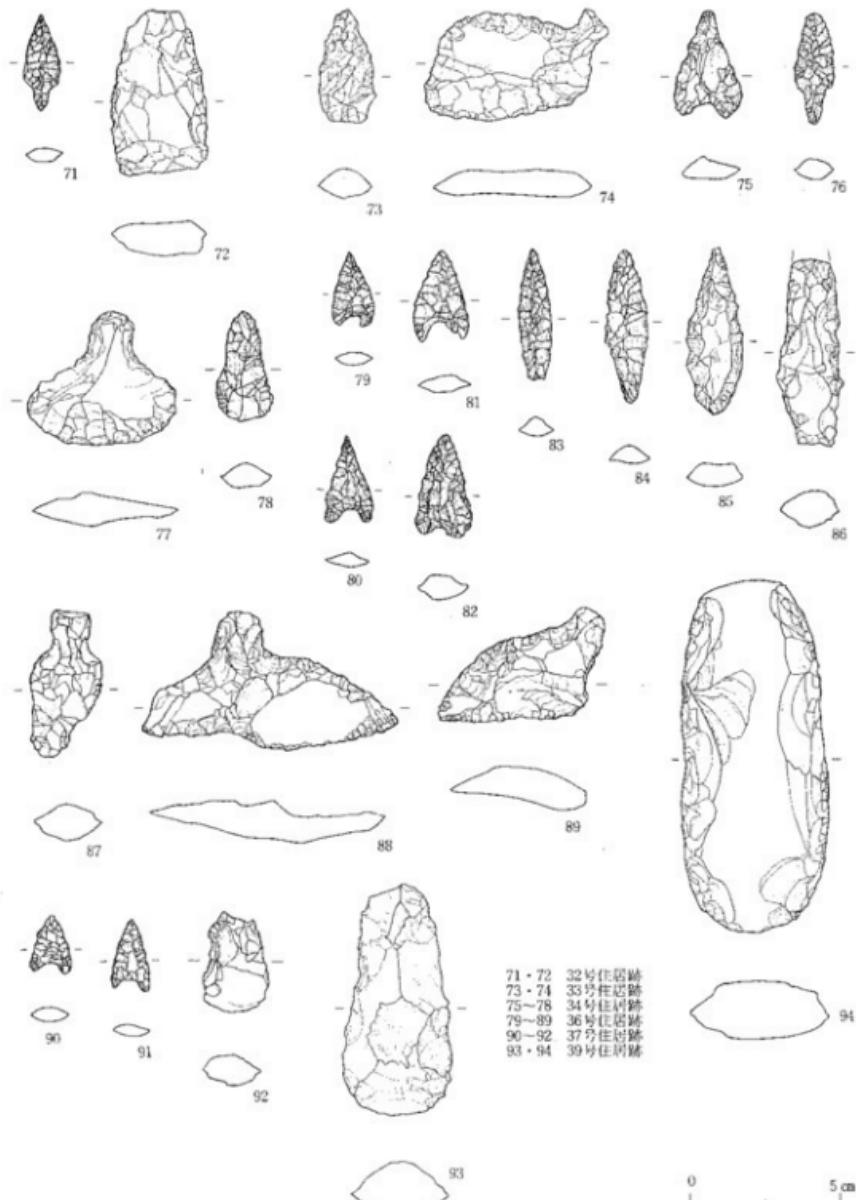
第88図 遺構内出土石器



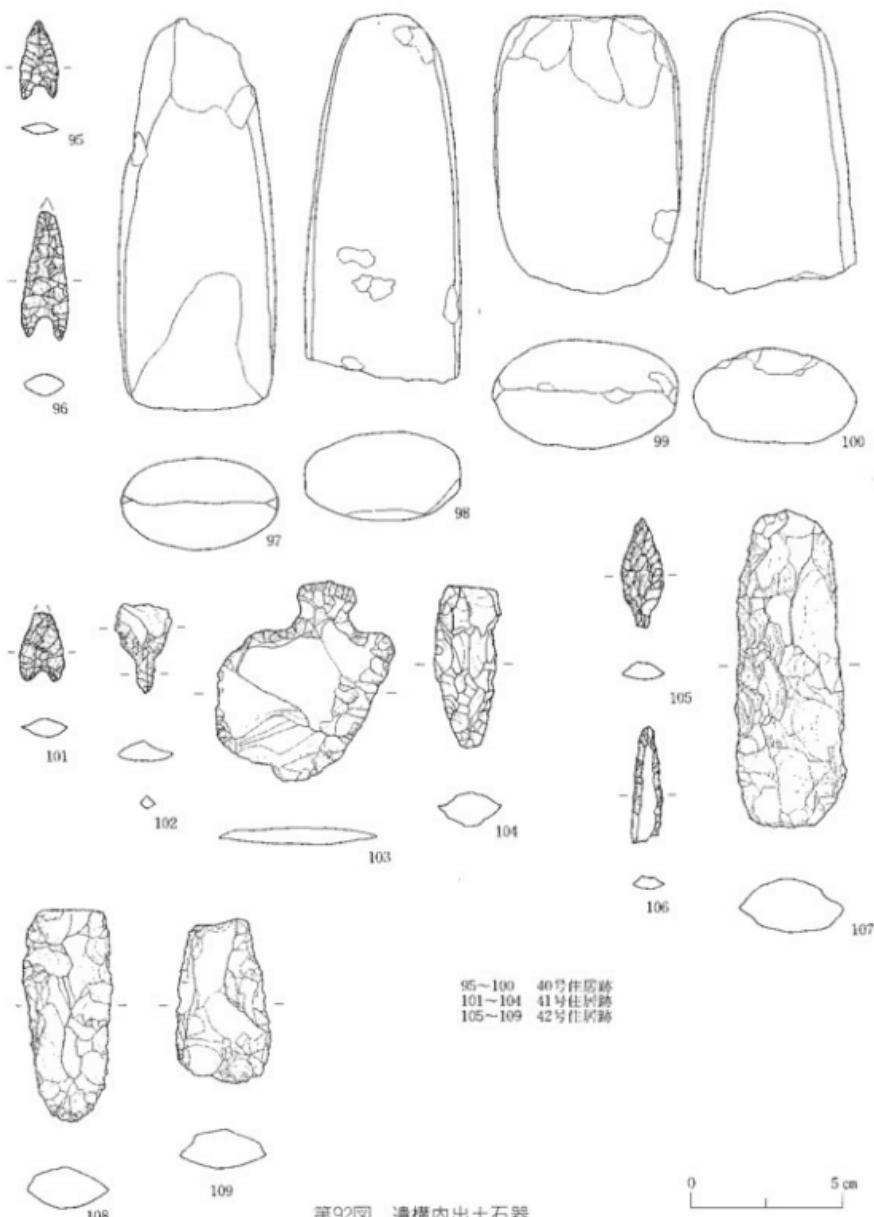
第89図 遺構内出土石器



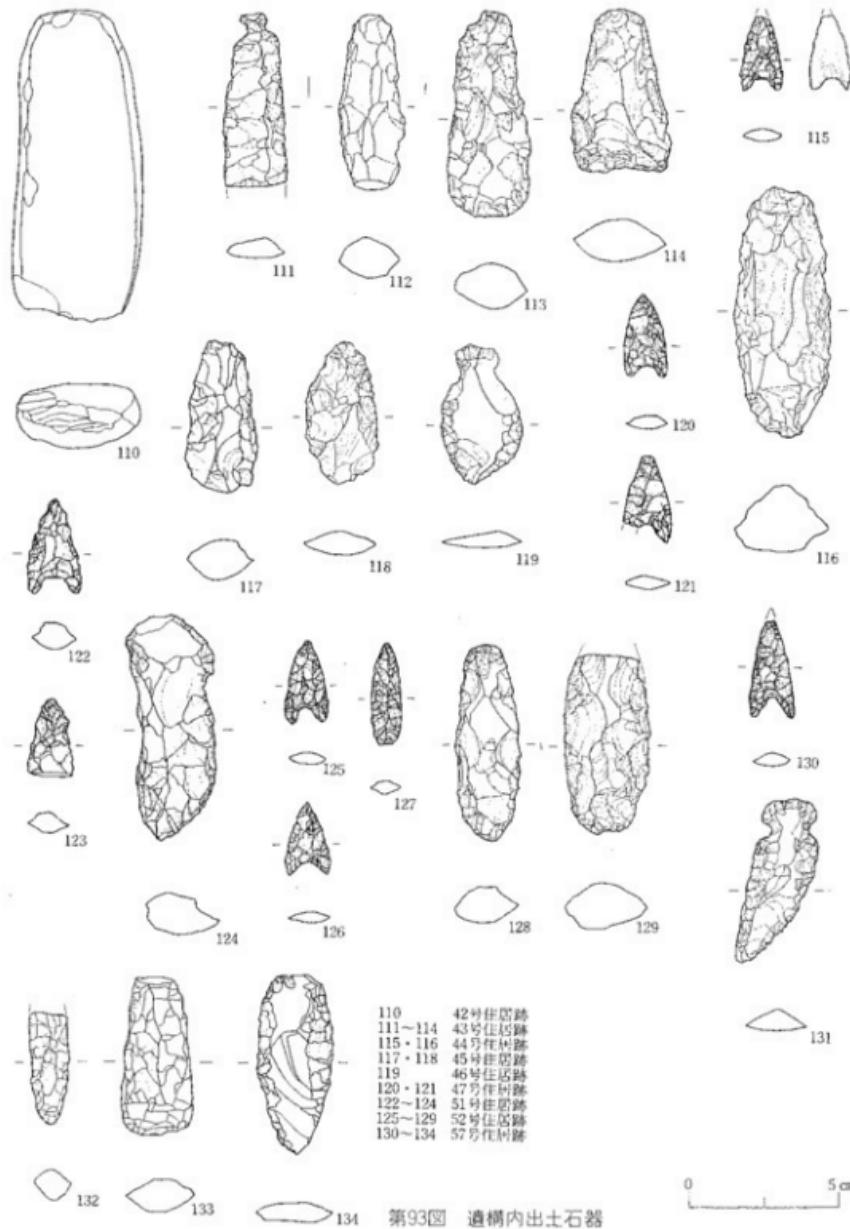
第90図 遺構内出土石器



第91図 遺構内出土石器

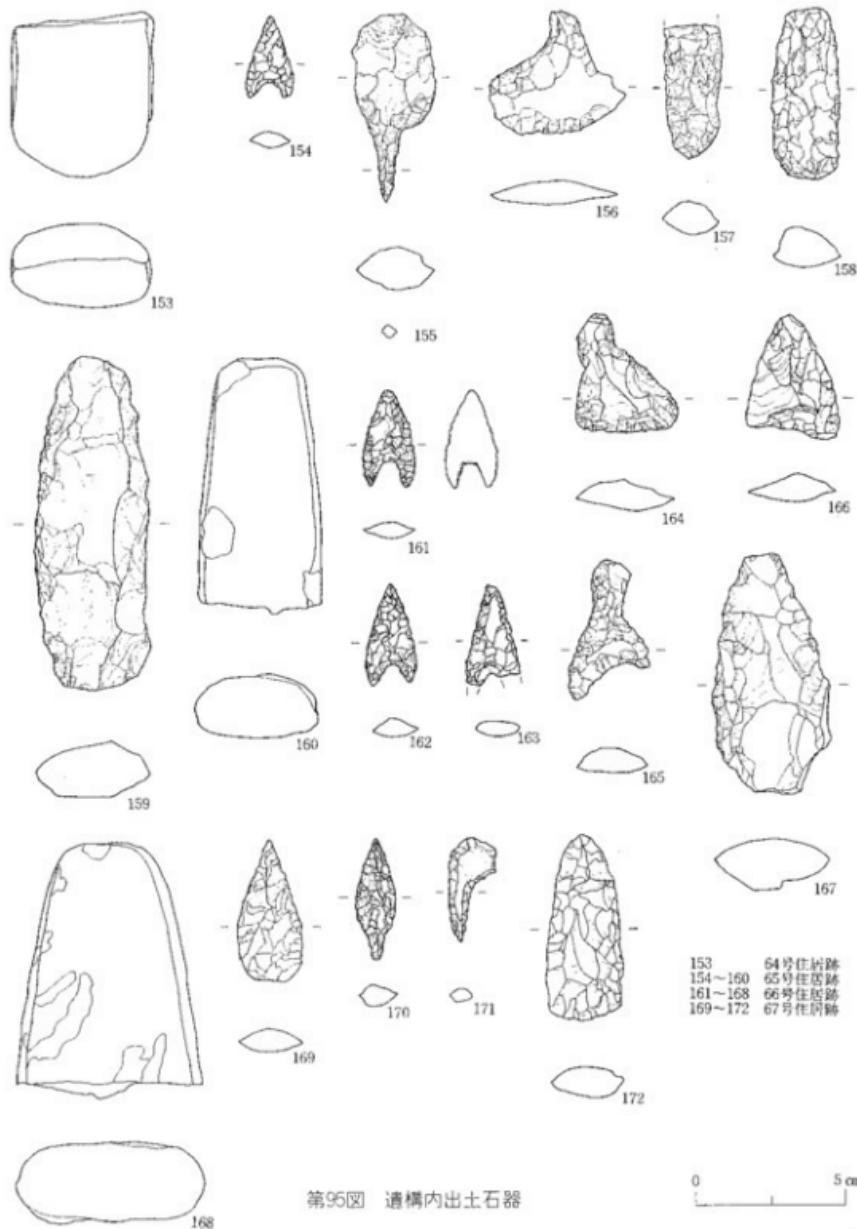


第92図 遺構内出土石器



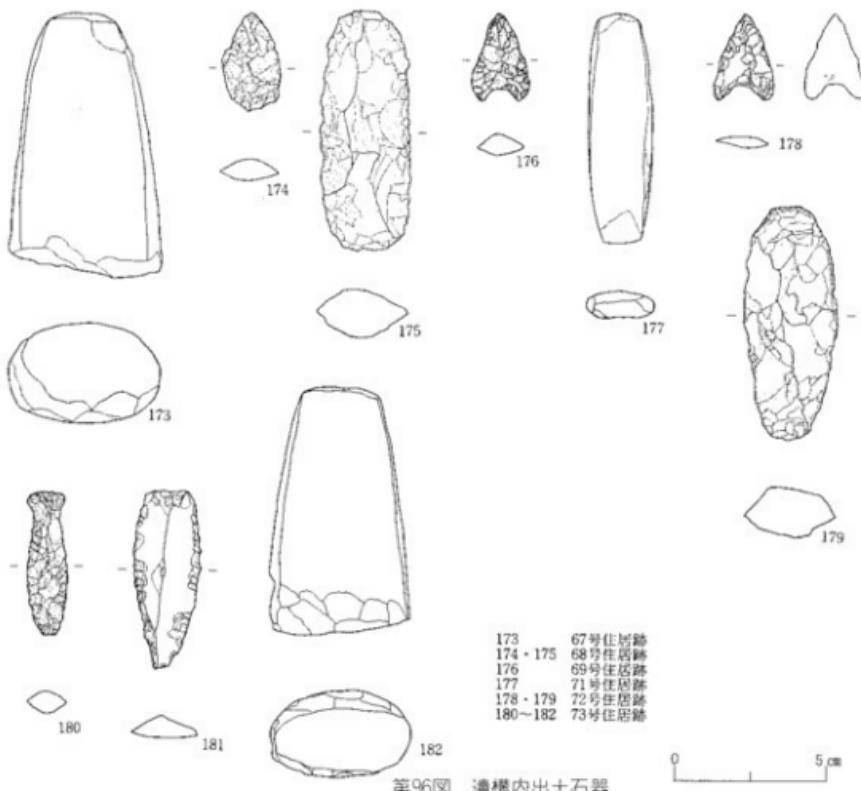
第93図 遺構内出土石器





第95図 遺構内出土石器

0 5 cm



フラスコ状ビット内から多量の遺物が出土した。ここでは完形・半完形品で実測図を載せた土器と石器について記述することにしたい。

#### 1号フラスコ状ビット出土遺物

##### 土器（第125図）

482は覆土から出土した深鉢形土器である。口縁部は欠損する。地文は羽状網文である。

#### 3号フラスコ状ビット出土遺物

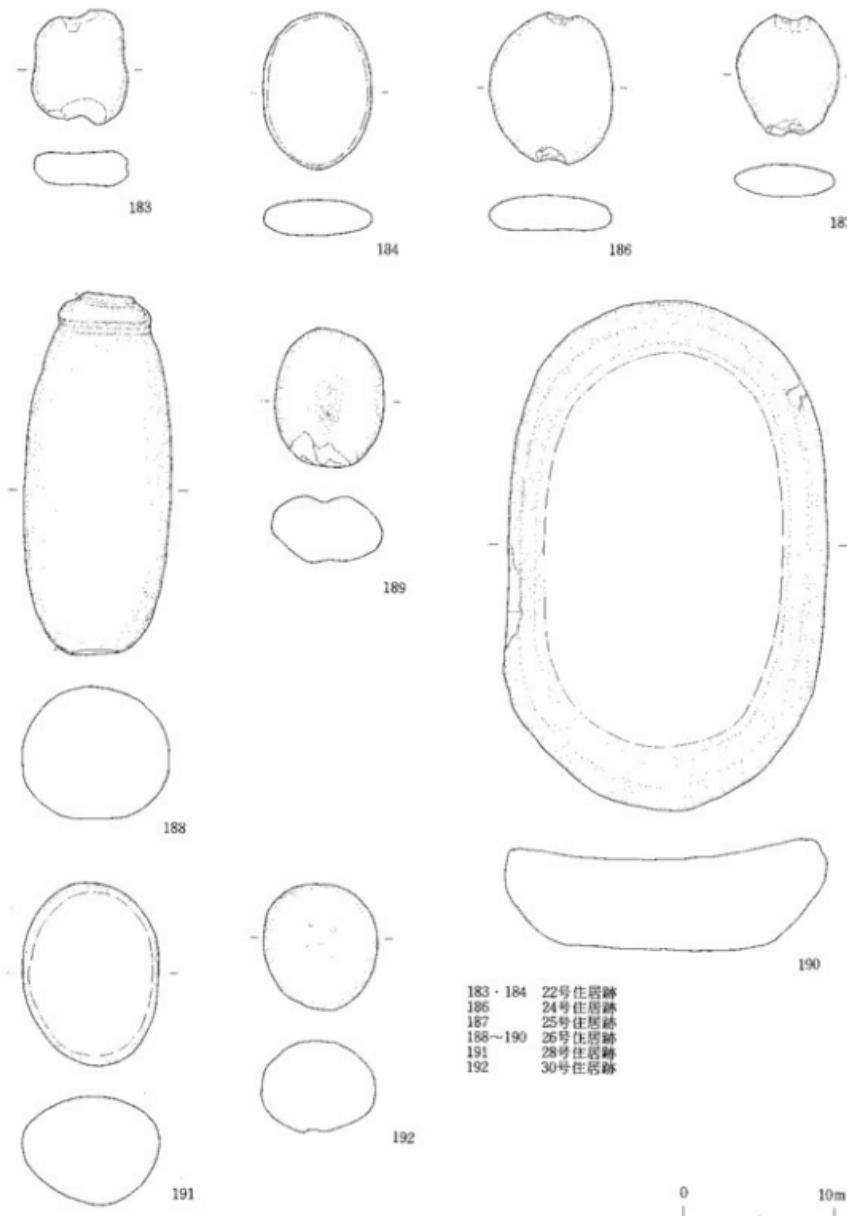
##### 土器（第125図）

483は覆土から出土した口縁部欠損の鉢形土器である。沈線によって文様が施され、胴上半は方形区文、下部は沈線が縱方向に施され練状文がみられる。

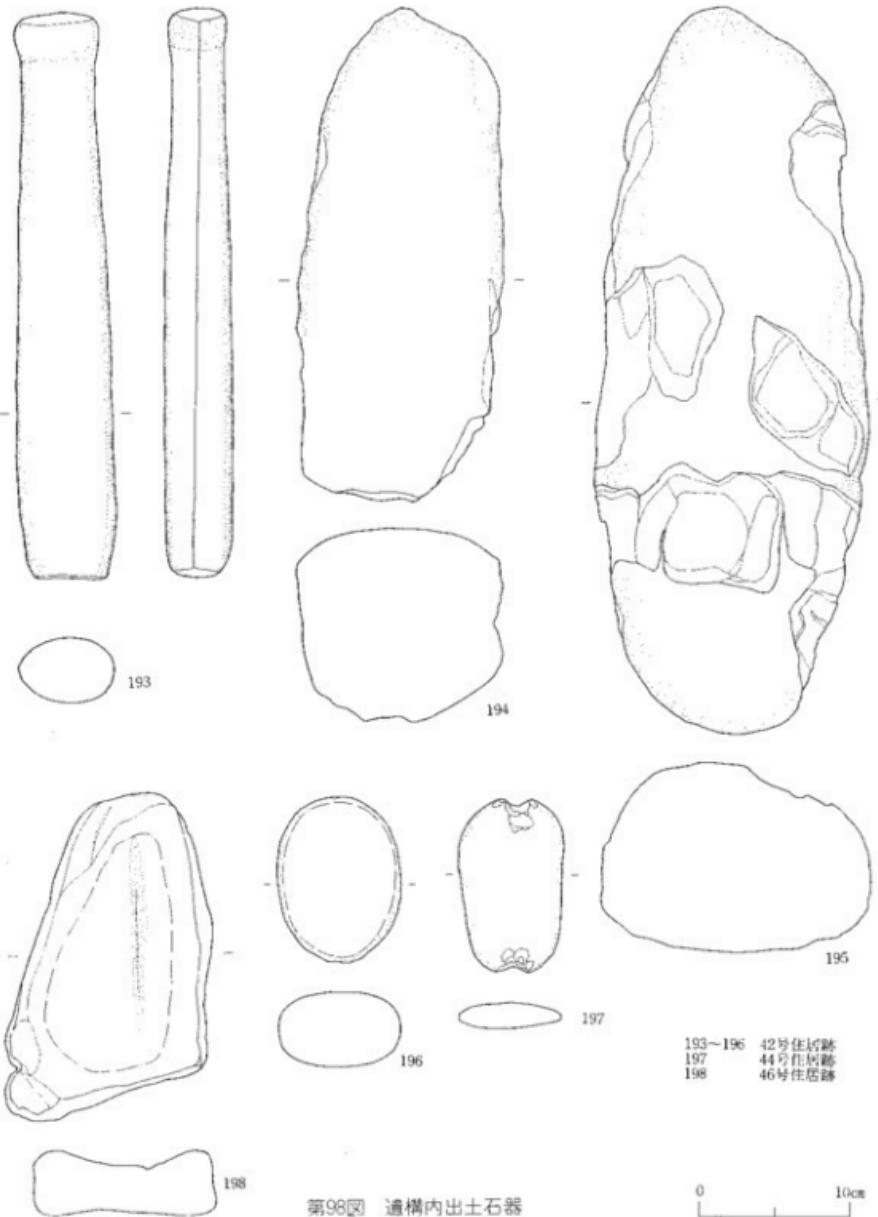
#### 4号フラスコ状ビット出土遺物

##### 土器（第125図）

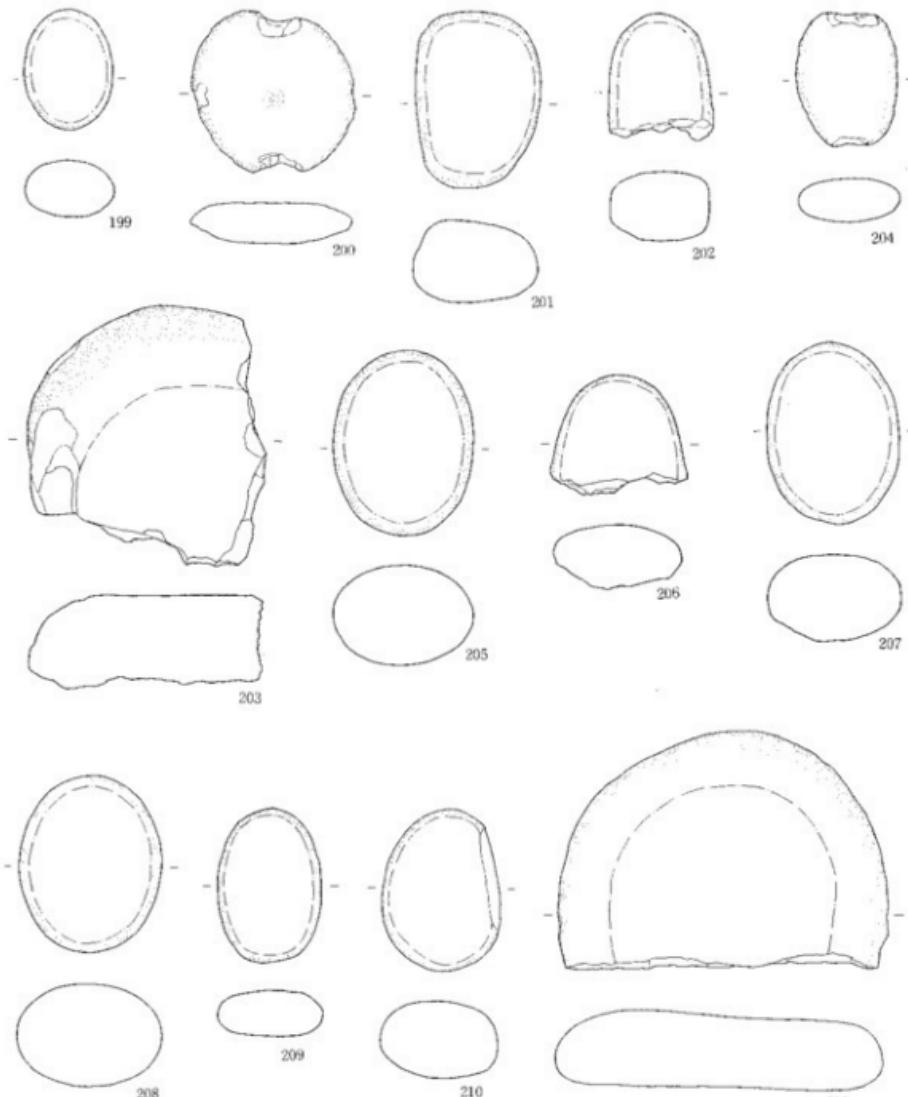
484・485は覆土から出土した。胴部がゆるく膨らみ口縁部が外反する深鉢形土器である。484は



第97図 遺構内出土石器



第98図 通構内出土石器



199	47号住居跡	206	57号住居跡
200	50号住居跡	207	65号住居跡
201~203	51号住居跡	208	66号住居跡
204	52号住居跡	209~210	67号住居跡
205	53号住居跡	211	72号住居跡

0 10cm

第99図 通構内出土石器

口縁部には粘土紐を波状に貼付し、上部に撻糸圧痕文が施される。胴上部は四単位に区画され縦に粘土紐を貼付し、その間を弧状に粘土紐を貼付して連絡させている。粘土紐間に撻糸圧痕文が縦どりされている。

地文は LR (横回転) 単節斜繩文である。485 は口縁部に波状の粘土紐貼付を行ない、上部に撻糸圧痕文が施される。地文は RL (横回転) 単節斜繩文である。

#### 5号 フラスコ状ビット出土遺物

##### 土器 (第 125 図)

底部近くの覆土から出土した。486 は浅鉢形土器である。口縁部に文様帶があり、撻糸圧痕文が施され、六区画に別れている。地文は RL (横回転) 単節斜繩文である。487 は口縁部が外反する深鉢形土器である。四単位の土器で四つの弁状把手があり、橋状突起が付けられている。胴上部まで文様帶があり、粘土紐貼付に撻糸圧痕文が施された隆帯が、下部では平行に、上部では波状・山形に施されている。その間には角形の刺突文を施している。地文は RL (縦回転) 単節斜繩文である。488 はキャリバー形の深鉢形土器である。口縁部文様帶は三区画され、その二ヶ所に縦の撻糸圧痕文と渦巻文が配される。口縁に梢円区画された溝状の無文部があり、その下に山形に隆帯が施され、撻糸圧痕文によって縦どりされている。地文は LR (横回転) 単節斜繩文である。

#### 6号 フラスコ状ビット出土遺物

##### 石器 (第 149 図)

212・213 は覆土から出土した。212 は左側が一部欠損しているが槍先状の石器と思われる。213 はヘラ状石器である。石質は両方とも頁岩である。

#### 7号 フラスコ状ビット出土遺物

##### 土器 (第 125・126 図)

489・490 は覆土から出土した。489 は浅鉢形土器である。四単位に区画されており、四ヶ所に小さな渦文が配される。その間は押圧繩文が長楕円形に施される。3 本目の押圧繩文は中間点で山形を呈している。地文は LR (縦回転) 単節斜繩文である。490 は胴部が膨らみ口縁部が外反する深鉢形土器である。文様帶は胴上部に施される。撻糸圧痕文が施された粘土紐貼付の隆帯文が波状・平行に施される。地文は RL (縦回転) 単節斜繩文である。

##### 石器 (第 149 図)

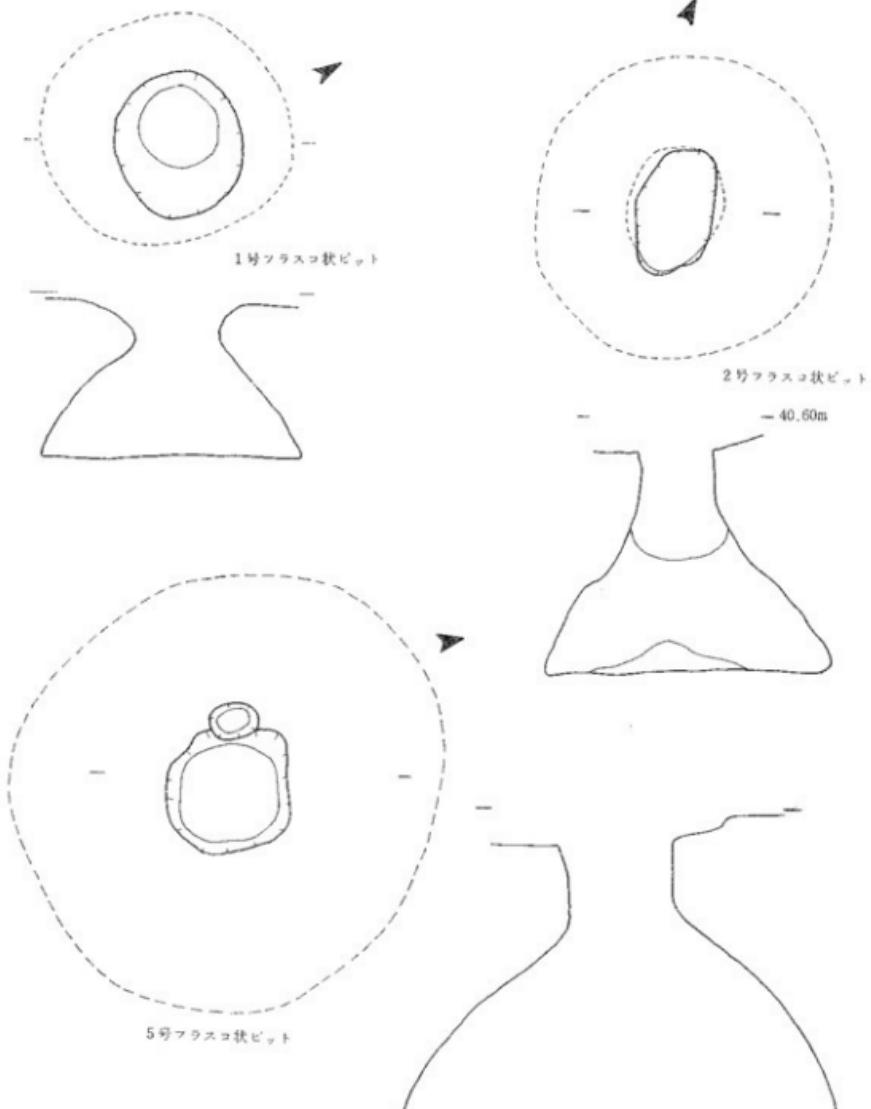
覆土から出土した。214 は無茎石鏃、215 は両面加工のヘラ状石器である。いずれも石質は頁岩である。

#### 8号 フラスコ状ビット出土遺物

##### 石器 (第 149 図)

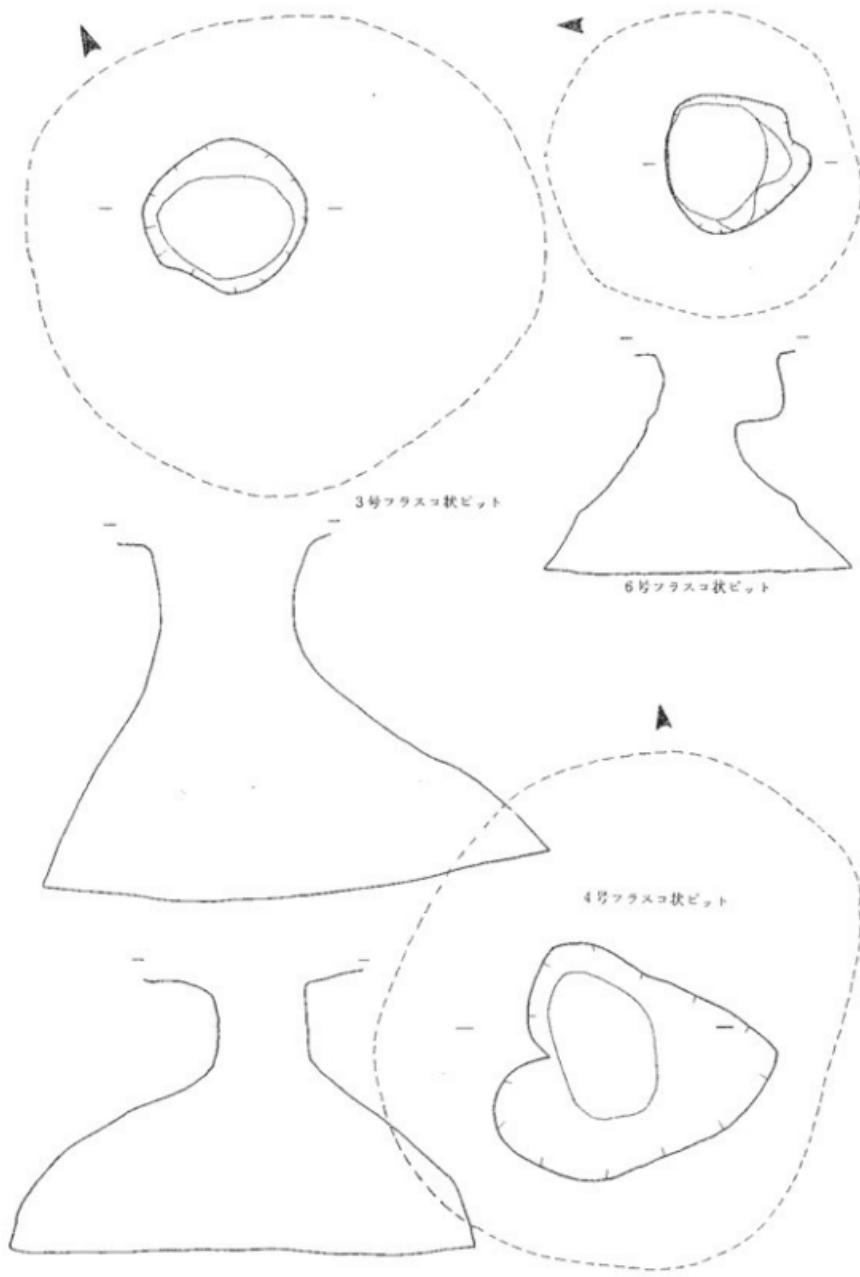
216 は覆土から出土した。両面加工で、先端刃部が欠損するヘラ状石器で、石質は頁岩である。

#### 9号 フラスコ状ビット出土遺物



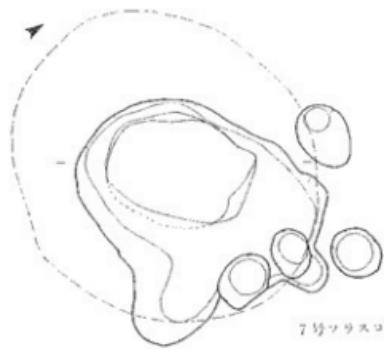
0 1m

第100図 フラスコ状ピット

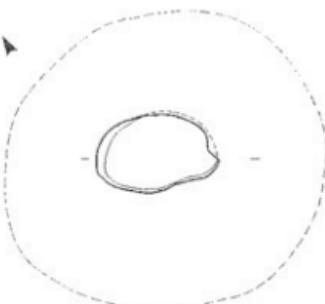


第101図 フラスコ状ピット

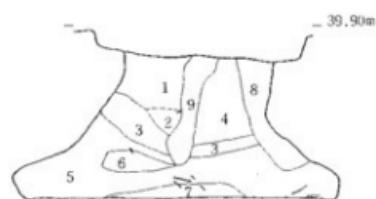
0 1 m



7号 フラスコ状ビット

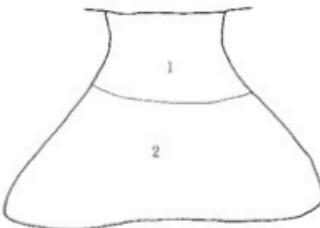


8号 フラスコ状ビット



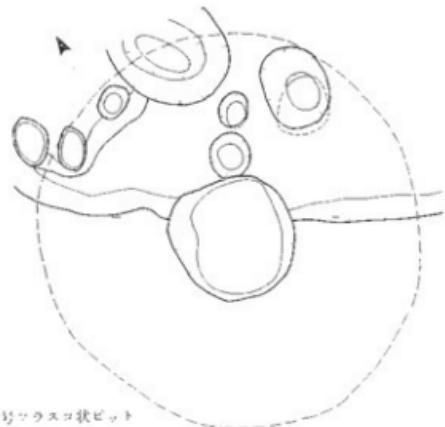
-39.90m

図14 第1層 咀土、炭化物、ゾーム粒子混入  
第2層 明褐色土、炭化物  
第3層 明褐色土、炭化物、ゾーム粒子混入  
第4層 明褐色土、炭化物、ゾーム粒子混入  
第5層 明褐色土、炭化物、ゾーム粒子混入  
第6層 明褐色土、炭化物、ゾーム粒子混入  
第7層 明褐色土、炭化物、ゾーム粒子混入  
第8層 明褐色土、炭化物  
第9層 明褐色土、炭化物  
ゾーム粒子混入

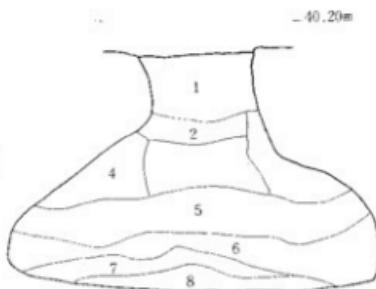


-40.10m

図14 第1層 明褐色土、炭化物混入  
第2層 深褐色土、炭化物、灰白色粘土ゾーム粒子混入



9号 フラスコ状ビット

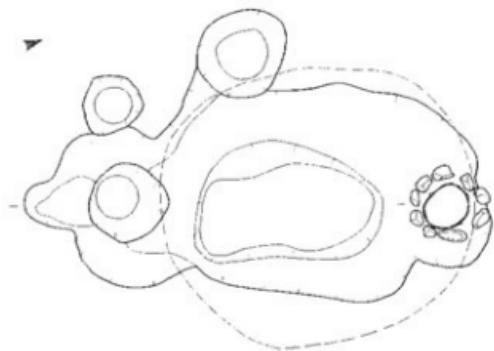


-40.20m

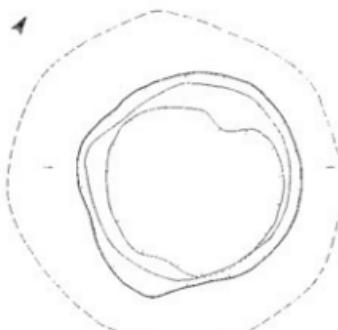
図14 第1層 明褐色土  
第2層 灰褐色土、炭化物無し  
第3層 明褐色土、炭化物混入  
第4層 明褐色土、炭化物混入  
第5層 明褐色土、ゾーム粒子混入  
第6層 明褐色土、ゾーム粒子混入  
第7層 明褐色土、炭化物多量混入  
第8層 深褐色土、小塊を有す含む



第102図 フラスコ状ビット



10号 フラスコ状ピット  
— 40.40m



11号 フラスコ状ピット  
— 40.50m

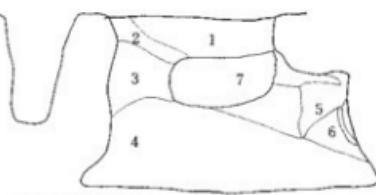


図11号  
1層 地上上、炭化物混入  
2層 暗褐色土  
3層 黄褐色土、明褐色土混入  
4層 黄褐色土  
5層 黄褐色土  
6層 黄褐色土  
7層 明褐色土 (明黃褐色土)

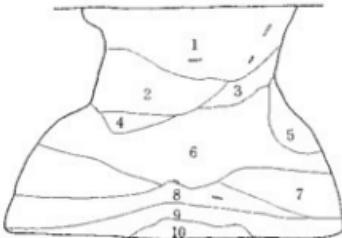
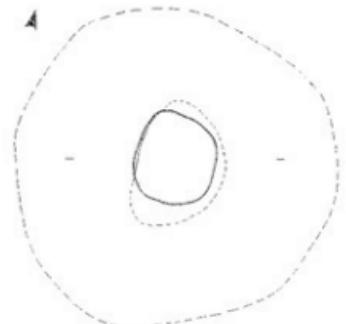


図12号  
1層 地上上、炭化物、油土、褐色色土、コロコロ混入  
2層 暗褐色土、油土、油土  
3層 黄褐色土、炭化物混入  
4層 黄褐色土、油土  
5層 黄褐色土、油土  
6層 黄褐色土、油土、油土  
7層 黄褐色土、明褐色色土多量混入  
8層 黄褐色土、油土  
9層 黄褐色土、油土  
10層 明黄褐色土、明褐色土混入



14号 フラスコ状ピット

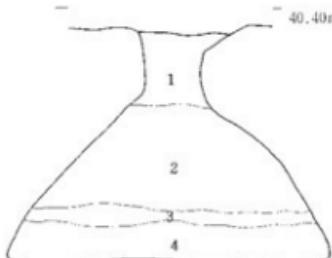


図13号  
1層 明褐色土、炭化物混入  
2層 黄褐色土、炭化物、明褐色色土、コロコロ混入  
3層 明褐色土、炭化物多量混入  
4層 黄褐色土、炭化物混入

0 1 m

第103図 フラスコ状ピット

#### 石器（第 149 図）

217・218 は覆土から出土した。上部が欠損する磨製石斧である。

#### 10 号フラスコ状ビット出土遺物

##### 土器（第 126 図）

覆土から出土した。491 は胴部が若干膨らみ、口縁部が外反する深鉢形土器である。口縁部と胴上部には粘土紐貼付の隆帯がまわり、上部に撫糸圧痕文が施される。また等間隔に二本一組の粘土紐貼付が継ぎに施されている。頸部には撫糸圧痕文と粘土紐貼付の隆帯が施され上下を連絡している。胴部には S 字状に二列縄文が横走する。地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。492 は二ヶ所に山形口縁を有する深鉢形土器である。半截竹管状工具内面を使用して施される半降起縫文と粘土紐貼付の隆帯によって文様が展開される。口縁部、頸部には二条の半降起縫文がまわり、頸部には二単位づつ四ヶ所に長・短の粘土紐貼付が施される。胴部には最初竹管状工具により細かい格子目文が施され、その後半降起縫文が L 字・ランク状に展開する。北陸系の土器である。493 は複合口縁を有する深鉢形土器で一ヶ所が山形口縁を呈する。その頂部に粘土紐を「P」状に貼付している。地文は RL（縦回転）単節斜縄文である。494 は胴部が膨らむ深鉢形土器である。地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。

#### 11 号フラスコ状ビット出土遺物

##### 土器（第 127 図）

覆土から出土した。495 は口縁部が外反する深鉢形土器の破片である。弁状把手を有する。口唇部には撫糸圧痕文が施される。頸部、口縁部は粘土紐貼付の隆帯文が施され、上部には撫糸圧痕文が付される。隆帯間に撫糸圧痕文が波状に施されている。496 は上半部欠損の深鉢形土器である。地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。

##### 石器（第 149 図）

219～223 は覆土から出土した。219・220 は両面加工で先端部に刃部のあるヘラ状石器である。221 は側縁に刃部のある搔器状の石器と思われる。222・223 は刃部欠損の磨製石斧である。

##### 土製品（第 161 図）

22 は覆土から出土した土偶である。頭・手は欠損する。腹部が非常に膨らんでおり、両足は非常にリアルに作られている。

#### 14 号フラスコ状ビット出土遺物

##### 石器（第 149・151 図）

覆土から出土した。224 は基部に対して刃部が直角に近くなるヘラ状石器と思われる。225 は小型のヘラ状石器である。241・242 は磨石である。

##### 土製品（第 162 図）

27 は覆土から出土した土偶の頭部である。沈線によって文様が描かれている。

## 15号フラスコ状ビット出土遺物

### 土器（第127図）

498は覆土から出土した。キャリバー形を呈する深鉢形土器である。四単位の土器で波状口縁である。各頂部に半截竹管状工具内面による半隆起線文を描き、上部に刻目文を施している。頸部には一条の粘土紐貼付の隆帯がめぐり、同様に刻目文が施される。地文はLR（継回転）単節斜縫文である。

### 石器（第149・151図）

226・243～248は覆土から出土した。226は両面加工のヘラ状石器である。243は両端を打ち欠いた石鎌である。244は片面使用のくぼみ石、245～248は磨石である。

### 土製品（第160図）

11は覆土から出土した三角形土製品である。中央部、三角形の各頂部に粘土を貼付している。全面に規則的に刺突文が配される。

## 16号フラスコ状ビット出土遺物

### 石器（第149図）

227は覆土から出土した。刃部が欠損するヘラ状石器である。石質は頁岩である。

## 17号フラスコ状ビット出土遺物

### 土器（第127・128図）

覆土から出土した。499は浅鉢形土器で、頸部は内反し、口縁は短かく外反している。四単位の土器と思われ、頸部に一对の押圧縫文を施す突起を有し、口縁部から粘土紐貼付の隆帯で連絡している。胴部は上部に粘土紐貼付の隆帯が波状にまわり、四ヶ所からは縦に垂下させ、中間で「+」字状に施される。隆帯に沿ってヘラ状工具による沈線で縁どられている。地文はLR（継回転）単節斜縫文である。500はキャリバー形を呈する深鉢形土器である。四単位の土器で口縁部に文様帶がある。頸部の四ヶ所に瘤状の突起を貼付し、その間を粘土紐貼付の隆帯で連絡させている。口縁部は同様の隆帯を大きく波状に施しており、押圧縫文で縁どりをしている。口縁にも押圧縫文が施される。地文は口縁部がLR（横回転）胴部がLR（継回転）単節斜縫文である。501は胴部が膨らみ、頸部から口縁部にかけて外反し、口縁が直立する深鉢形土器の破片である。口縁部は粘土紐貼付の隆帯を波状にめぐらし、上部に刻目文を施している。胴部は粘土紐貼付の隆帯で文様帶を区画しその内側にヘラ状工具による沈線文で渦文などの文様が施されている。地文はLR（継回転）単節斜縫文である。

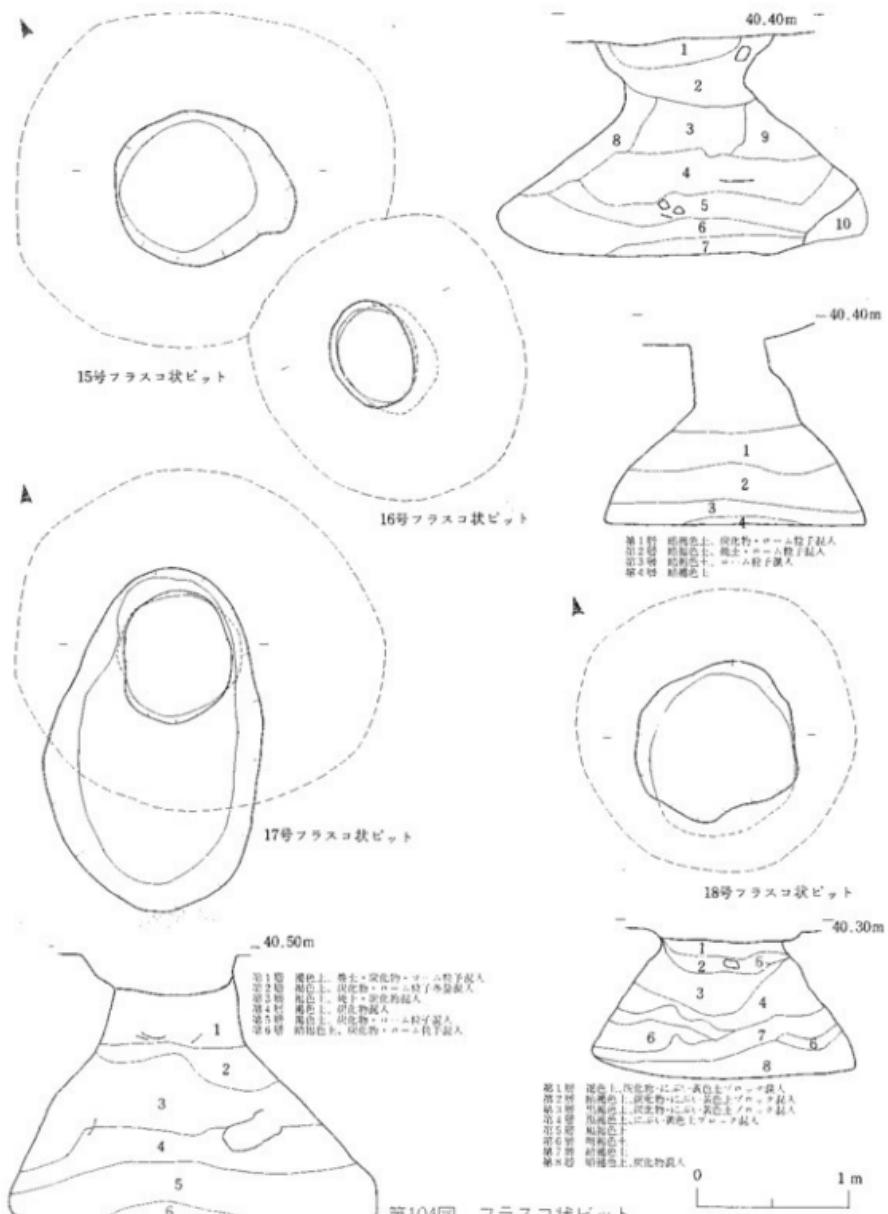
### 石器（第150図）

覆土から出土した。228は無茎の石鎌で抉りが深く、先端は細く鋭角になっている。229は両面加工のヘラ状石器である。いずれも石質は頁岩である。

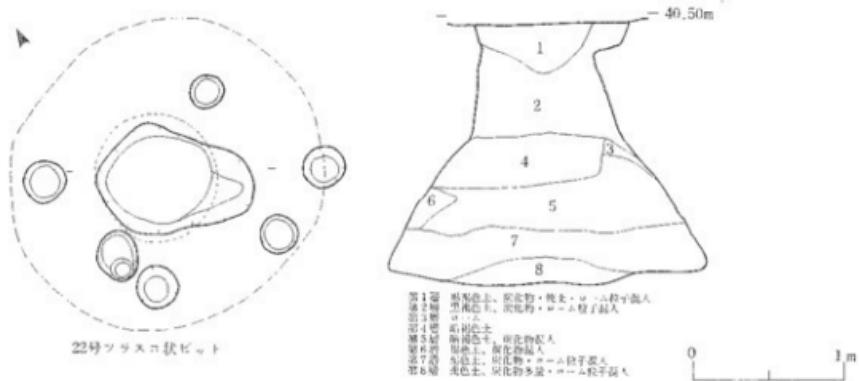
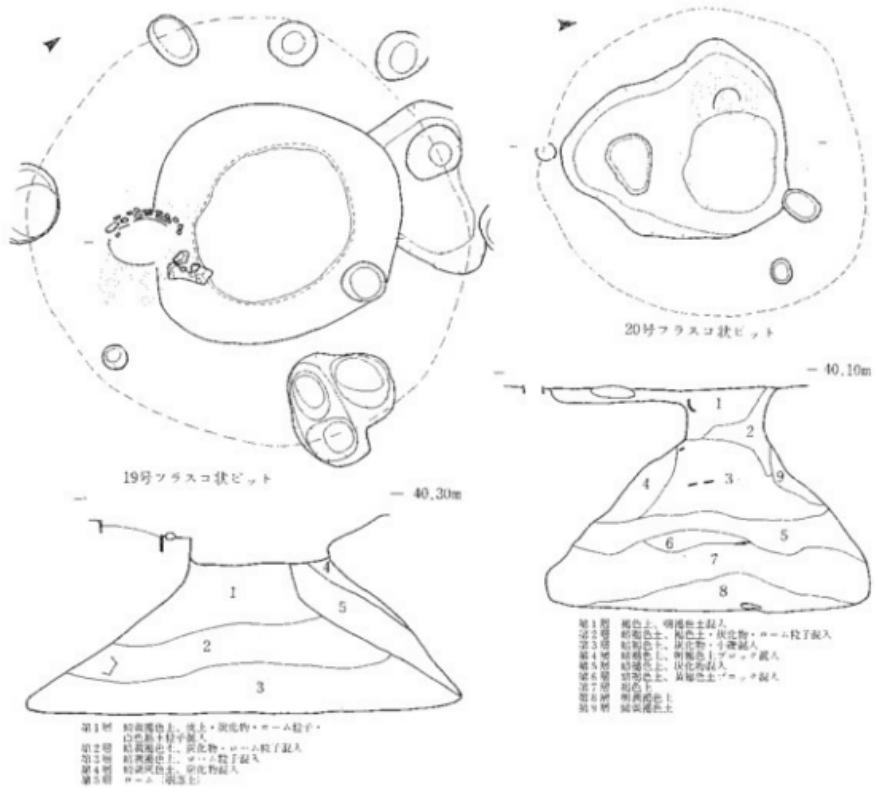
## 19号フラスコ状ビット出土遺物

フラスコ状ピット一覧表

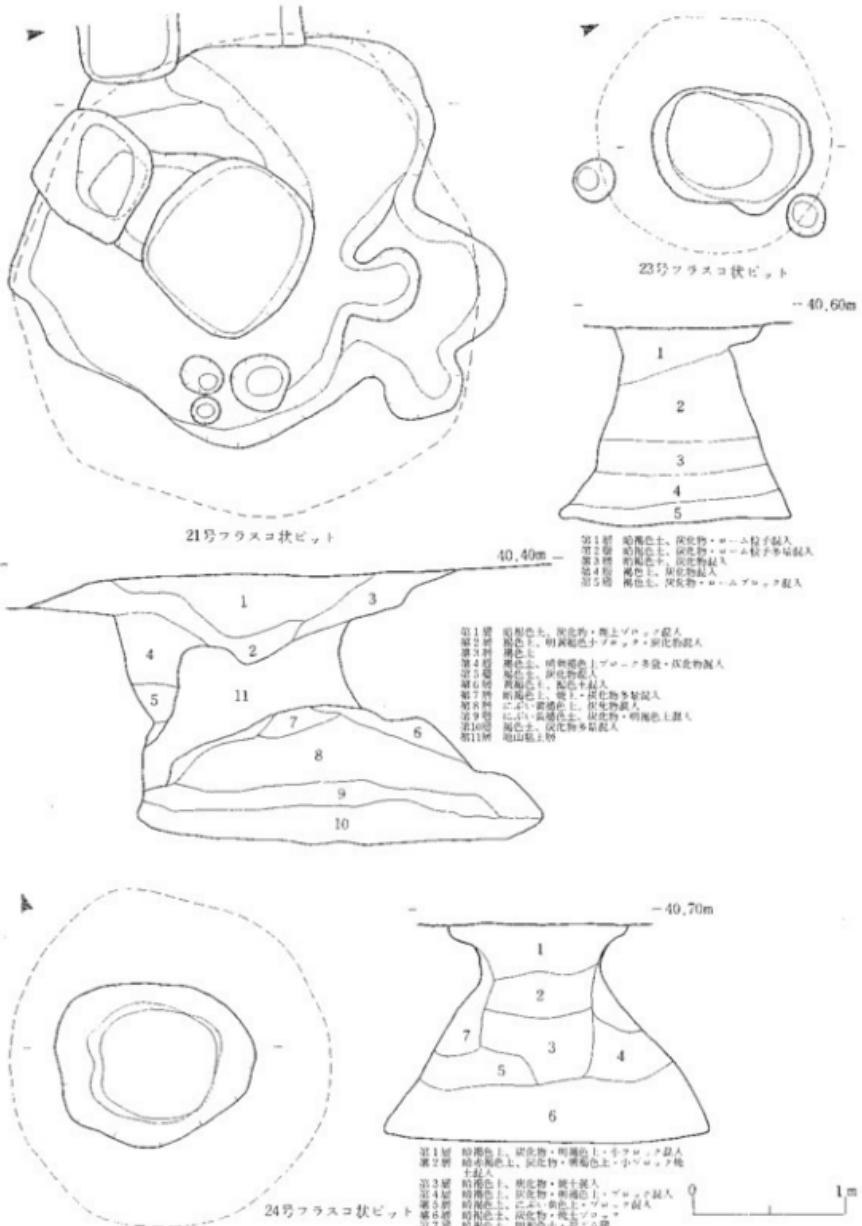
番号	墳 口 部			墳 底 部			深さ(cm)	出 土 遺 物	備 考
	長軸(cm)	短軸(cm)	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	平面形			
1	99	86	楕円形	170	160	楕円形	101	第125図482	
2	88	52	楕円形	200	198	円形	146		
3	109	102	楕円形	348	320	楕円形	237	第125図483	
4	193	150	不整形	347	289	楕円形	177	第125図484・485	
5	94	84	扁丸方形	302	279	楕円形	194	第125図486～488	
6	96	88	不整形	215	201	楕円形	146	第149図212・213	
7	97	67	楕円形	215	191	楕円形	111	第125図489、第126図490、第129図、第149図214・215	
8	82	51	楕円形	218	197	楕円形	138	第130図、第149図216	
9	87	81	楕円形	262	249	楕円形	157	第131図536～546、第149図217・218	
10	127	81	楕円形	216	196	楕円形	118	第126図491～494、第131図547～549	
11	157	147	円形	225	214	楕円形	153	第127図495・496、第132図550～557、第149図219～223、第161図222	
12								第132図558～562	崩落のため調査不能
13									
14	64	57	楕円形	212	209	円形	151	第132図563～568、第133図569～577、第149図224・225、第151図241・242、第162図227	
15	122	102	楕円形	250	222	楕円形	144	第127図498、第133図578～583、第134図584～588、第149図226、第151図243～248、第160図211	
16	72	53	楕円形	187	175	楕円形	121	第134図589～595、第149図227	
17	89	71	楕円形	248	226	楕円形	174	第127図499、第128図500・501、第134図596～600、第135図、第136図513～621、第150図228・229	
18	113	104	不整形	188	182	円形	98	第136図622～624	
19	180	161	楕円形	291	271	楕円形	130	第128図502、第137図、第151図249・250	
20	148	110	不整形	221	203	楕円形	148	第138図644～658、第139図659～670、第150図231・232、第151図251～253、第161図16	
21	119	112	不整形	314	305	楕円形	196	第129図503、第139図671～675、第140図676～685	
22	105	66	楕円形	210	194	楕円形	173	第127図497、第128図504・50	
23	106	74	楕円形	162	154	楕円形	132	第141図686～687、第151図233	
24	132	106	楕円形	226	212	楕円形	144	第140図688～693、第141図694～696	
25	77	75	円形	242	217	楕円形	178	第128図506、第141図706～708	
26	84	63	楕円形	193	178	楕円形	135	第141図697～705、第150図234・235、第151図254、第160図9、第161図17	
27	99	67	楕円形	170	155	楕円形	138	第141図709～713	
28	124	106	不整形	191	183	扁丸方形	88		



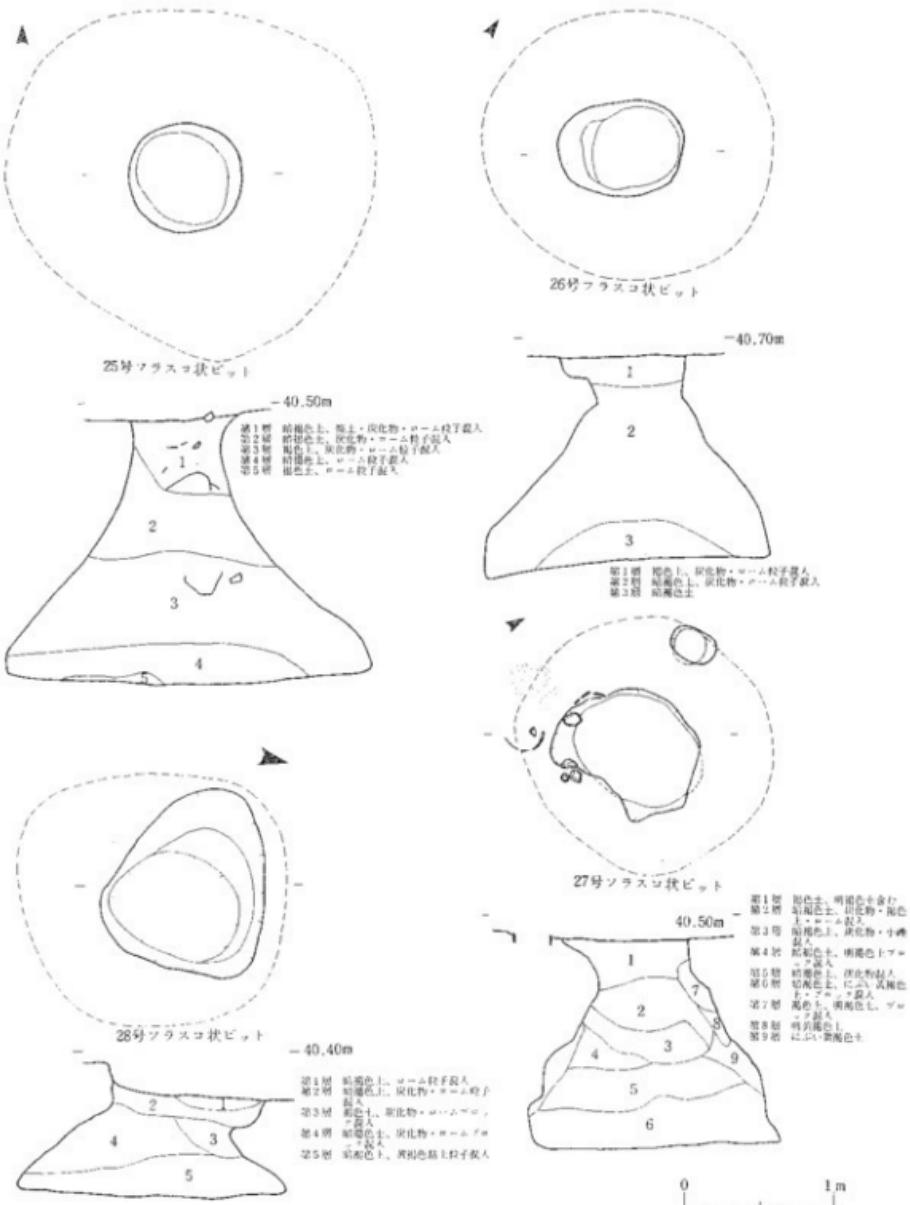
第104図 フラスコ状ビット



第105図 フラスコ状ピット



第106図 フラスコ状ピット



第107図 フラスコ状ビット

#### 土器（第128図）

覆土から出土した。502は頸部が膨らみ口縁部が若干外反する鉢形土器である。口縁部には撚糸圧痕文を等間隔に配し、四ヶ所に細い粘土紐貼付を施す。頸部から胴上部は沈線文で区画し、渦文が横向方に施される。地文は撚糸文である。

#### 石器（第151図）

覆土から出土した。249・250は両端を打ち欠いて作られた石鏟である。

#### 20号フラスコ状ビット出土遺物

#### 石器（第150図）

覆土から出土した。230は両面加工のヘラ状石器と思われる。頁岩である。

#### 21号フラスコ状ビット出土遺物

#### 石器（第150・151図）

覆土から出土した。230は先端が尖った縫型の石匙、231は上部が欠損する磨製石斧である。251は両端を打ち欠いた石鏟、252・253は磨石である。

#### 土製品（第161図）

覆土から出土した。16は三角形土製品である。二つの頂部は欠損しているが、残っている頂部には粘土を貼付で盛りあげている。

#### 22号フラスコ状ビット出土遺物

#### 土器（第128図）

覆土から出土した。頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反する深鉢形土器である。四つの弁状把手を有し、口唇部には等間隔に粘土紐を貼付している。文様帶は胴部中程まで下がり、頂部四ヶ所からは粘土紐貼付の隆帯が二本重下し中に波状文を施している。間にには角形の刺突文を肋骨状に配している。地文はLR（綱回転）単節斜繩文である。

#### 23号フラスコ状ビット出土遺物

#### 石器（第151図）

覆土から出土した。233は上部が若干くびれ、先端部に刃部をもつ両面加工のヘラ状石器である。石質は頁岩である。

#### 25号フラスコ状ビット出土遺物

#### 土器（第127・128図）

覆土から出土した。497はキャリバー形を呈する深鉢形土器である。口縁と頸部に細い粘土紐貼付の隆帯がまわる。間にには二本一組の同様の隆帯を綴に施し連絡する。地文はRL（綱回転）単節斜繩文である。504はLR（綱回転）単節斜繩文の浅鉢形土器である。505は口縁部が「く」の字状に外反する浅鉢形土器である。口縁部は粘土紐貼付によって楕円区画され、中に押圧繩文が施される。地文はRL（綱回転）単節斜繩文である。

### 石器（第 150・151 図）

覆土から出土した。234 はツマ部に対して刃部が鋭角につく石匙で縦型に入ると思われる。235 は両面加工のヘラ状石器である。いずれも石質は頁岩である。254 は両端を欠いて作られた石鍤である。

### 土製品（第 160・161 図）

覆土から出土した。9 は長方形を呈する土製品で等間隔に沈線がまわり、片面に継に三本の沈線が走る。17 は三角形土製品である。

### 26 号 フラスコ状ピット出土遺物

### 土器（第 128 図）

覆土から出土した。506 は口縁部がゆるやかに外反する深鉢形土器である。四単位の土器で、口縁

土器埋設遺構一覧表

遺構番号	プラン	掘り方規模		出土遺物（埋設土器）	備考
		径(cm)	深さ(cm)		
1号土器埋設遺構	円形	60	27	深鉢形土器、口縁部外反、口縁、頸部に二条ずつ粘土紐貼付隆帯がめぐる。上に刻み状の撚糸圧痕、隆帯間に撚糸圧痕による擬似爪形文。	第146図759
2号土器埋設遺構	円形	35	28	深鉢形土器、垂下する粘土紐貼付の隆帯が蛇行する。地文、LR（継回転）単節斜繩文。	第146図760
3号土器埋設遺構	円形	33	15	深鉢形土器胴部、地文、LR（継回転）単節斜繩文。	第146図761
4号土器埋設遺構	円形	55	27	深鉢形土器、胴部、地文、LR（継回転）単節斜繩文。	第147図762
5号土器埋設遺構	円形	32	32	深鉢形土器、平縁、平行、垂下、Y字の撚糸圧痕文が施される。(763) 深鉢形土器、破片、粘土紐貼付の隆帯上に撚糸圧痕文、間に擬似爪形文、地文、結束のある羽状繩文。	第147図763、764
6号土器埋設遺構	円形	47	34	深鉢形土器、波状口縁、地文、LR（継回転）単節斜繩文	第148図766、周辺焼土分布
7号土器埋設遺構	円形	34	20	深鉢形土器、胴部、頸部に隆縁、口縁部は隆縁に沿って押圧繩文。	第147図765
8号土器埋設遺構	円形	47	57	深鉢形土器、四単位、四ヶ所に細い粘土紐貼付二本一組を紙に施す。その間を連絡して、4条の平行な押圧繩文をめぐらし、間に波状に押圧繩文が施される。	第148図767、倒立して埋設

土壤一覧表

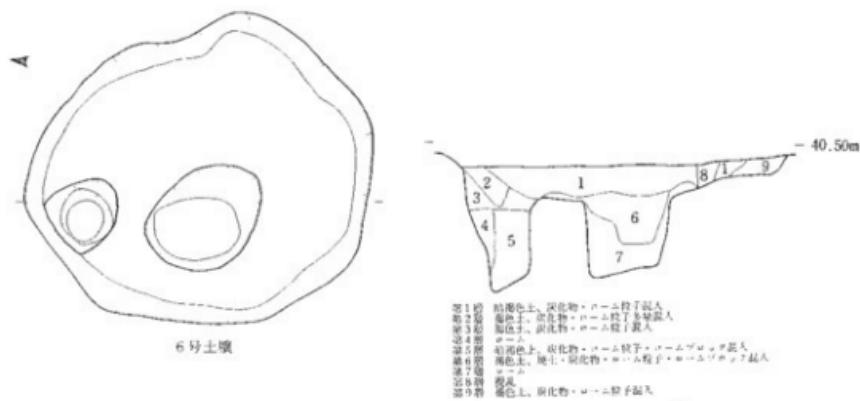
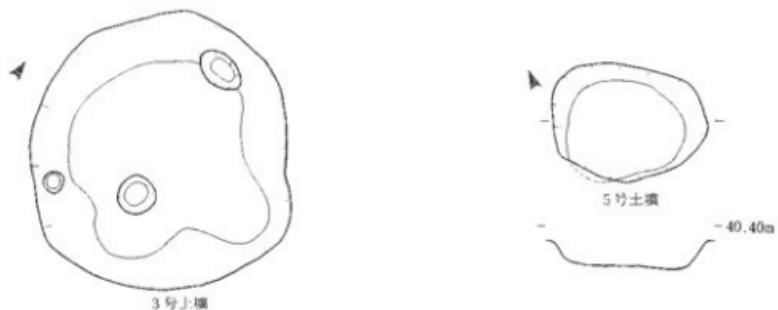
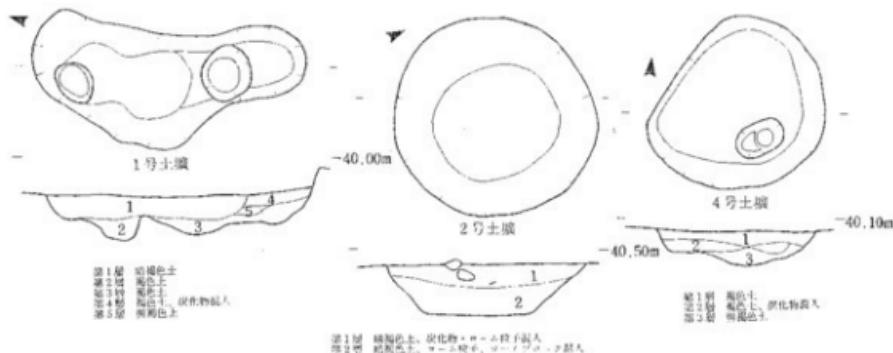
土壤番号	規 模 (cm)			平面形	断面形	出土遺物
	長軸	短軸	深さ			
1	183	76	30	不整形	皿状	
2	134	133	34	円形	洗面器状	
3	182	169	55	椭円形	皿状	第144図723
4	118	114	24	精円形	洗面器状	第145図755
5	105	76	20	精円形	洗面器状	
6	236	199	83	精円形	皿状	第144図724~725
7	210	129	32	不整形	皿状	第151図255、第144図726
8	225	172	58	不整形	ロート状	第144図727・728
9	134	121	48	円形	鍋状	第150図236、第144図729
10	234	213	16	不整形	皿状	
11	227	125	40	不整形	洗面器状	
12	110	80	64	不整形	ロート状	第144図730
13	142	116	50	不整形	鍋状	第144図731・732
14	93	74	65	精円形	ビーカー状	第142図714~716、第150図237
15	92	75	73	椭円形	ロート状	第144図733・734
16	156	84	15	不整形	皿状	
17	90	83	27	円形	鍋状	
18	76	59	33	椭円形	鍋状	第144図735
19	153	129	82	精円形	ビーカー状	第144図736
20	122	95	61	精円形	洗面器状	
21	147	104	66	椭円形	ビーカー状	第142図717
22	226	165	39	椭円形	洗面器状	第150図238、第144図737~744
23	94	88	31	円形	鍋状	
24	78	74	51	円形	ビーカー状	
25	84	57	44	精円形	ビーカー状	
26	66	57	22	椭円形	鍋状	
27	77	66	27	椭円形	鍋状	
28	86	69	11	椭円形	皿状	
29	70	62	14	円形	皿状	第142図718
30	73	67	13	円形	洗面器状	
31	107	68	29	不整形	鍋状	第145図745~747
32	67	65	22	円形	鍋状	
33	79	73	12	円形	洗面器状	
34	297	103	28	椭円形	皿状	
35	114	96	35	精円形	鍋状	
36	81	64	30	精円形	鍋状	
37	64	59	24	円形	鍋状	
38	69	64	26	円形	鍋状	

土器番号	規 模 (cm)			平面形	断面形	出 土 遺 物
	長軸	短軸	深さ			
39	72	65	16	円 形	洗面器状	第151図256
40	69	63	18	円 形	洗面器状	
41	64	62	39	円 形	ビーカー状	
42	80	73	26	椭 圆 形	鍋 状	
43	83	80	17	円 形	鍋 状	
44	65	59	28	円 形	袋 状	
45	73	70	53	円 形	袋 状	
46	77	66	52	椭 圆 形	袋 状	
47	90	74	25	椭 圆 形	鍋 状	
48	92	83	31	椭 圆 形	鍋 状	
49	67	62	17	円 形	鍋 状	
50	100	92	55	椭 圆 形	ビーカー状	
51	107	71	31	椭 圆 形	鍋 状	
52	83	77	14	円 形	洗面器状	
53	87	87	17	円 形	洗面器状	
54	65	50	14	不 整 形	洗面器状	
55	59	49	23	椭 圆 形	鍋 状	
56	90	84	31	椭 圆 形	鍋 状	
57	68	60	25	円 形	鍋 状	
58	55	52	9	円 形	皿 状	
59	69	65	13	円 形	皿 状	
60	101	99	13	円 形	皿 状	
61	72	71	39	円 形	鍋 状	
62	73	70	33	円 形	鍋 状	
63	71	69	28	円 形	鍋 状	
64	79	64	34	椭 圆 形	鍋 状	第142図719
65	84	74	47	椭 圆 形	鍋 状	
66	65	62	27	円 形	鍋 状	
67	79	77	15	円 形	皿 状	
68	76	71	51	円 形	ビーカー形	
69	71	66	36	椭 圆 形	鍋 状	
70	84	71	43	椭 圆 形	鍋 状	
71	66	62	41	円 形	ビーカー状	
72	98	96	57	円 形	鍋 状	
73	87	79	46	椭 圆 形	ビーカー状	
74	79	72	66	椭 圆 形	ビーカー状	
75	107	95	75	椭 圆 形	ビーカー状	
76	85	75	39	椭 圆 形	鍋 状	

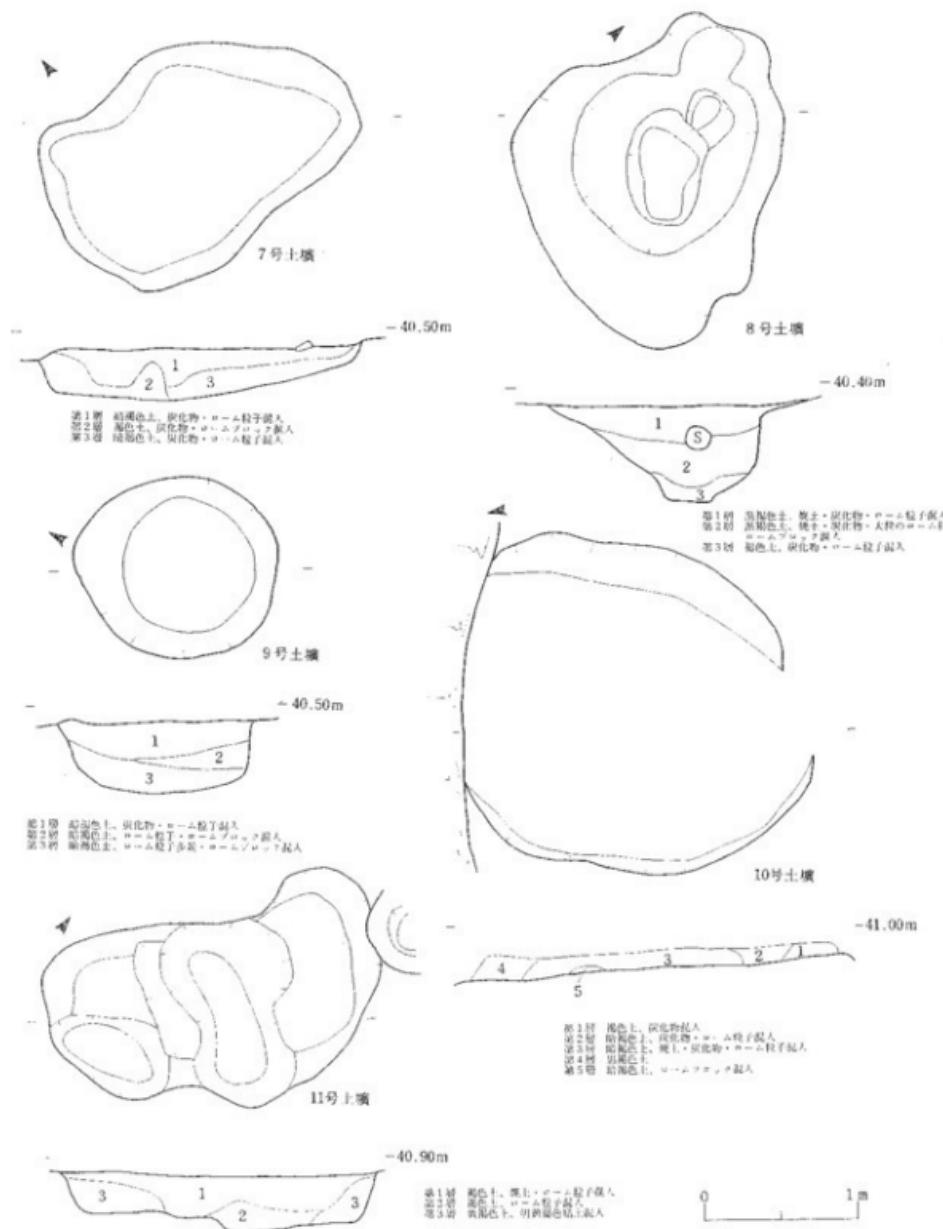
土壤番号	規 模 (cm)			平面形	断面形	出 土 遺 物
	長軸	短軸	深さ			
77	75	72	46	円 形	ビーカー状	
78	65	58	47	橢 圓 形	鍋 状	
79	87	73	52	橢 圓 形	ビーカー状	
80	79	77	77	円 形	ビーカー状	
81	73	64	58	橢 圓 形	ビーカー状	
82	64	58	47	円 形	鍋 状	
83	94	84	63	橢 圓 形	ビーカー状	
84	96	85	31	橢 圓 形	鍋 状	
85	78	75	45	円 形	鍋 状	
86	94	86	56	椭 丸 方 形	鍋 状	
87	99	76	22	橢 圓 形	鍋 状	
88	93	86	66	橢 圓 形	ビーカー状	
89	75	72	46	円 形	ビーカー状	
90	88	80	45	橢 圓 形	鍋 状	第150図239
91	75	72	65	円 形	ビーカー状	
92	90	85	30	橢 圓 形	鍋 状	
93	77	70	37	橢 圓 形	鍋 状	
94	88	82	47	橢 圓 形	ビーカー状	
95	93	76	33	橢 圓 形	袋 状	
96	86	82	41	橢 圓 形	鍋 状	
97	69	66	33	円 形	鍋 状	
98	66	59	14	橢 圓 形	洗面器状	
99	72	71	36	円 形	鍋 状	
100	76	68	38	橢 圓 形	ビーカー状	
101	70	65	50	橢 圓 形	ビーカー状	
102	64	57	44	不 整 形	ビーカー状	
103	88	78	66	橢 圓 形	ビーカー状	
104	71	69	47	円 形	ビーカー状	
105	66	63	44	円 形	ビーカー状	第143図720
106	75	62	28	橢 圓 形	鍋 状	
107	93	84	43	橢 圓 形	鍋 状	
108	84	71	70	橢 圓 形	ビーカー状	
109	71	70	48	円 形	鍋 状	
110	111	101	108	円 形	袋 状	
111	114	102	41	不 整 形	鍋 状	
112	71	65	52	円 形	袋 状	
113	61	57	46	円 形	鍋 状	
114	76	66	16	橢 圓 形	洗面器状	

土壤番号	規 模 (cm)			平面形	断面形	出 土 遺 物
	長軸	短軸	深さ			
115	68	65	49	円 形	ビーカー状	
116	121	69	45	椭 圆 形	鍋 状	
117	233	65	30	不 整 形	鍋 状	
118	95	85	68	椭 圆 形	皿 状	
119	148	84	35	椭 圆 形	鍋 状	
120	107	81	62	椭 圆 形	鍋 状	
121	67	63	40	椭 圆 形	鍋 状	
122	81	61	33	椭 圆 形	鍋 状	
123	77	70	21	椭 圆 形	鍋 状	
124	87	83	32	椭 圆 形	鍋 状	
125	99	79	44	椭 圆 形	鍋 状	
126	87	76	—	椭 圆 形		
127	91	84	46	円 形	鍋 状	
128	97	83	55	椭 圆 形	鍋 状	
129	78	74	38	円 形	鍋 状	
130	78	73	19	円 形	洗面器状	
131	102	77	57	椭 圆 形	鍋 状	
132	78	64	28	椭 圆 形	鍋 状	
133	92	71	54	椭 圆 形	袋 状	
134	88	42	24	椭 圆 形	洗面器状	
135	84	56	25	椭 圆 形	洗面器状	
136	85	81	77	円 形	ビーカー状	
137	70	62	56	椭 圆 形	鍋 形	
138	62	60	51	椭 圆 形	鍋 状	第143図721
139	106	88	52	椭 圆 形	鍋 状	
140	87	84	53	円 形	鍋 状	
141	77	76	53	円 形	鍋 状	
142	86	81	66	円 形	鍋 状	
143	90	—	50	椭 圆 形	鍋 状	
144	88	—	48	椭 圆 形	鍋 状	
145	132	94	50	椭 圆 形	鍋 状	
146	87	79	57	円 形	鍋 状	
147	60	51	42	椭 圆 形	鍋 状	
148	97	87	53	椭 圆 形	鍋 状	
149	88	77	56	椭 圆 形	ビーカー状	
150	90	74	45	椭 圆 形	ビーカー状	第143図720
151	89	72	48	椭 圆 形	鍋 状	
152	77	69	49	椭 圆 形	ビーカー状	

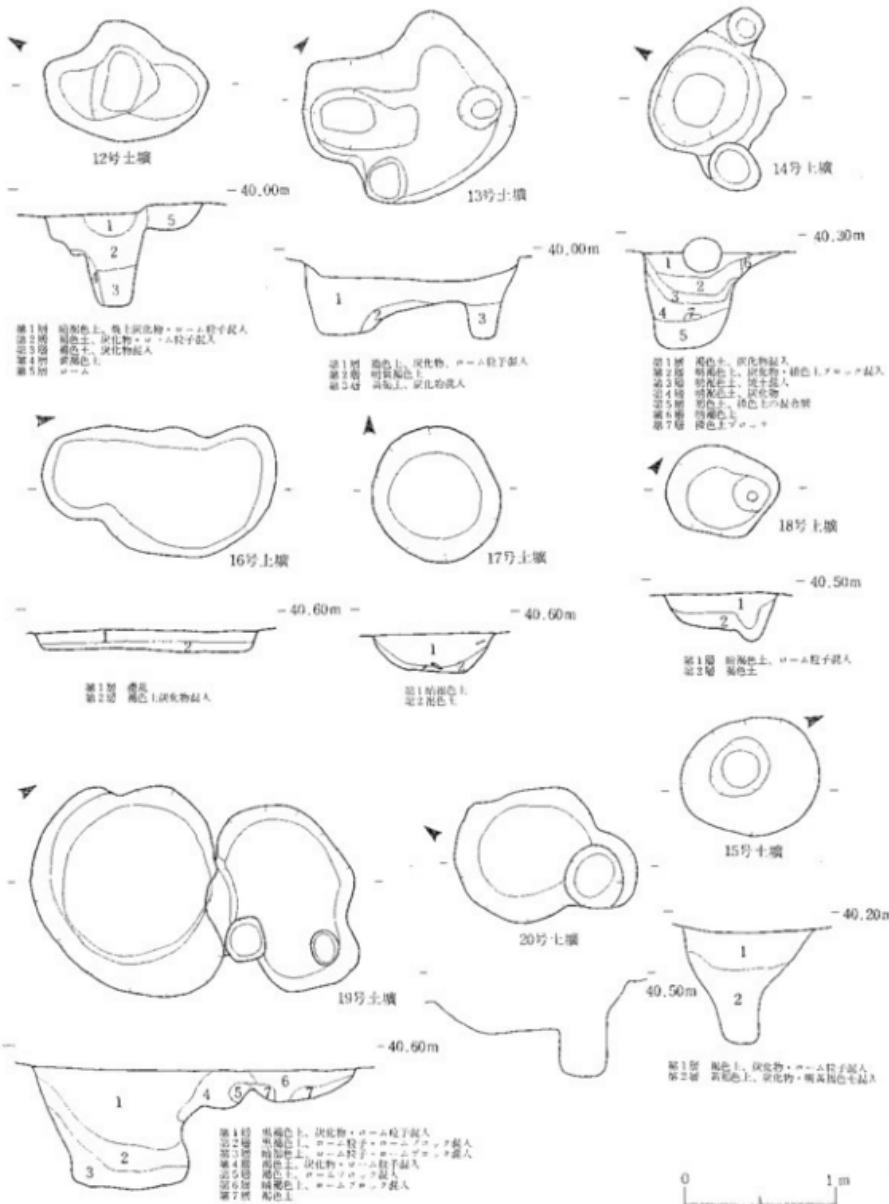
土壤番号	規 模 (cm)			平 面 形	断 面 形	出 土 物
	長 軸	短 軸	深 さ			
153	70	63	37	椭 圆 形	鍋 状	
154	94	86	75	円 形	ビーカー状	
155	80	75	45	円 形	鍋 状	
156	101	77	52	椭 圆 形	鍋 状	
157	63	59	36	椭 圆 形	鍋 状	
158	81	60	44	椭 圆 形	鍋 状	
159	89	71	62	椭 圆 形	ビーカー状	
160	74	66	57	椭 圆 形	ビーカー状	
161	89	85	42	椭 圆 形	鍋 状	
162	75	68	41	椭 圆 形	鍋 状	
163	86	73	49	椭 圆 形	鍋 状	
164	74	72	37	円 形	鍋 状	第143図722
165	97	76	54	椭 圆 形	鍋 状	
166	95	89	54	椭 圆 形	鍋 状	第145図748～752
167	106	98	69	椭 圆 形	鍋 状	
168	79	65	50	椭 圆 形	鍋 状	
169	106	80	68	椭 圆 形	鍋 状	
170	81	65	41	椭 圆 形	鍋 状	
171	113	103	50	椭 圆 形	鍋 状	
172	110	95	58	不 整 形	鍋 状	
173	76	73	49	円 形	鍋 状	
174	90	73	52	椭 圆 形	鍋 状	
175	78	71	29	椭 圆 形	鍋 状	
176	101	78	34	椭 圆 形	鍋 状	第146図756
177	73	70	64	円 形	ビーカー状	
178	96	80	71	椭 圆 形	ビーカー状	第146図757
179	125	66	58	椭 圆 形	鍋 状	
180	80	74	75	椭 圆 形	ビーカー状	
181	73	67	63	椭 圆 形	ビーカー状	
182	72	70	53	円 形	ビーカー状	
183	115	80	70	椭 圆 形	ビーカー状	
184	82	65	48	椭 圆 形	鍋 状	
185	115	95	45	椭 圆 形	鍋 状	
186	69	60	53	椭 圆 形	鍋 状	
187	89	—	55	椭 圆 形	鍋 状	
188	82	65	54	椭 圆 形	ビーカー状	
189	110	75	55	椭 圆 形	鍋 状	
190	58	55	27	円 形	鍋 状	第145図753～754



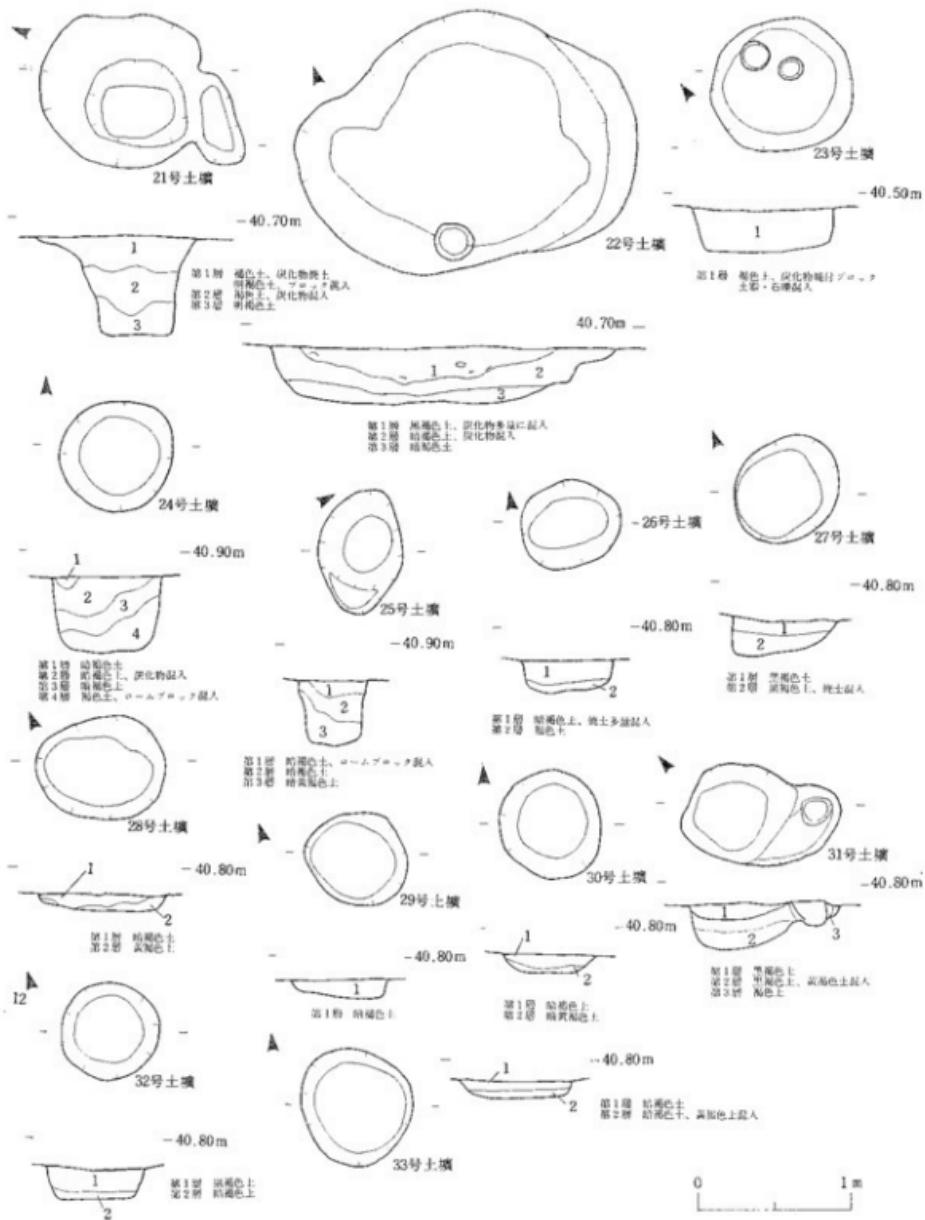
第108図 土壌



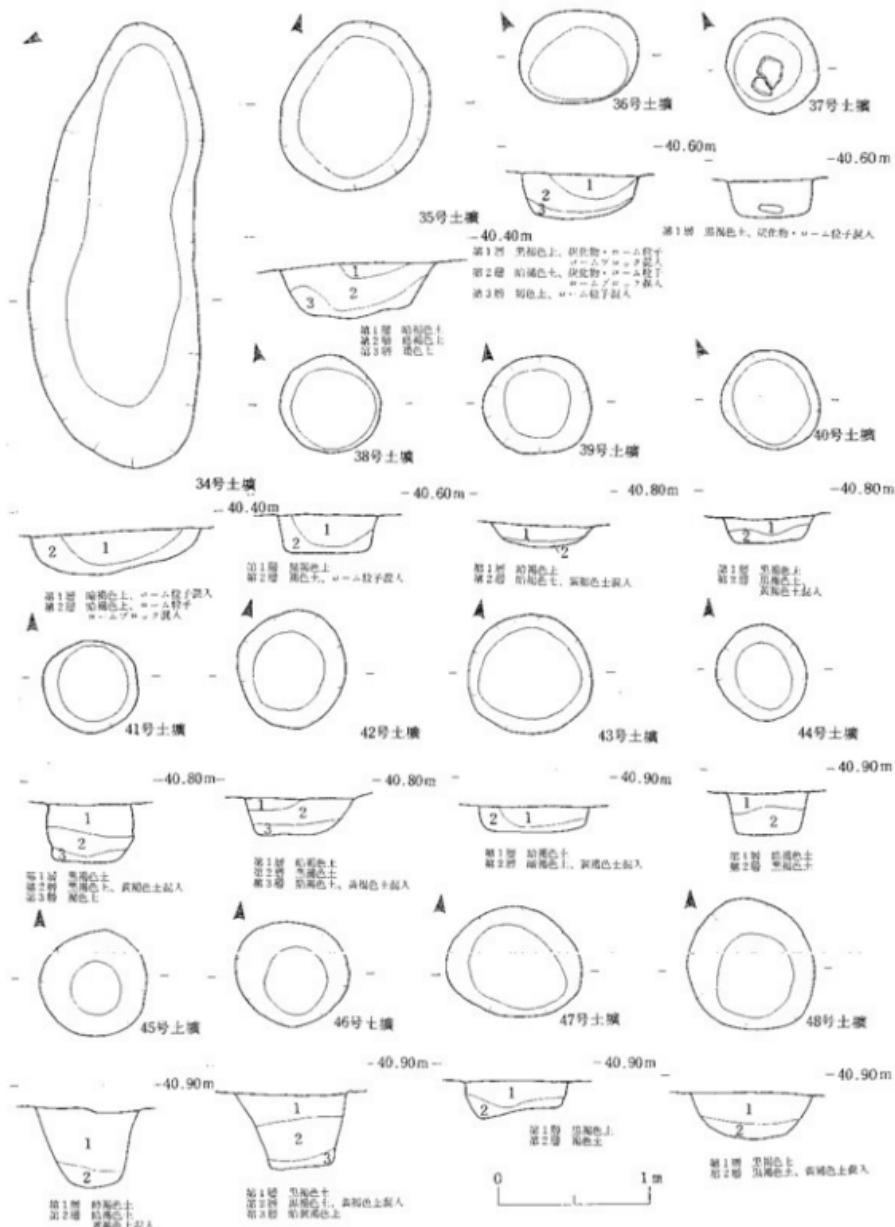
第109図 土壌



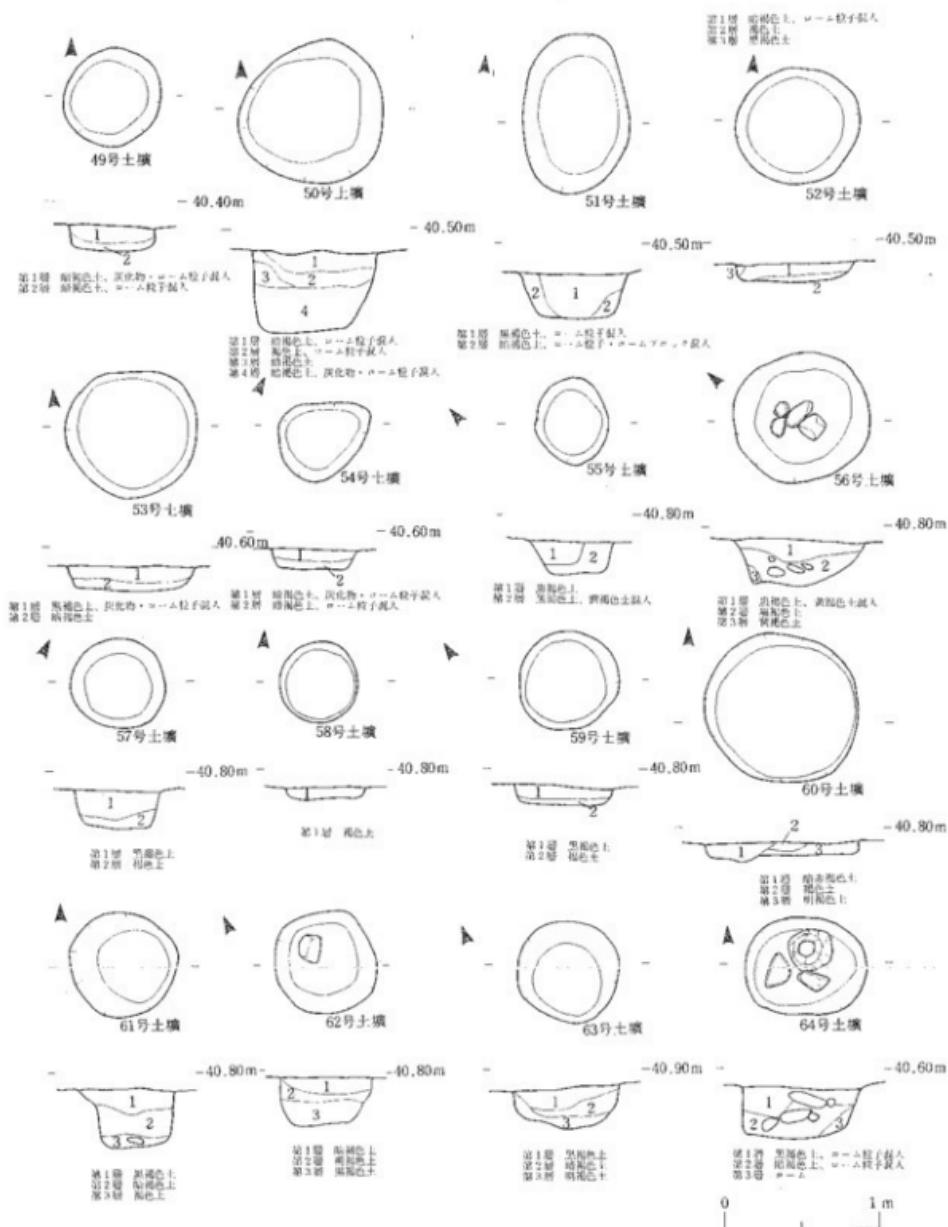
第110図 土壤



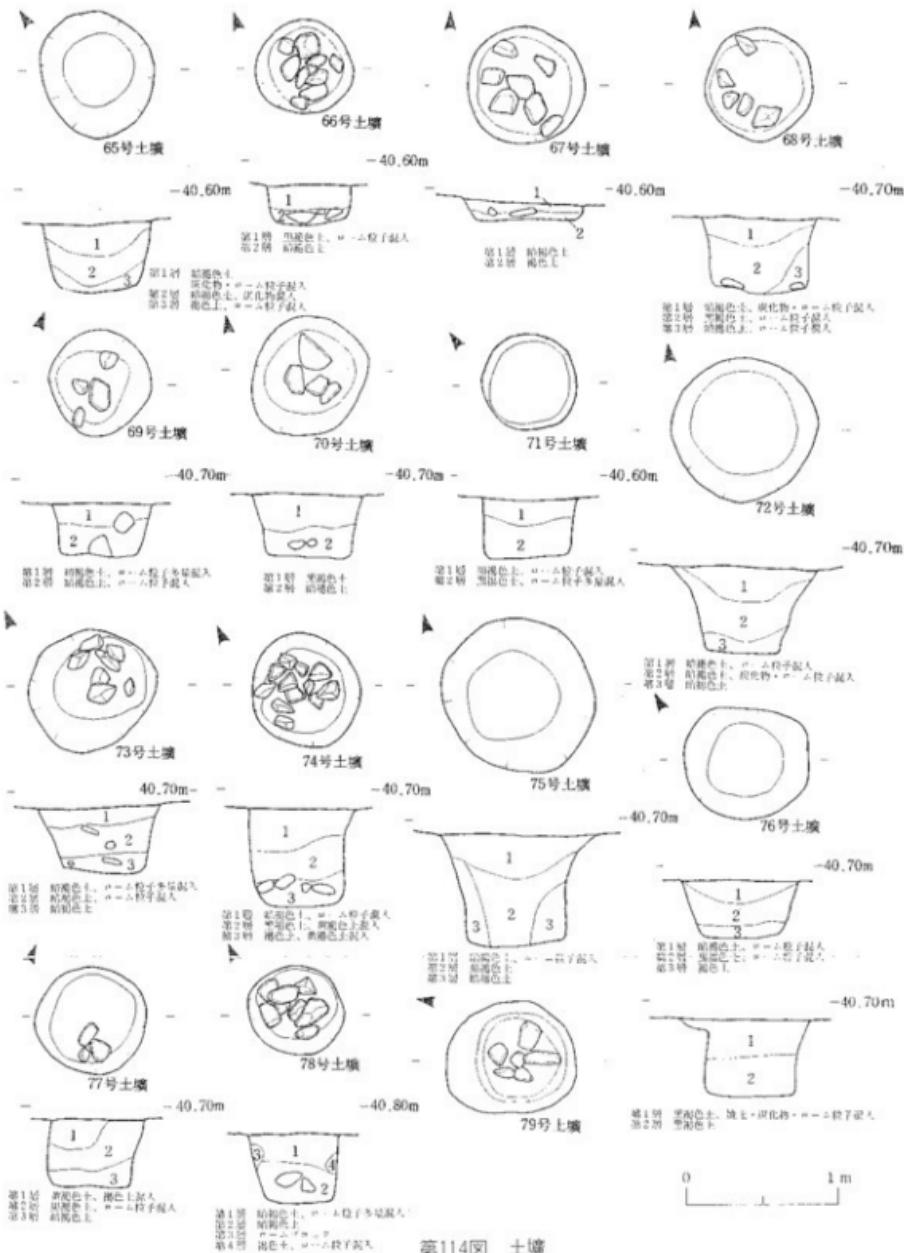
第111図 土壤



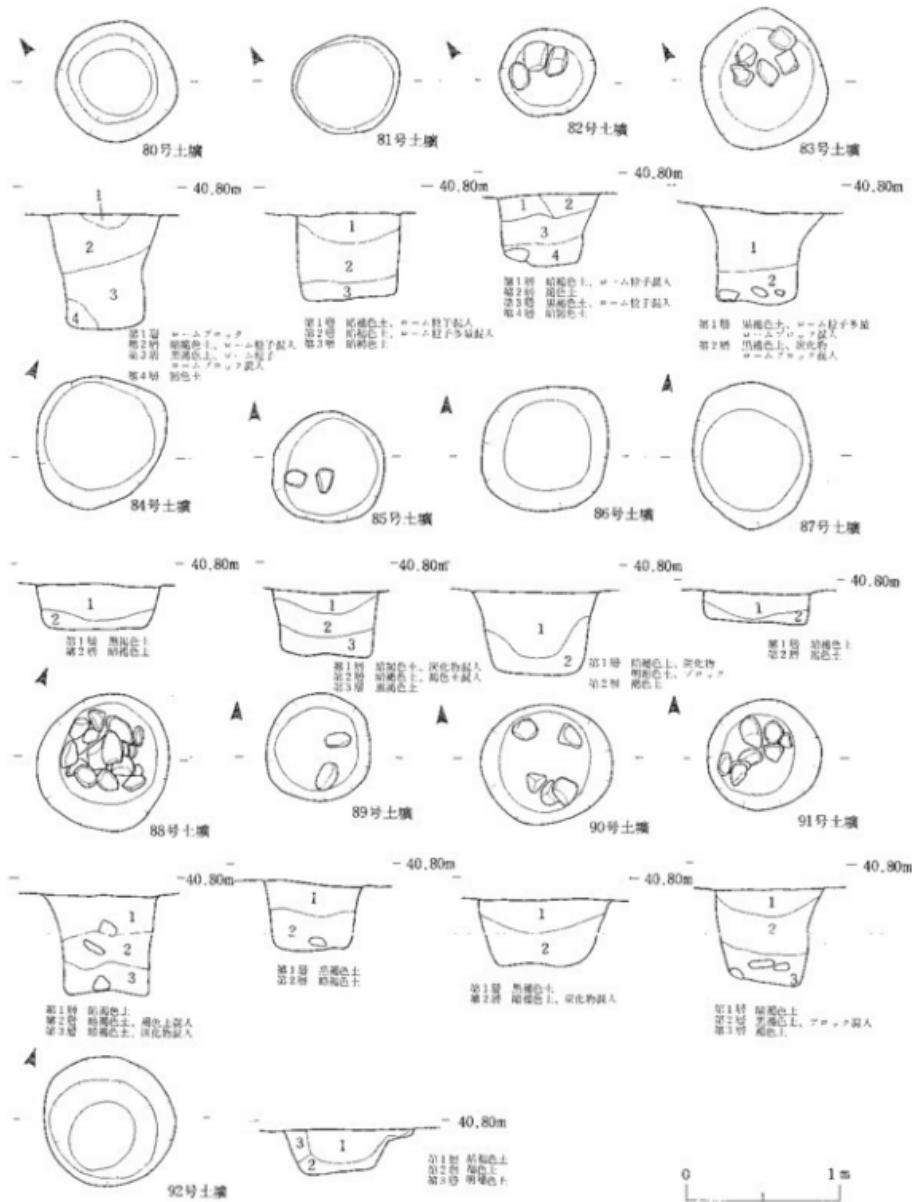
第112圖 土壠



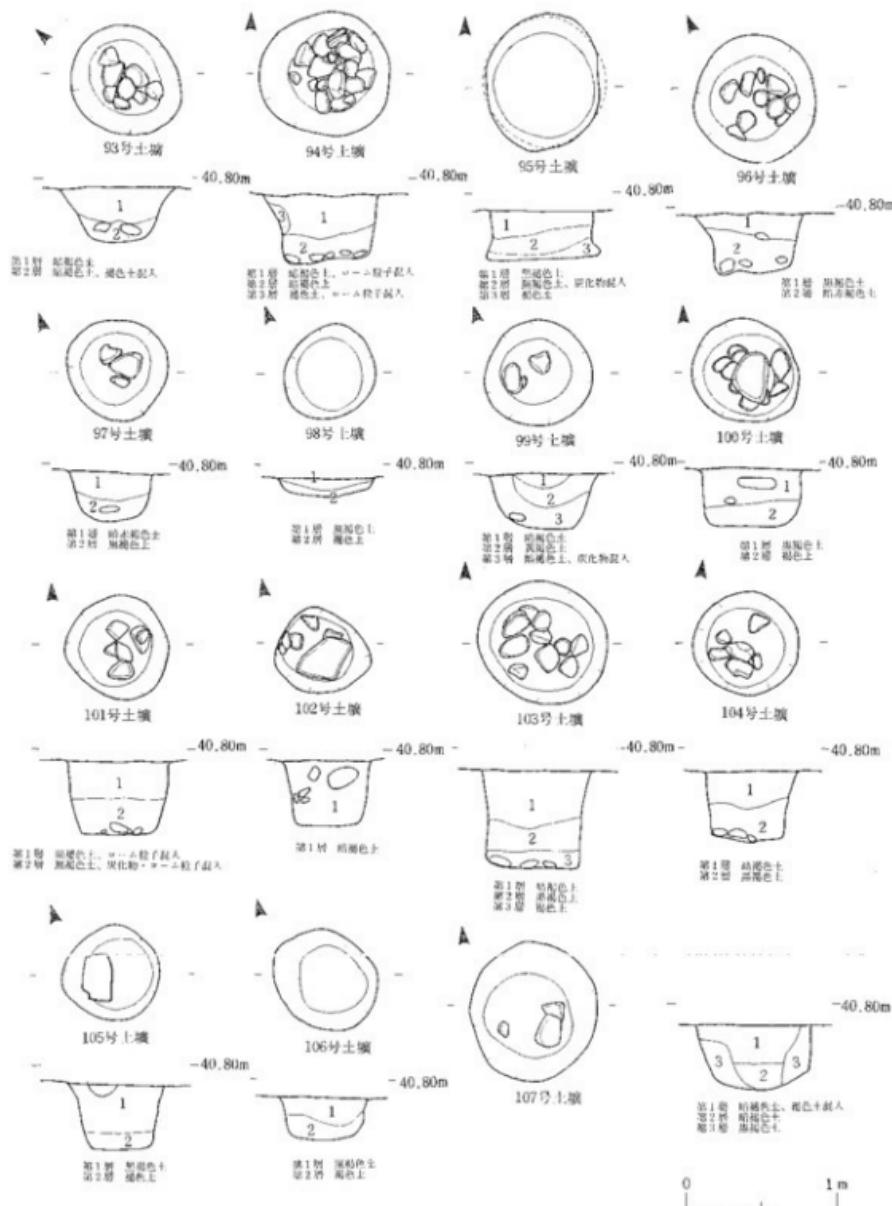
第113図 土壌



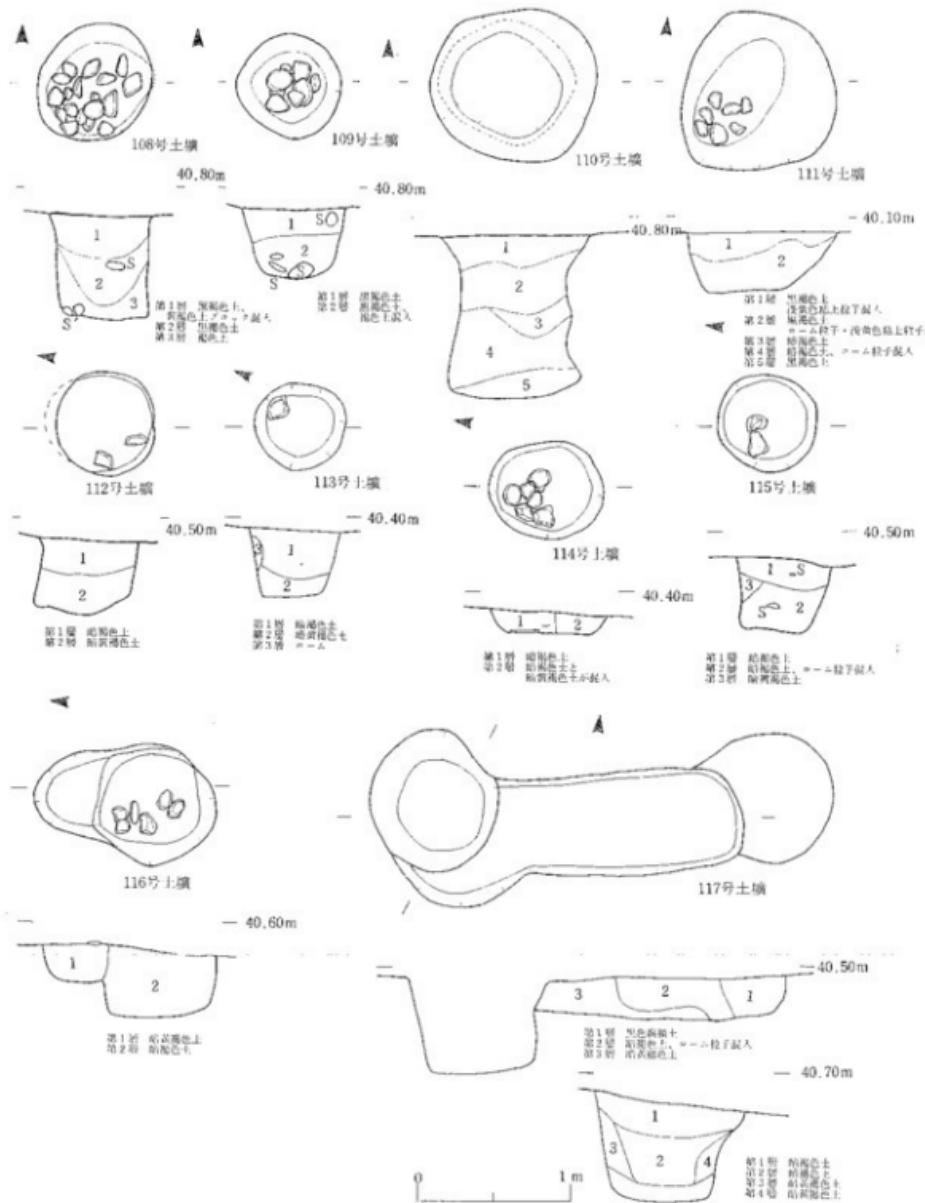
第114図 土壤



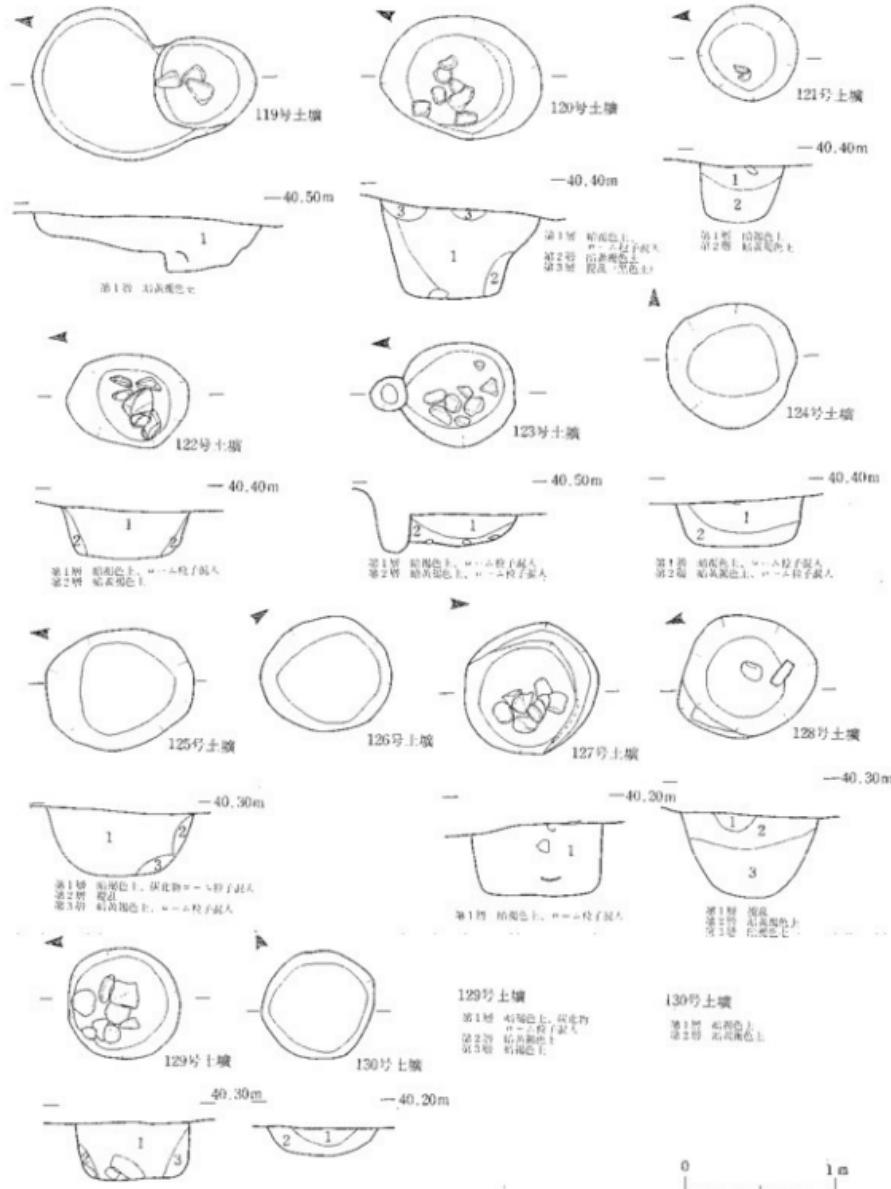
第115図 土壤



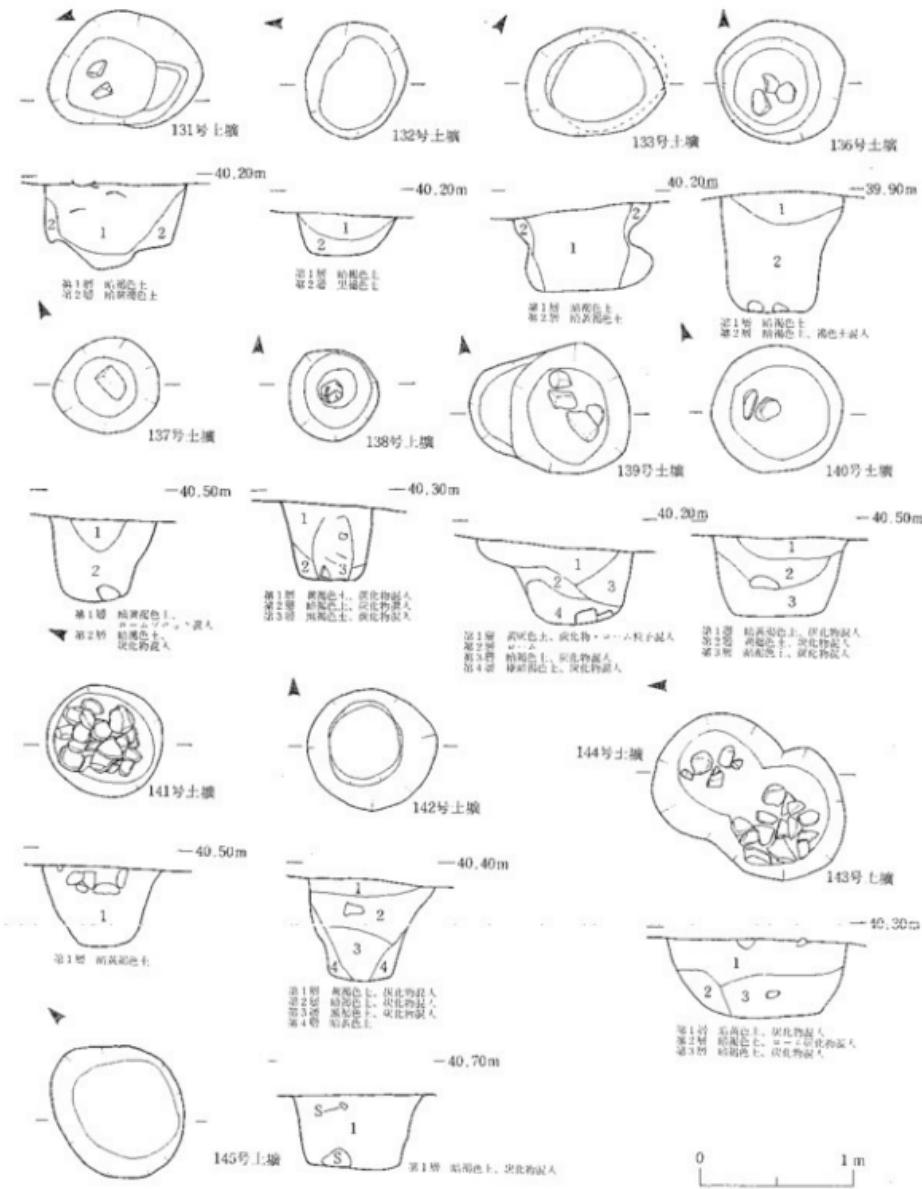
第116図 土壤



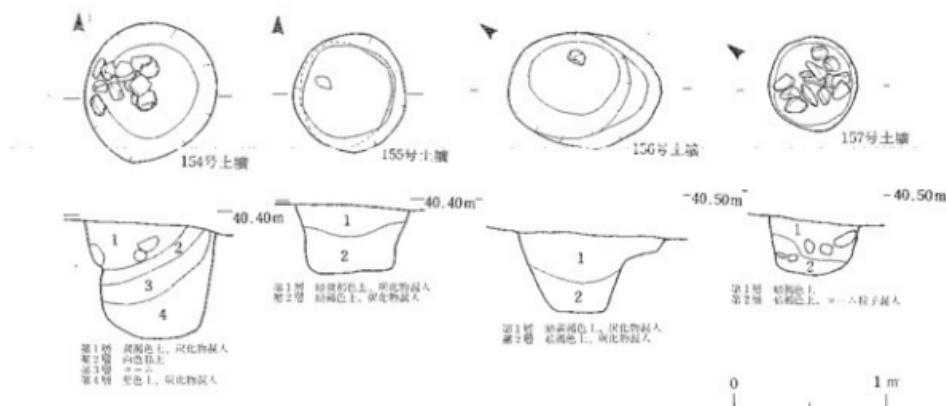
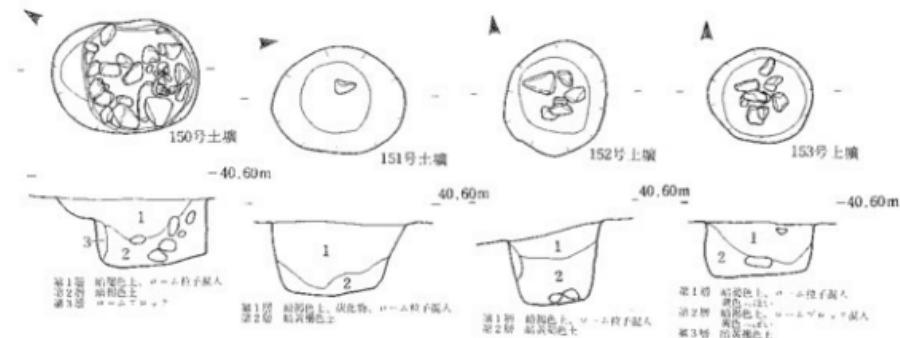
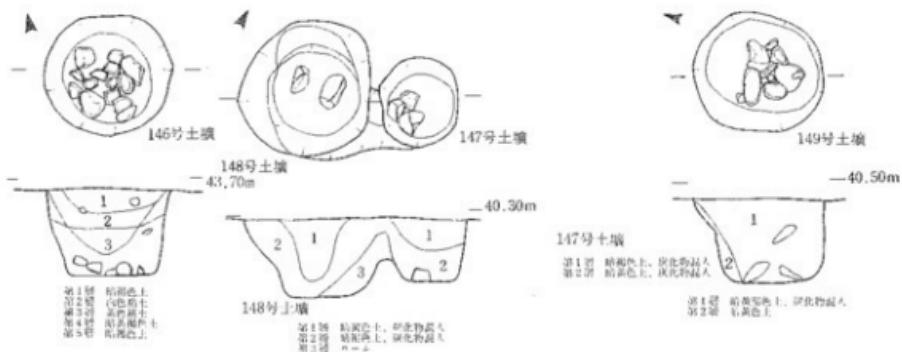
第117図 土壤



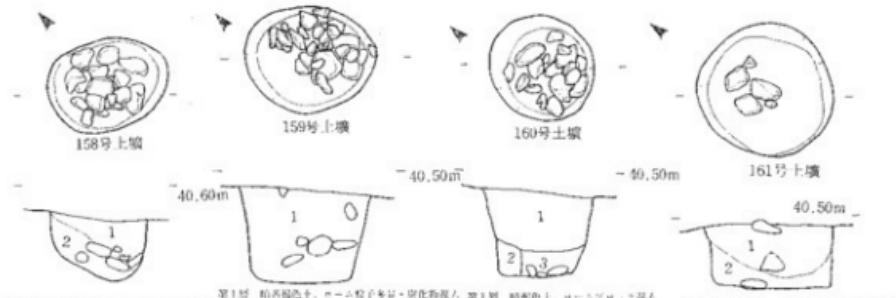
第118图 土壤



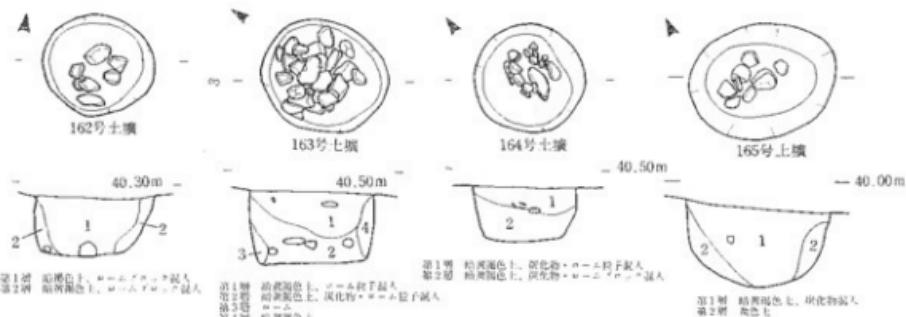
第119圖 土壤



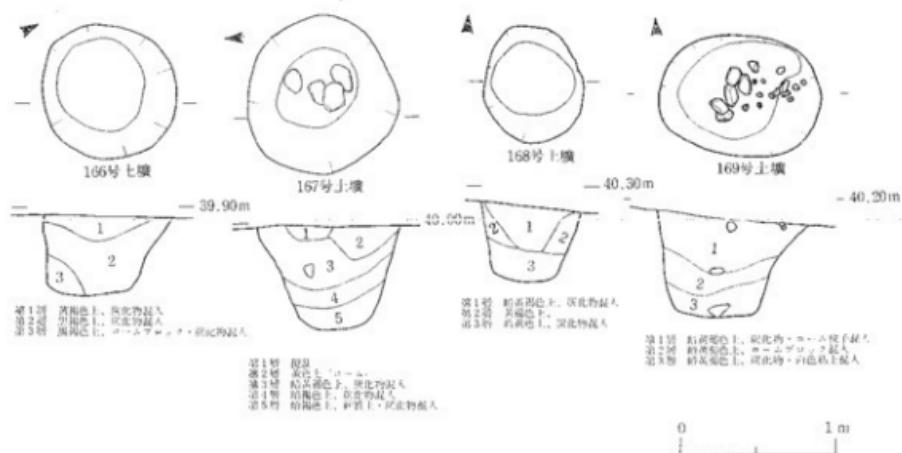
第120図 土壤



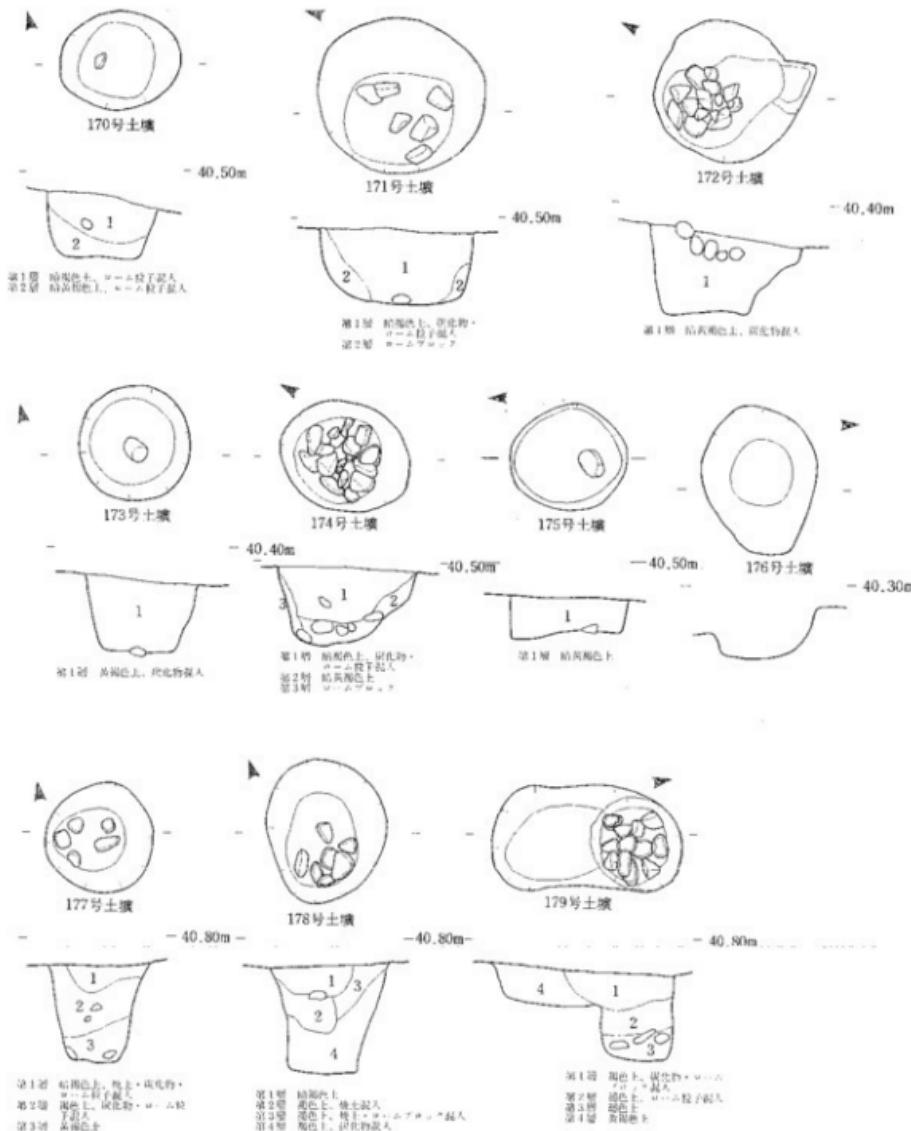
第1阶段	培养基颜色	$\mu$ -D-核糖水解
第1阶段 初期培养上，深褐色物。 $\mu$ -D-核糖， $\beta$ 酸	暗褐色	强阳性
第2阶段 培养基变白后。 $\mu$ -D-核糖， $\beta$ 酸	浅褐色	弱阳性



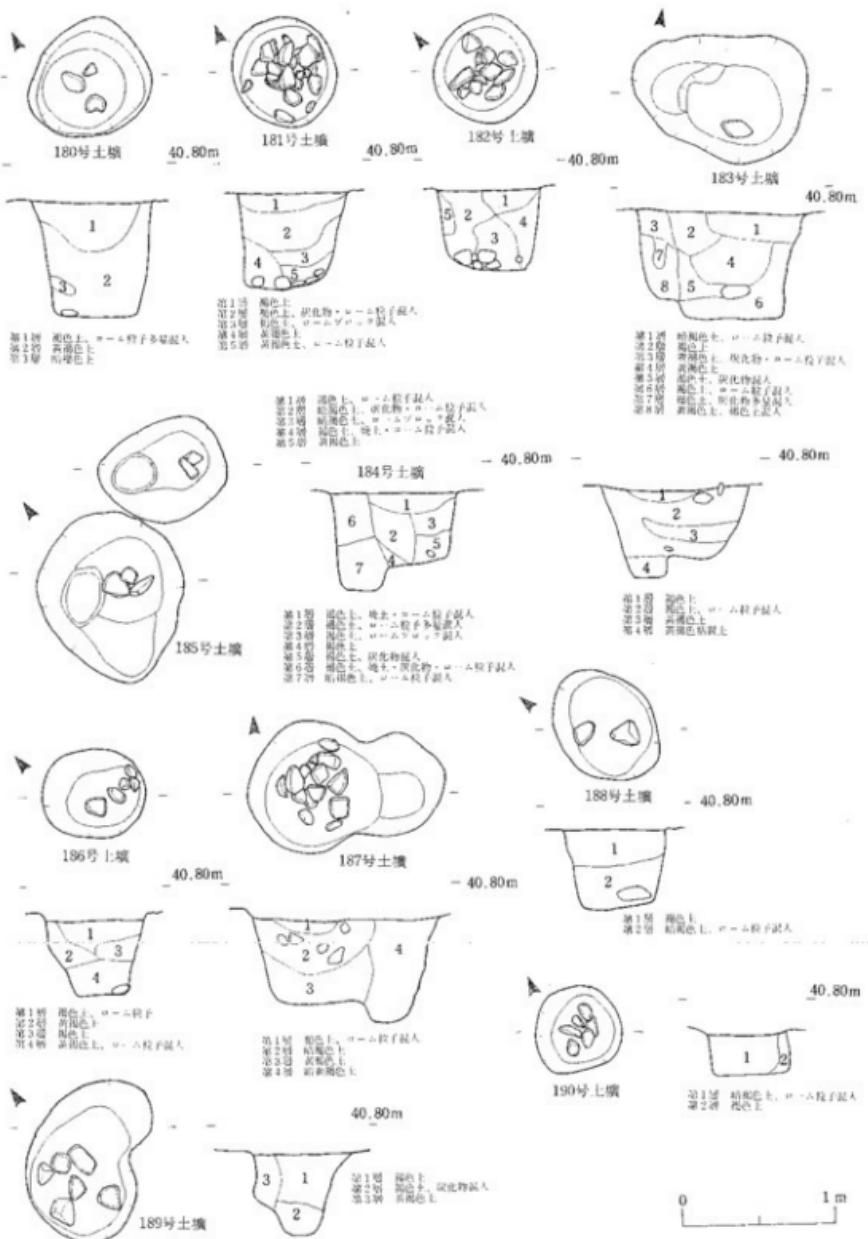
第1回	結婚相手。化物語人。
第2回	結婚相手。化物語人。
第3回	結婚相手。化物語人。
第4回	結婚相手。化物語人。
第5回	結婚相手。化物語人。
第6回	結婚相手。化物語人。
第7回	結婚相手。化物語人。
第8回	結婚相手。化物語人。
第9回	結婚相手。化物語人。
第10回	結婚相手。化物語人。
第11回	結婚相手。化物語人。
第12回	結婚相手。化物語人。
第13回	結婚相手。化物語人。
第14回	結婚相手。化物語人。
第15回	結婚相手。化物語人。
第16回	結婚相手。化物語人。
第17回	結婚相手。化物語人。
第18回	結婚相手。化物語人。
第19回	結婚相手。化物語人。
第20回	結婚相手。化物語人。



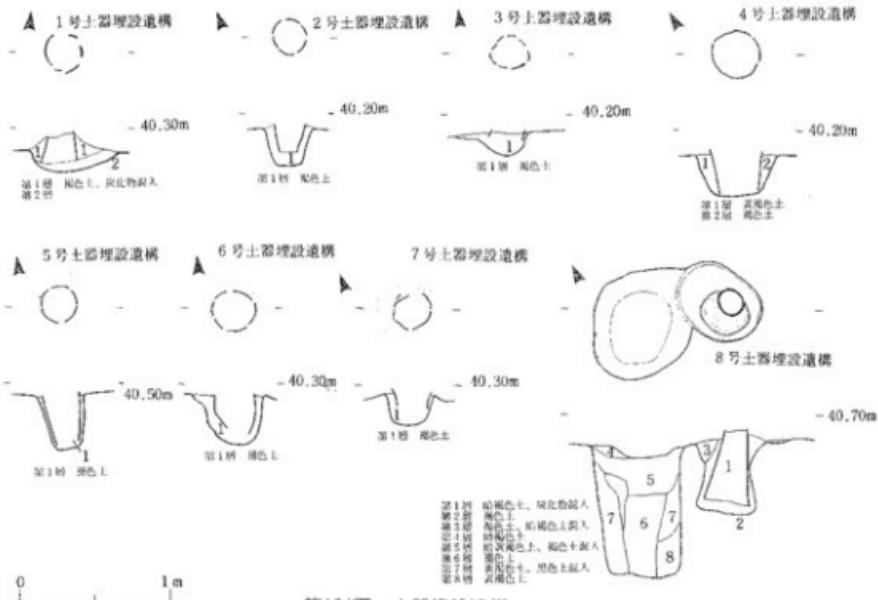
### 第121図 土壌



第122圖 土壤



第123圖 土壤



第124図 土器埋設遺構

は波状、頸部には一条の粘土紐貼付の隆帯がまわり、上部に撫糸压痕文が施される。間の四ヶ所には「ハ」状の隆帯が貼付され、それらの間には擬似爪形文・撫糸压痕文が配される。地文は結束のある継方向の羽状繩文である。

#### 土器埋設遺構（第124図）

住居跡外にあり、明確に土器を埋設する掘り方を掘り、完形、半完形土器を埋設した遺構である。周辺に焼土が分布するものも認められ、住居跡の炉と思われるものもある。以下表にしてまとめた。

#### 遺構内・外出土土器

遺構内・外から、大木式、円筒式、北陸系の土器が多数出土している。ここでは大木式土器をⅠ群、円筒式土器をⅡ群、北陸系土器をⅢ群、その他の土器をⅣ群とし、各々類別して述べることにする。

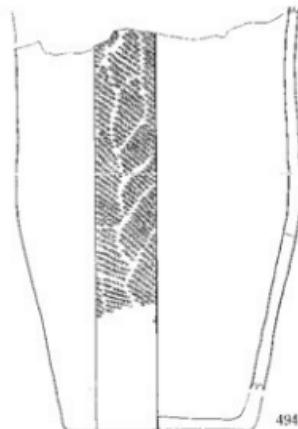
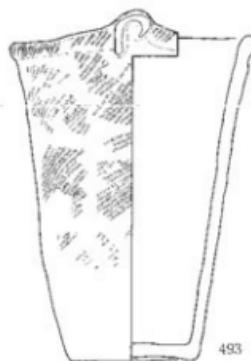
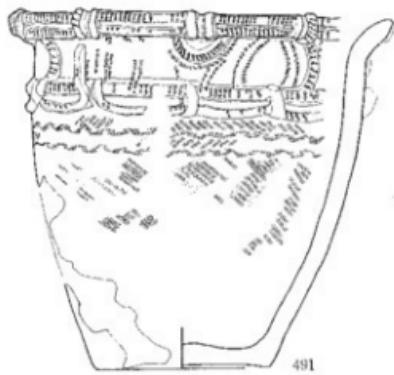
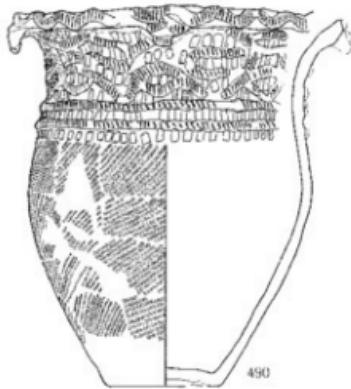
#### 第Ⅰ群土器

1類土器 (26・36~40・44・45・47・82・85・222・242・276・285・286~288・308・309・349・425・426・435・451・453・493・521・536・550・551・585~587・589・623・624・697・698・728・729・731・736・737・740・741・745・746・748・749・750・760・768・775・780)

口縁が平縁、波状を呈する深鉢形土器が主体である。粘土紐貼付、半截竹管状工具により文様が施される。波状口縁の頂部から粘土紐貼付の隆帯が、蛇行・鋸齒状・直線に施されるもの、横方向の沈線で鋸齒状文が施されるもの、平行沈線間に細い粘土紐貼付の鋸齒状文、さらに交互刺突を施



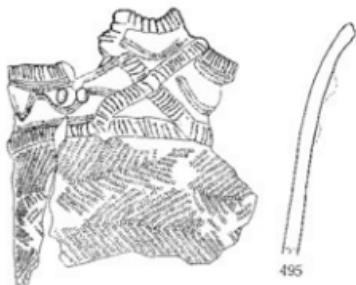
第125図 遺構内出土土器



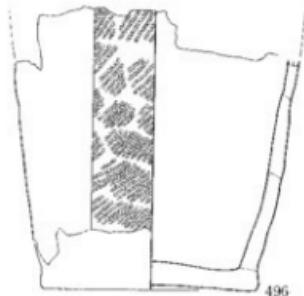
490 7号ラスロ状ビット  
491-494 10号ラスコ状ビット

0 10cm

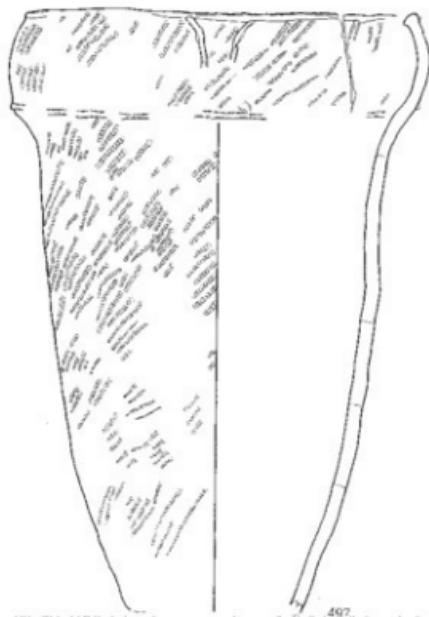
第126図 遺構内出土土器



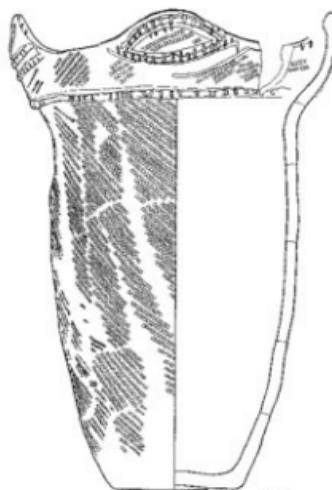
495



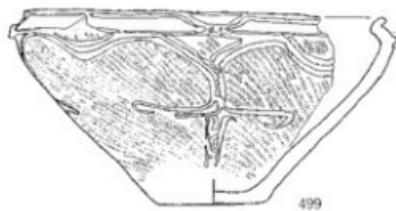
496



497



498

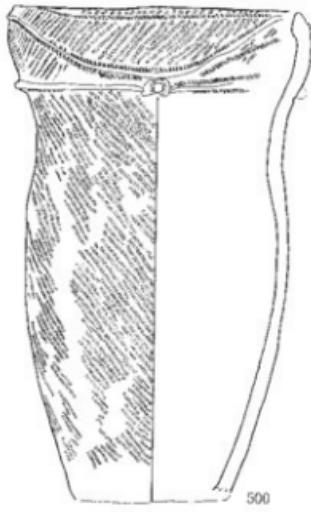


499

- 495・496 11号 フラスコ状ビット  
497 25号 フラスコ状ビット  
498 15号 フラスコ状ビット  
499 17号 フラスコ状ビット



第127図 遺構内出土土器



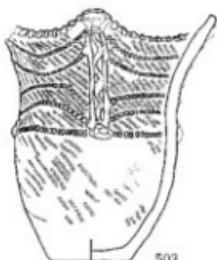
500



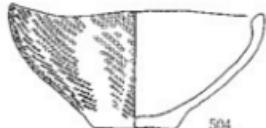
501



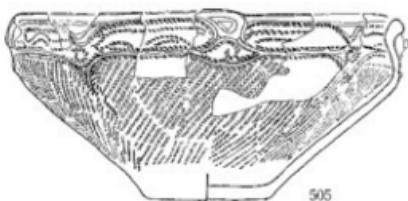
502



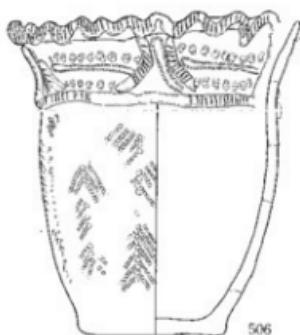
503



504



505

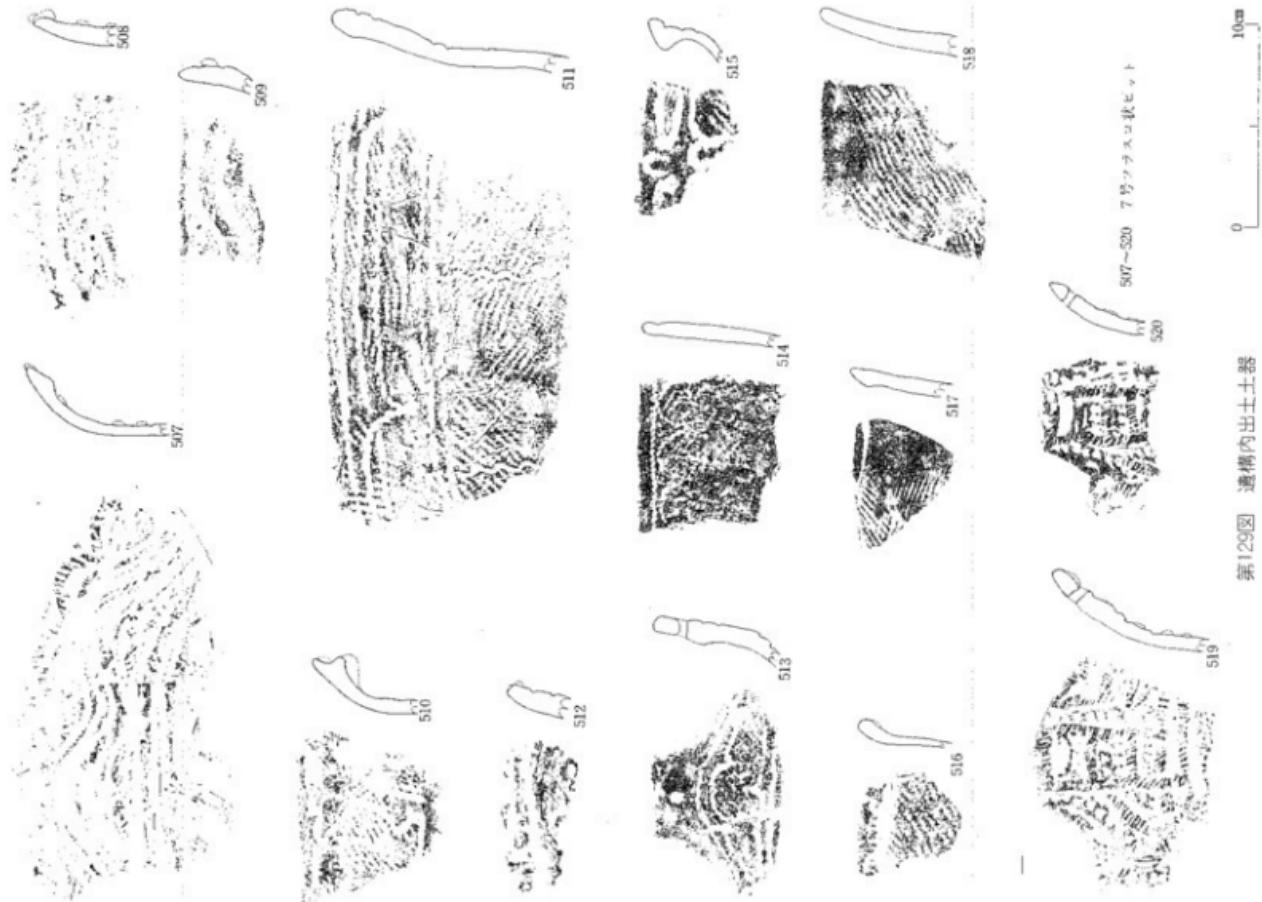


506

- 500・501 17号 フラスコ状ビット  
 502 19号 フラスコ状ビット  
 503 22号 フラスコ状ビット  
 504～505 25号 フラスコ状ビット  
 506 26号 フラスコ状ビット

0 10cm

第128図 遺構内出土土器



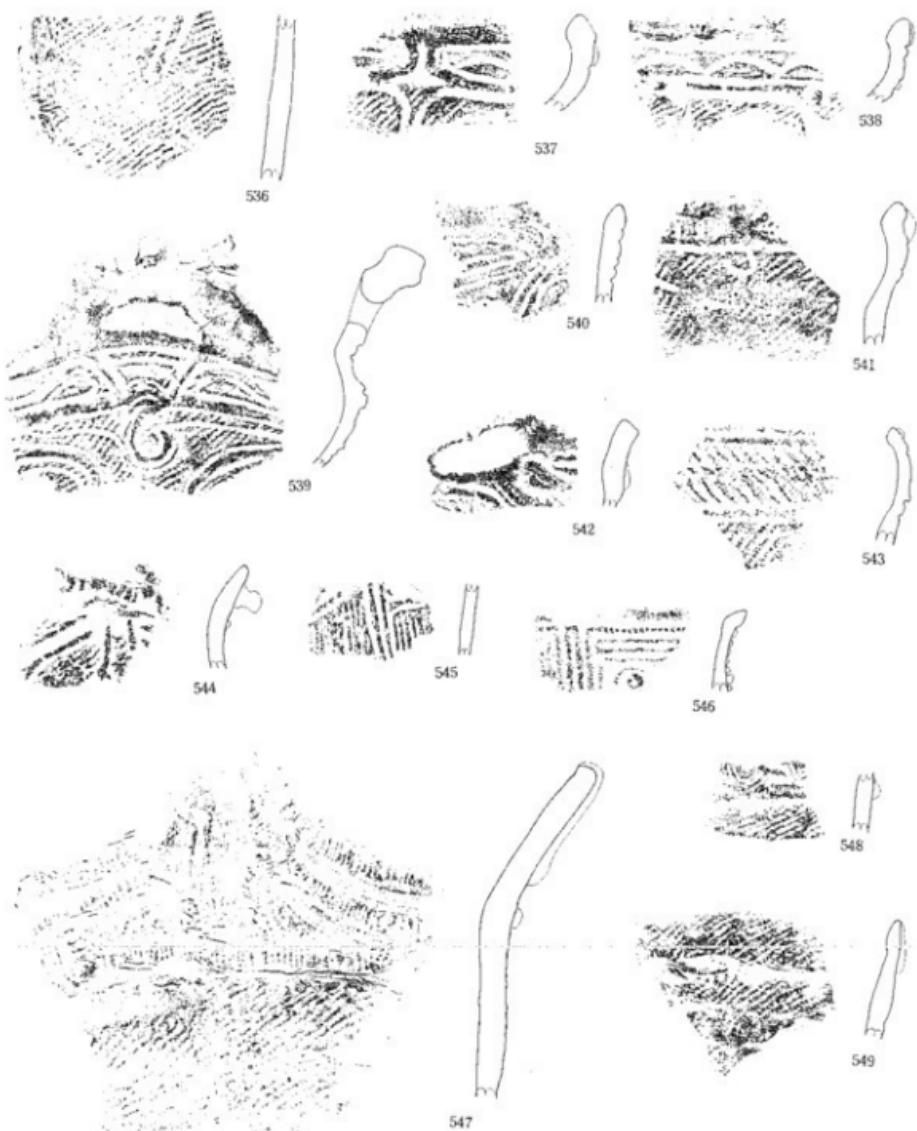
第129図 遺構内出土土器



521-535 8号フラスコ状ビット

第130図 遺構内出土土器

0 10cm



536-546 9号 フラスコ状ビット  
547-549 10号 フラスコ状ビット

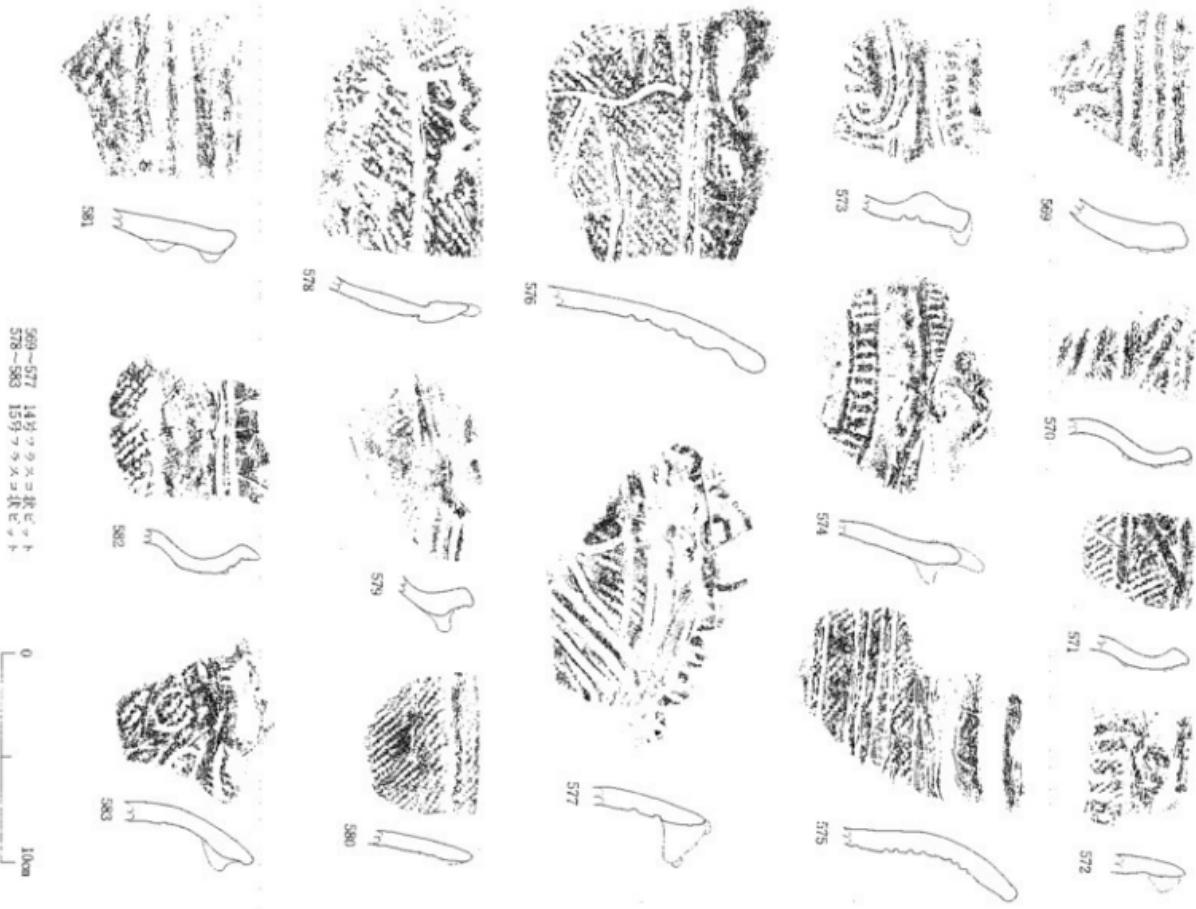
0 10cm

第131図 遺構内出土土器



550～557 11号フラスコ状ビット  
 558～562 12号フラスコ状ビット  
 563～568 14号フラスコ状ビット

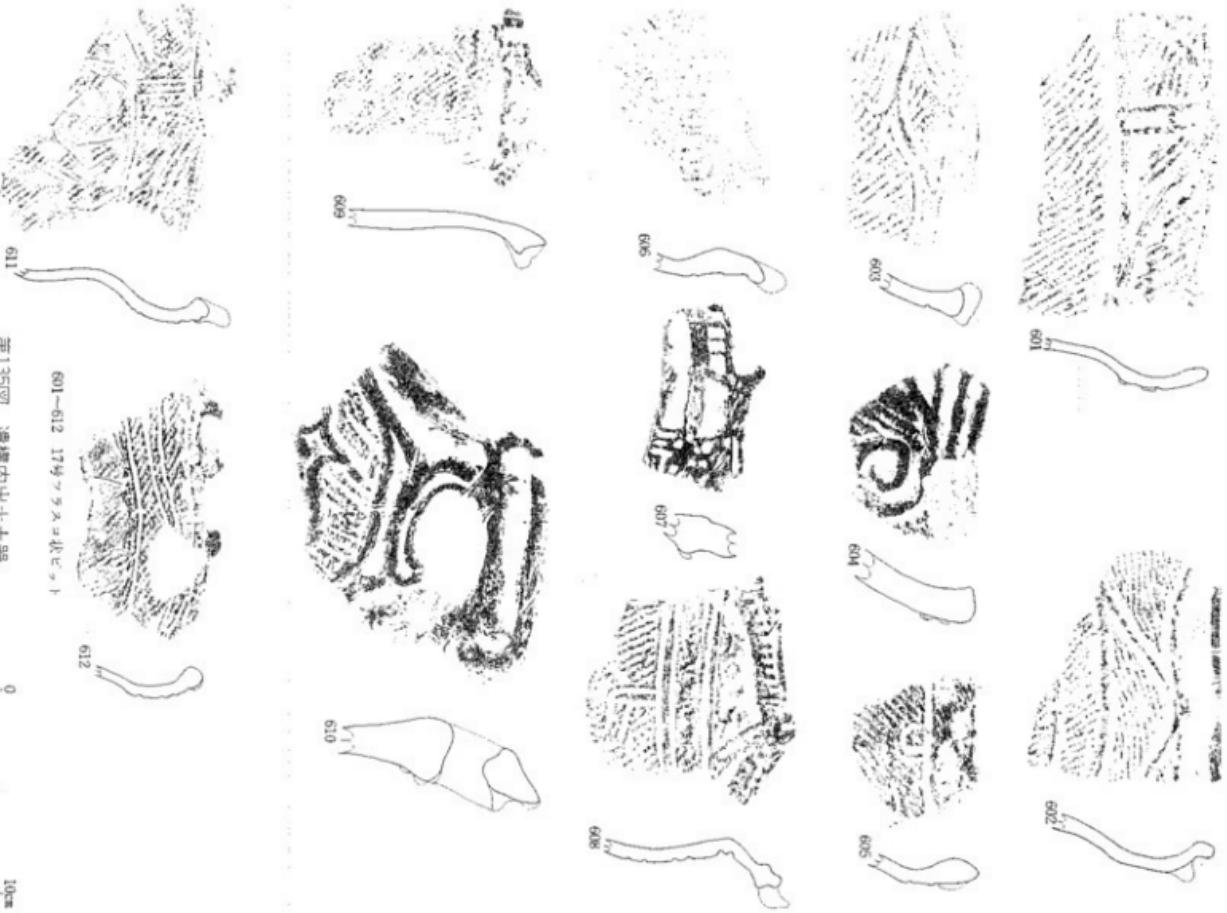
0 10cm



第133回 遺構内出土土器



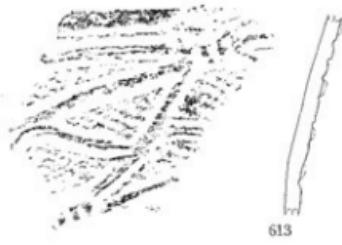
第134図 通横内出土土器



第135図 遺構内出土土器

601~612 17号カラヌコ貝ビット

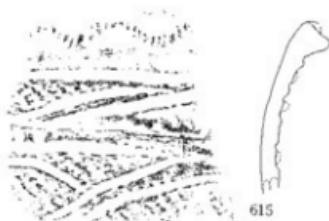
0 10cm



613



614



615



616



617



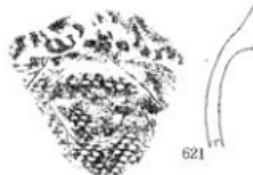
618



619



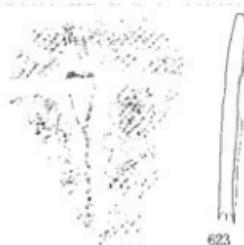
620



621



622



623



624

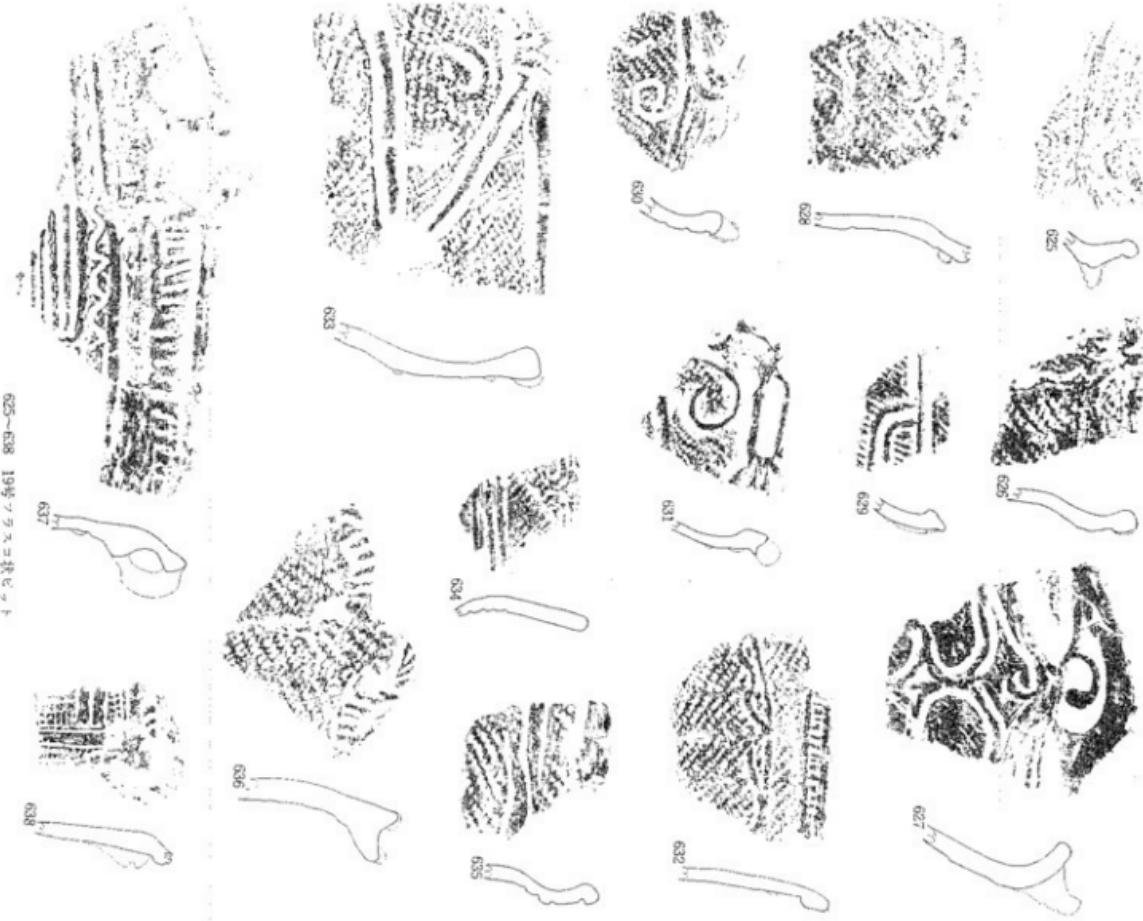
613~621 17号 フラスコ状ビット  
622~64 18号 フラスコ状ビット

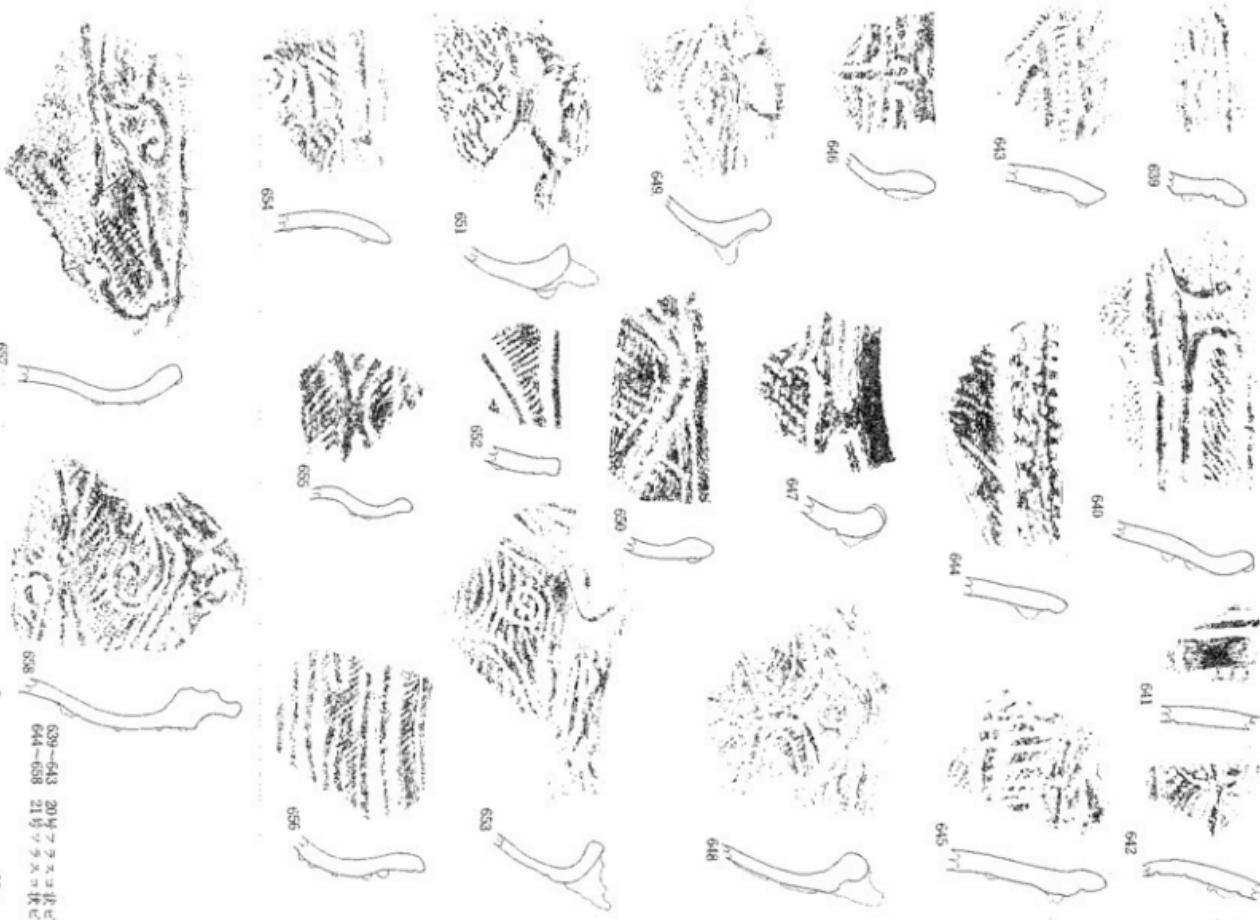
第136図 造構内出土土器

第137図 遺構内出土土器

0  
10cm

625-638 19号・プラスコ状ビット

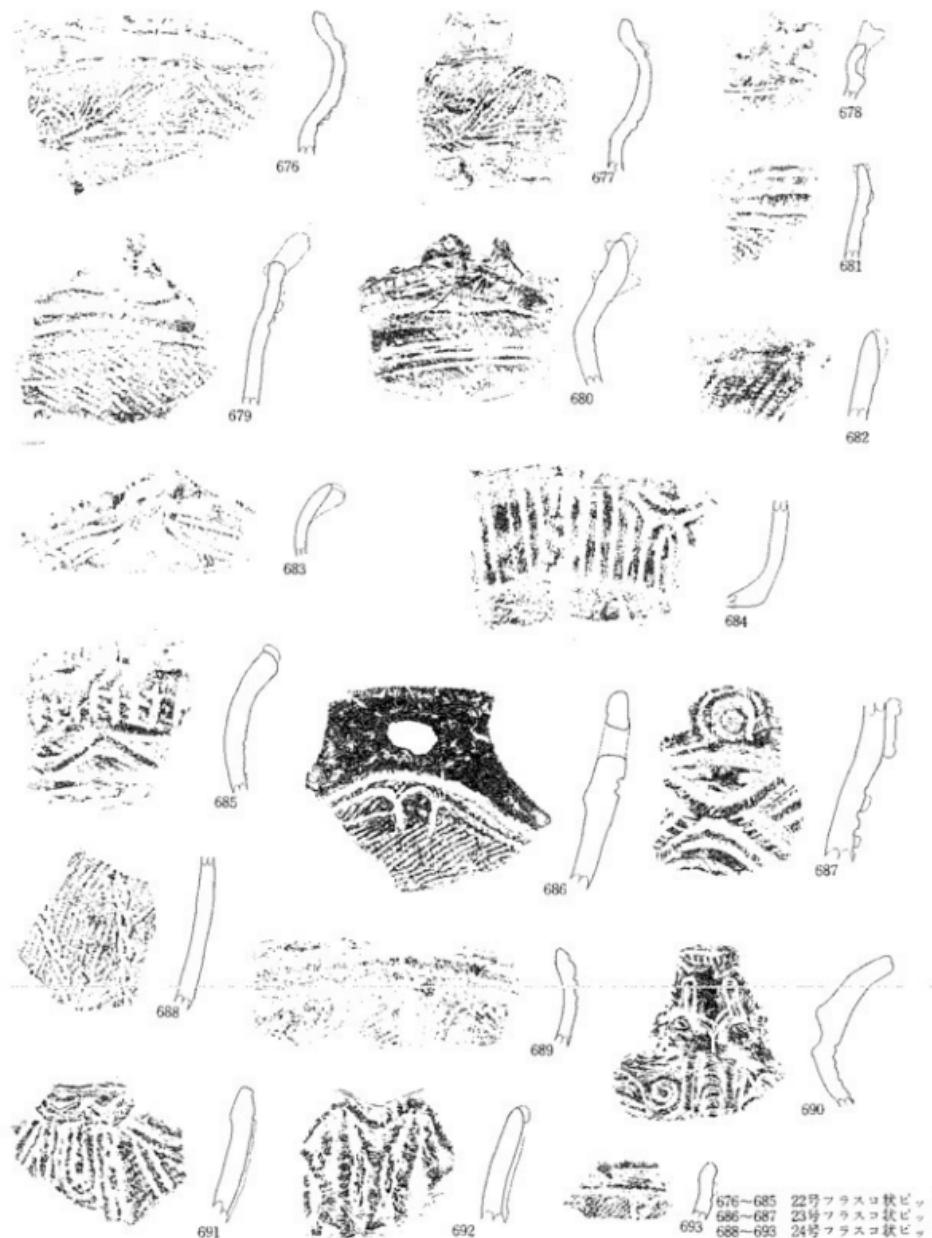




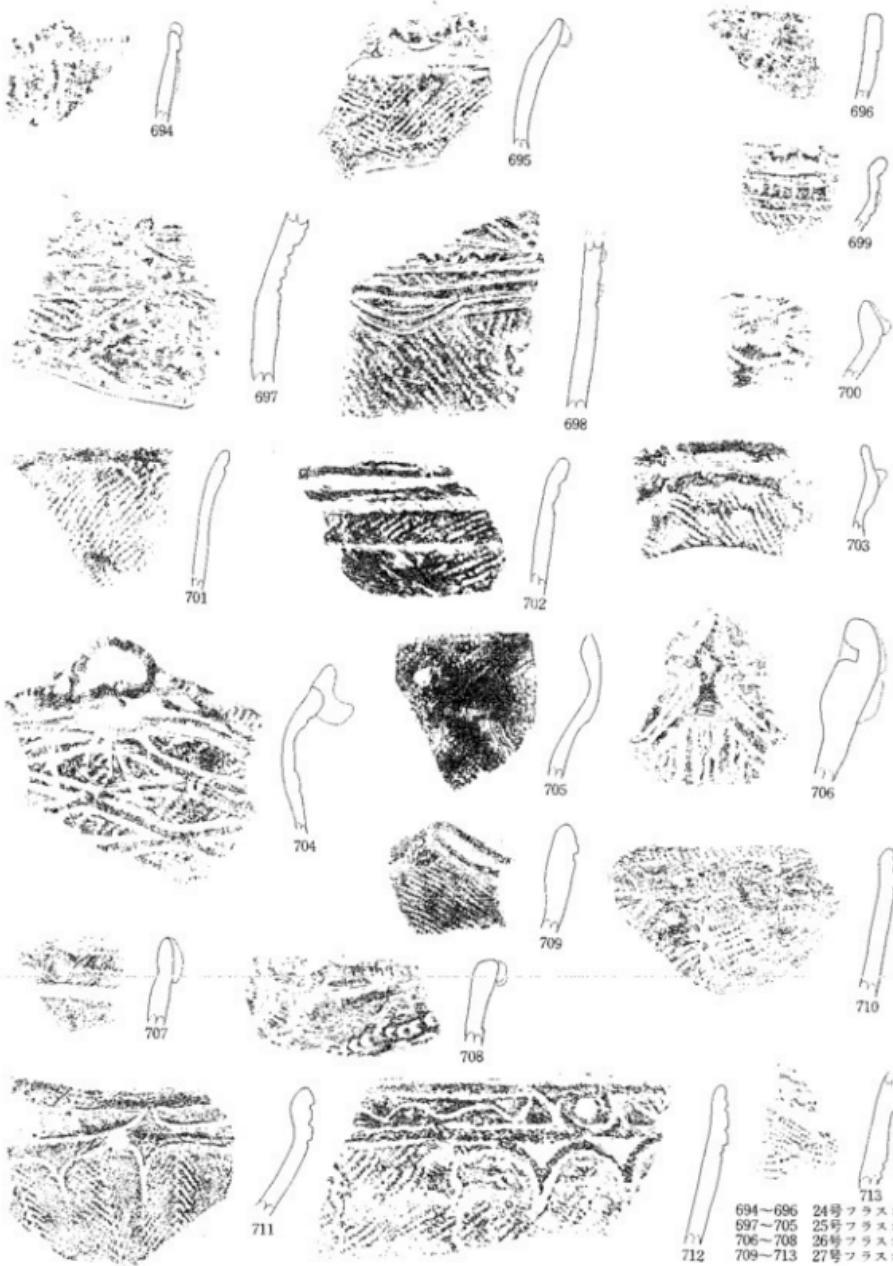
第138図 通横内出土土器



第139図 遺構内出土土器



第140図 遺構内出土土器



第141図 遺構内出土土器

— 184 —

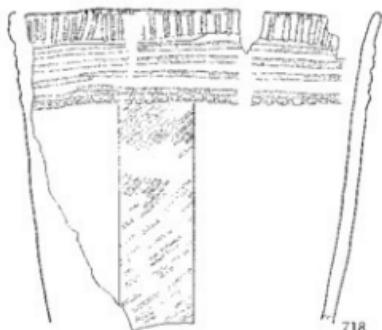
694～696 24号 フラスコ状ビット  
697～705 25号 フラスコ状ビット  
706～708 26号 フラスコ状ビット  
709～713 27号 フラスコ状ビット

0

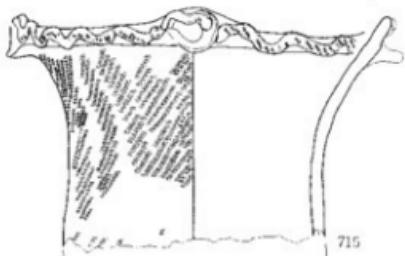
10cm



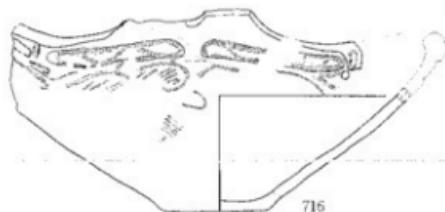
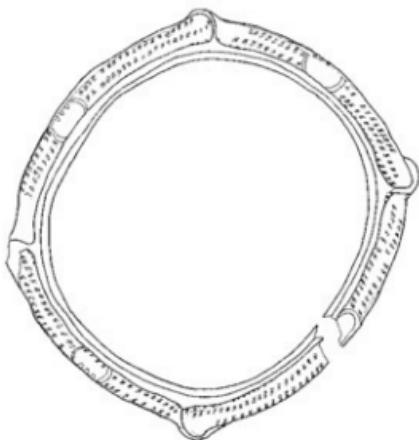
714



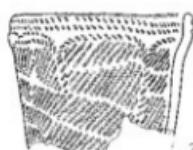
718



715



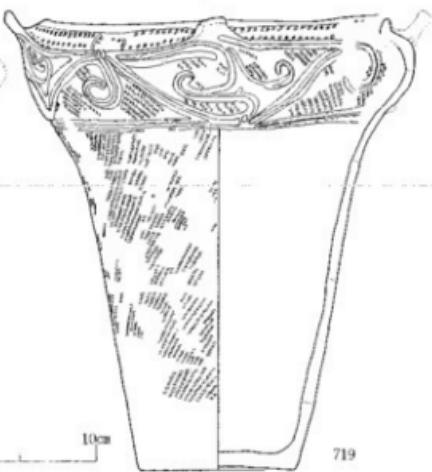
716



717

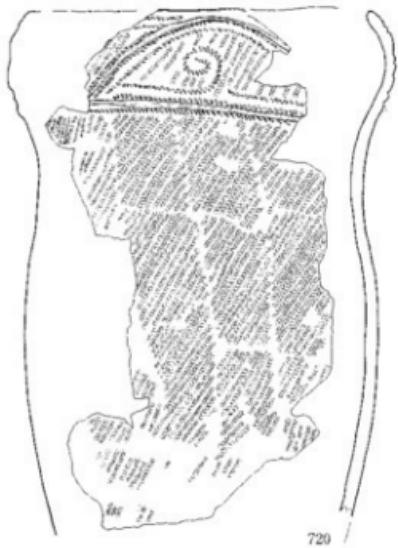
714~716 14号土壤  
717 21号土壤  
718 29号土壤  
719 64号土壤

0 10cm

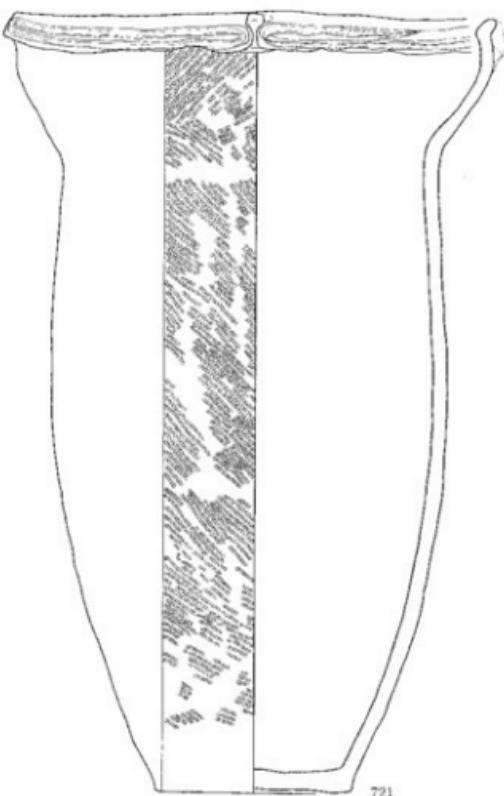


719

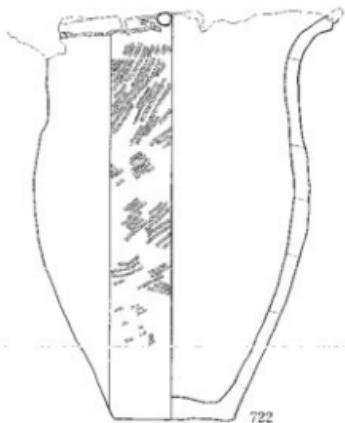
第142図 遺構内出土土器



720



721

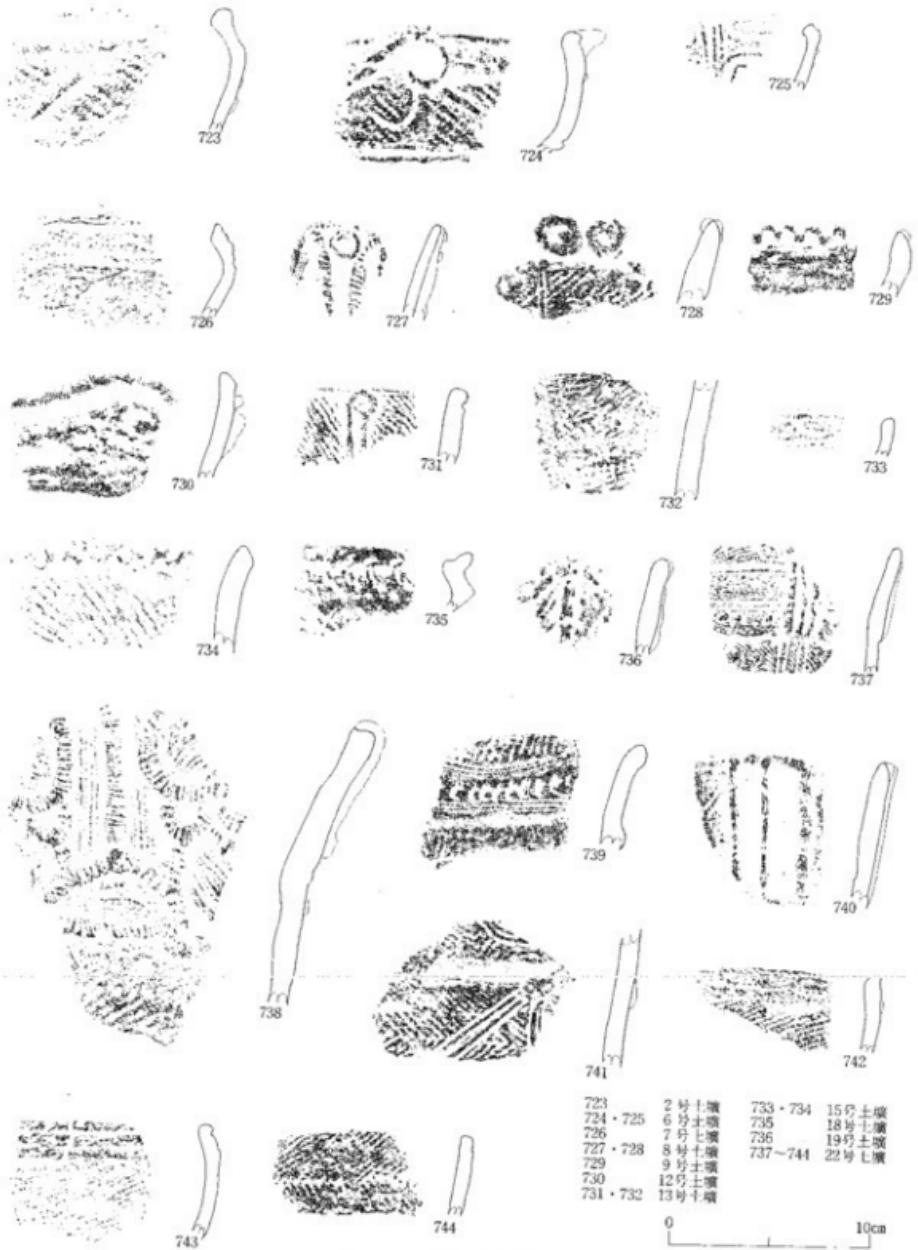


722

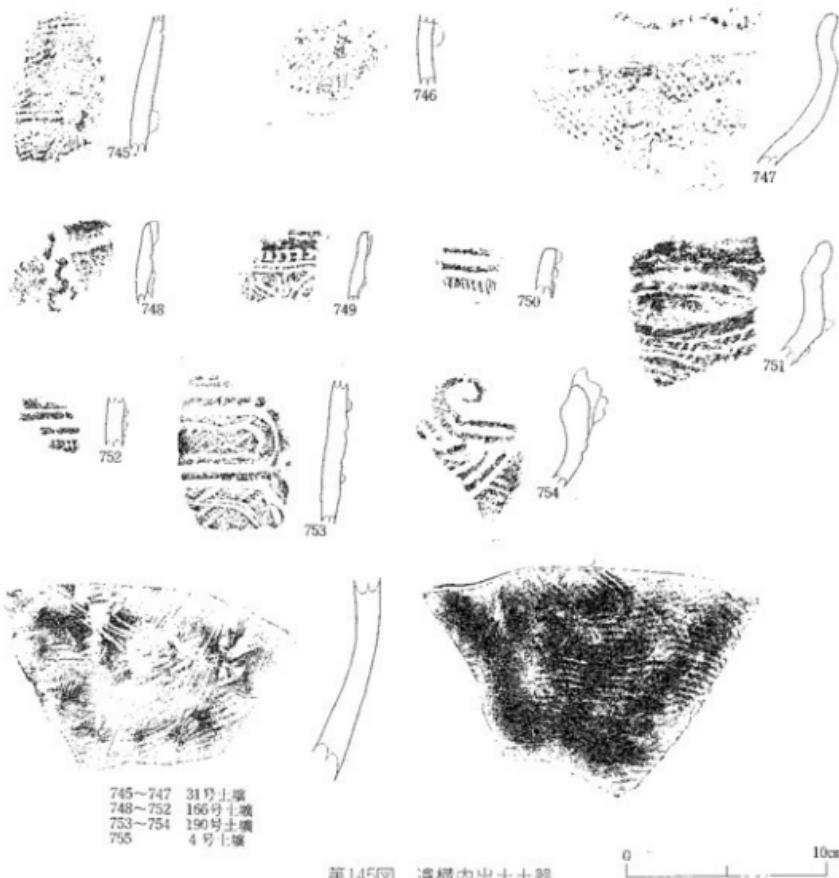
720 105号土壤  
721 138号土壤  
722 164号土壤



第143図 遺構内出土土器



第144図 遺構内出土土器



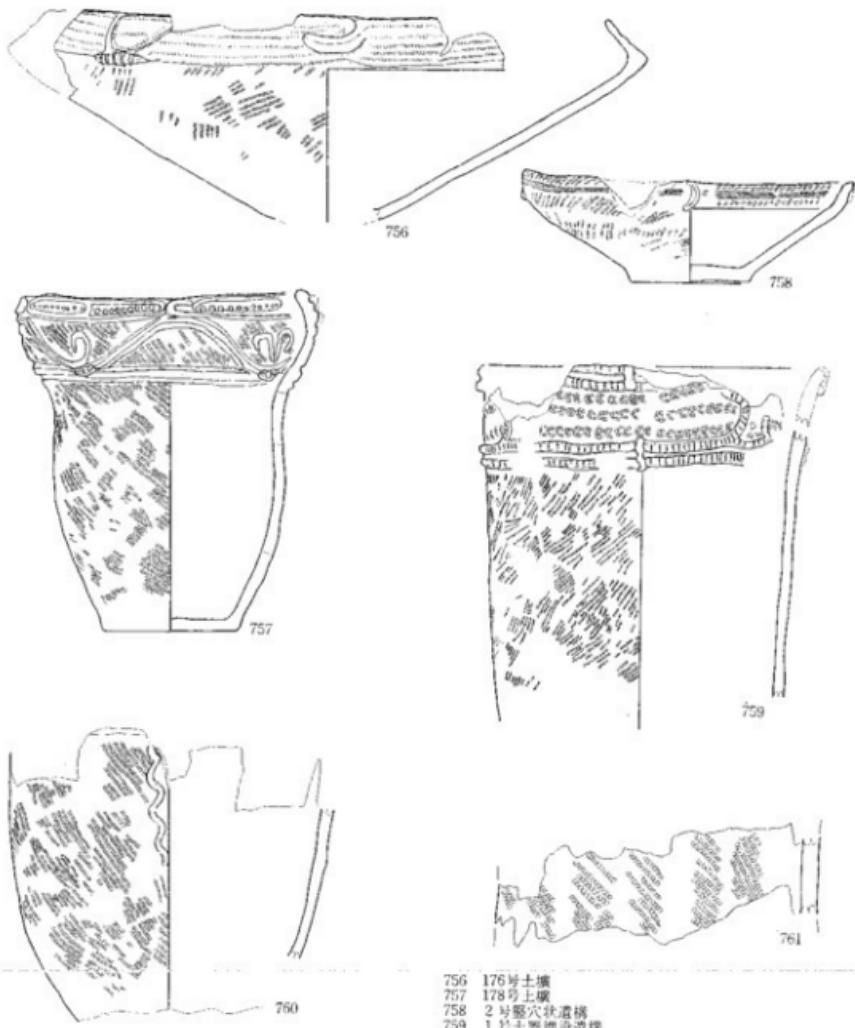
第145図 遺構内出土土器

すもの、半截竹管状工具による刺突で爪形文が施されるものなどがある。

## 2 類土器

口縁部は平縁が主で、中には波状口縁のものもある。器種は口縁部が内傾する浅鉢形土器、口縁部がゆるく内湾するキャリバー形を呈する深鉢形土器などがある。文様は撚糸圧痕文・押壓繩文・粘土紐貼付文・隆帶文・梢円文・渦巻文などが施文される。施文様からa~c類に分られる。

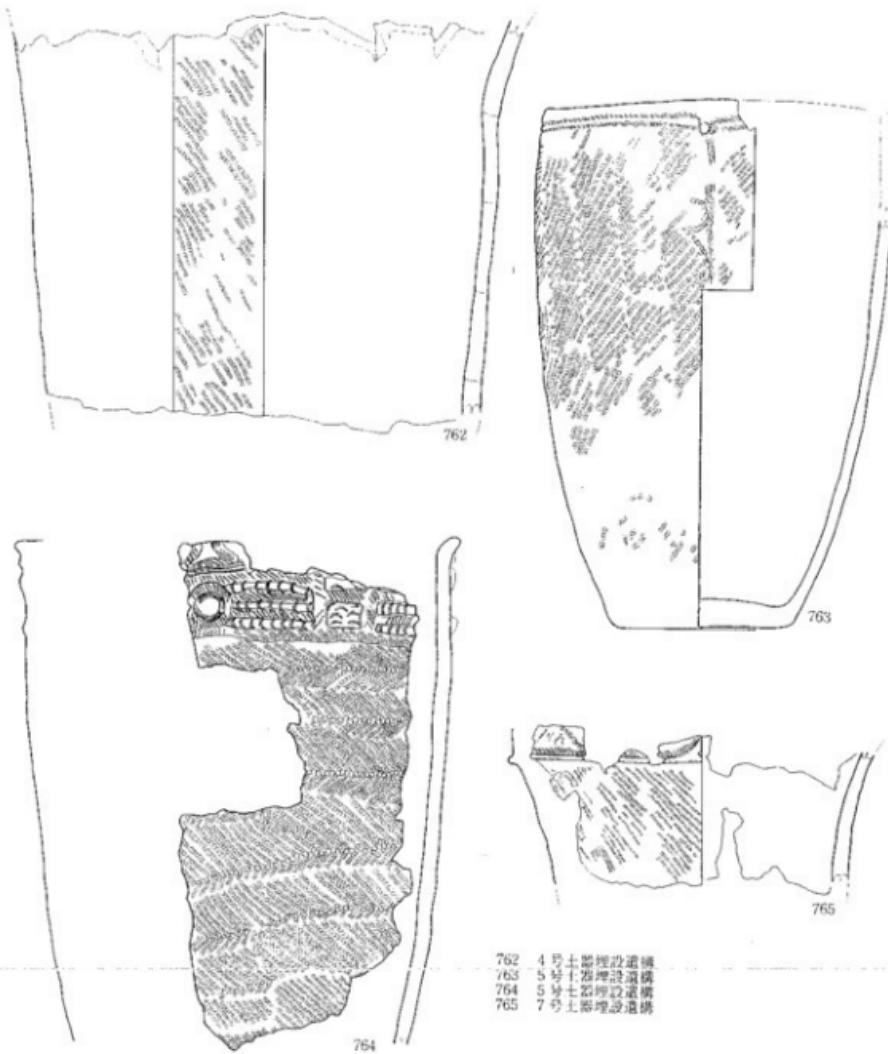
a類 (2・7・17・41・97・106・109・111・116~119・170・172~175・208・224・225・237・246・262・268・277・278・313・314・356・370~375・387・414・415・454・486・488・489・505・508~517・525・548・592・634・635・639・672・686・689・700~703・707・709~713・718・722・726・742・743・756・758・763・765・769・782~798・800・803)



756 176号土壤  
 757 178号土壤  
 758 2号堅穴状遺構  
 759 1号土器埋設遺構  
 760 2号土器埋設遺構  
 761 3号土器埋設遺構

第146図 遺構内出土土器

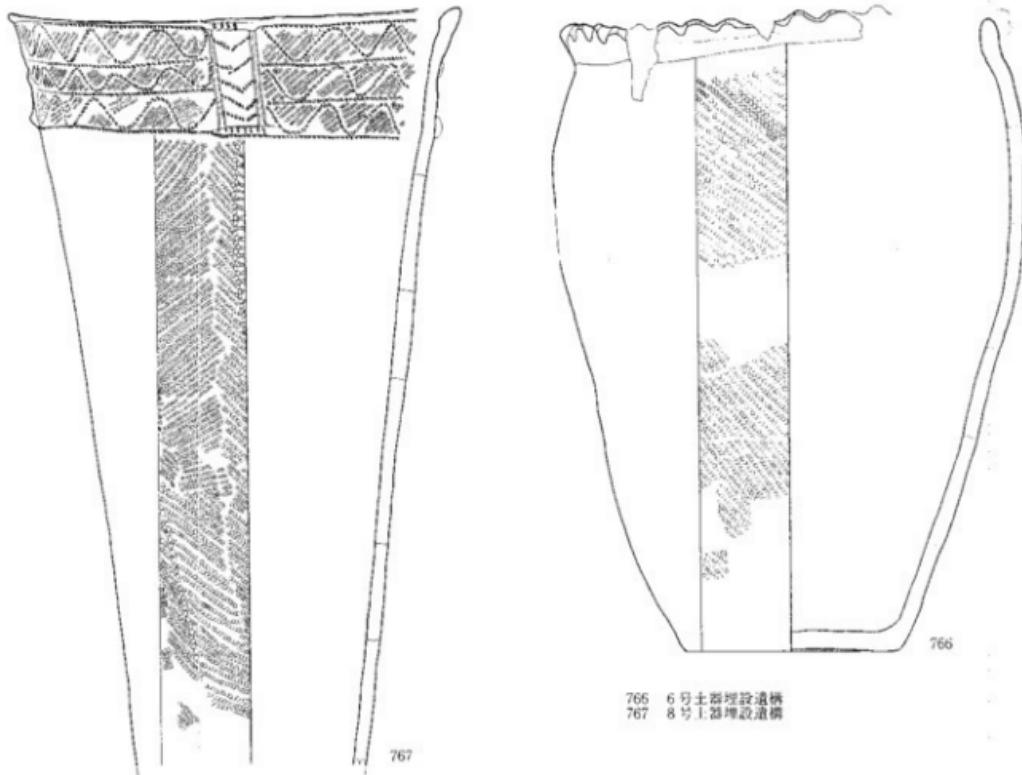




762 4号土器埋設遺構  
763 5号土器埋設遺構  
764 5号土器埋設遺構  
765 7号土器埋設遺構



第147図 遺構内出土土器



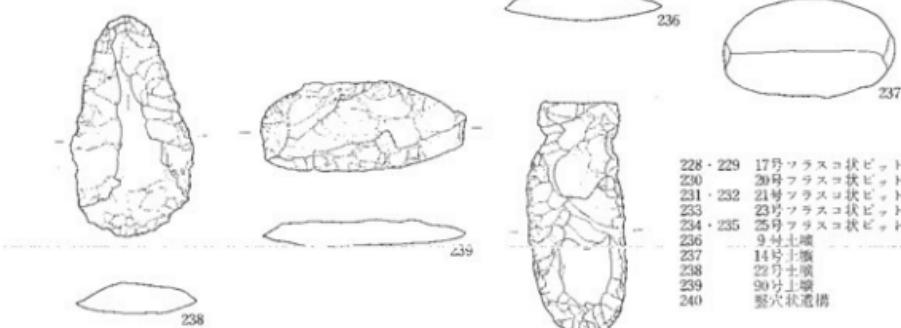
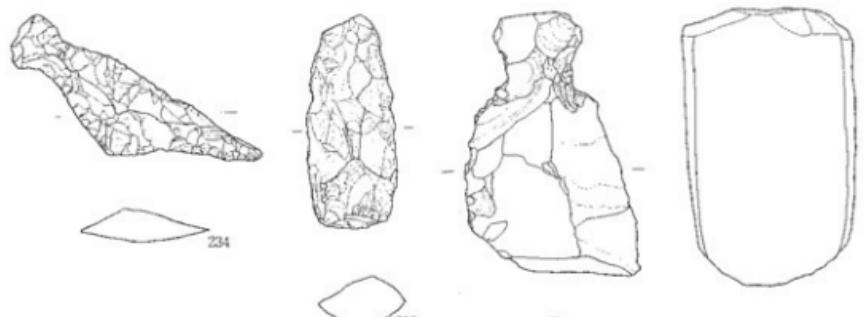
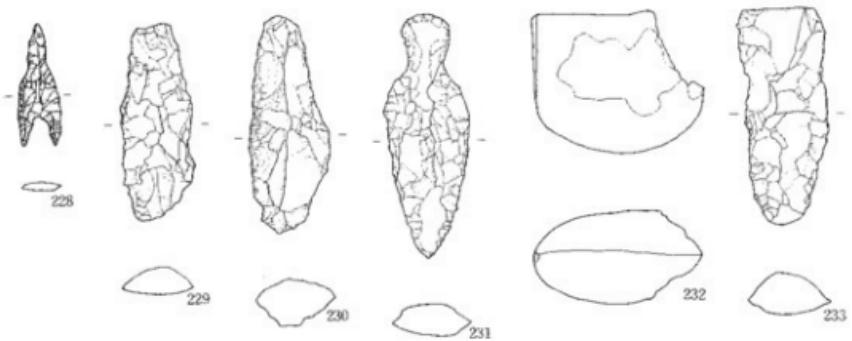
765 6号土器埋設遺構  
767 8号土器埋設遺構

第148図 遺構内出土土器





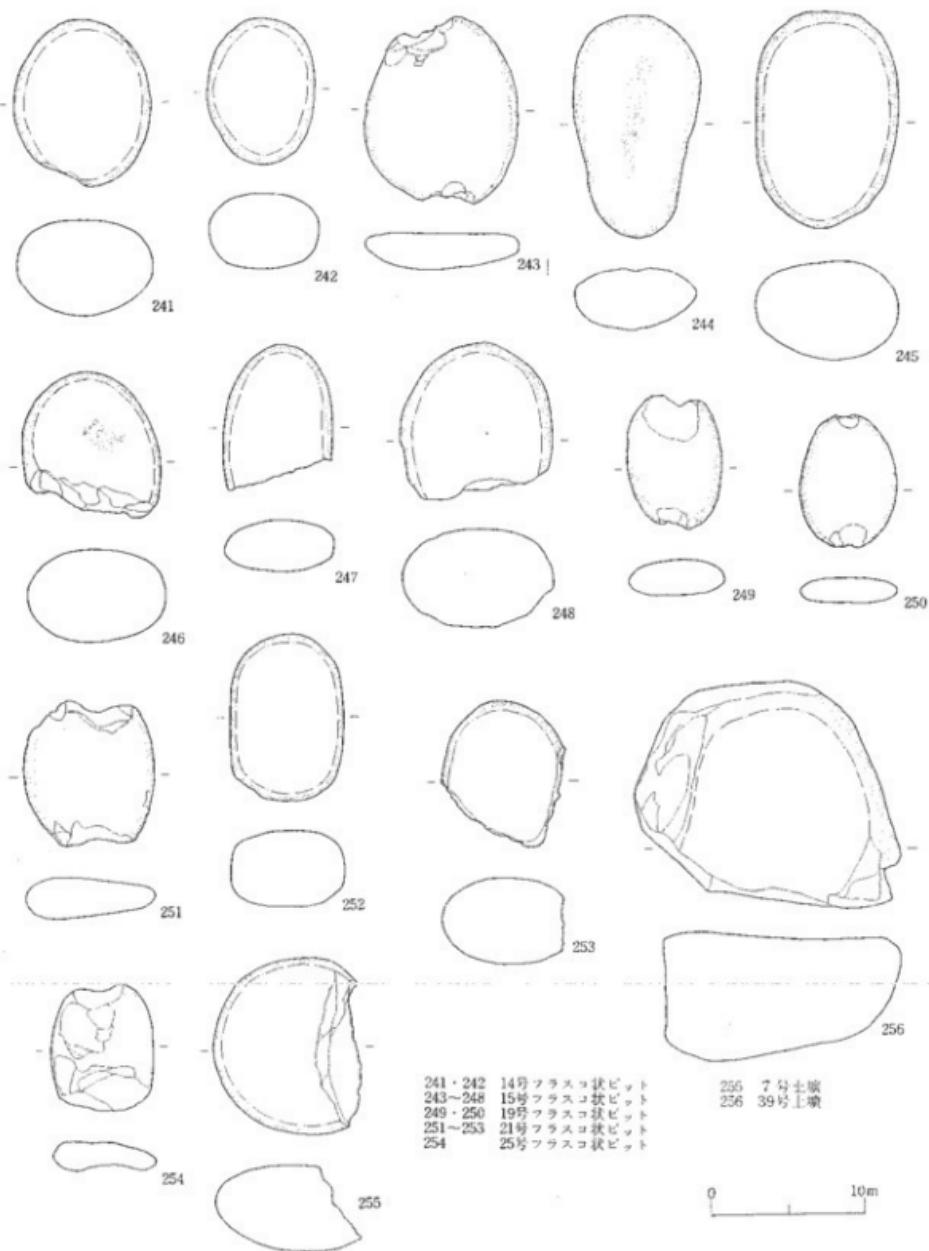
第149図 遺構内出土石器



0 5 cm

- 228・229 17号 フラスコ状ビット  
 230 20号 フラスコ状ビット  
 231・232 21号 フラスコ状ビット  
 233 23号 フラスコ状ビット  
 234・235 25号 フラスコ状ビット  
 236 9号 土器  
 237 14号 土器  
 238 22号 土器  
 239 30号 土器  
 240 整穴状遺構

第150図 遺構内出土石器



第151図 遺構内出土石器

撲糸圧痕文によって主に口縁部、頸部に文様が施される土器である。撲糸圧痕文は単独で平行直線・連弧状・Y字状などに施文される。

b 類 (770・771)

口縁が内傾する浅鉢形土器である。四ヶ所につまみ出したような瘤状の突起を貼付し、細長い梢円形に区画する。771は竹管状工具による爪形文が施される。

c 類 (1・6・33・56・92・154・206・207・233~236・247・310~312・315・333・338~342・360~364・416・417・418・427・430・456・498・499・502・507・522・524・537~542・551・563・564・674・687~688・690~693・716・723・724・804~820)

粘土紐貼付による隆帯が波状・山形に貼付され、それを縁どりする形で撲糸圧痕文・押圧繩文が施される。末端は渦巻文になるものが多い。また梢円文・渦巻文が展開するものもある。

3 類土器

キャリバー形を呈する深鉢形土器が主体をなす。撲糸圧痕文・押圧繩文が施される土器も若干残るが、文様の主体は粘土紐貼付文が隆盛となる。また、沈線文によって文様が施される土器もみられる。施文様からa~d 類に分けられる。

a 類 (75・292・297・406・464・500・543・544・599・658・676・677・720・772)

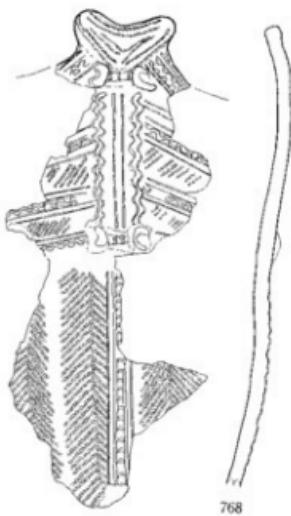
キャリバー形を呈する深鉢形土器で、口縁部に文様が施される。細い粘土紐貼付の隆帯を波状にめぐらし、その両側を撲糸圧痕文・押圧繩文によって縁どりする。さらに渦巻文などが施される。

b 類 (15・18・20・68・77・99・112・141・142・145・155~157・177~179・180~182・214・215・269・293・316~318・334・352・365~367・376・377・390~393・395~397・401・437・446~448・469・497・526~528・558・559・569~571・581・582・601~603・633・640・655~657・673・675・719・721・757・821・822・824・825)

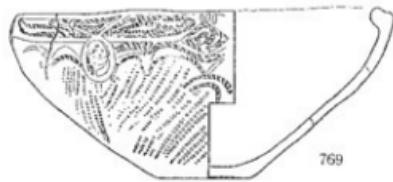
撲糸圧痕文・押圧繩文が消滅し、細い粘土紐貼付文が口縁部に施される。隆帯は直線・波状にめぐり、渦巻文もみられる。

c 類 (5・21・24・35・53・60~63・80・93・113・124・131~135・144・146・149・158~160・161~164・183・184・187・193・238・249・257・259・270・271・273・319・320・324・368・378~380・383・419~423・426・432・433・438~440・449・465・467・472・529~534・566・572~574・581・604~608・610・613・629~632・637・659~663・671・714・730・753・754・823・827~837・839・842~846)

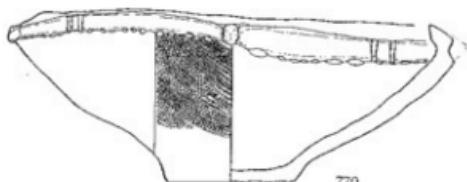
キャリバー形、波状口縁をなす深鉢形土器が主体を占める。口縁部に大きな把手が付されるものもある。粘土紐貼付が文様の主体をなし、胴部にまで施され、垂下・平行・鋸歯状・渦巻・梢円文などが施文される。842は橋状把手が付けられ、843・844は太い隆帯が付される。口縁部には縁方向に刻みが施されるものもある。地文は單節斜繩文が圧倒的に多く、口縁部と体部では繩文方向が異なるものも認められる。



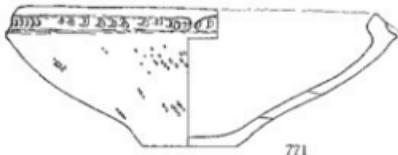
768



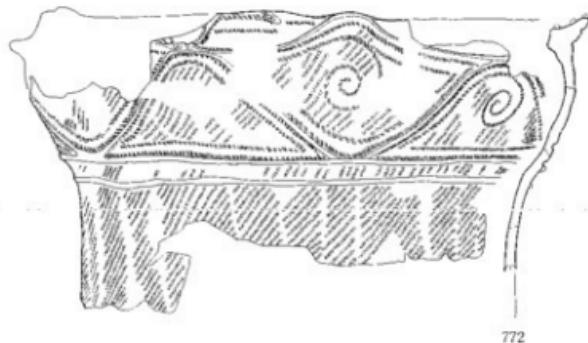
769



770



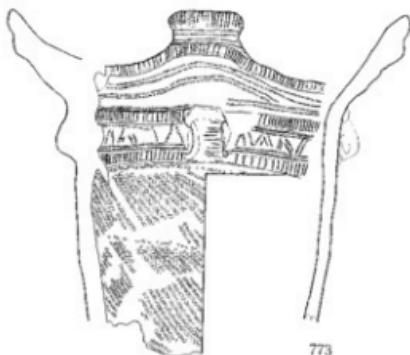
771



772

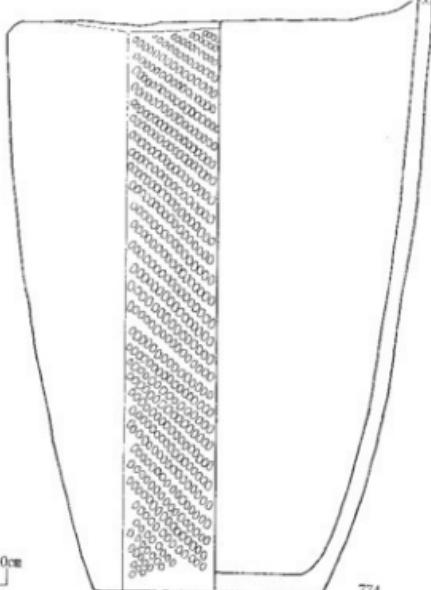


第152図 遺構外出土土器



773

0 10cm



774

第153図 遺構外出土土器

d類 (14・19・78・79・121・125・128~130・150・151・186・196・213・325・369・404・575・576・611・612・678~671・838・840・841・848)

粘土紐貼付文はほとんど消滅し沈線文が主体となる。平行沈線文・渦巻文などが施文される。848は縦に垂下する沈線文と、菱形をなす沈線文が付されている。

4類土器 (3・52・64・78・325・369・433・440・471・474・483・668・847・848)

頸部が膨らみ、頸部から口縁部にかけてゆるく外反する小形の深鉢形土器が主体をなす。沈線によって文様が施され、頸部に数条の沈線がめぐり頸部にかけて垂下する沈線から、渦巻文・フ字状文・棘状文などが展開する。

5類土器 (69・385)

頸部がゆるく膨らみ、口縁部にかけてゆるく外反する深鉢形土器である。沈線区画の磨消帶によって文様が施され、「J」字状・曲線で横方向に大きく文様が展開する。

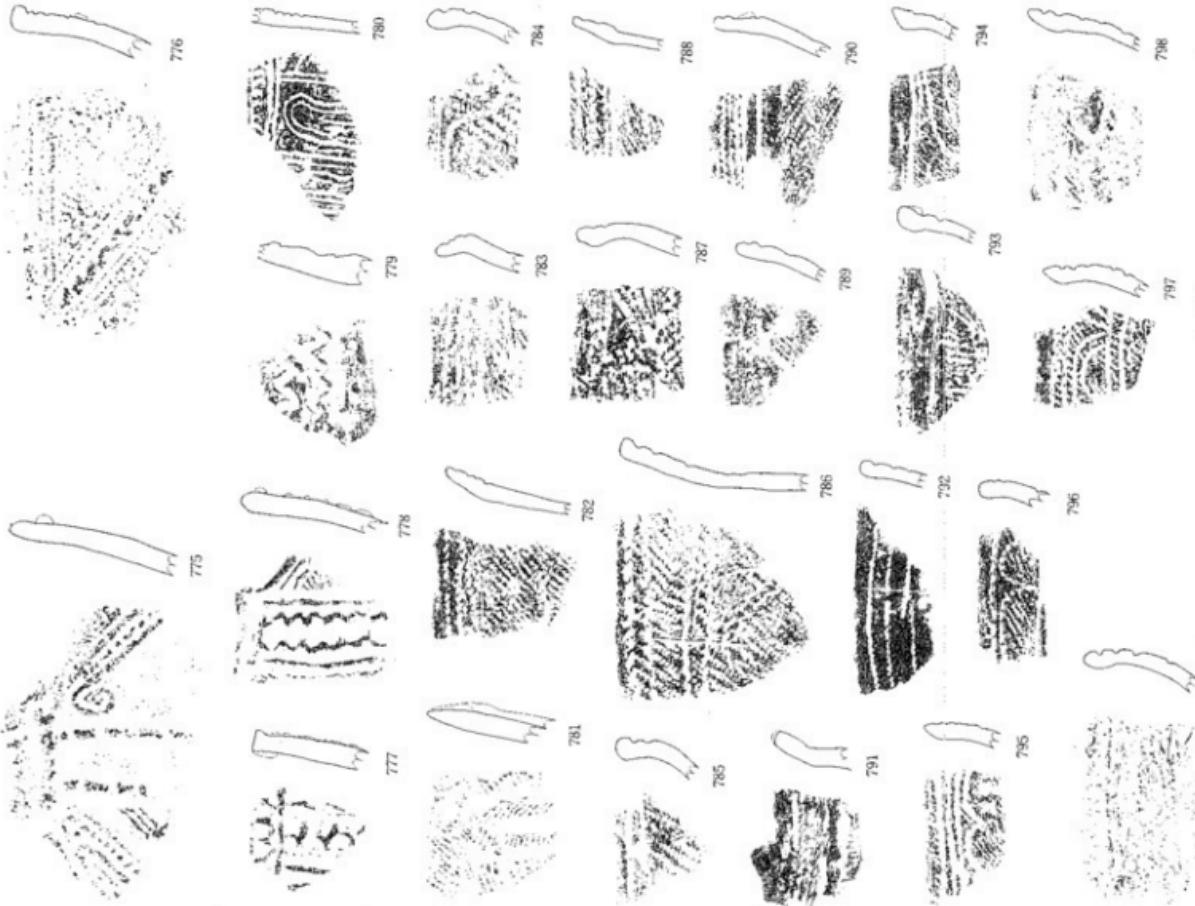
## 第二群土器

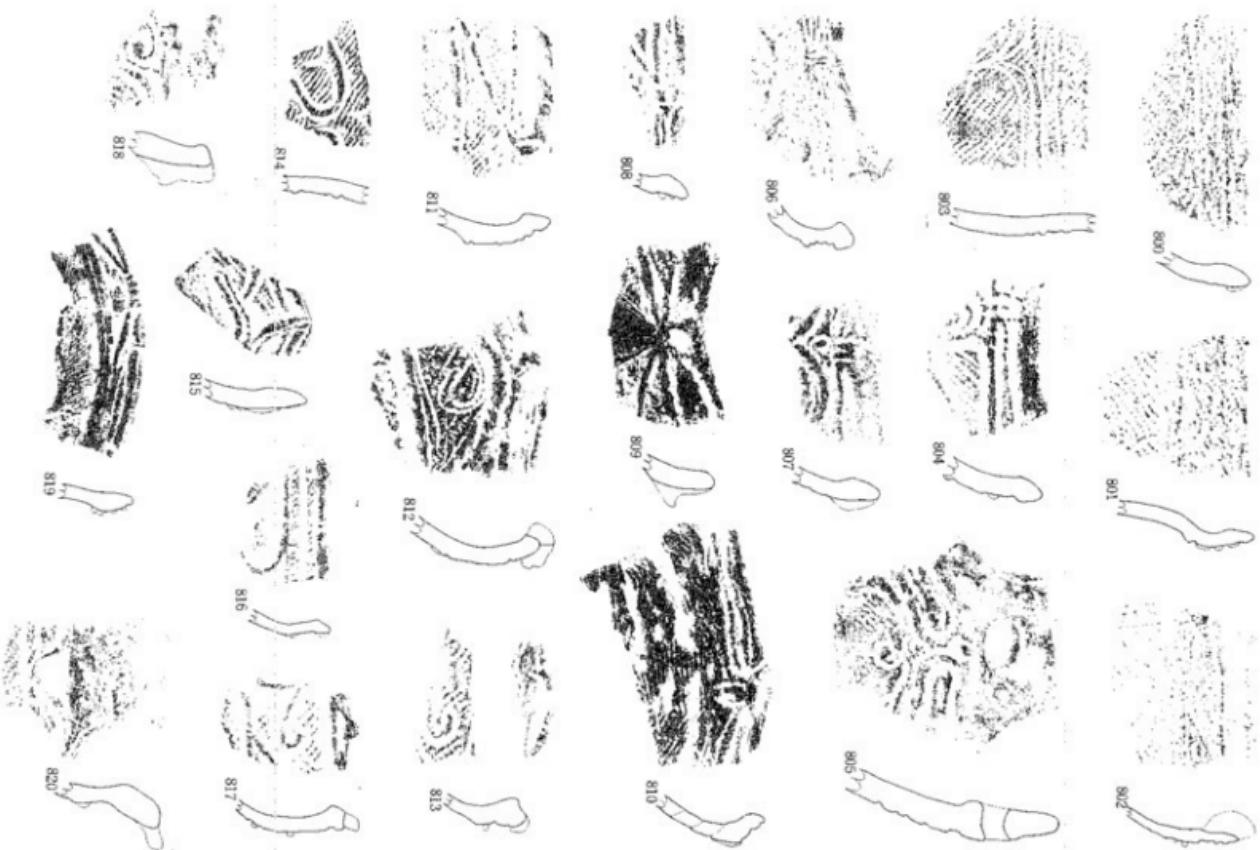
1類土器 (34・250・261・272・303・327~329・457・491・495・692・738・767・773・858~863)

頸部から口縁部にかけて外反し、弁状把手を有する深鉢形土器である。773のように頸部に橋状把手を付すものもある。口縁部・頸部に粘土紐貼付の隆帯をめぐらし、その上部に刻み状の撚糸圧痕が施され、隆帯間を充填して、波状・鋸歯状に撚糸圧痕文が施文される。

第154図 漢城外出土土器

0 100 mm





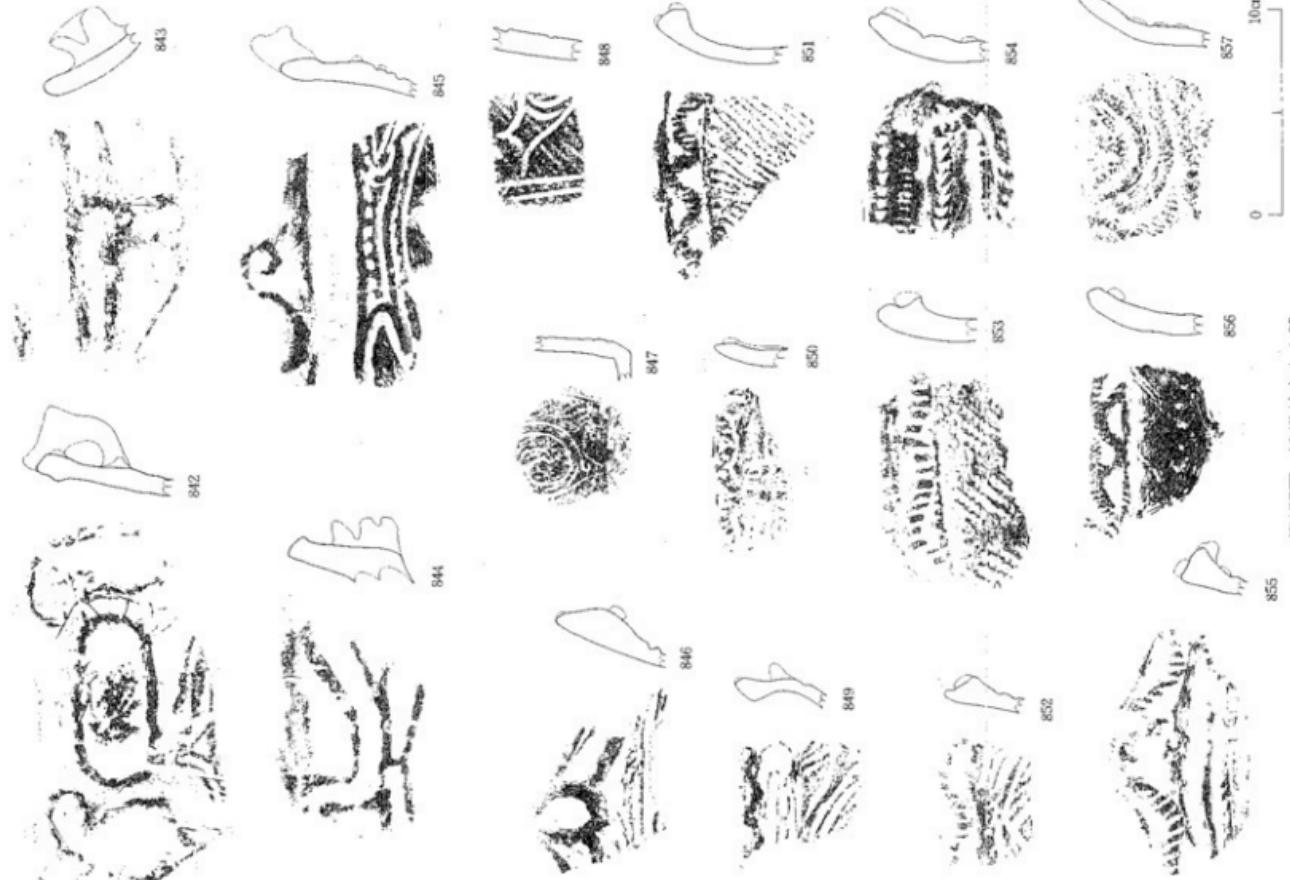
第155圖 通構出土土器

— 199 —

0  
1  
10cm



第156図 漢構外出土土器



第157図 遺構出土土器



858



859



860



861



862



863



864



865



866



867



868



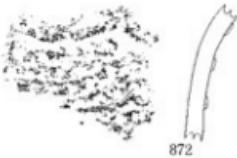
869



870



871

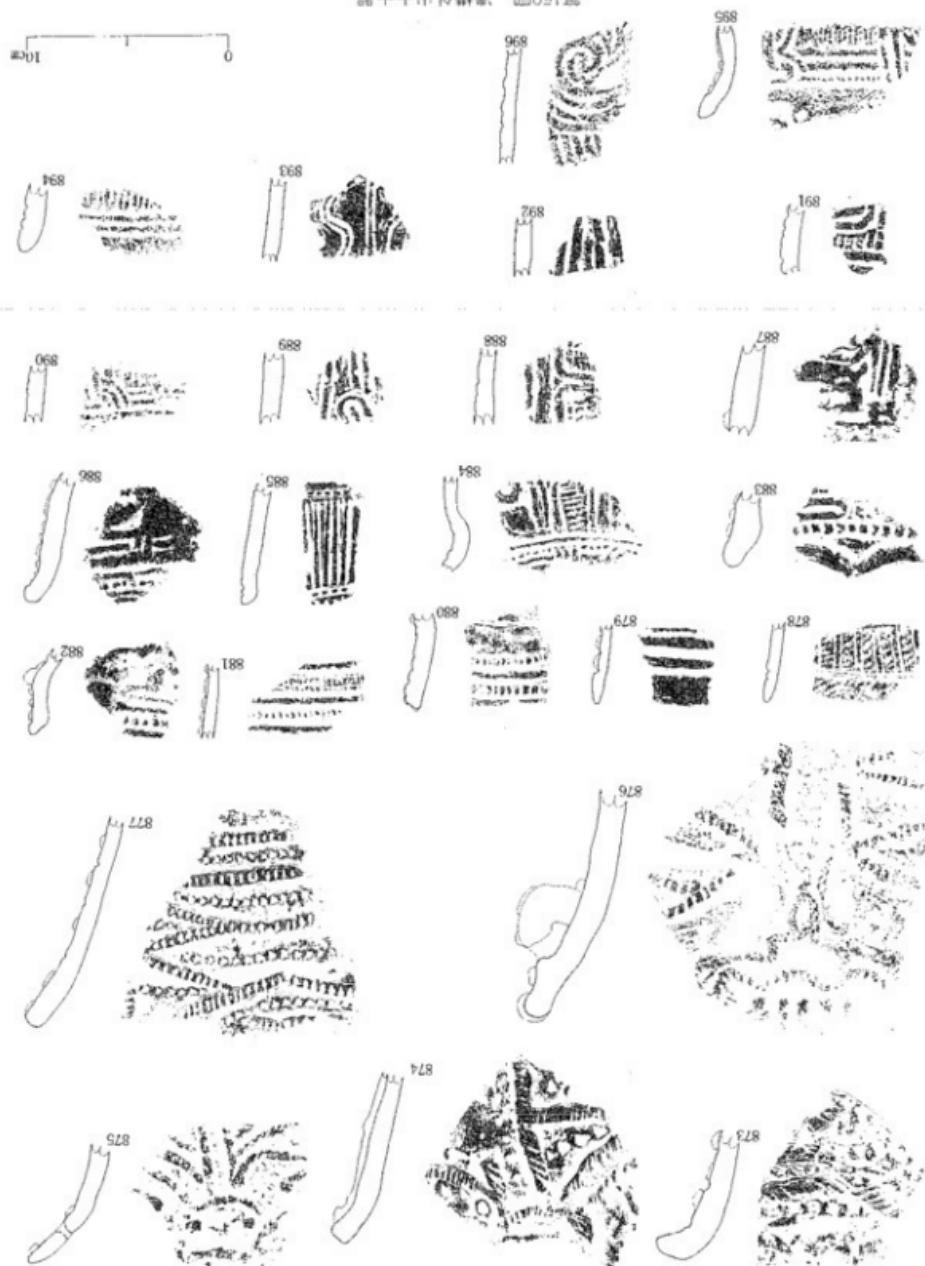


872



第158図 遺構外出土土器

第159圖 滬縣外出土玉器



**2 頸土器** (12・42・126・254・264・283・345・348・519・520・547・593・666・708・759・764・864～868)

頸部から口縁部にかけて外反し、弁状把手を有する深鉢形土器が主体である。粘土紐貼付の隆帯がめぐり、直線・山形・弧状など複雜になる。その上部には刻み状の撫糸圧痕・半截竹管工具による爪形の刺突文などが施文される。それらの間を充填して撫糸圧痕文・撫糸圧痕による擬似爪形文が施される。

**3 頸土器** (23・27・30・31・70・114・195・231・232・240・255・304・305・428・435・487・544・869～877)

頸部から口縁部にかけて外反し、弁状把手を有するものと、平縁のものがある。粘土紐貼付の隆帯はわずかに細くなり、胴部にまで下がる土器もみられる。隆帯上には刻み状の撫糸圧痕が残るものと、まったく施文されないものがある。また、半截竹管状工具による爪形文が施文されるものもある。隆帯間を充填する撫糸圧痕文はみられなくなり、変りに爪形・三角状の刺突文が施されるものがある。

### 第三群土器

**1 頸土器** (349・350・386・408～410・412・545・684・685・878・881～887・890・892・893・896)

口縁部や胴部に縦位の半隆起線文が施文される。口縁、頸部に烈点状の刻みが施されるものもある。

### 2 頸土器 (546・879～883)

口縁部に横方向に半隆起線文を施し、その上部に半截竹管状工具による爪形文を施している。

### 3 頸土器 (263・492・638・888・891)

地文は無文、細かい格子目文である。半隆起線文によって曲線・直線・渦巻文などが施文されている。492は二ヶ所に山形口縁を有する深鉢形土器である。口縁部、頸部に二条づつ半隆起線文がめぐり、頸部にL形・瘤状に粘土紐貼付が施される。胴部は細かい格子目文の地文に半隆起線がL字・クランク状に展開する。

### 4 頸土器 (586・894・895)

口縁部は無文帶で横位に半隆起線文が施される。その下には連弧状に縦位に文様が施文されている。

**第四群土器** (137・138・185・211・212・251・252・260・326・343・344・357～359・381・400・443・481・485・501・507・577・583・614～618・620・621・636・664・665・667・683・685・694・695・704・715・849～857)

大木式土器と円筒式土器の中間形式とも思われる土器群である。平縁のものもみられるが、波状口縁が主体を占める。頸部から口縁部にかけて外反し、胴部が膨らむ深鉢形土器が多い。文様の主

体は口唇、口縁に波状の粘土紐貼付による隆帯をめぐらし、上部に刻み状の撻糸圧痕が施されることである。口縁部以下の文様は、細い粘土紐貼付文・波状・弧状・r状に撻糸圧痕文、ヘラ状工具による沈線文が描かれる。また、爪形文なども施文される。

#### 土製品（第 160～163 図）

1・2 はミニチュア土器と思われる。1 は口縁部の二ヶ所に穿孔がある。3 は舟形を呈する土製品である。内部は中空で上部の一端に穴が穿たれる。土笛と思われる。4・5 は側面が鼓状を呈する。4 は中心部に穿孔がある。耳飾りと思われる。6 は中心に小さな穿孔のある円盤状土製品である。7～10 は三角・円・角柱形を呈する。7 は中央に一条の切り込みがまわっている。9 は等間隔に沈線がまわり、片面に三条の沈線が縦に走っている。10 はきれいに面取りされ、両端に沈線がまわる。11～18 は三角形土製品である。11～14 は片面に竹管状工具による刺突文が施されている。14 は弧状に撻糸圧痕文が配される。16～18 は無文である。19～27 は土偶である。19 は下半身が欠損する。顔は抽象的に表わされ、胸に乳房が付される。表裏に竹管状工具による細い沈線と刺突文が施される。20 は胸部で背面に沈線が施され、背骨ラインがリアルである。21 は足部、22 は腹部が大きく膨らみ、両足は非常にリアルに作られている。23 は胸・腹部で沈線で文様が描かれ、背面には渦巻文がみられる。首部の欠損箇所に厚くアスファルトが付着している。24・27 は頭部で、目・口・鼻などが表されている。25 は腹部が膨らみ中央に縦に一本沈線が施される。26 は胸部で表面に刺突・鋸齒状文が施される。33 は土冠である。長さ 9.1 cm、底部巾 5.3 cm、高さ 6.1 cm を測る。側面は三角形を呈し、下部で段がつき底部となる。側面の一端に穿孔されており、沈線によって文様が描かれている。底部の中央部分はくぼんでいる。

#### 石製品（第 162・163 図）

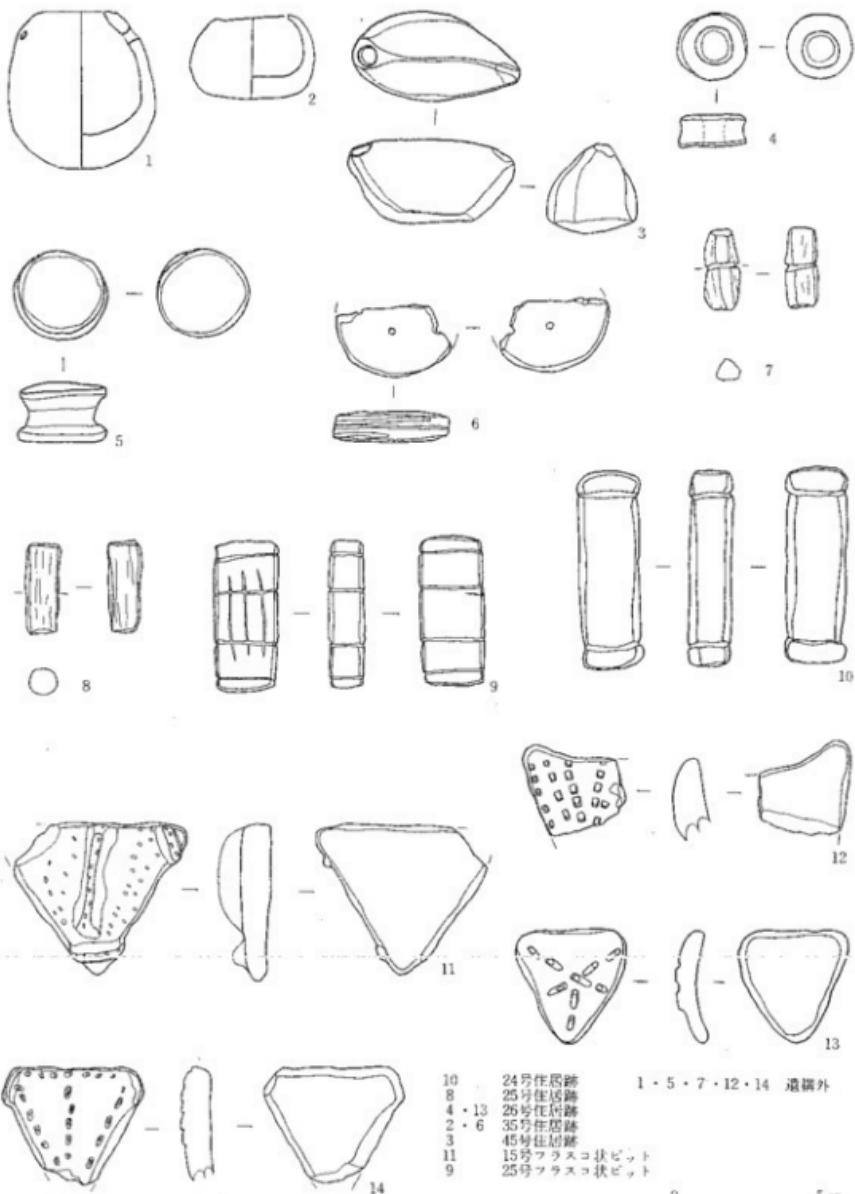
29 は卵形を呈し上部に穿孔が施される。磨かれており硬玉製の大珠である。30 は円形を呈し中央に穿孔がある。32 はハート形を呈し、上部の両側に穿孔されている。表裏面には擦痕が多数みられる。これらはいずれも装飾品としての用途が考えられる。31 は一端が欠損する石棒状のもので、きれいに面取りされている。34 は石冠である。長さ 10 cm、底部巾 5 cm、高さ 3.7 cm を測る。正面からみると「かまぼこ」形をなし、側面は三角形を呈し下部に広い段がつく。一側面から底部にかけて斜めに穴が穿たれている。段の正・側面には沈線によって円・渦巻文などが施されている。底部は平坦で擦痕が多数みられる。

#### 遺構出土石器（第 164～171 図）

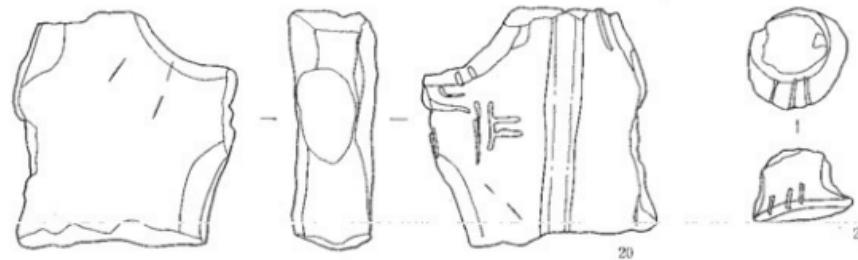
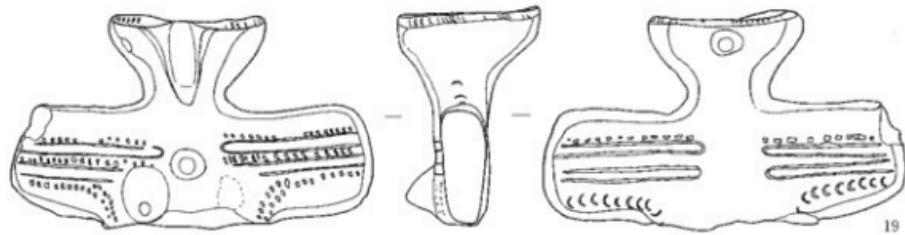
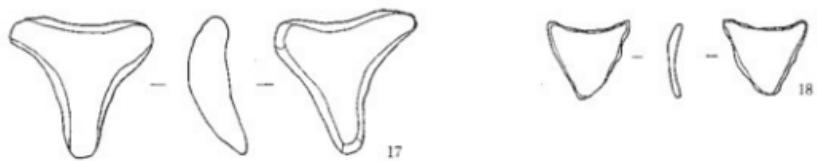
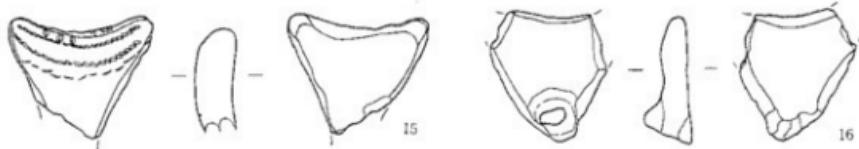
石鏃：257～273 は無茎の石鏃で、258・266・271 は表裏にアスファルトが付着している。274 は柳葉形、275 は有茎の石鏃である。石質はすべて頁岩である。

石錐：276～279 は基部と錐部が明確に区別できる。278・279 は錐部先端が欠損している。石質は頁岩である。

石匙：280～293 は綫形、294～298 は横型の石匙である。量的には綫型石匙が多い。297・298



第160回 遺構内・外出土土製品



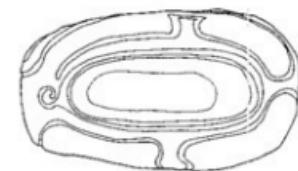
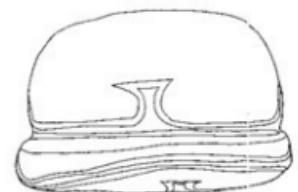
- 20 23住居跡
- 21 30住居跡
- 18 42住居跡
- 22 11プラスコ状ビット
- 16 21プラスコ状ビット
- 17 25プラスコ状ビット
- 15・19 道構外

0 5 cm

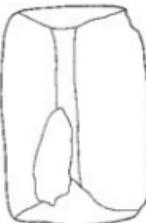
第161図 道構内・外出土土製品



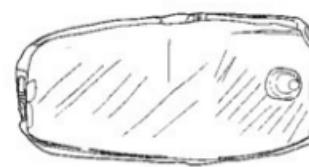
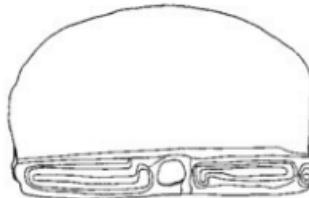
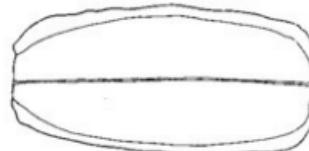
第162図 通構内・外出土土製品・石製品



33



33

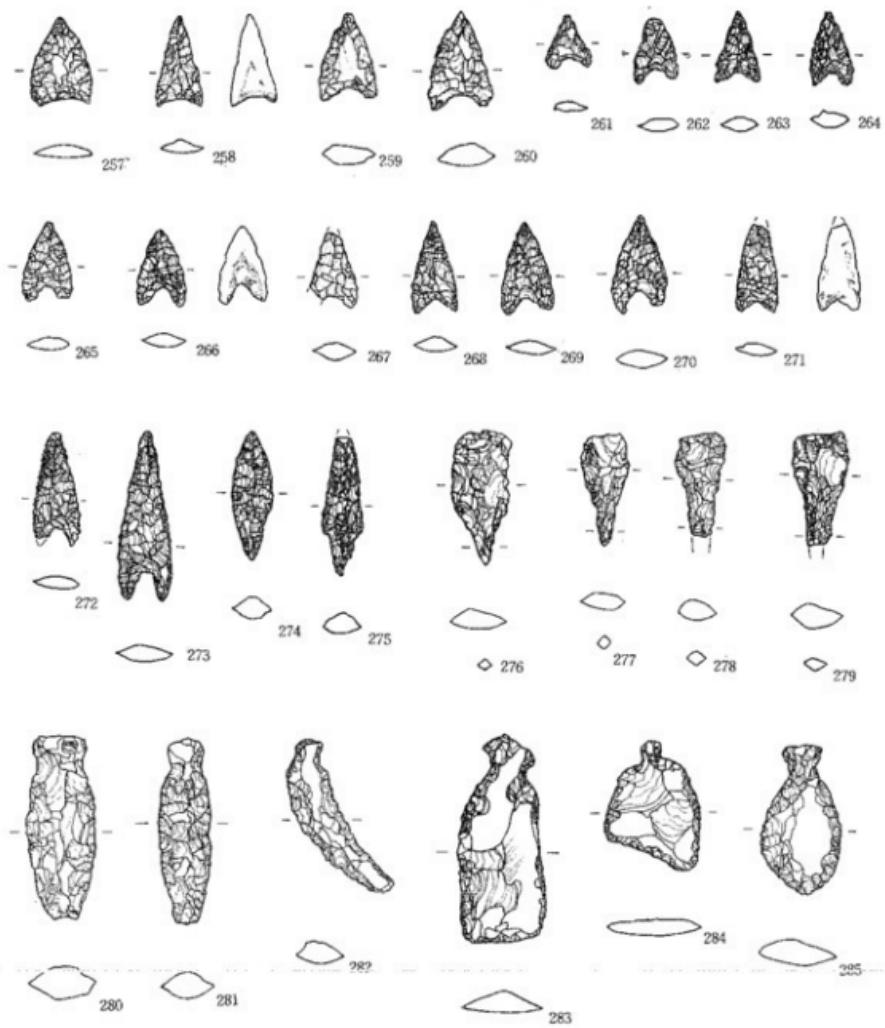


34

34 23号住居跡  
33 38号住居跡  
35 62号住居跡

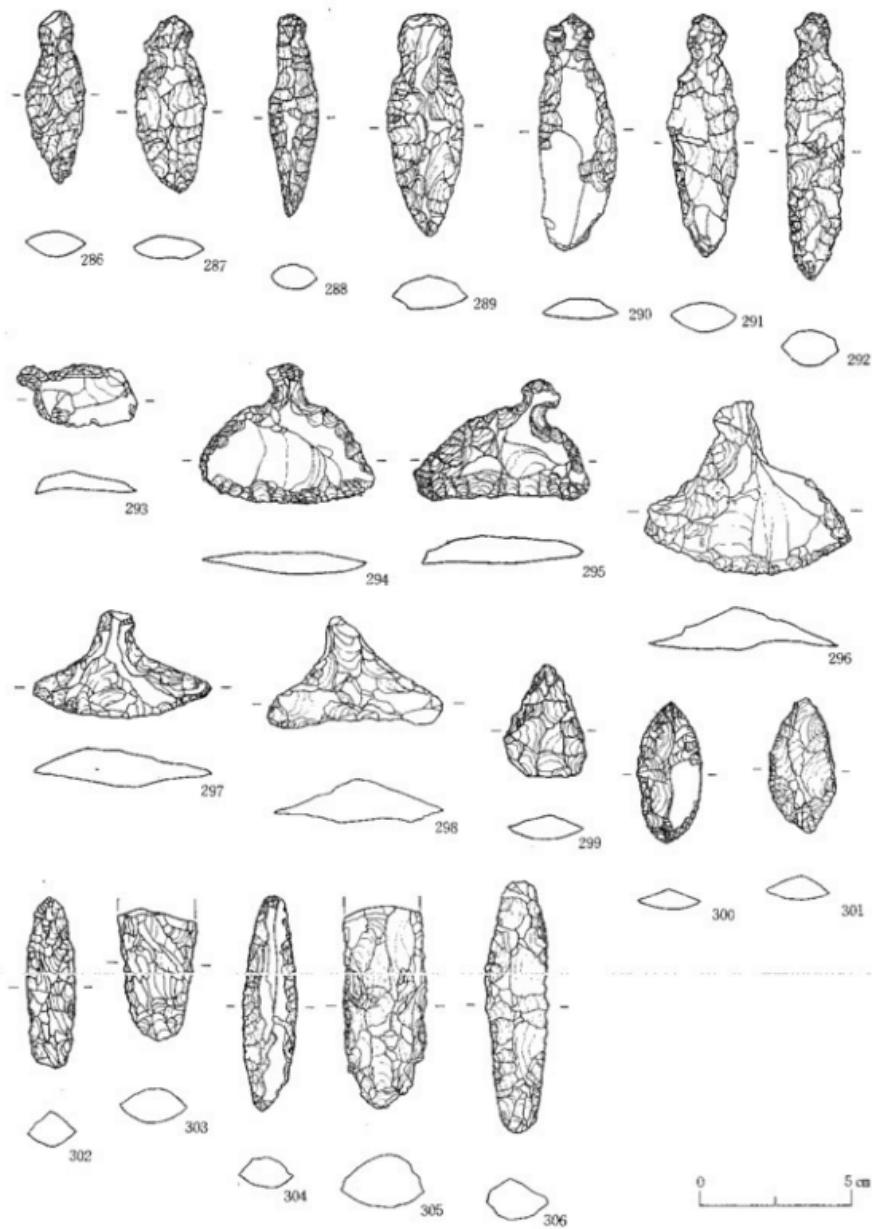


第163図 遺構内出土土製品・石製品

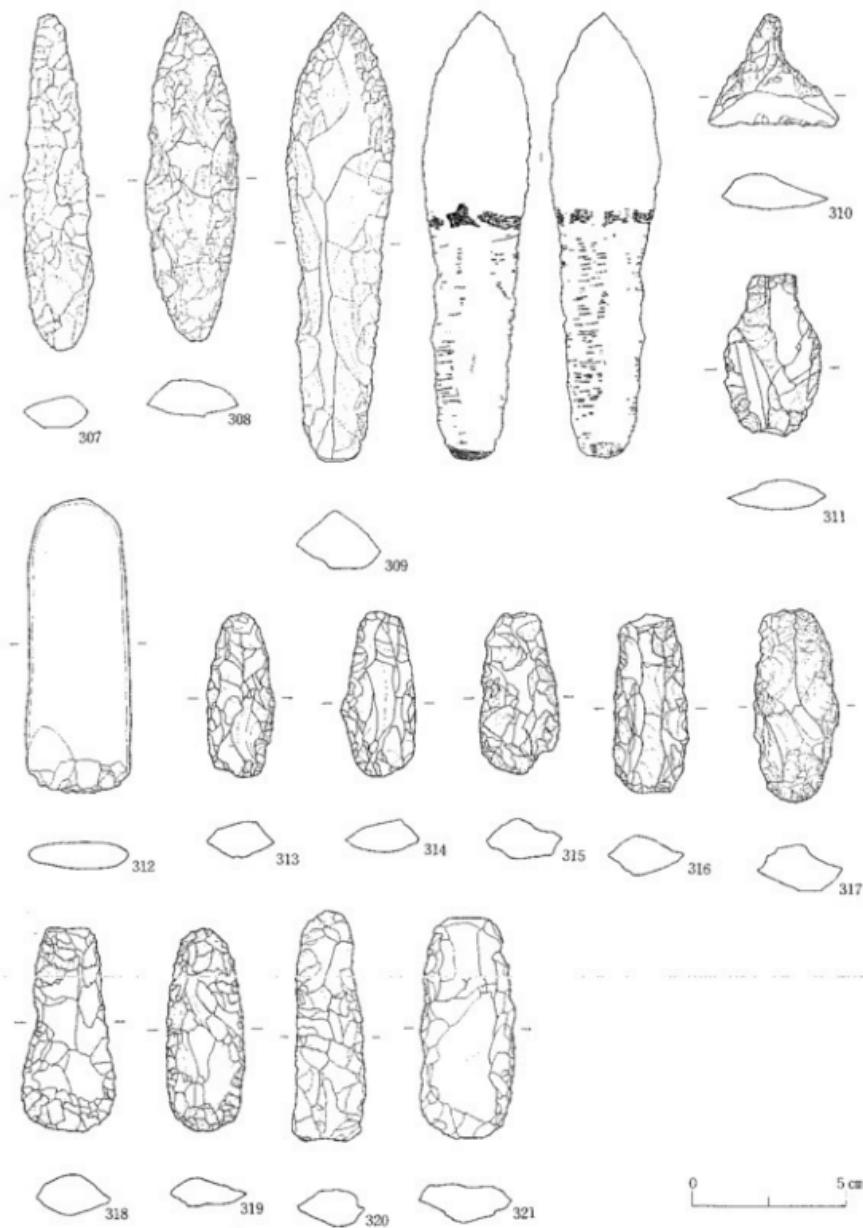


0 5 cm

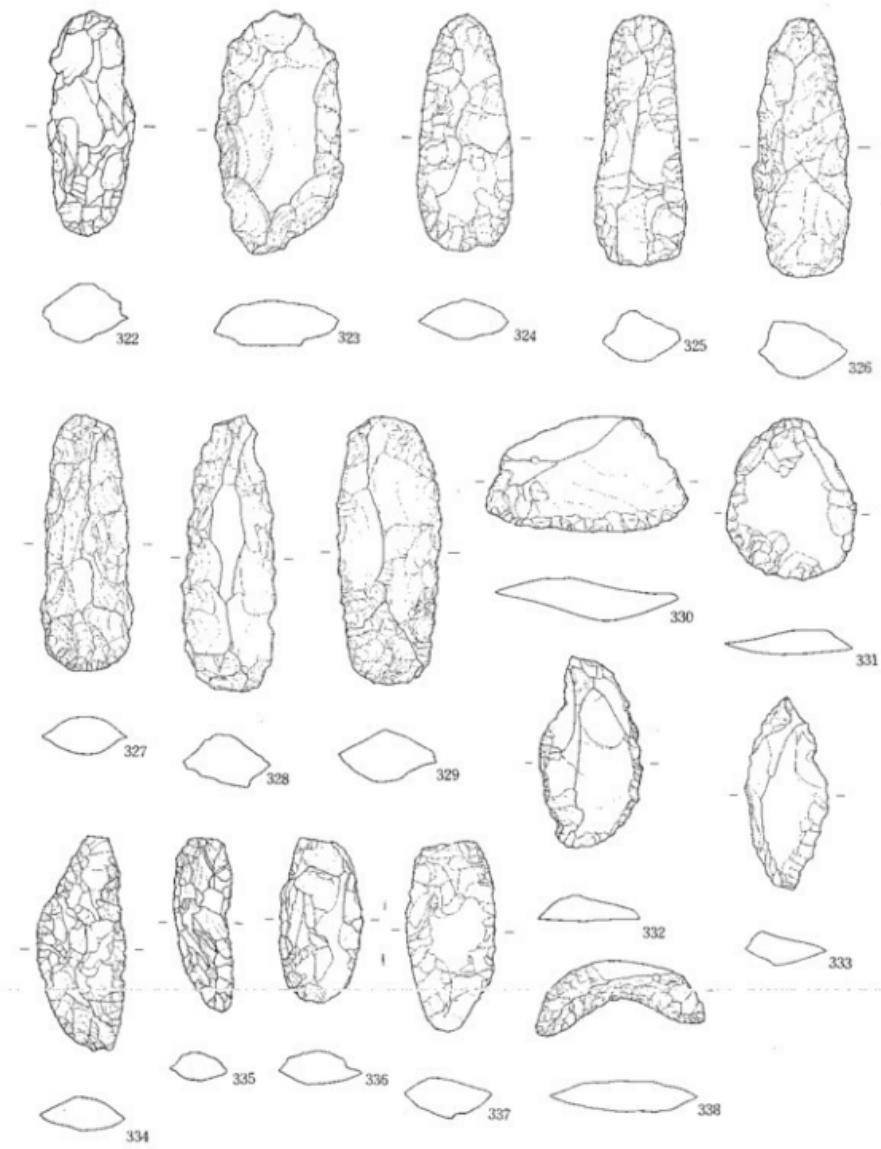
第164図 遺構外出土石器



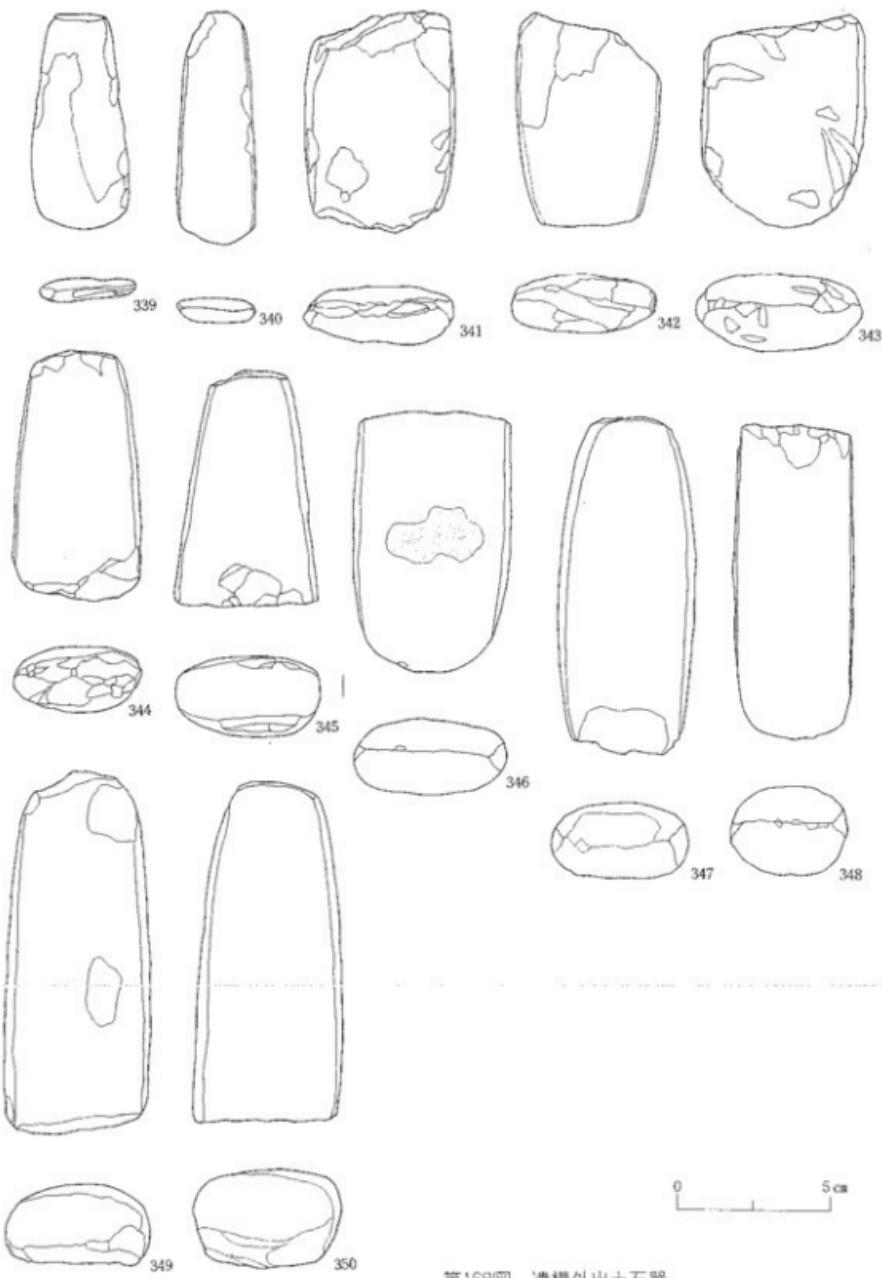
第165図 遺構出土石器



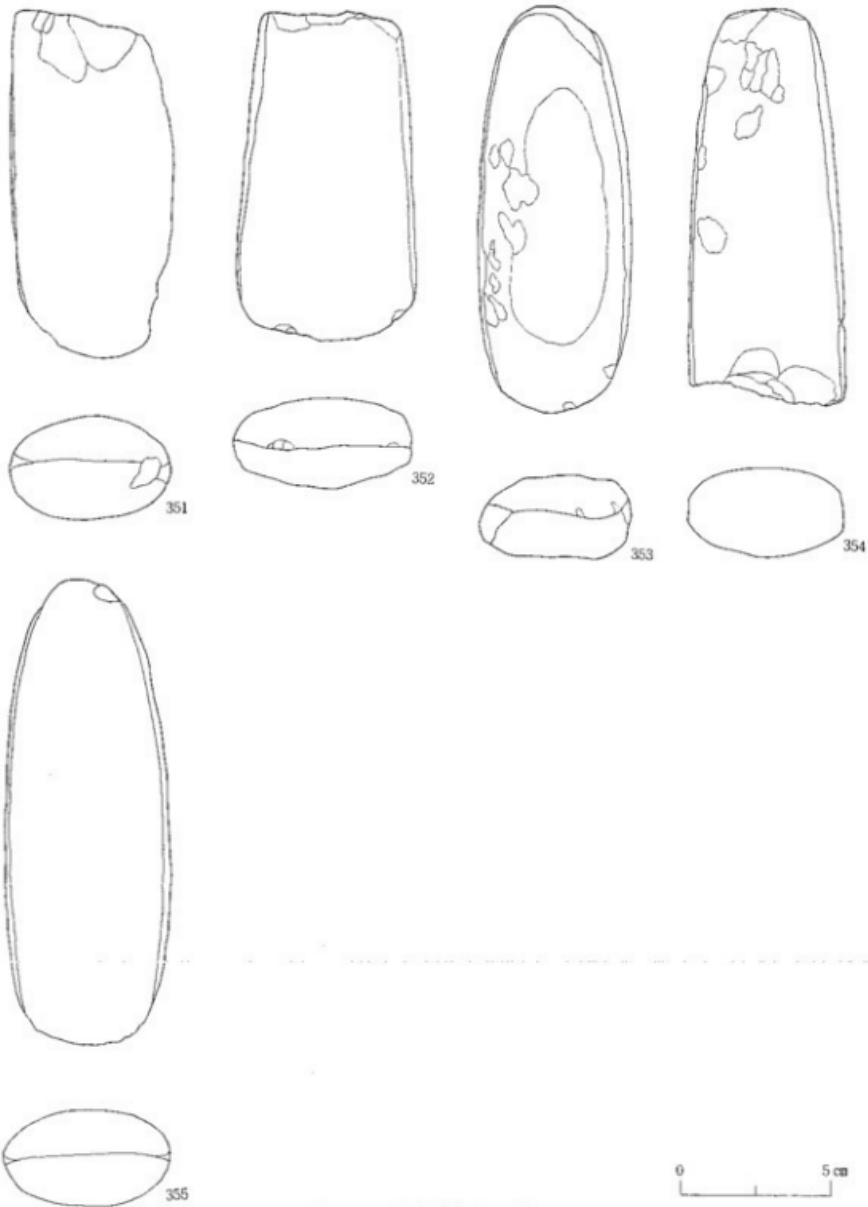
第166図 遺構外出土石器



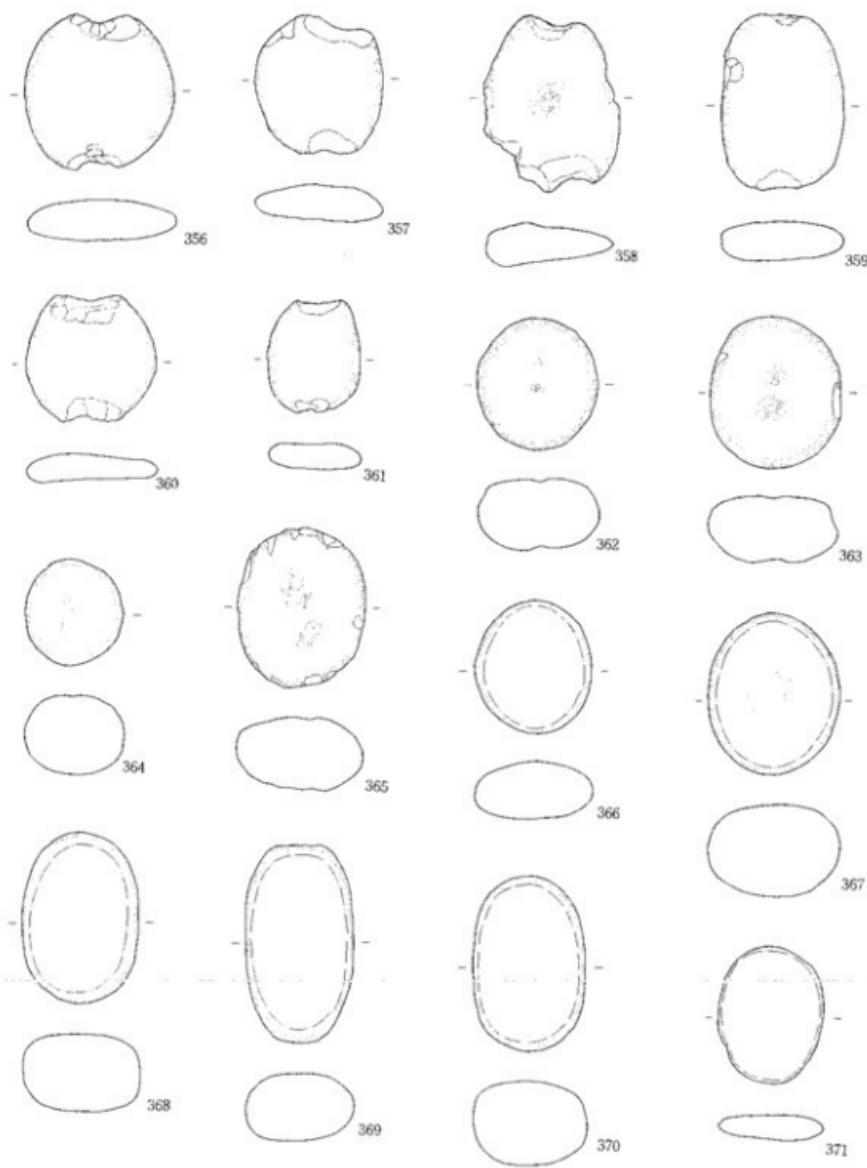
第167図 遺構外出土石器



第168図 遺構外出土石器

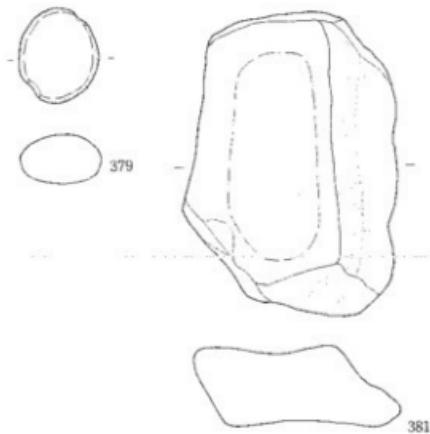
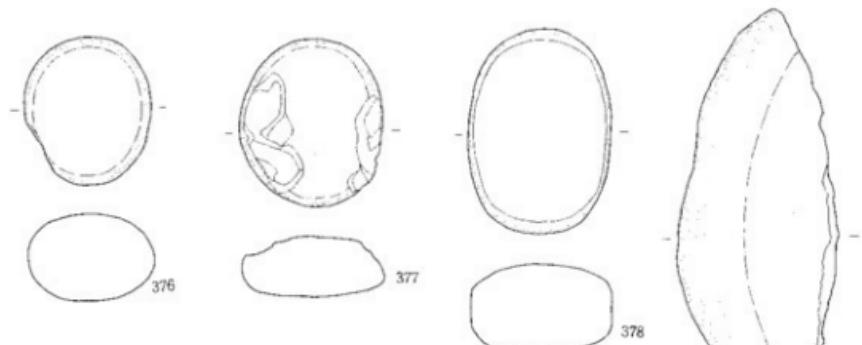
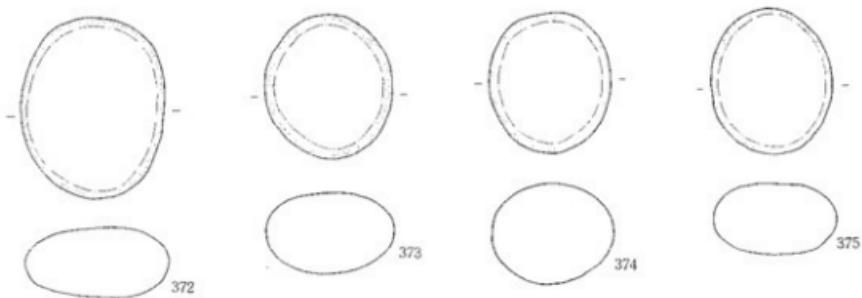


第169図 遺構外出土石器



第170図 遺構出土石器

0 10cm



0 10cm

第171図 遺構外出土石器

は横型石匙であるが三角形状を呈する。石質は頁岩である。

石槍：299～309は石槍である。299～301は小型のものである。302～307は細身のもので303・305は先端部が欠損する。308・309は先端部が鋭利に尖っている。309は中程から基部にかけて柄を装着した時に使用したと思われる蔓状のものを巻いた痕跡が明瞭に残っている。さらにその前後にアスファルトが付着している。石質は309が凝灰岩、他は頁岩である。

ヘラ状石器：310～329・334～337はヘラ状石器と思われるものである。310は三角形を呈し、両側縁に剥離が施される。312は扁平な石材の先端部に剥離を施し刃部にしている。313～329はいわゆるヘラ状石器である。左右対称で両面加工がなされている。石質は312が凝灰岩、他は頁岩である。

搔器状石器：332・333は両側縁部に加工が施されている。338は弧状をなしている。石質は頁岩である。

磨製石斧：339～355は磨製石斧である。基部・刃部が欠損するものが多い。石質は凝灰岩のものが多い。

石錘：356～361は石錘である。扁平な丸い石材の両端を打ち欠いて作られている。

くぼみ石：362～365はくぼみ石である。362・363はくぼみ部が片面に二ヶ所あり、両面使用のものである。

磨石：366～379は磨石である。磨面が片面・両面のものがみられる。

石皿：380・381は石皿の破損品である。381は中央がくぼみ、焼痕跡が明瞭である。

## 平安時代

平安時代の遺構として竪穴住居跡4軒が検出された。住居番号が飛んでいるのは縄文時代の住居跡と通し番号にしたためである。

### 35号住居跡（第172図）

調査区北端で検出された。縄文時代の64・65号住居跡の上部に構築されている。

プランは、東西4.2m、南北4.5mのほぼ方形を呈する。確認面からの深さは16cmで、壁は斜めに立ち上がる。ビットは11個検出されているが、東・西・南コーナー部にあるビットの他は明確に本住居跡にともなうものか不明である。カマドは東壁に付設されている。北側の袖がわずかに遺存するが他は不明である。燃焼部は火熱を受けて赤変している。

### 55号住居跡（第173図）

調査区北西端部で検出された。

プランは長軸5.8m、短軸4.3mの長方形を呈する。確認面からの深さは14cmで、壁は斜めに立ち上がる。ビットは28個検出されている。主柱穴は各コーナー部、一辺の中間点にあるビットと思われる。カマドは検出されなかった。床面は平坦で堅く良好である。床面上に本住居跡を切る3号

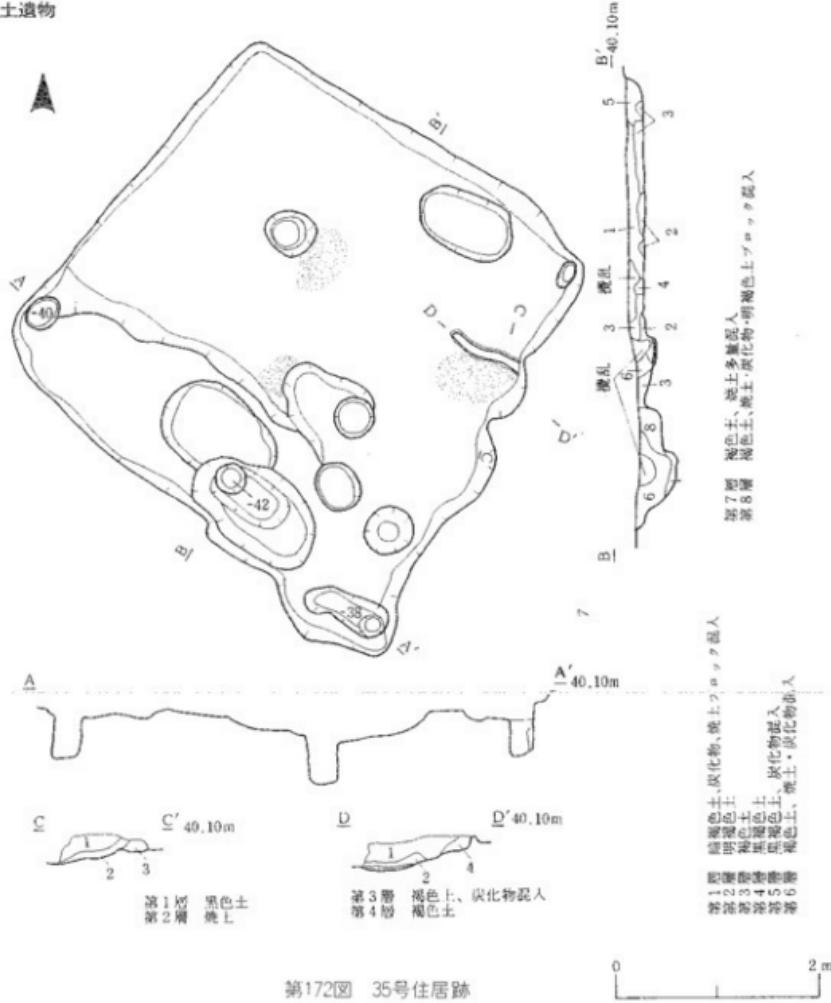
上塙が掘り込まれている。

#### 70号住居跡（第174図）

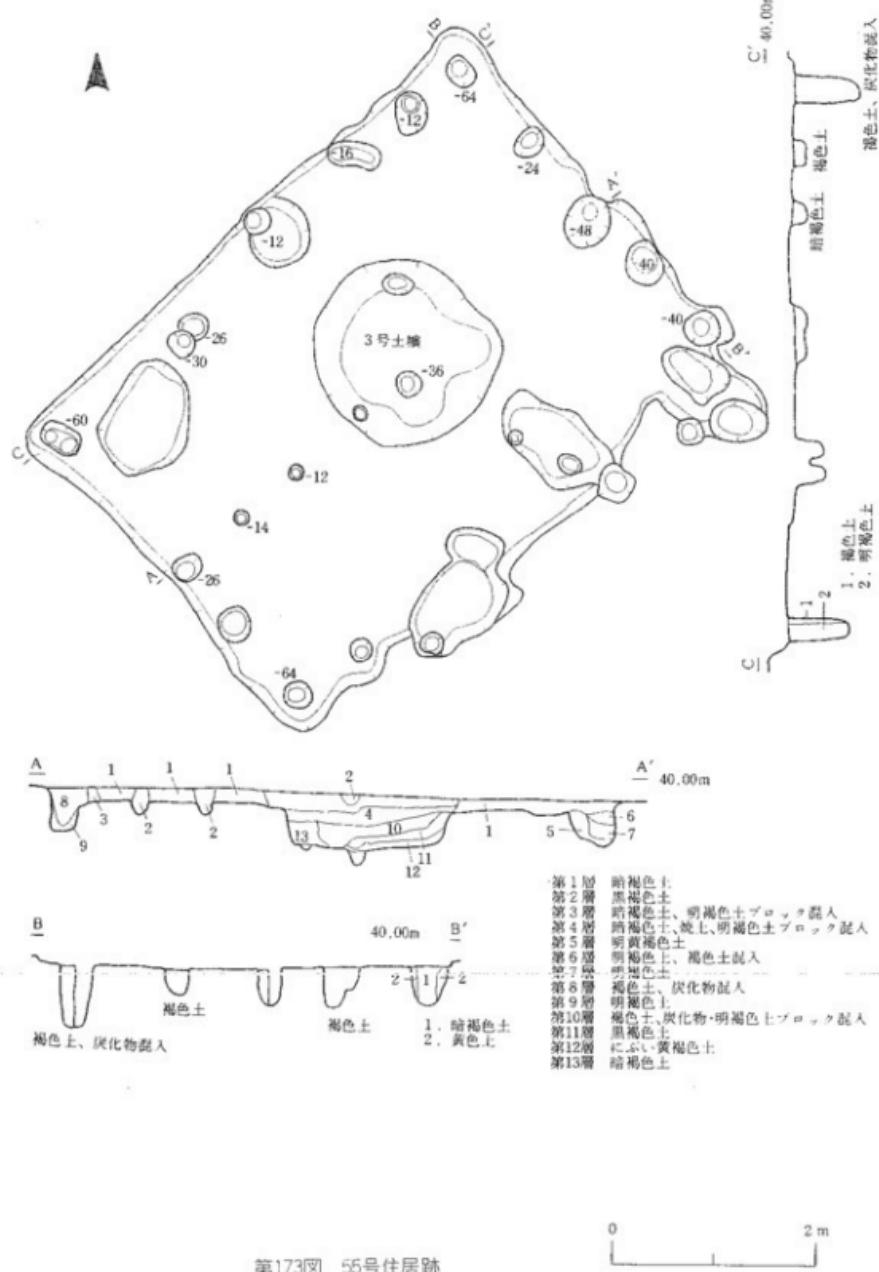
調査区中央西側で検出された。

プランは、長軸 5.0 m、短軸 4.4 m のほぼ方形を呈する。確認面からの深さは 22 cm で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 15 個検出されているが主柱穴は不明である。カマドは明確でないが東壁際には二ヶ所焼土が堅く分布する範囲が認められることからカマド痕跡の可能性も考えられる。床面は平坦で堅く良好である。

#### 出土遺物



第172図 35号住居跡



第173図 55号住居跡

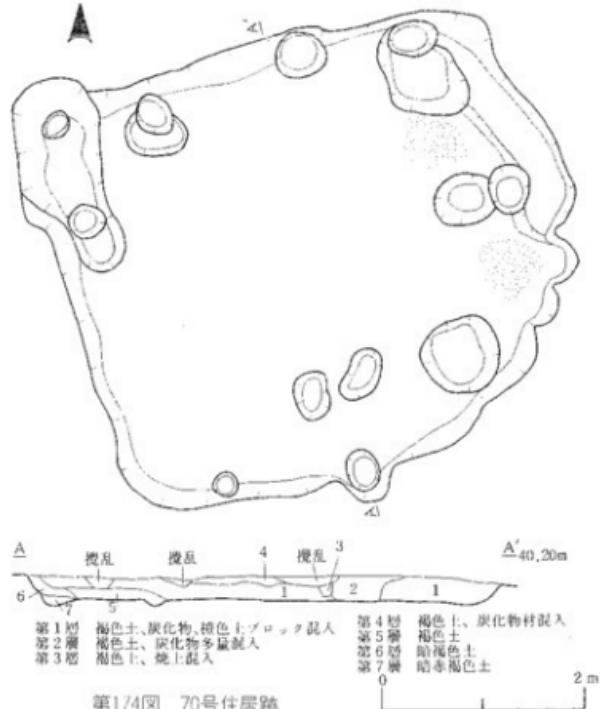
土器（第176図）

479は覆上から出土した。台付環で回転糸切り後に高台を貼付し、ナデを施している。赤橙色を呈している。

78号住居跡（第175図）

調査区中央西側で検出された。南西部は新しい土取りによって切られている。

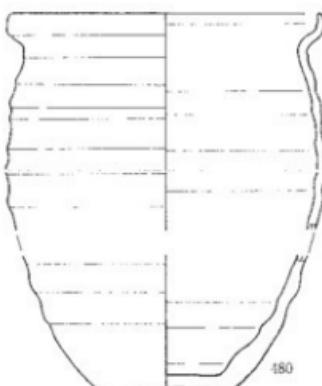
プランは長軸5.2m、短軸4.0mの長方形を呈する。礎認面からの深さは16cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは18個検出されている。主柱穴は各コーナー部にあるピットが考えられる。カマドは南壁東寄に付設されて



第174図 70号住居跡



479



480

479 70号住居跡 覆上  
480・481 78号住居跡 カマド内

第175図 遺構内出土土器



いる。両袖は壊されて不明であるが、住居外に長くのびる煙道が検出された。燃焼部には火熱を受け堅い焼土が認められる。床面は平坦で堅く良好である。

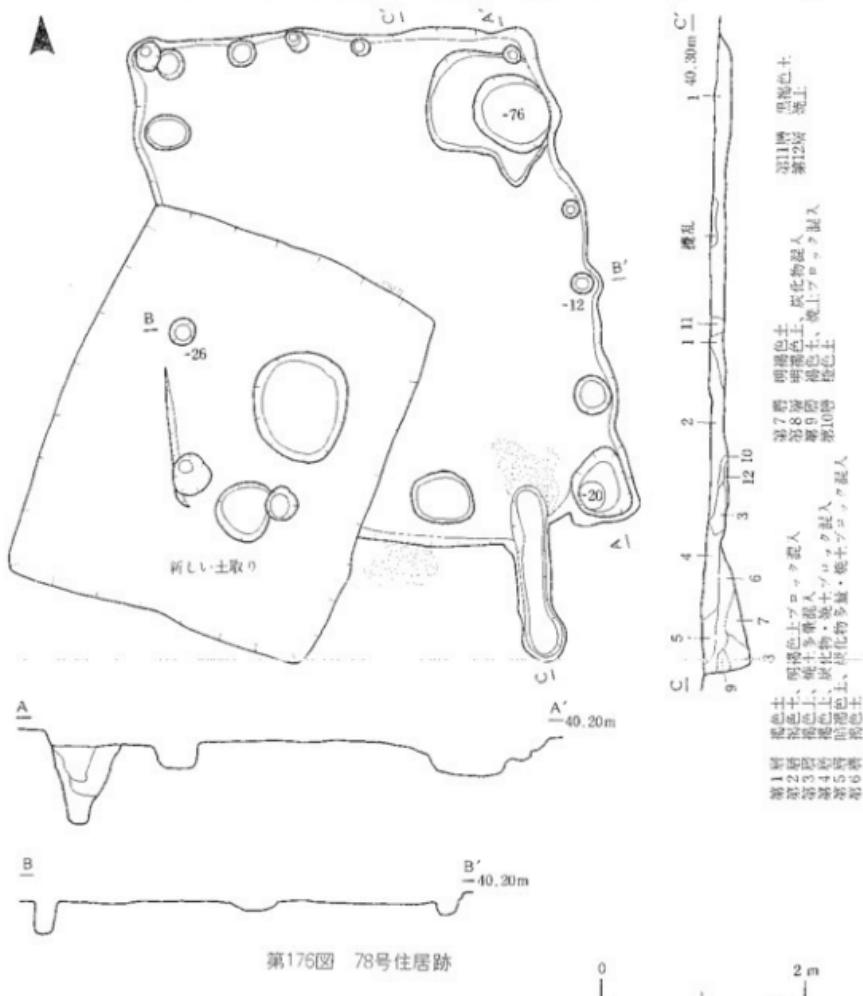
#### 出土遺物

##### 土器（第176図）

480・481はカマド内から出土した。頸部が「く」の字状に外反し、口縁部が直立する上師器型である。481は胴部にヘラケズリ調整が施される。

##### 造構外出土遺物（第162図）

28はフイゴ羽口である。上部は欠損するが先端部は火熱によりガラス状になっている。



## まとめ

### —縄文時代中期—

#### 住居跡について

本遺跡では4つの舌状部をもつ台地の中央部西端で74軒の堅穴住居跡を検出した。住居跡を構成する各要素（平面形・規模・長軸方向・炉等）について分析してみたい。

平面形は、円形・楕円形・隅丸方形・隅丸長方形があり、以下のように分類される。

第I類、円形……29・32・38・40・45・53・54・57号住居跡

第II類、楕円形……1・2・4～7・9・10～16・18・19・22～28・30・31・33・36・37・39・41～44・46～51・56・58・60・61・63～65・67・71～73・75号住居跡

第III類、隅丸方形……8号住居跡

第IV類、隅丸長方形……34・52・62・68・69号住居跡

床面積（大きく重複しているため推定面積のものも含む）については、次の6つに分類される。

10 m<sup>2</sup>以下……29・33・36・40・43・45・54・62・72号住居跡

10.1 m<sup>2</sup>～20 m<sup>2</sup>……12・13・22～24・26・28・32・46・49・50・56・63・67・74号住居跡

20.1 m<sup>2</sup>～30 m<sup>2</sup>……1・5・6・9・10・16・25・27・31・34・38・44・51・53・57・65号住居跡

30.1 m<sup>2</sup>～40 m<sup>2</sup>……4・7・11・14・15・41・58・62・64・71・73・75号住居跡

40.1 m<sup>2</sup>～50 m<sup>2</sup>……2・18・30・39号住居跡

50.1 m<sup>2</sup>以上……19・37・42・61・69号住居跡

長軸方向については、次のように分類される。

0° ≤ α < 45° E……1・7～12・14～16・22～28・34・37・44・50・51・56・69号住居跡

45° ≤ α < 90° E……18・41・42・43・46号住居跡

0° ≤ α < 45° W……2・6・30・31・48・49・50・64・71・72号住居跡

45° ≤ α < 90° W……4・13・19・57・58・61・62・65・67号住居跡

東～西方向に長軸がくるもの……5・33・36・39・60・62・63・68・75号住居跡

炉は74軒の住居跡のうち、27・28・31・33・45・49・50・51・60・65・72号住居跡を除く62軒から検出された。構造上から5つに大別される。

A類、地床炉……床面が焼けているもの

3・6・36・37・43・46・47・52・68・69号住居跡

B類、土器埋設炉……床面を掘りくぼめた後、土器を埋設して使用したもの

2・4・5・8～10・12・14～25・29・30・32・34・40・41・44・48・54・57・61・64・67・

73～76号住居跡

C類、石圍炉……礎を組んで炉外部と区画したものの、方形のもの（C<sub>1</sub>類）、Uまたはコの字形のもの（C<sub>2</sub>類）に細別される。また、石圍炉であるが重複し、切られているため形態が不明瞭な

もの（C<sub>3</sub>類）もある。

C<sub>1</sub>類……1・38・56・63号住居跡

C<sub>2</sub>類……13号住居跡

C<sub>3</sub>類……19・30・39・42・57・58・62・64号住居跡

D類、石器埋設炉……床面を掘りくぼめた後、土器を埋設し、礫を組んで炉外部と区画したものである。

7・10～12・26・34・59・71・77号住居跡

E類、複式炉……土器埋設部+掘り込み部+掘り込み部からなるものである。

53号住居跡

以上、住居跡の各要素について概観してみた。平面形と炉の組み合せは表1のようになり、II類が最も多い。A類はII・IV類で認められ、C<sub>1</sub>・D類はII類にともなうものが多いようである。次に、時期の判明する31軒の炉について時期・形態別に分類すると表2のようになる。地床炉は大木7a・7b期に認められるが、それ以降はみられない。土器埋設炉は各時期にみられるが、大木8a期に最も多い。C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>類の石圓炉については埋設土器などの明確に時期を判別する資料もなく不明である。C<sub>1</sub>類の石圓炉、D類の石器埋設炉は、大木7a・7b期にはみられず、大木8a期以降に認められる。

最後に、炉埋設土器、床面出土土器から明確に時期のわかる住居跡は次のようである。

大木7a式期……36・37・40・41・75号住居跡

大木7b式期……2・3・5・9・34・43号住居跡

円筒上層b式期……17号住居跡

大木8a式期……8・19・22・23・24・25・26・44・58・64・67・71・73号住居跡

円筒上層C式期……12・32・57号住居跡

大木8b式期……7・56号住居跡

大木10式期……53・54号住居跡

表1 住居跡平面形と炉の形態

平面形	形態	A	B	C <sub>1</sub>	C <sub>2</sub>	C <sub>3</sub>	D	E	計
I類			5	1					7
II類		6	23	3	1	7	6		46
III類			1						1
IV類		3	1			1	1		6

以上のように、本遺跡では7形式にわたる変遷が認められ、大木8a式期が最も多い。大木10式期は立地などから他とは若干様相が異なる。また一時期内の変遷については不明である。

表2 住居跡、炉の時期別分類

時期\炉形態	A	B	C <sub>1</sub>	C <sub>2</sub>	C <sub>3</sub>	D	E	計
大木 7 a	2	3						5
大木 7 b	2	3						5
円筒上層 b		1						1
大木 8 a		10			3	1		14
円筒上層 c		1				1		2
大木 8 b			1		1	1		3
大木 10		1					1	2

#### 特異なビットについて

22軒の住居跡で、長軸線上の一方の壁際寄りに比較的大きなビット、すなわち径50～130cm、深さ45～100cm、断面形がロート状を呈するものが検出された。構造から2つに分類される。

I類……黄白色粘土、または黄褐色土で周囲に高く盛上し、馬蹄形状に縁取りしたもの。

4・23・25・27～29・32・40・44・62・64・67号住居跡

II類……ビットの周囲に馬蹄形状の盛土を持たないもの。

16・18・19・22・34・37・39・58・68・73号住居跡

I類に類似したビットは、山本郡八竜町菅刈沢貝塚では「有機物投捨施設」、また青森県近野遺跡(註1)では「特殊施設」と呼ばれている。II類は、男鹿市船川大烟台遺跡、能代市館下I遺跡、北秋田郡上小阿仁村不動羅遺跡(註2)で検出されている。いずれも具体的な性格、機能については不明であるとしている。本遺跡においてもこの種のビットの性格を特徴づける具体的要素は認められなかった。ただI類では馬蹄形状の盛土で意識的に居住区域とを画しているように思われることから住居跡内において重要な位置を占める施設と思われる。今後資料の増加を待って検討しなければならない問題である。

#### フラスコ状ビットについて

フラスコ状ビットは28基検出された。1～6号フラスコ状ビットは昭和43～48年までの調査で検出されたものである。今回の調査で住居内に検出されたものは6基確認されたが、屋内施設として明確に捉えられるものは認められなかった。土層断面の観察結果から、10・19号の2基は住居の構築以前のもの、20・21・27・28号の4基は住居廃棄後に構築されたものである。特に19号フラスコ状ビットは壇口部に貼床を施し26号住居跡を構築している。

#### 土壤について

調査区の東部、南部、南東部の三地区に集中して190基の土壤が検出された。これらの土壤は平面形が円形もしくは橢円形を呈し、断面形はピーカー状、鍋状を呈する。規模は長軸55cm～113cm、短軸50cm～102cm、深さ30～70cmである。土壤の内部からは、こぶし大の礫が多数検出され

る。土器を検出する土壤は 27 基と少ないが、大木 7 b 式期から大木 8 a 式期に位置づけられる。これらの土壤の性格については例を待って検討したい。

#### 遺物について

下堤 A 遺跡から土器・石器・土製品・石製品など多数が出土している。

前述したように、大木式、同筒式、北陸系の土器が出土しており、I 群を大木式、II 群を円筒式、III 群を北陸系、IV 群をその他の土器として分類し、それぞれ形式によって類別した。

第 I 群土器は 1 類から 5 類まで分類した。1 類上器は深鉢形土器が主体で、粘土紐貼付、半截竹管状工具により文様が施される。粘土紐貼付の隆帯を垂下させ、鋸歯状、蛇行、直線に施し、横方向に鋸歯状文、交互刺突、爪形文などがみられる。大木 7 a 式に比定されるものである。2 類土器は大木 7 b 式に比定される土器である。深鉢形土器、浅鉢形土器がある。撫糸圧痕文が主体で平行直線、連弧状、r 状に施文される a 類と、粘土紐貼付文と撫糸圧痕文、押圧縄文とが組み合される c 類がみられる。3 類土器は大木 8 a 式に比定される土器で、施文様から a～d 類に分類した。キャリバー形を呈する深鉢が主体であり、粘土紐貼付の隆帯によって全体に文様が施される b・c 類が主体を占める。口縁部に粘土紐貼付を施し、両側を撫糸圧痕、押圧縄文で縁どりする a 類は大木 7 b 式に近いものである。また、粘土紐貼付文が消滅し、沈線文が主体となる a 類は大木 8 a 式でも新しい時期と思われる。4 類土器は大木 8 b 式に比定される。小形の深鉢形土器が主体であるが出土量は少ない。5 類土器は大木 10 式に比定される。深鉢形土器が主体で、沈線区画の磨消帯によって文様が展開する。

第 II 群上器は 1 類から 3 類まで分類した。弁状把手を有する深鉢形土器が主体であり、撫糸圧痕文により、波状、鋸歯状文が施される 1 類土器は円筒上層 a 類土器と思われる。2 類上器は円筒上層 b 式土器である。隆帯が丸連し複雜になる。隆帯間に撫糸圧痕による擬似爪形文が施文される。3 類土器は円筒上層 c 式土器である。隆帯が細くなり、胴部近くまで下がる土器もある。隆帯間に撫糸圧痕文はみられなくなり、変りに爪形、三角状の刺突文が施される。

第 III 群土器は 1 類土器から 4 類土器まで分類した。出土量は非常に少なく、小破片である。北陸系の土器は、坂ノ上下遺跡で多量に出土し、1 群から 6 群まで分類している。本跡出土の 1 類土器<sup>(註 6)</sup>は 2 群に、2・4 類土器は 3 群、3 類土器は 5 群にそれぞれ比定できるものと思われ、中期初頭円筒上層 a 式、大木 7 a 式土器に併行する北陸系土器と思われる。<sup>(註 7)</sup>

第 IV 群土器は波状口縁が主体の深鉢形土器である。口唇、口縁部に刻み状の撫糸圧痕を施す隆帯が波状にめぐり、同筒上層式土器とも思われる。一方、口縁部が外反し、胴部が膨らむ器形、胴部に施される文様は大木式と思われる。いわば円筒式土器と大木式土器の折衷形式とも言える土器群である。

表3 住居跡一覧

住居番号	平而形	長軸方向	周溝	床面積(㎡)	炉の構造	埋 蘭	時 期	備 考
1	楕円形	N2° E	無	21.8	方形石闌炉	無		
2	楕円形	N27° W	無	42.7(推定)	土器埋設炉	有	大木7 b	
3	—	—	無	—	地床炉	無	大木7 b	
4	楕円形	N51° W	無	36.2	上器埋設炉	有		
5	楕円形	N104° E	無	23.4(推定)	上器埋設炉	有	大木7 b	
6	楕円形	N19° W	無	20.7	地床炉	無		
7	楕円形	N8° E	無	34.2	石闌上器埋設炉	有	大木8 b	昭和43年
8	隅丸方形	N16° E	無	—	土器埋設炉	有	大木8 a	?
9	楕円形	N15° E	無	29.5	上器埋設炉	有	大木7 b	昭和48年
10	不整楕円形	N36° E	無	22.7	石闌上器埋設炉	有		発掘調査
					土器埋設炉	有		
11	椭円形	N16° E	無	31.1	石闌土器埋設炉	有		
12	椭円形	N9° E	無	15.1	石闌土器埋設炉	有	円筒上層c	
					土器埋設炉	有		
13	椭円形	N60° W	無	18.9(推定)	コ字形石闌炉	抜き取痕有り		
14	椭円形	N38° E	無	33.1(推定)	土器埋設炉			
15	椭円形	N33° E	無	33.4	土器埋設炉			
16	椭円形	N16°	無	29.1	土器埋設炉		大木8 a ?	
17	—	—	無	—	土器埋設炉	有	円筒上層b	
18	椭円形	N52° E	無	41.0	土器埋設炉	有	?	
19	椭円形	N52° W	無	52.9	石闌炉			
					土器埋設炉	有	大木8 a	
20	—	—	無	—	土器埋設炉	有	円筒上層b ?	昭和43～48年発掘調査
21	—	—	無	—	土器埋設炉	有	?	
22	不整楕円形	N16° E	無	18.0	土器埋設炉	有	大木8 a	
23	椭円形	N3° E	無	18.9	土器埋設炉	有	大木8 a	
24	椭円形	N9° E	無	11.6	土器埋設炉	有	大木8 a	
25	椭円形	N2° E	無	22.3	土器埋設炉	有	大木8 a	
26	椭円形	N10° E	無	19.8	石闌土器埋設炉	有	大木8 a	
27	椭円形	N31° E	有	47.7(推定)				
28	椭円形?	N25° E	無	16.3(推定)				
29	円形	—	無	8.0	土器埋設炉	有	?	
30	椭円形	N12° W	無	42.4(推定)	石闌炉	—		
					土器埋設炉	有		炉4, 大木7 a, 円筒上層c
31	椭円形	N19° W	無	28.7				
32	円形	—	無	11.9	土器埋設炉	有	円筒上層c	
33	不整楕円形	N103° W	無	6				
34	隅丸長方形	N24° E	無	26.2	土器埋設炉	有	?	
					石闌上器埋設炉	有	大木7 b	
35								平安住居跡
36	椭円形	N97° E	無	9.8	地床炉	無	大木7 a	
37	椭円形	N3° E	無	53.7	地床炉	無	大木7 a	
38	円形	—	無	25.5	長方形石闌炉	無		

表3 住居跡一覧

住居番号	平面形	長軸方向	周溝	床面積(㎡)	炉の構造	埋 窓	時 期	備 考
39	楕円形	N95°W	無	49.2	石 圈 炉	無		
40	不整円形	—	無	8.1	土 器 埋 設 炉	有	大木7a	
41	楕円形	N64°E	無	30.1(推定)	土 器 埋 設 炉	有	大木7a	
42	楕円形	N54°E	無	58.2	石 圈 炉	無		
43	楕円形	N52°E	無	7.5	地 床 炉	無	大木7b	
44	楕円形	N20°E	無	29.8	土 器 埋 設 炉	有	大木8a	
45	円 形	—	無	9.4			大木8a	
46	楕円形	N66°E	無	14	地 床 炉			
47	楕円形		無		地 床 炉			
48	楕円形	N9°W	無	—	土 器 埋 設 炉	有	?	
49	楕円形	N12°W	無	17.8				
50	楕円形	N15°E	無	11.6(推定)				
51	楕円形	N36°E	無	20.5				
52	隅丸長方形		無		地 床 炉			
53	円 形	—	無	2.3	複式炉	有	大木10	
54	円 形	—	無	9.4	土 器 埋 設 炉		大木10	
55								平安住居跡
56	楕円形	N23°E	無	10.5(推定)	長方形石圈炉	有	大木8b	S43~48年発掘調査
57	楕円形	N58°W	無	27.5(推定)	石 圈 炉			
					土 器 埋 設 炉	有	円窓上層c	
58	楕円形	N52°W	無	39.5(推定)	石 圈 炉	有	大木8a	S43~48年発掘調査
59		—	無	—	石圈上器埋設炉	—		
60	楕円形	N85°W	無	9.6				
61	楕円形	N57°W	無	51(推定)	土 器 埋 設 炉		?	
62	隅丸長方形	N84°W	無	32.8(推定)	石 圈 炉			
63	楕円形	N97°W	無	16.9(推定)	長方形石圈炉	無		
64	楕円形	N36°W	無	32.5(推定)	石 圈 炉			
					土 器 埋 設 炉	有	大木8a	
65	楕円形	N47°W	無	24(推定)				
66		—	無	—				
67	楕円形	N50°W	無	14	土 器 埋 設 炉	有	大木8a	
68	隅丸長方形	N90°W	無		地 床 炉			
69	隅丸長方形	N19°E	無	105	地 床 炉			
70								平安住居跡
71	楕円形	N5°W	無	34.2	石圈土器埋設炉	有	大木8a	
72	楕円形	—	無	8.2				
73	楕円形	N10°W	無	37.6	土 器 埋 設 炉	有	大木8a	
74	円 形	—	無	19.5	土 器 埋 設 炉	有	?	
75	楕円形	N90°W	無	32	土 器 埋 設 炉	有	大木7a	
76		—	無	—	土 器 埋 設 炉	有	?	
77		—	無	—	石圈土器埋設炉	有	?	
78								平安住居跡

## —平安時代—

### 遺構と遺物

調査区の北西端から平安時代の堅穴住居跡4軒が検出された。方形、長方形のプランをもち、カマドは35号住居跡が南東壁、78号住居跡は南壁に付設されている。南西300mにある下堤B遺跡から3軒、東に隣接する下堤C遺跡からは31軒の住居跡が検出されている。出土遺物は非常に少ないが、赤褐色土器が出土しており、下堤B、C遺跡と同様な時期と思われる。

註1、「壹刈沢貝塚」 山本郡八竜町壹刈貝塚発掘調査報告書 八竜町教育委員会 1979

註2、「近野遺跡発掘調査報告書」 青森県教育委員会 1978

註3、「大畠台遺跡発掘調査報告書」 日本鉱業株式会社船川製油所 1979

註4、「館下I遺跡発掘調査報告書」 秋田県教育委員会 1979

註5、「上小阿仁村「不動縦遺跡概要」 上小阿仁村教育委員会 1978

註6、「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 坂ノ上F遺跡」 秋田市教育委員会 1985

註7、「山本郡八竜町「壹刈沢貝塚」で5号住居跡から円筒上層a式土器と大木7a式、新崎式の土器が伴出している。

## 参考文献

秋田市教育委員会：「小阿仁下堤遺跡発掘調査報告書」 1976

秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 湯ノ沢B遺跡」 1983

秋田市教育委員会：「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 下堤C遺跡」 1987

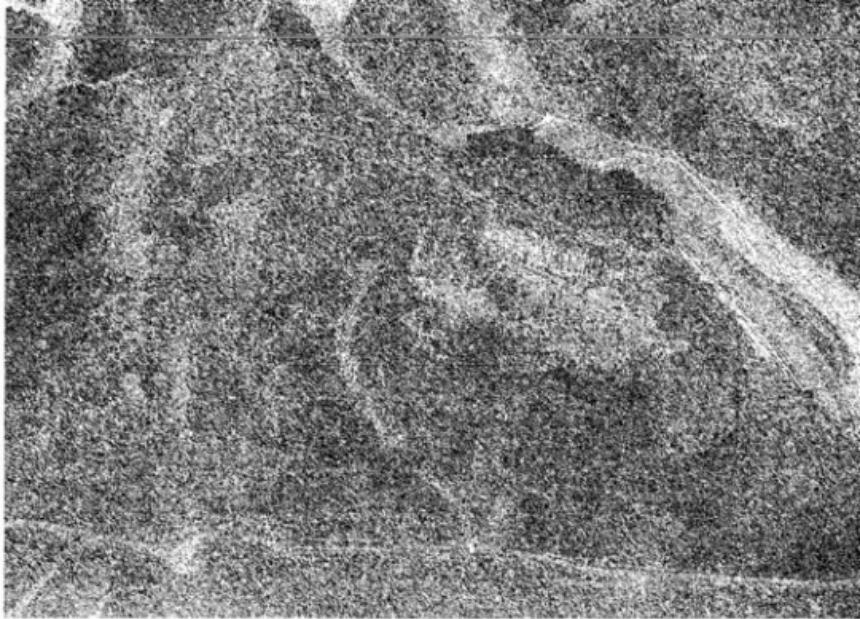
秋田県教育委員会：「杉沢台遺跡発掘調査報告書」 1981

田沢湖町教育委員会：「黒倉B遺跡—第1次発掘調査報告書」 1985

青森県教育委員会：「中の平遺跡発掘調査報告書」 1975

芹沢長介 塙井清足他：「縄文土器大成第2巻中期」 講談社 1981

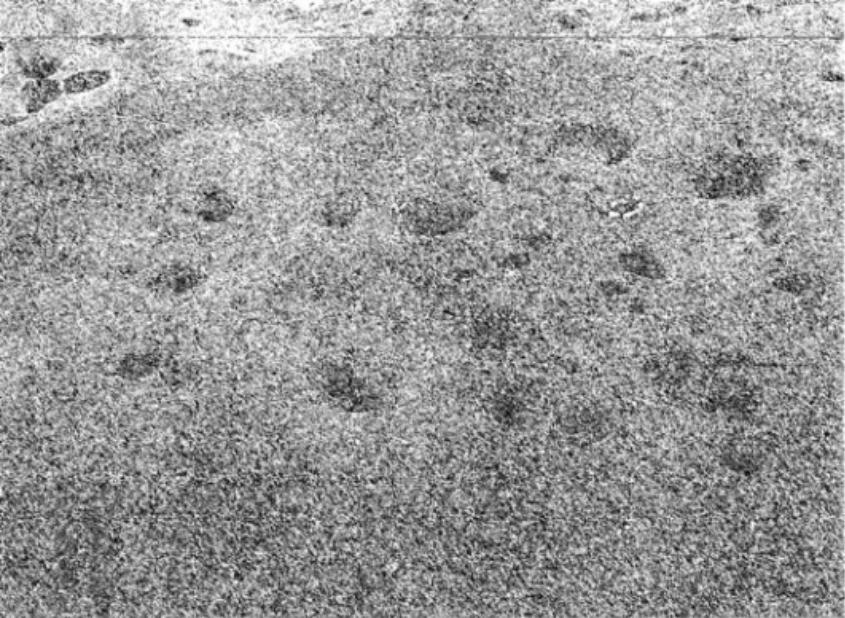




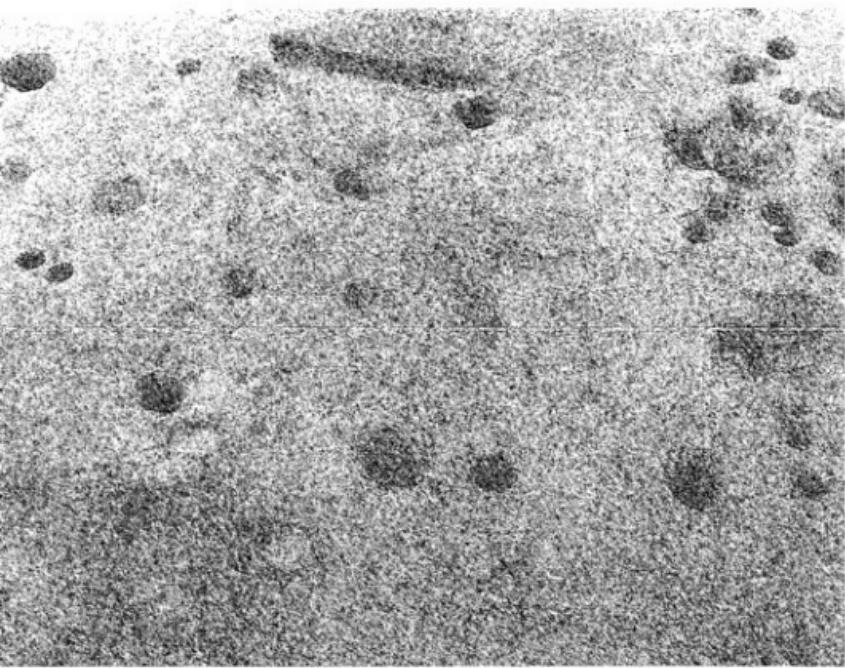
下堤 A・B・C 遺跡航空写真（北西→）



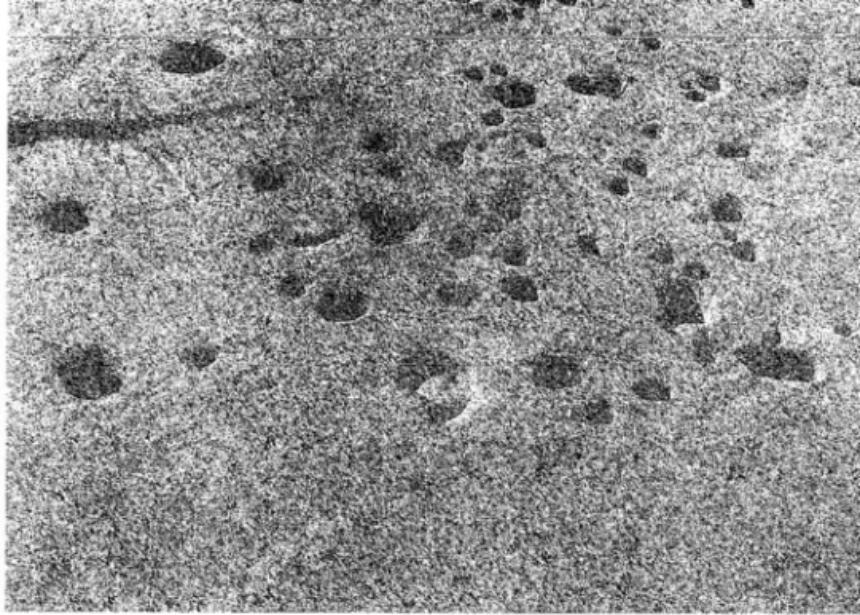
下堤 A 遺跡航空写真（北西→）



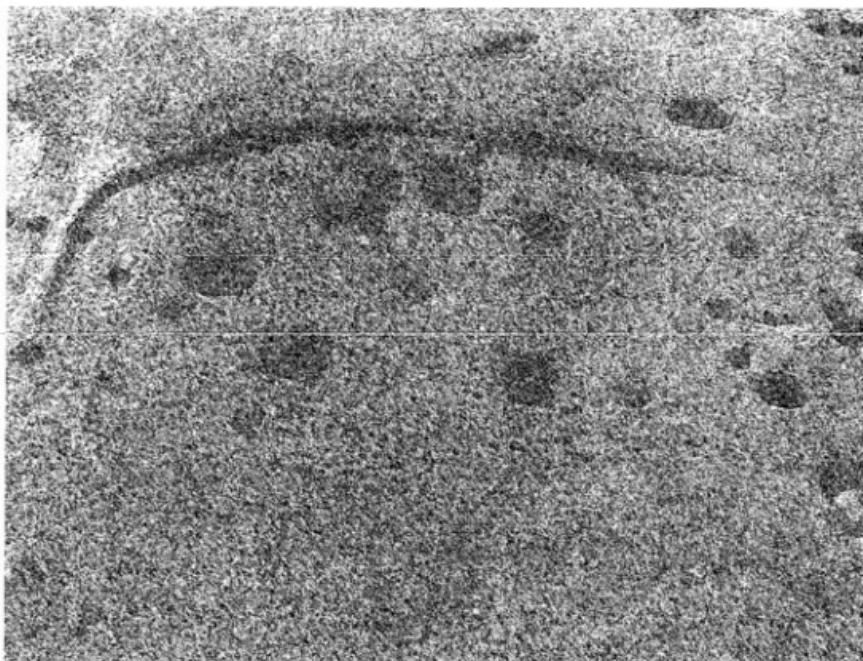
1号・69号住居跡（東→）



2号住居跡（東→）



3号・5号住居跡（北→）



4号住居跡（北→）